
story of ALFREIA 1 『空蟬の一族』 第一話 「約束された出会い」

鈴木 かぐや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

story of ALFREIA 1 『空蝉の一族』第一話
「約束された出会い」

【Nコード】

N9537D

【作者名】

鈴木 かぐや

【あらすじ】

【完結しました】憎しみと過去の因縁に囚われた哀しい一族に生まれた双子児。愛情不足の主人公は、行方不明の弟を見つけ出すことができるのか？ - - 第一話「約束された出会い」では、主人公を取り巻く運命の輪に取り込まれる仲間たちとの出会いを描きます。 - - 表向き人当たりよく振舞う主人公の傲慢で尊大で人間嫌いな顔を知りながら、仲間たちは主人公を受け入れられるのか？ - - 仲間を得た主人公は、人間嫌いが直るのか？長い物語の導入編。こ

これから物語は始まります。また下記アドレスYahooブログ内で
先行記事&物語の世界観解説がアップされています。http://
blogs.yahoo.co.jp/alfrania

「00:prologue」(前書き)

こちらのシリーズは、『超』長編物語となっております。

読みやすさを考えて、敢えて第1部(原稿用紙約50枚分)を7回に分けて掲載しておりますが、もし、1部を一気に掲載した方がいいというご意見がございましたら、評価にて教えて下さい。

では、拙い作品ではありますが、主人公たちの激動の一生をご覧下さい。

「00: prologue」

さあ、こちらへおいで。

だいぶ大きくなったね。長い長い物語を聞けるくらいにね。

これから大事な物語を聞かせてあげる。

あなたは知らなくちゃいけないの。そしてわたしは語らなくちゃいけない。

わたしはその為にここにいるのだから。

神に試された哀しい人たちの物語を。

『空蝉の一族』の物語を語り継いでもらう為に。

あなたにはちよつと難しいかもしれない。でも聞いてちょうだい。
世界を愛した強い人の話。

『空蝉』

それは蝉の抜け殻のこと。過去の姿をひきずった、魂の抜け去った
虚（空）しきもの。

『空蝉の一族』

それは過去の因縁と憎しみに囚われて、運命に縛られてしまった、
とつても哀れな虚しき一族。

今から彼らの物語を語らなくてはいけない。

虚しき空蝉たちが、過去の姿から逃れようと、

たとえその先にある姿の生命が短かろうと、

永きに渡る運命の呪縛から逃れようと藻掻き戦い始めたところから。
それが死出の道だと知りながら、最後の空蝉が藻掻き始めるところ
から。

彼らは魂を得て空高く飛び立とうと、心の自由を手に入れようと藻

掻く。

高く…高く……

長い、長い、終わりの始まり……

「00:prologue」(後書き)

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfradia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第1部：五月〜出会い〜 - 1

その教室は、熱氣と埃ほこりで充ちていた。

「はいはい、決まったら、騒いどらんと、こっちに報告して、さっさと席着けえな」

黒板の前の人集りの中から、中性的な声がした。

「アキラ、わたし、あなたの斜め前！」

「おう」と、先程の中性的な声が返事し、黒板に書かれている席順表の『アキラの斜前』に、『コメチ』と、痩せて大柄な少年が書き込んだ。それが甲高い声の少女のあだ名らしい。

窓の外には、埃っぽい教室とは正反対の、瑞々しい景色が広がっている。

田圃たんぼの真ん中に、今年四月に開校したばかりの、市立神森中学校。未だ五月だというのに、七回目になる席替えをしている、二年五組の賑にぎやかな様子だ。

市の海岸近くの広い神森地区は、最寄り駅から電車で二十分とかからずに、市の中心部に出られる。その便利さから、ここ数年で駅周辺ばかりが急激に人口が増え、それまで地区唯一の「市立東部中学校」はパンクしてしまった。

そこで新しく建てられたのが「市立神森中学校」だ。これまでの区域よりも海よりの、昔ながらの場所が学区となる。

とても広い神森地区だが、駅周辺以外の土地は相変わらず過疎のまま。その広い過疎地域のど真ん中に、新しい神森中は忽然と現われたのだ。そのあまりの不自然さに、誰もが何らかの意図を確信していた。

神森中の学区内にある、木の茂った小さな小さな丘。そこからの湧き水が小川を作り、市の中心部から流れてくる川と合流する。この二本の川から海寄りが神森中の学区。神森地区は、学区という明確な形で都市機能から分離させられた。それは、まるでこの都市からぬ美しい風景を守る為というよりは、むしろ神森地区から都市を守る為のよう。

切り離してまで都市が怖れるもの。

切り離されても捨てられずに人々の心を捉え、そして縛り付けるもの。

それは「信仰」という、土地の人間にとっては必要不可欠なもの。

神森地区には、土地独特の古代的信仰と、それに伴う風習が根強く残っていて、それは都市化を推進する役所の開発担当からすれば、目の上のタンコブでしかない。

交通の便がよいこの神森地区を、都市のベッドタウンとして開発できたなら、人口が増えて税収増を見込めるというのに、それができない。なにしろ、誰もが口を揃えてこう言うのだ。

「神々と巫女が守って下さった、この先祖伝来の土地を、くだらない連中には売れない。お前さんたち、誰に食べ物作ってもらってんのっしや？わしら、自分の食べ物も作れないようなお前さんたちに、大事な土地を売りはせん。どうせ大事な土を覆うんだ。そんな痛ましいこと、わしにはできない」

しかし、この穏やかすぎる風景は、もっと都市の中心部から離れている方がよい。そうしたら、「電車一本で自然と触れ合える、クオリティの高い住宅地」として、都市と観光を同時に売り出せるはずなのだ。けれど現実にはそうはいかない。原風景がこんな近くにあっては、まるで無理矢理都市開発をしたようで、かえって「環境破壊都市」の汚名を着せかねられない。

そこで開発担当は考えた。いつそ、神森地区の奇特な連中を、そのまま隔離して忘れてしまおうと。
今まさに、景気は上向き。歴史ある信仰は、もはや過去の遺物ではない。

木の繁った小さな小さな丘。その上にある神社こそが、神森地区の信仰の中心。

その神社に名前はない。土地の者は、ただ「大樹の森の神社」と呼んでいた。そこで祀^{まつ}っているのは豊饒と大地と海の三柱の神だが、神々だけではなく、何処^{どこ}から周期的に派遣される生きた巫女までもを、土地の者は崇め祀^{まつ}っていた。事の真偽は別として、巫女には霊能力があると言われている。

とはいえ、この現代に於いて、物理的に解明できない超能力など真に受けているわけもなく、巫女への崇敬の気持ちは能力の為ではなく信仰だ。土地の者にとって、超能力などというものは、どうでもいいことだった。

ただ、伝承に残された代々の巫女の業績が、土地の者に尊敬され、それが信仰に変化しただけの話だ。

その昔、巫女は天気を自在に操る力を持っていた。

伝承は語る。

巫女は切羽詰った時意外は能力を見せず、また村人も安易に能力を發揮しないことを望んでいた。

自分たちがは神を崇^{あが}めているのであって、巫女という人を崇めているのではない。あくまで彼女は一祭祀者にすぎない存在なのだ。神が与えた能力で以って、その領域を侵すことは神の決定を覆すということ。それを願えば巫女だけではなく、自分たちも神の怒りを買うことになる。それは彼らにとってはとても怖ろしいことだ。

せつかく神から巫女を与えられ、神に守られているのに、多くを望んではいけない。「神の決定を覆す」能力を持った巫女そのものが、神の恵みなのだから、節度わきまを弁えなければ、その恵みをも失うことになってしまう。

伝承はこうも語っている。

ある豪族が、巫女を自らの意のままにしようと彼女を捕え、逃が出せぬように首を鉄鎖に繋ぎ、自らの土地を富ませるまではと日夜監視を置いて迫ったと。

しかしどんなに辱めを受けようと、巫女は屈しなかった。

そればかりか、大勢の者が見守る中で手を使わずに鉄鎖を引きちぎり、空を飛んで神社に戻ると、まるで鬼の形相で呪を唱えたという。豪族の土地はみるみるうちに痩せ、その豪族が泣いて赦しを請うまでは呪を絶えることなく唱え続け、それから豪族は改心したという。それから三柱の神々のみならず、巫女も信仰の対象になった。

巫女の素性を、村人は誰も知らない。土地の者ではないということだけは確かだった。能力の有無などは、現代においては全く関係なく、伝説と信仰のみの存在を体现することを求められていた。

第1部：五月ゝ出会い - 1（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfradia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第1部・五月〜出会い〜 2

黒板の前の人集りが、^{ひとだか} 各々の場所によろやく落ち着いた中で、男女一組だけが黒板の前に残っていた。

「あ、ナミがオレと同じ班か。げっ、何や、お前がアリーナ席か。先生、大変そうやな」

大胆にも教卓に座り、スリッパと化した上靴を突っつけた、ポニテールの美少女。

彼女が、先程の中性的な声の主「アキラ」だった。

見たところ彼女はただの美少女ではない。髪型によっては美少年にもなれる、魅力的な顔立ちなのだが、非常に残念なことに、目の前の彼女からは、品行方正というものは欠片^{かけら}も見受けられない。

彼女は一通り教室を見回して好き勝手喋ると、後ろに立っていた、痩せて背の高い少年に声をかけた。

「ところで、お前、何処や、サキ？」

「お前の隣」

「最悪やんか」

「その台詞、そのまんまお前に返す」

「はいはい」

中性的な美少女「アキラ」は、教卓から飛び降りた。

^{かかと} 踵まであるスカート。第一ボタンを外したブラウス。首にぶら下げているだけのスカーフ。羽織っているだけのブレザー。今どきありえない、まるで化石のような不良スタイルだ。

「じゃ、次の議題、いくで」

おまけにこの不良少女ときたら、珍妙な方言を使う。

「サキ、書いてえな」と、後ろの少年に声をかけ、彼女は一段と

大きな声を張り上げた。

「次は、十月の野外活動の班決め。どうやって六つに分けるか、意見出してえな」

どうせ誰も挙手するわけがない。このクラスの生徒ときたら、雑談の中でしか意見を言わないのだということを、アキラは理解している。

「委員長一任うちゅうのはナシやで。オレもサキも暇人ちゃうさかい」

だから一呼吸分の間を置いて、アキラは付け足した。
クラス中が笑い出す。

「んじゃ、今決まった班にすっぺし。面倒だしやあ」
誰かがズボラな意見を出し、拍手が起きた。

「一応、反対意見ないか？……いないなら決まりや。後になって嫌や言うても、聞く耳持たへんで。じゃ、プリントに書いてある係、明後日までに決めて、オレらの所に提出な。」

次、球技大会のチーム。東部中の時と同じで、男女混合バレーボールなんやけどな」

「それも今の班でいいっちゃ」

「はい、反対は？ないね。ほな、こいつも決定。球技大会は六月の第三土曜日やさかい、それまでに、各班で仲良くなつとくこと。以上、葵ちゃん、ホームルーム終わり」

アキラはホームルームを終えると、ずっと教室の後ろで成り行きを見守っていた、担任の音楽教師、中野 葵と司会を交替した。

ところが、アキラは自分の席に着くなり、周りの生徒と喋りだした。彼女の前の席のくせつ毛の少年などは、困った顔をしている。

「なあ、コメチ。このコの下の名前、何やったっけ？」

さすがのアキラも、自分の前の席の少年に、直接声をかけにくかったのか、身体を真横に向けて喋っている、大きな垂れ目ときっか

り弧を描く眉、それに甲高い声が特徴的な少女「コメチ」こと古明池初音^{いちね}にこっそり訊ねた。彼女とは去年も同じクラスで部活も同じ、ということもあって、二人は馬が合っていた。

「ああ、天然パーマの天然パーのカズヤよ。鈴木和哉^{かずや}」

「天然パー……。あ、あの、ハンド部の部長やっとなるくせに、男子バレーと掛け持ちしとるっての。…ってどしたの、コメチ。顔、ごつつ怖いで」

「気にしないでワ。わたし、こいつらに付きまとわれてんの」

コメチはわざとらしく、大きなため息をついた。

「こいつらって、オレモか？」

今まで無関係・無関心を決め込んでいた、アキラの隣の席の学級委員「サキ」こと鈴木賢木^{さかき}が、とうとう小声で口を開いた。彼もまた、アキラやコメチと去年も同じクラスだった友人の一人だ。

「あーら、聞こえてたのワ」

「白々しい。で、どういう意味なのワ」

サキは、担任の話の邪魔にならぬよう、極力押し殺した声で訊いた。

「あなたこそ白々しいわね。あなたたちW鈴木に囲まれること十三年。付きまとわれてる以外、言いようがないっちゃ」

「お互い様だろ」

コメチとサキの険悪な雰囲気を知って知らずか、アキラは全くお構いなしだ。

「そっか、コメチ、神森小やもんな。あそこ、学年一クラスで、そんでもって、一クラス十人くらいしかおらへんのやろ。それじゃ、サキとずっと同じで、カズヤ君とは去年以外はずっと同じなんや。ま、ええやんか、幼馴染みがおるってことは。仲良うしようや」

しかしコメチもサキも、そして困り顔のカズヤまでもが、アキラを無視した。

「アキラ」。桂小路 晃^{かづろ あり}。

関西の方の小学校を卒業し、市立東部中に入學。その後神森中の新設に伴って移動してきた、表向きは気が強く、格好の割には頼れるしつかり者で人気者。吹奏楽部の部長もしている。言葉遣いや態度は悪いが、学級委員として責任は果たしている、というのが周囲の評価だ。しかしアキラの本当の性格や家庭の事情などを知る者はいない。案外彼女は自分のことは何一つ、誰にも語ろうとはしなかった。

教室で級友たちを笑わせることもあるし、楽しそうな表情も見せるのだが、付き合い二年目で、尚且つ彼女をよく観察している者から見れば、意外とアキラは表情が乏しい。基本の顔が崩れることが、決してないのだ。

その美しい顔で一番目を引くのが、大きく魅力的な漆黒の瞳だ。少し吊り上がっているせいか、厳しくも見える。健康的な白い肌で、造り物のように、各パーツが均整のとれた場所に付いている。身長はとても高く、中学二年生の男子の平均身長よりも高い。華奢な身体つきに見えるが、そうではなく、筋肉質で、贅肉が全く無い、引き締まった身体をしている。外見は文句の付けどころが全くない。それがアキラだ。

第1部・五月ゝ出会い - 2 (後書き)

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第1部・五月〜出会い〜 3

「起立！礼！」

アキラは担任の話が終わると号令をかけ、さっさと音楽室へ向かった。

「待つて、アキラ！」

コメチもその後を追う。二人は吹奏楽部だ。

「おーい、コメチ！部活終わったら、係決めすつぺし、教室サ戻つて来いワ」

とつと走り去る二人の背中にカズヤは声をかけたが、二人は返事もなく出て行った。「大丈夫。二人とも、ちゃんと来るよワ。オレらも部活サ行くべ」

動じるカズヤの肩を、サキは軽く叩いた。

追いかける気まんまんだったカズヤは、そこで初めてサキの格好に気付いた。

「サキ、何、サポーターしてんのヤ？今日、見学の日だっちゃ」

目標に逃げられたカズヤの次のターゲットはサキに替わる。

「細かいこと気にすんなつて。せつかく体調いいんだつけ、そういう日に鍛えとかなないと、かえって病人になるよワ。大丈夫、オレのことはオレが一番知ってるの、お前が一番知ってるっちゃ」

「んだけど……」

「じゃ、いいっちゃ」

サキは笑った。カズヤは単純だから、すぐ誤魔化せる。

青白く痩せているサキは、生まれつき循環器系に原因不明の疾患がある。

病弱ゆえにいろいろ行動に制約があつても、サキは性格が いい ので、彼を悪し様に言う者は一人もない。

サキは二年生で既に百七十五センチもある身長と、類い稀な瞬発力を持っていて、知らない人が見たら、彼が病氣持ちだと気付かないだろう。ところが彼は幼い頃から何度も発作で死にかけたこともある。

だからこそ彼は体調の良いときは身体を鍛え、病に耐えられる体力を付ける努力をしてきていた。その甲斐あって、今は長時間の運動以外ではできるようになっている。

年の割に大人びた、眠っているようにも見える伏し目がちの細い目は、いつも穏やか。そしてこれも年の割に幼い一人っ子の坊つちやん育ちのカズヤの隣で、彼の兄貴分をしているから余計に大人びて見えるのだ。

そして自分に厳しくても、他人には優しいサキは、当然成績優秀。茶目インテリヤンキつ気もあり、教師をからかう一面も持ち合わせていて、『頭脳派不良』と呼ばれもしている。

「無理したら、即、退部」

「はいはい、部長サマ」

サキはふざけた。

生まれてからの付き合いのカズヤは、サキには逆らわない。サキの性格を知っているし、何より、同じ年であっても、兄のように慕っていたからだ。

「オレ、嫌やかんな」

アキラは、さつきから同じことばかり言っている。

部活終了時間を過ぎ、彼らは教室に集まっていた。

「はい、はい。よく解ってるわよ」

コメチはアキラに、いちいち返事をしてあげていた。

「何でもいいけどや、その無表情で駄々こねるの、どうにかしてくれよ。死人がお笑いやってるみたいで、怖いんだよ、アキラ」

「サキ、言い過ぎじゃ……」

控えめに釘を刺したのは、アキラとは逆の意味で中性的な少年「シキ」こと橘^{たちばな}志貴。彼は今年初めて、アキラと同じクラスになったばかりで、まだ彼女との接し方が判っていない。

「気にすんな、シキ」

購買部で買ってきた大量のパンを頬張りながら、おっとりのんびりシキの肩を叩いたのは、悪戯^{いたずら}つ子のような顔つきで、縦にも横にも大柄な柔道家、「ポン」こと東海林^{しょうじ}篤孝^{しげたか}。彼はアキラやサキ、コメチと去年同じクラスだった、勝手知ったる仲の一人だ。

終始無言のカズヤは、単に慣れていないだけで、今いる面子の中で一番大きな身体を持て余すように、居場所を探して、もじもじと落ち着かない。

とうとう、完全下校の鐘が鳴った。

「遅いなや、ナミは」

一同は、未だ現われないもう一人の女子を待っていた。

「ただ待つてるだけじゃなんだし、ボくらで、係の決め方だけでも決めようよ」

「アミダでいいっちゃ」

ポンは既に黒板に線を引きはじめている。

「ポンなあ、お前、アミダ好きだよな。ホームルームでも同じじゃんか」

「だって、楽だべや」

「でも、それじゃ、アキラとサキが班長になっちゃうかもしれないさ。マズイよ」

「あ、んだなあ」

「じゃさ、何かの『長』じゃない人っての、どう？」

「賛成」

シキの提案に、反対する者は誰もいなかった。誰もが、自分が班長にならない自信があるからだ。

コメチは必修クラブの方で部長をしていたし、カズヤはハンドボ

ール部の部長、ポンも柔道部の部長だったし、意外にも、シキはバレーボール部の部長をしていた。そしてアキラとサキは学級委員長。学校再編のついでに二年生が部長になった部活は多いが、それでもこの班は異常だ。

「何だかさ、ナミに申し訳ない気がすんねん……」

「じゃ、あなたやるのワ」

「嫌やねん」

「じゃ、他に何か案がある、アキラ？」

「無いから、悪いって思うんやんか」

その場にいた六人がため息をついたその時、教室のドアが開いた。「ごめーん。何だかうちの部長、やたら気張っちゃってワ、遅くなっちゃった。決まったのワ、係？」

遅れてやって来たのは、ただの卓球部員、「ナミ」こと佐藤七海^{ななみ}。「決まったと言えば決まったんやけどな、『長』つかない人が班長って……」

「えーっ、それじゃ、あたしだサ、班長」

六人は申し訳なさそうに、ナミを見た。

「ま、しゃあないっちゃね、それじゃ」

意外とあっさり、ナミは引き受けた。彼女は『長』から逃げて、今まで目立たぬようにしてきていたはずだったのだが……。

「どうせ、アキラもサキもいることだし、この班、知った顔ばかりで慣れてるし、名前だけでしょ」

おとなしいナミなのだが、意外とちゃっかりした一面も持っている。

「と、いうことで一件落着くことで、他の係はアミダで決めるべ」「やっぱりそれかい」

「ポン……何もそこまでアミダに……」

「気にすんな。せっかくできてるんだっけ」

「……」

ドングリ眼をくりくりさせて、我先に、自分が書いたアミダくじの場所を選ぶポンの姿に、一同は笑った。あまりに可愛らしかったのだ。

第1部・五月ゝ出会い - 3 (後書き)

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfradia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第1部・五月〜出会い〜 - 4

「ところでさ、この班で球技大会って、マジ？」

今までなかなか会話に入れず、機会を窺^{うかが}っていたカズヤが、話題を変えた。

が、切り出し方がどうにも悪い。

「ちよつと、それ、どういう意味？」

コメチはカズヤを睨^{にら}みつけた。ナミまでもがだ。

「バカだなヤ、カズヤは」

ポンは、口籠^{くちし}もるカズヤの肩を叩いた。

「ちゃんと二人に言わなきゃ、かえって嫌味だっちゃ。大丈夫、身長なんて気にすつことねえってなあ」

腰に手を当てて笑うポンを、今度はアキラがど突いた。

「お前^{そら}ら、揃^{そろ}って大バカや！アホたれが！」

ナミとコメチは、クラスで一番身長が低かった。未だに小学生に間違えられる声変わり前のシキですら、百六十センチはあるし、アキラときたら、百六十七センチのモデル体型。後の三人の男子は、クラスで一番大きい三人だ。

「ったく、バレーはチームワークってどうして言えんかね、バカどもは。」

今更だけどな、オレはすつごく頼りにしてるんやで、運動神経抜群の二人を。

って、アホ二人の所為で、オレの台詞^{せりふ}も台無しやわ」

アキラのフォローに、ポンなどは調子良く相槌^{あいつち}を打って、またど突かれた。

「いいのよ、アキラ以外はバカばかり」

コメチは鋭い視線をポンとカズヤに向けると、背中を返し、「帰りましょ。こんなバカども放つ^{はな}つ^ついてワ」と、カバンを掴んだ。

広い学区の神森中では、自転車通学は当然のことだった。七人は土手沿いの道を、喋りながらちんたら進んでいた。

「じゃな」

一番始めに集団を抜けるのはアキラだ。彼女の家は、学校から見て南西の黒森地域にある。

「おう、またな」

「明日ね」

口々に思いおもいの挨拶を交わし、六人は土手沿いの道から脇道へ下るアキラに手を振った。

「それにしても、あいつ、オソロシク丸くなったよな、性格。去年の今頃とは大違い」

「んだなヤ」

何気ないボンとサキの会話だったが、それはたった今別れたばかりのアキラのことを指していると、もはや鈍感の烙印を押されかけているカズヤですら、すぐに気が付く。あまりにも何気ない会話に、カズヤは喰いつけなかったのだが、カズヤはアキラが気になって仕方なかった。

つい最近行なわれていた中間テストの、恐怖の総合結果が戻ってきた。

クラス中が例によって騒々しい中、アキラだけは「かったりい……」と、机の上に足を投げ出し、踏ん返り返っていた。「パンツ見えるから、やめなさい」と、コメチはアキラの足をひっぱたいが、一向にお構いなしだ。

コメチも心得ているから、二度も注意はしない。すぐカズヤに話しかけた。

「ね、カズヤ、何位？」

「まかせろ！今回は五十二位」

カズヤはVサインを出したが、その手はすぐ引っ込めるはめになる。

「勝った、わたし、四十七位」

「あたしも。五十位ジャスト」

「カズヤは波があるんだよ。前なんか、三桁だったべ。その前は二桁で、その前は……」

「煩いなあ、サキ。ごしゃかれるのは、親からだけでいいんだよ。な、シキは？」

「え、ボク。えっと、十九位かな。今までで最高」

これではカズヤは肩を落とすしかない。

「すげーなヤ。オレなんか、机に向かうと口ばっか動くんだよ。だっけ、成績も体重も増えてやんの。初の三桁突入。ちょうど百位」

「ポンよお、あんなにオレとサキで教えてやったのに、去年から下がりっぱなしやんか。マズイで」

「悪いねえ、アキラ」

ポンはにこにこしながら、頭を掻いた。

「マズイって、未だ学年で半分より上だっちゃ。平気だサ」

カズヤとしては、厳しいアキラの言葉を慰めるつもりでポンに声をかけたつもりだったが、返り討ちに遭う。アキラは自分に厳しく、そして他人にも厳しいのだ。

「ま、オレのことじゃないっけ、ええねんけどな。お前みたいに自分に甘いと、人生損するで。せつかくサキもオレもおるんやし、利用して、ええ点取ったらええやん。ま、どうでもええけど」

アキラは相変わらず机の上に足を投げ出したまま、かつたるそうにカズヤに言った。はつきりと「自分に甘い」と言われてしまったカズヤは、黙るしかない。他の五人は心得ているようだが、カズヤは、全体の中のアキラと個としてのアキラとの違いによろやく気持ち始め、戸惑っていた。

しかしアキラときたら、戸惑っているカズヤなどまるで無関心で、受け取ったばかりの成績表に見入ることなく、保護者欄に勝手に印鑑を押すと、さっさと担任に返しにいった。

カズヤは目を丸くした。担任も、何も言わずに受け取ったではないか。

「ところで、サキはどう？下がっちゃった？」

「いや、変わらず」

「コメチ、酷いっちゃ、そんな訊き方。取り敢えず、未だ上がる余地あるのに」

カズヤの言い分は至極当然なのだが、コメチは全く動じた素振りを見せず、肩で大きく息をした。

「あなたって、本当に周りを知らないのね。いいこと、サキはいつも学年二位」

「コメチ、いいよ。カズヤに言っても……」

「サキはいつもカズヤを庇いすぎよ、ま、いいけど。でも、よく考えたら判ることだサ。絶対四八〇点取ってるのに、いつも二位なのよ。マグレで四九〇点以上取る人が、そう都合良く毎回いるわけないっちゃ。毎回一位取る人間、有名なだけどね。シキは知ってるっちゃ？」

七人の中でもう一人、去年違うクラスだったシキにコメチは同意を求め、シキは頷いた。

コメチの言う通り、見るからに成績優秀なサキは、定期テストで二位以外取ったことがない。

サキは自分のことが話題にされるのが恥ずかしくて、トイレに逃げ出した。

「コメチ、オレ、先に部活行つとるで」

アキラも例によつて、荷物を早々にまとめて立ち上がった。

「了解」

「サキのヤツ、小姑みたいにうるせーんだよ。な、思つやる」
「そうね」

コメチは笑った。

「早く行きなよ。そろそろ戻ってくる頃だし、あなたもこの話、聞いていたくないでしょ」

「そうやな。ほな、お先に」

アキラは背を向けた。

「今年は、もう、来ないみたいだっちゃ。良かったなや、アキラ」

「何か期待しとんのか、ポン」

アキラは後ろ手でドアを閉めた。

第1部・五月ゝ出会い - 4 (後書き)

(注)ごしゃかれる 怒られる

作中の地方の方言として使用しました。

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第1部・五月〜出会い〜 - 5

アキラが出て行った後に残されたコメチとナミは、肩で大きく息を吐いた。

「もう、ポンったら、何言ってるのワ」

「あたし、めちゃくちゃ怖かったよワ」

「でもやあ、連中、殆ど東部中^{ほんとう}に残ってるべや。今更来ないっちゃ」

「ま、それもそうだな」

元一年五組の三人は、彼らだけにしか解らない会話をした。

「ね、何か来んのワ？」

わくわくしながら訊ねてきたカズヤに、コメチはまた、肩で大きく息をした。

「もう、つくづくオメデタイ人間よね、カズヤは。ナミ、ポン、説明してやってワ。わたしはもう嫌。丁度シキも詳しく知らないし」

「んだな、去年の一学期の中間テストの後の大騒ぎ、知ってるべ、あの……」

ポンの声が、物音でかき消された。

「あっちゃーっ、最悪」

ポンは頭を抱え、コメチとナミは顔を見合わせた。

「何や、ワレ、何とか言えや、クズ共め！てめえらから、因縁吹っかけてきよったんやろが！」

中途半端な関西弁のドスの効いた声がし、黄色い髪の男子生徒が、ドアと一緒に教室に入ってきた。

「誰か、誰かつ！先生呼んでこい！」

珍しくポンが大声を出して命令し、喧嘩に関係のない生徒が巻き込まれないよう、彼らとの間に入って、野次馬が近付かないようにした。ただ、決して止めようとはしなかった。

別の男子生徒が倒れこんできた。その向こうには、鬼の形相の桂

小路 晃。

「そつちが蒔いた種^まやろが。きつちり自分でカタ付けろや！てめえのケツくらい、てめえで拭け、クズが！」

かれこれ五人くらいの男子を床に転がし、それでも立ち上がろうとする者の頭を、アキラは靴で踏み躪^{にじ}つた。

「クズって言われんの、そないに嫌か。言葉ばつかに反応して、だから人間はクズなんだよ。生きる価値ねえんだよ。神森中の番を張る、結構なこつた。で、どうしてオレのどこに来るんや？アホちゃうか、お前ら」

倒れている男子の胸ぐらを無理遣り掴んで殴ろうとしたアキラを、後ろから誰かが止めた。

「アキラ、またかよ」

騒^{さわ}ぎを聞きつけて、トイレから駆けつけたサキだった。

「煩^{うる}せえっ！」

アキラの拳をサキは軽々とかわし、代わりに木の掲示板が割れた。カズヤは息を呑んだ。今の拳は、サキだからこそかわせたのではないか。

アキラは職員室から駆けつけた、大勢の男性教師に取り押さえられるまで、サキを攻撃し続けた。その攻めはとても美しい舞のようで、サキもその攻めを舞うように、紙一重でかわす。体力を消耗しないような動きは、無駄のない美しい無いものだった。

「あああ、派手にやっちゃってワ。成績優良児は人気者だこた」

我を忘れたように悪態をつきながら暴れるアキラは、取り押さえられても、尚サキに牙を剥いていた。サキはそんな彼女を睨^{にら}みつけ、はつきりと彼女に嫌味を言った。

そして「目を覚ませ、桂小路 晃」とアキラの頬に、容赦ない平手打ちを一つ見舞った。すると、アキラは動きを止めた。

「周りを見る。お前、また、やったな」

アキラは短い声を上げて突然失神し、教師の一人が担ぎ上げた。

担任の中野 葵も来ていて、男性教師の耳に、小声で何かを囁いた。

「まさか去年の騒ぎも……」

「そ、あのバカだよ」

サキは話しかけてきたカズヤに、箒ほうきを押しつけた。

「神森中に来た連中は雑魚ぞうばっかだったっけ、まさか同じ手で来るとは思ってなかったんだけど、甘かったなヤ。ま、あのバカと同じクラスになれて、ほんと良かったよワ。オレ以外、あのバカに手エ出せないっけな。学年一位があれなんだから、世も末だ」

サキは割れたガラスを集め始めた。他の生徒も、外れたドアや乱れた机を直し始め、野次馬たちは去って行った。

「あー、みんな、ちよつと聞いて。知ってると思うけど、オレらのクラスの委員長は、ちよつとデキがいいから、やんちゃな彼らに絡まれやすいんだけど……」

サキはもう一人の委員長として、事態の收拾を着けるために、大きな声を出した。

「な、ポン。さっきはなして、誰も止めに入らなかったのワ？」

カズヤはポンに訊ねた。

「サキに止められてんだ」

ポンはそれだけ手短に言つと、サキの話を聞けと、顎あごで示した。

「ちよつと彼女は強い上にキレやすいから、ケガするっけ、誰も止めに入らないでほしい。」

しかもあいつ、キレ過ぎちゃって気絶しちゃったんだけど、ああいう時、彼女、少し記憶を失くすんだ。まあ都合が悪いことを忘れちゃうんだな。保健の先生が言うには、そういう場合は、無理に思い出させない方がいいらしいから、明日、あのバカが普通の顔して

ても、知らんぷりしてやってほしい。

迷惑かけて悪いけど、ヨロシク」

要するに、軽い心の病気みたいなものだ、サキは言い訳をして、アキラを守ってやっていた。サキが言うと、不思議と誰も異を唱えない。それは彼の人徳の為せる業だ。

一人腑に落ちないといった顔つきのカズヤだけに、サキは付け加えた。

「あいつはな、我に返るまでは、怒りに任せて、相手が動かなくなるまで攻撃する習性があるんだ。危ないだろ」

「そう、去年、ポンったら止めサ入って、逆に投げられて頭サ打って、脳震盪起こして、救急車で運ばれちゃったもんね」

ナミが更に付け加え、ポンはまるで他人事のように、はははっと笑った。

一体、あのアキラのギャップは何なのだろう。あんなに自分勝手に、正しくて明るいのに、どうして何故あんなことを言ったのだろう。

「だから人間はクズなんだよ。生きる価値ねえんだよ」の叫びが、カズヤの脳にこびりついて離れない。何故、人間という単語で一括りにしたのだろう。「お前ら」でも、「てめえら」でも、むしろ汚い言葉だとしても、その方がぴったりするではないか。

そういえば、確かにクラスの中の個人として、アキラは人気もあるし、明るい。けれど、彼女が個人対個人で仲の良い人間といえ、まずサキとコメチ、そしてナミとポン、今の班の連中くらいだ。よく見ていれば、コメチがアキラのことを積極的に、コメチの個人の輪、クラスよりも小さい輪に引き込んで、アキラを盛り立てている。その中でのアキラはとても陽気だが、その明るさは、実はその場限りで、もしかしたら彼女自身は、明るいという言葉とは全く無縁な性格なのではないだろうか。

カズヤはようやくそこまで考えた。ここまでが彼の限界だった。

第1部・五月ゝ出会い - 5 (後書き)

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfradia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第1部・五月〜出会い〜 - 6

「あ、そうそう、カズヤ。オレ、今日、用事あるっけ、部活休むからワ」

窓の外を気にしながら掃除をしていたサキは、カズヤが止める間もなく、急にカバンを掴んで外へ出た。

「何だヤな。ま、あれだけアキラとやり合ったことだっけ、休めって言っつもりだったけど、元気にこしたことねえし……」

カズヤも掃除を切り上げた。大方片付いていたから、部活へ向かって問題なさそうだった。

一見元氣良く教室を出たサキだったが、カズヤの心配通り、ひどい倦怠感に襲われ、全力の半分も力が出せない状態だった。それでも彼は、彼が出せるだけの速度で自転車をこいで、舗装されていない農道を走った。その道は、例のアキラが分かれるところへ行く近道だった。

サキは、その農道と通学路が合流する地点で、自転車を降りた。

「よお、お嬢さん、元氣ないこた」

サキは遠くから自転車を押して来る、スカート丈の長い女子に声をかけた。

「今日もまた、えらく派手にやりましたねえ」

「あ、ああ……つい……」

アキラは、そう短く返事をする、立ち止まらずに、サキの前を通り過ぎた。

「悪かったな」

「別に。オレの方もぬかってたし、こっちこそ悪かったよ」

サキが後を付いて来るのを知っているから、アキラは話しかけた。

「ちょっと、付き合えよ」

サキは更に声をかけた。「嫌ってのはナシだぜ。一緒に川へ落ちてでも、付き合わせるっけ」

「じゃ、嫌やワ」

「ヤな女だこた、もう……」

アキラの返事に、サキは今日何度目かのため息を付いた。

「はいはい、どーせ、オレはヤな女ですよ」

アキラはあげ足を取った。

「どうでもいいけど、もういい加減、キレるのやめろよ」

「今日だって、オレから吹っかけたわけじゃねえぞ」

「判ってるさ、んなこと」

二人は土手に腰を下ろした。

「でも、今年、しかも今日来るとは思ってたよ。去年で懲りてると思ってた」

「オレかてそう思っつったんやけど、連中にも理屈があるみたいで、神森中仕切るなら、東部中のバカ大将やっちまったオレを倒さなきゃ、面子^{メンツ}が立たないらしいぜ。バカみたい。ま、オレもオレやけどな」

「とにかく、またいつもの『フリ』しろよ。大抵の連中は信じてっけ。騙^{だま}すなんて、お前の性には合わないだろうけどさ」

「じゃあないさ。それに、そうでもない。普通の学校生活送る為やしな。第一、オレが悪いんやし、去年みたいにサキが事前に食い止めてくれるのに、甘えてばかりもいられへんさかいな」

「あ、知ってたのワ」

「当たり前やんか。普段はそんなにバカじゃねえぞ、オレは」

アキラは石を投げた。石は水面^{みなも}を跳ね、対岸まで辿^{たど}り着いた。

「けどなあ、サキ。これ以上オレの世話焼くな。これ以上オレに付き合つと、オレはきつと、お前を碌^{ろく}でもないことに巻き込むかもしれない」

「何を今更。自分のプライドを、オレの所為^{せい}にすんなよ」

サキは茶化した。

アキラは終始、ブスっとしていた。教室での彼女とは、まるで違う。

「言つとくけど、お前だからな。普段、普通に過ごす方法を訊いてきたのは」

アキラの表情を見咎め、サキは言った。

「なあ、サキ、オレ、普段『普通』か？」

そう訊ねたアキラの口調には、少し不安が混ざっているようにも聞こえた。

「ああ、喧嘩っ早くなけりゃ、充分さ」

サキは念を押してやるように言った。この気の強い少女は、意外と「普通」であることに気を遣っていることを、変だと思いながら「じゃ、明日は普段通りに振る舞って、忘れたフリをすること。いいな」

サキはアキラの肩を叩いた。

が、一瞬、アキラの全身から殺気のようなものが立ち、彼は手を慌てて引つ込め、同時に彼女は彼の手を払い除ける動作をした。

「悪い」

二人は同時に同じ言葉を口にした。

「お前、不用意に触られるの、苦手なんだよな」

「イヤ、悪い癖さ。悪かった」

暫く二人は黙り込んだ。

先に口を開いたのはサキだった。

「葵ちゃんさ、きつと、お前やコメチと、オレが同じクラスで、しかも自分が担任するって、頑張ってくれたんだろな」

「きつとな。お前やコメチなら、こんなオレを抑えられるって思ったんやろ」

「感謝しろよ」

「してるさ。転入しておきながら、両親が海外転勤で一人暮らししてる一人娘なんて、胡散臭いヤツに目を懸けてくれてるんだ。それに、他の先生連中のが葵ちゃんに感謝してんじゃないか。問題児を引き受けてるんだ」

「そりや言える。ところで、当分帰って来られないのワ？ご両親」

「オレが中学出るまではな」

「大変だこた……」

「そうでもない、気楽やわ。」

……昔さ、必ずクラスに一人は問題児がおって、真面目で人気のある生徒が、『ちゃん係』って、世話役押しつけられたりしてなかったか？」

「さあ……。なして？」

「神森小は小さすぎるから、そんな問題児、おらへんかったかな。イヤ、何となくオレとサキみたいやなと思ってさ」

「はははっ、確かに」

「おいっ、ちよつとは否定せえな。まったく……」

「悪い悪い。……あ、問題児ならいたよワ。まあ、天然バーマの天然パーのカズヤ」

「あいつと同列かいっ」

二人は笑いながらも、お互いそれが愛想笑いだと気付いていた。

不可解なヤツだよな、こいつは……

サキはいつも感じていた。いつもアキラは、何かを演じているような気がするのだ。

そういや、喧嘩してる時くらいだサ。アキラが何も演じてないようなのだ。普通にマズイよなあ……

サキは、この頭の良い美少女の保護者であろうと、つい思ってしまっただった。もう一人の被保護者、カズヤとアキラとは全く正反對のキャラクターなのに、何故かどちらも、大事な所で何だか頼りないのだ。

「オレも氣イ付けっけど、アキラも、あんな連中相手サすんな。お前にとつちや、相手する程の者じゃないだろう」

サキはくどくアキラに言い聞かせ、家へ帰った。

第1部・五月ゝ出会い - 6 (後書き)

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfradia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第1部・五月ゝ出会いゝ7

翌日の放課後、何事もなかったようにサキとカズヤはジャージに着替えていた。

「なあ、サキ」

「ん？今日は部活出るよワ」

「じゃなくって」

カズヤは学生服を畳みながら訊ねた。

「昨日は、一体何だったのかヤと思つて」

カズヤのその一言だけで、聡明なサキは、大体察しがついた。

「本当は知ってるくせに」

カズヤは、勿論頷いたりはしない。

「あんましオレのプライベートに顔、突っ込むなよ」

サキは別に責めるつもりではなく、むしろ茶化したつもりで、隠そうなどとは全く思っていないかった。

「それとも、まさかやきもち妬いてんのワ、オレに」

「バカ」

けれど、カズヤの頭の中では、サキのふざけは半分本気で、本当にサキとアキラが付き合っているのではと、「付き合う」の意味を取り違えて思い込んでしまっていた。

「なあ、今日、二人共部活サボれん？」

そこへ、丁度間の悪いことに、昨日大問題を起こしておきながら、いけしゃあしゃあと一日を送っていたアキラが、にこにこしながらやって来た。それこそまるで何事もなかったかのように。

「よう、何かいいことでもあったのワ？」

「別に。いつもと同じやんか、カズヤ」

カズヤの意地悪な質問にアキラの横顔が一瞬だけ歪ゆがんだのを、サキは見逃さなかった。

「ウソつけ」

「何やねん、カズヤ。いきなし尋問口調で」

アキラの視線は鋭く、口調こそごまかしていても、視線に本性が出てしまっている。

「で、なして部活サボれって」

サキは話を元に戻した。

「いやさ、ちよつと付き合ってほしい所があるねん」

「お前ら二人で行けよ」

カズヤは頬をぷうつと膨^{ふく}らませ、サキとアキラに背を向けた。

「はあ？」とアキラは呆れ、目を点にした。

「カズヤ、お前、もしかして、何か誤解してねえか？」

サキは、つい先程の会話の流れから、カズヤが何か大きな勘違いをしていることに気が付いた。カズヤの意地悪な質問は、昨日の騒ぎを咎^{とが}めた嫌味ではなく、その後のことを嫌味にしているのだ。これは厄介だ。

「誤解？」

アキラとカズヤは同じ言葉を口にした。

「何が誤解なのさ。お前、部活休んでまで、あんな騒ぎ起こしたアキラのことサ、慰めに行ったべや」

サキは頭を抱え込んだ。想像していた通りの誤解を、カズヤはしている。しかも余計なことを言ってくれた。今の発言に忘れたフリをしているアキラは、どう反応するだろうか。

「何、オレ、昨日騒ぎ起こしたか？ウソやろ。誰かと間違えとるんとちゃうか、カズヤ」

アキラはへらへらした。

「何言つてんのヤ。オレらの目の前で、お前、ヤンキー連中相手に喧嘩したっちゃ！とぼけんなよ」

「オレ、身に覚えはないねん。こいつ、何、言っつてんのや、サキ？」

アキラは頑として、とぼけ続けた。

サキはほつとした。アキラの心配は、取り敢えず今はしなくて大丈夫だ。アキラはサキが望んだ通り、皆を騙だまし続けてくれている。頭の良い彼女は、冷静でありさえすれば、完璧なコンピュータでいてくれるだけの脳みそを持っている。

「オレのこと、からかってんのワ？」

とうとうカズヤは怒りだした。それでも、サキとアキラは良かった。少しカズヤには気の毒だとは思ってはいたが。

「オレは部活サ行くからワ、二人でよろしくやってろよ！」
捨て台詞を残し、カズヤは教室を飛び出してしまった。

「まったく、しゃーねーなヤ」

サキは、カズヤが出ていった後と、アキラの顔を見比べた。

「ところで、あいつの言うことった『誤解』って、何やねん」

困ったなヤ……。こいつに恋愛語りたくないし、第一、解らないだろうし……

サキはまた困ってしまった。アキラのことだから、先ず一般的な男女関係は全く疎い。

たとえ「アキラとサキが付き合っていると、カズヤは誤解した」のだと説明したところで、「付き合って、一体何が悪いんやねん？」と言い切ってしまうだろうし、第一、純情なサキの口から「アキラと自分が恋人同志だと誤解した」のだとは、いくら解りやすいとはいえ、とても言えない。

サキだって、一応思春期真っ只中の少年なのだ。

しかし一体どうやって、鈍いアキラに正しい情報を伝えよう。

「どうも、その……」

「何や、はつきりせえよ」

「……その、オレとお前が、恋人同志だと勘違いしたみたいで……」
サキは、かなり意を決して言った。それなのにだ。

「どういうところが恋人なんだよ。オレにはさっぱり解れへん。大体、どうすりやなれるんや、恋人って」

サキは頭を抱え、心の中で怒鳴った。

ふざけんじゃねえ。バカ共め！と。

「それとこれと、大体どうしてカズヤが拗^すねる原因になるんや？」

「もういいよワ。お前にそんなこと、説明するだけ時間の無駄」

「何や、それ、いけず」

「もう、何とでも言ってくれ。お前の用事は後でゆっくり聞いてけっからワ」

「ああつ、待て！」

「待たねえ！」

サキはアキラをそこに残し、カズヤの後を追った。

「……ふん、バカじゃねえの」

今までそこにいたアキラは消え失せ、別人のような彼女が残されていた。そのアキラは、走り去ったサキの背に、鋭い、他人を見下したような視線を突き刺していた。

「バカは嫌いだ……」

彼女は一人^{つひや}弦き、グラウンドに背を向け、卓球場へ足を向けた。

「そんなバカになるうなんて、オレも所詮バカな人間だよな。笑っちゃまうよ。まったく、バカになる努力はえらく疲れるしさ。楽しいからいいけど。バカな人間は、大バカ者の手の上の道化で、その大バカはバカになるうって、自分の手の上でおどけちゃって、本当に究極のバカだよ……」

アキラの表情が、いつものものに戻った。

卓球場のドアを開ける。

「よお、ナミ、おるかあ？ちよいと貸してえな」

陽気な声を出すアキラは、いつもの彼女だった。

第1部・五月〜出会い〜・7（後書き）

次回から第2部・五月〜去年の出来事〜を始めます。

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfradia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第2部・五月〜去年の出来事〜 - 1

2・五月〜去年の出来事〜

サキは幸い、部員が集まり切らないうちに、何とか他の部員に部活を任せ、カズヤを連れ出すことに成功した。

「何だよ、ったくよー」

「いいから、来い」

「二人で仲良くやってろよ。部活なんて、野暮やぼ言わないつけ」

「つくづくアホだな、お前は。黙ってついて来い」

「どうせ、サキなんかよりアホですよ、オレは」

「嫌味かよ！単純にも程がある」

苛いらつきながらも、サキはカズヤを連れて、川の土手でも特に人目のつかない所を選んで、腰を下ろした。

当然カズヤも苛いらついていて、そもそも自分のことだけ世話を焼いてくれていたサキが他人の世話をも焼いていることも苛いらつくし、そのサキが彼女なんか自分よりも先に作って大人になろうとしているのもむかつくし、その言い訳の為に無理やり部活をサボらされたのだから、苛いらつきも最高潮だ。

素直に話なんか聞いてやるもんか。

そう心に決めて引つ張られて来たのだ。

「お前さ、本当にオレとアキラが付き合ってると思ってんのワ？」

「んだって、そうだべ」

サキはため息をついた。今日、何回目だか判らない。

いつまでこの同い年の幼馴染おさななじみは、自分の弟でいるつもりなのかと、思わないでもない。カズヤのやっていることは、独占欲にとりつかれた園児と同じだから厄介だ。

「違うのワ？」

ため息をつくサキを見て、カズヤは少し冷静になった。

「大間違いだ！あの、アキラだぞ！」

冗談じゃない。あんな凶暴な女に惚^ほれるほど、この病弱な身に余裕はない。

「何も、そこまで怒鳴らなくても……」

「うるさいっ！聞けワ」

「はい」

どんなに逆らう気であっても、基本的に、カズヤはサキには素直だ。

「始めっから、お前やシキにも言っとくべきだったんだよ、アキラのこと。まさか、神森中までと思って、オレが油断してたのワ」

「それは何度も聞いた。それで？」

「オレら、つまり、去年一年五組だった四人は、去年もアキラと同じ班だったんだ。ほら、名前順が近いだろ。今年はアキラとコメチが、ちよつと離れたけど」

「だから？」

「今日は、やたら挑戦的だこた」

サキは苦笑した。

「オレな、去年アキラと喧嘩して、負けたのワ。めちゃくちゃ怖かった」

「お前が負けた？」

「話の途中」

サキは一喝入れた。

「あいつはオレに相談してきた。本人はしてないって言うだろうけど、でも、こう言ったんだ。『自分は元ヤンキーで、足洗おうと思ってたのに、つい手に振り回されちゃうんだ』って。

んだからオレは、こう言ってやった。喧嘩の原因は近付けないようにしてやる。それでも、もし、また騒ぎになったら、次の日は忘

れたフリをしろつて。怒りで我を忘れて、何も憶えてないって顔をしろつて。

あいつが今日すつとぼけてたのは、全部オレが嘘つかせてるんだよ。嘘つきだつてんならオレの方だ。

実際、何度も連中は因縁吹っかけようとしてきてたけど、今までオレが未然に防いできただけのこと。でもその連中の殆どは東中に残ったから、オレは今日の件に根回ししていなかったんだ。今回油断したつてのは、そういうわけ」

「なんでサキが世話焼いてやんなきゃなんないんだよ？」

頬をぷうつと膨らませ、カズヤが喰つてかかつてきたが、その幼さが可愛くもあり、疎ましくもある。今はむしろ後者の気持ちが強い。

「相談されて無視するか、普通。オレ、お前のことだつて無視したことないっちゃ」

「そりや、まあ、そうだけど……」

サキはため息をついた。数えたら両手両足の指が足りない。

「いいか、普段のアキラは陽気だし、クラスを笑わせることもできるし、人気がある。でも本当のあいつは全然違う。本心から笑わないし、冗談の一つも言えない。陽気なんかじゃ絶対ないし、本当のことは絶対言わない。その分、泣き言も絶対言わない。そんなヤツが、初めて頼み事したんだっけ、オレも応えるしかないっちゃ。その事情を、ポン、コメチ、ナミには説明して、アキラには忘れたフリをしやすい環境を作つてやつたんだ」

「はあ……」

間の抜けた返事を、カズヤはした。

それだけ悪口並べ立てるくらいなら、放っておけばいいというのが、カズヤの見解だ。でも、サキがそういう発想をしないということだけは、充分知っている。

ぽかんと口を開け、間の抜けた返事をする時のカズヤは、大概話の内容をあまり理解していない時だということを、サキは知っている。

た。

カズヤの理解度は露骨に顔に出るから、まあ便利なものだと思います、
「まあ、憶えててくれればいいし、他のみんなに黙っててくれればいい」とサキは言うに止めた。

「じゃ、次はオレが訊いてもいい？」

「何なりと」

「なして、アキラと喧嘩して、サキが怖がるの？」

「きつついなヤ」

「ごめん」

「いいんだけど」

サキはいつも半閉じのまぶた瞼を閉じて、話し始めた。

第2部・五月〜去年の出来事〜 - 1（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第2部・五月〜去年の出来事〜 2

着馴れない制服に身を包まれて緊張した顔が、所狭しと並べられた教室の机一つひとつにあった。一クラス五十五人。それが市立東部中の現状だった。

「よお、コメチ、偶然だっちゃ」

「あら、ほんと」

「しつかしこの人の多さはなんとかならないかヤ。息が詰まる」

「狭いし、臭いし、気分悪いったらありやしない。」

でも、あなたがいて良かった。こんな中に一人で放り出されたら、もう不安でしようがないもの」

サキとコメチは同じクラスの、しかも斜めに座ることになった。

何しろ二人の出身小の神森小は小さく、一学年一クラス、しかもクラスに十人位しかないような学校だ。

それに引き替え、東部中の大きいこと。近隣の小学校が七つも集まっているのだから仕方ない。神森小出身者は先ず大きな校舎で迷子になると聞かされていただけある。それだけ大きな校舎の中に、一つ五十五人のクラスが、各学年学年十一クラスもあるというのだ。思わずこっちの目が回る。

そんな大きな学校で、神森小出身者が同じクラスになることは、当然確立的に殆どないはずだった。

担任は若くて美人の音楽教師、中野 葵。

サキはクラスを見回そうとした。

しかしすぐにその視線は止まった。

コメチの前に座っている、一人の女生徒。彼女だけは少女ではなく、もう女性だった。サキの視線は、何故か彼女に吸い寄せられ、逸らすことができなかった。

それが桂小路 晃。かつみちうじ あきひ

それが恋ではなかったということだけは、確かだった。

こんな田舎の中学校に不釣り合いなほど、桂小路 晃の雰囲気は都会的だった。掃き溜めに鶴とはまさにこのことだろう。その冷たい大人びた顔立ちが、つい一カ月前まで小学生だったとは思えないほど均整の取れた造りで、サキはこの近所でこのような顔を見たことがない。

でも、サキの視線がそこで止まった理由はそれだけではない。

桂小路 晃が、他のクラスメイト違って見えたのは、その制服が窮屈そうではなかったからだ。

何しろ彼女の制服は入学式のその日から、踵かかとまである長いスカートだったのだ。

マンモス中学校の全男子生徒が、この美人の新入生を見に、一年五組に集まったと言っても、過言ではなかった。まるで黒蟻の群れか何かのように入口やら廊下側の窓やらに入り乱れ、トイレに行こうと教室から出るのも難儀したほどだ。

それ程もてはやされていたにも関わらず……

それだけの人気を一身に集めていたというのに、桂小路 晃は、愛想一つ振りまこうとしなかったばかりか、一カ月以上もの間、口を開こうとしなかった。

まるでバカには用などないと言わんばかりの視線を投げかけ、どれだけでもはやされても、

眉間みけん たてじわに縦皺を寄せて、一切表情を変えること無く、真つすぐ前を睨み付けている。授業中に指名されても返事をしないばかりか、出席確認でも返事をした試しがない。教師に叱られてもどこ吹く風で、早々に諦められてしまったし、クラスメイトが話しかけても、耳が聞こえていないかのように、目の前を素通りしていく始末。

始めのうちは他のクラスの生徒が、この美少女の気を引こうとつまらない言葉をかけたりしたりと休み時間煩かったものだが、それもすぐに消え、当然のように彼女はクラス中からも嫌われ始めた。それでも当の本人は、興味が無いというよりは、むしろ、せいせいたといった感じで決まった時間に登校し、決まった時間に下校した。

それなのに、つくづく腹の立つ女なのに、サキの目は桂小路 晃から離すことができずにいた。彼女の肝っ玉の大きさに、彼もまた腹立ちながらも感心してしまうのだ。

「ほんつと、腹立つんだよワ、アイツ。そんなに学校嫌なら、さつさと登校拒否でもしちゃえばいいのに……って、ねえっ、サキ、聞いているのワ？」

「はいはい、ちゃんと聞いてますよ」

コメチはそんな桂小路 晃に対し、日々苛々を募らせていた。当然のようなコメチの愚痴に、サキは苦笑した。

「あの神経の図太さは、天然記念物モンだっちゃん」

「あたし、本当に耳が不自由なのかと思っちゃったよワ、始め」

「わたし、そろそろ堪忍袋の緒が切れる」

そう言うコメチが、一番桂小路 晃に気を遣^{つか}って、話しかけ続けていた。そこが彼女らしさだ。彼女の中で曲がったことはできない性分なのだ。

一カ月以上、そんな状態を続けていくうち、桂小路 晃にちょっとした変化が表れ始めたことに、サキは気が付いた。

辛抱強く、努めて普段通りに明るく、他の誰とも同じように接してくるコメチに、相変わらず黙ったままの桂小路 晃だったが、それでもほんの僅かだが、困ったような戸惑ったような表情を作るようになったのだ。

クラスの誰もが気付いていない、この表情の変化が何を意味して

いるかなど、サキに解るわけがないが、彼には何かの兆^{きざ}しに見えた。

化けの皮、そろそろ剥^はがれつかや……

サキは腹の底でほくそ笑みながら、成り行きを見守っていた。

きつとあのだんまりの桂小路 晃は変わらざるを得ない。それがいい方向か悪い方向かは想像もつかないが、見ていて楽しみであることに変わりはない。

そんな頃だった。あの事件が起こったのは。

第2部・五月～去年の出来事～ - 2（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第2部・五月〜去年の出来事〜 - 3

その日は、初めての中間テストの総合結果が返ってきた日。サキはかなり自信があつたのに、何故か総合二位だった。合計四八〇点も取つたのに、一体誰が自分よりも高得点を取つたのか、氣になつて仕方がなかつた。

「桂小路 晃、おるか？」

騒がしい中、ぞろぞろと、いわゆる不良と呼ばれる類の生徒十人以上もが、一年五組にやつて来たのだ。

収拾がつかないくらい騒々しかった教室が、水を打つたように静まり返り、全員がだんまりを決め込んでいる桂小路 晃に注目した。しかし、張本人は部外者を決め込んでいるのか、平然と帰り支度を整えて立ち上がった。

「おらあつ！ いるなら返事くらいしろつてんだよ、礼儀知らずがつ！」

下っ端とおぼしき男子生徒が、桂小路 晃の胸ぐらを掴んだ。

「何とか言えよ、ええ！ 生意気なんだよ。番張りたいなら、挨拶くらいしに来いよ！」

「汚ねえ手、離せよ」

小さいけれど、低く、はつきりと、だんまりの桂小路 晃は言つた。

「てめえら、礼儀つて言葉の意味、解つて使つてんのかよ。くだらない理由で、インネン吹っかけんなよな、このクズ人間」

これが、だんまり美少女の第一声だった。

誰もが啞然として彼女を見た。もともと態度が悪いから、今更泣いたりするようなことはあるまいとは思っていたが、まさかここまで強烈なことを言うとは、期待以上だった。

「上等じゃねえか」

「……」

やはり、必要以上はだんまりを貫くつもりらしい。

「度々、総長の所へ挨拶へ来いって言っただはすなのに、お前が無視するから、こうして直々に迎えに来た。解ったら顔貸せや」

無言の桂小路 晃に、総長の取り巻きが、背筋を伸ばして言った。すると、あの無表情な桂小路 晃の顔に、生気が蘇^{よみがえ}ってきたではないか。あまつさえ、不気味な笑みすら浮かべている。

「フフフ……総長ねえ。ま、所詮ってとこやな。で、何でオレがお前らに挨拶せなあかんのや。用があるなら、最初^{はな}っから総長一人で来いよ。用があるのはそつちゃんやから。大体、こないにたくさん連れて来て、オレのこと怖いんか。弱虫やなあ、お前らの総長」

「ざけんじゃねえつ、このアマ！」

「やっちまえ！」

逆上して殴りかかってきた男子の一人の拳を掴み、桂小路 晃は、その腕を捻^{ひね}り上げた。

「イタタタタつ」

細くか弱そうな腕に掴まれてしまった、哀れな男子は呻^{うめ}いた。

「子分がこの程度じゃな、親分も大変やろ」

桂小路 晃は笑った。明らかに彼らを馬鹿にしていた。

「所詮クズの手下やもんな、たかが知れてるさ。こんな辺鄙^{へんぴ}な中学の番長なんて、猿山のボスってとこやな。大体なあ、今時番長だなんて流行^{はや}らないっつーか、ダサいし。大体オレ、番張るなんて一言も言ってないし」

彼女は更に、呻く男子の腕を擦^ぬじ上げた。異様な鈍い音がし、彼の腕が折られたことは、誰の目にも明らかだった。しかし、桂小路 晃は、悲鳴を上げて蹲^{うつすくま}った彼を、まるで道端の空缶を蹴るように、躊躇^{ためら}いなく蹴り捨てた。

桂小路 晃は、一步詰め寄った。彼らは思わず一步下がった。それだけの迫力があつた。

「一人ずつなんて面倒臭えから、いつそ全員でかかって来てくれな

いかなあ。一人ずつだと手加減できないんやわ、オレ」

大胆な桂小路 晃の言葉に怯^{ひる}まないわけがない。でもここで退^ひいては示しがつかないというものだ。

思わず生唾を一つ呑みこんで、それから口を開く。

「構わねえ、手加減しねえで、やっちまえ！」

一人の合図で、十人以上もの男子生徒が、桂小路 晃一人に襲いかかった。

「お約束通りのバカやなあ。こっちも手加減せえへんで」

彼女は一跳びで机の上に乗ると、高い位置からの顔面への蹴を、彼らに見舞った。

「バカはなあ、生きとる価値、ないんやで」

まるで楽しそうに、舞うように、桂小路 晃は彼らを子供扱いした。彼女一人に対し、彼らのうち誰一人として、拳一つ浴びせることができなかった。

ところが、偶然、彼女の腹に誰かの蹴が決まった。まあ、そういうこともある。

「上等じゃねえか！」

「桂小路さん、もう、やめてよ！」

間に入っただのは、なんと、コメチだった。

さすがの桂小路 晃も、これでは手が出せない。

「古明池^{こめいち}さん、こいつはオレの問題で、このアホ連中が……」

意外にもコメチの名前を憶えていた桂小路 晃だったが、彼女は困惑^{こんわく}を顔にしていた。

「教室ぐちゃぐちゃにしろって、何が一人の問題よ」

「ぐだぐだうっせーこた！どけよ、チビ！」

総長を名乗る男子は、コメチを思い切り突き飛ばし、彼女は机に額を打ち付けた。その小さな額から血が滲^{にじ}んだ。

「てめえ……、本当に番張る資格もねえ、クズ人間やな！ええか、それなりに番張つとるヤツはなあ、ちゃんと連中なりにスジを通し

てるもんや。それなりに格好ええもんなんや！それが何だ、てめえは最低や！」

とうとう桂小路 晃は暴発した。

「佐藤さん（ナミのこと）、古明池さん、保健室へ連れてってえな！」

それだけ言うと、彼女は不良たちに襲いかかった。それはもう、怖ろしい顔だった。

桂小路のやつ、コメチをちゃんと受け入れてたのかヤ……

サキはそう考え、すぐ行動を起こすことにした。

これ以上混乱させても意味がない。うっかりしたら怪我人が増えるだけだ。

桂小路 晃と、彼女の獲物との間に割って入った。

第2部・五月～去年の出来事～ - 3（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第2部・五月〜去年の出来事〜 - 4

「何や、貴様。一緒にされたいんか？」

「もう、いいだろ、怪我人相手に」

これからは体力勝負だ。自分がばてる前に相手を説き伏せることができるか、もう逃げ出せない。

「うるせえんだよ、雑魚が！」

繰り出された拳を受け止め、サキは後悔した。桂小路 晃は本当に場慣れしている。

サキは持久力こそないが、一応空手を習っている。彼女もすぐにそのことに気が付いたようだ。身のこなしが、サキのレベルに合わせて素早くなった。

「誰か、先生呼んでこい！会議中だけど！」

サキは誰かれ構わずに、指示を出した。サキの手に負える相手じゃないと、数発拳を合わせるだけで、彼はすぐに判ったのだ。早く誰かに止めてもらわないと、サキの方がやられてしまうか、発作を起こしてしまう。

「?!」

と、誰かが桂小路 晃を後ろから羽交い締めにした。ポンだった。

「しやらくせえっ！」

桂小路 晃は叫ぶと、上体を思い切り曲げ、巨体のポンを投げってしまったのだ。その細い身体のどこに、それだけの力があるのだろうと、そこにいた誰もが目を疑った。

宙を舞ったポンは机に頭を強打し、気絶してしまった。

「誰か、救急車！」

沈黙の後、場は騒然となった。

「う……あ……」

桂小路 晃は、青白い顔を両手で覆った。肩が小さく震えていた。呻く不良たち。氣絶している者や、出血している者もいる。無傷な者は誰もいない。

立っているのはサキと、桂小路 晃だけ。

「みんな、お前一人でやったんだぜ」

平静を装って言ったものの、サキはこの女を怖ろしく思った。

「何とか言えよ」

「……」

「また、だんまりかよ」

と、桂小路 晃、短く悲鳴を上げ、急に外へ逃げ出した。

「お、おい！待てよ、桂小路！」

サキはその場を捨てて、桂小路 晃を追った。コメチもポンも心配だったが、それよりも、何故か桂小路 晃が気になった。尋常ではない彼女の反応に、よく解らない何かを感じてしまったのだ。

「おい、桂小路」

土手に腰を下ろしている桂小路 晃を、サキは見つけた。

「オレに関わるな、優等生」

桂小路 晃は立ち上がり、その場を去ろうとした。

「待てよ」

「何だよ」

「用があるから、待てって言ってるんだサ」

ヒューと、彼女は口笛を吹いた。

「面白いヤツやな、お前。インネン吹っかけられとんのに」

桂小路 晃は、もう一度腰を下ろした。

「その顔じゃ、別に我を忘れて暴れたってわけじゃなさそうだな」

「……」

「なして逃げたのワ？それこそ自分でケリつけろよ」

「……」

「また、だんまりか。狡いヤツだな。」

「じゃ、ついでに訊くけど、なして一カ月以上もだんまり続けたのワ？嫌われるの、必然だサ」

「もう、嫌われとるやる。知つとんねん」

「ようやく桂小路 晃は答えた。」

「じゃ、なして？」

「苦手なんだよ、今更」

彼女は不良っぽく、ガムを吐き出した。

「オレは昔っから、人の輪に溶け込むのが苦手でね、だからずっと人付き合いから逃げてたんだ。その方が楽じゃねえか。で、そいつが身体に染みついててな、声をかけられても、どうしたらええか、さっぱり判れへんようになってな」

素直に自分の質問に答えていることに驚きながらも、サキは思わず本音を言った。

「なあ、桂小路。さっきから、何もできない話ばっかだサ。それじゃあ、なあ……」

「解っちゃいるさ。……ところで、お前さあ、『かつらこーじ』って呼ぶの、やめてくれへんかなあ。オレ、名字で呼ばれんの、慣れてへんねん。オレも、お前のこと名字で呼べへんことだし」

「確かに、オレの場合、同じ名字が多すぎるもんな。オレが『サキ』って呼ばれてるのは知ってるだろ。で、オレはお前のことを、どう呼んだらいいのワ？『さん』付けか、『ちゃん』付けか？」

「呼び捨て。アキラだけでええねん」

今更自己紹介するアキラの言葉遣いは、いささか不慣れな印象を、サキは受けた。

「アキラさ、腹立てると、周りのこと見えてないべ」

「ん？」

「ポン、お前が最後に投げた、東海林しょうじのことだけど、あいつが気絶

したら、お前の顔つきが変わったような気がして。んー、強いて言
えば、正氣に戻った、みたいな」

「お前さ、結構遠慮ねえヤツやな。人が気にしとることを、数年来
の親友みたいに」

「あつ、ごめん、つい……」

サキはそれでも、顔色を伺いながら、充分氣を使っていたつもり
だった。何しろ相手は強すぎる。

「ええねん。オレもその方が楽やし、お前、オレのこと、ずっと観
察してたもんな」

「え？」

いつも真直ぐ前を見て、後ろにいるサキのことなど、一度たりと
も顔を向けたことがなかったはずだ、彼女は。

第2部・五月～去年の出来事～ - 4（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfradia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第2部・五月〜去年の出来事〜 - 5

不思議そうな顔つきのサキに、アキラは気付いたようだ。

「そりゃ、毎日色目とか奇異の目とかで見物されてたさかいな、一人違う視線なんて、すぐ判るわ。オレはバカじゃないから」

「バカじゃないって言うわりに、バカな態度続けてたよな、アキラ」
彼女は間を置いてから、短く「ああ」と応えた。

「アキラってさあ、どっかで番長でもやってたのワ？」

「お前、ほんっと、遠慮ねえな。氣イ遣わんで済むつけ、ええねんけどな」

そう言ってくつくつと小さく笑ったアキラの顔を、サキは思わずじつと見てしまった。

「何やねん。何か付いとるんか、オレの顔？」

アキラの顔はすぐに元の冷たい顔に戻ってしまった。

「いや、そうやって笑うんだなと思って。せっかく美人なんだっけ、笑ってればいいのに」

「それができる環境で育ってれば、そうすることが身に付いとったんやろな」

彼女は照れ隠しのつもりか、顔を背け、草の上に寝転んだ。

「ここは、空がとても青い」

アキラは空を見上げて呟いた。

「そつえば前はどこ？お前、自己紹介しなかったもんな」

やはりサキの問いに、アキラは答えなかった。その代わり、彼女は少し隙を見せた。

「オレなあ、今までの自分にあきあきして、捨てたくて、忘れたくて転校したつちゅうのにな……。明日、どないな顔して学校に行きやええんやろ。せっかく普通の学生になれるチャンス、自分からフ

イにしてしもて……」

アキラは独り言を言ったのかもしれない。独り言を装って、サキに答を求めたのかもしれない。

その時サキは、応えてやろうと思ってしまったのだ。理由などない。それこそそういう性分なのだ。

「じゃさ、オレの提案、やってみる気ある？」

アキラは驚きの表情を見せた。

「何、言つとんの、お前。オレに関わるなって、さっき言つたやろ」「アキラこそ、どんな顔して学校行きやいいんだって、今、言つたばかりだつちや。せつかく他人が手を貸してやるって言ってるんだ。お人好しのバカの言うこと、ちよつとは聞いてみるワ」

「ほんつと、変わったヤツやな、サキ」

アキラは、また少し微笑んで言った。「で、オレはどないしたらええんやろ、サキ」

「偉そうに言つたわりに、全くの思いつきで申し訳ないんだけど、けどな、誰もアキラのこと知らないわけだし、結構通用すると思うんだ。甘い発想だつて、笑われるかもしれないけど。」

アキラのこと性格悪い女だと、みんなで思ってたけど、まさかあそこまでやるとは、誰も予想してなかったよワ。要するに、そこさ。未だ、アキラなら、どんな性格出しても、意外な一面だつて受け入れられちゃうんじゃないかってね」

「具体的には？」

「なるだけ、喧嘩は買うなつてのは基本。でも、万一売られて、そんでもって買っちゃったら、その後、怒りで我を忘れて記憶なくしたフリをしるワ。生徒だけじゃない、先生にも勿論な」

さすがのアキラも、大きな口を開けて笑いだした。

「バカだと思つべ」

サキは、自分らしくなく現実離れしたことを言つたと、後悔して

いた。まったくもって、自分らしくない。できることなら忘れてほしいくらいだ。

サキは鼻を掻き、それから頭を掻いた。

「違う、悪い、悪い。いや、意外と面白いこと言うヤツなんやな、サキって。オレ、お前のこと、もっとクソ真面目でつまらないヤツなんかと思ってたさかい、つい……」。

その提案、やってみるよ。オレが人間らしくなれるんやったら、簡単なことさ」

大声で笑うことを止めたアキラの顔が、先程の大乱闘の最中に見せた、不気味で妖しい微笑みを浮かべているように、サキには一瞬見えた気がした。

「恩に着るよ、サキ。ま、明日見てな。言われたようにしてみせるさかい」

「クラスみんなには、上手くフォローしとくっけ、心配すんなよ」

「いつか、この借りは返すよ」

「期待しないで待ってるからワ」

翌朝、アキラは遅刻してきた。

しかし、不思議なことに、朝のホームルームで、担任がアキラについて「彼女は怒ると我を忘れてしまって、今回の件も憶えてないかもしれないけど、ちょっとした病気みたいなものだから、受け入れてやるように」と、言ったのだ。クラスの生徒の殆どが、腑に落ちないといった顔をしていたが、取り敢えず、先生も言っていることだと、受け入れていた。しかし、サキだけは、担任がアキラのことを信じ切っている様子そのものが、どうしても腑に落ちなかった。例の話はサキとアキラしか知らないはずで、そのアキラは未だ登校していない。どうしてそれなのに知っていて、しかも信じているのだろう。

答は結局見つからずじまいだ。

遅刻してきたアキラは、やっぱりだんまりのままだったが、まずコメチとポンには、その日のうちに謝り、教師の指名に返事をし、しおらしくしてみせていた。そして、例によって気を遣って話しかけてきたコメチと、少しずつ話し始め、一カ月をかけて、明るく陽気な、現在のアキラを作り上げていった。

あまりに違和感のない変貌ぶりに、サキはアキラのことを、恐ろしく頭の良い女だと、彼女のフォローをしながら思っていた。

第2部・五月～去年の出来事～ - 5（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfradia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第2部・五月〜去年の出来事〜 - 6

「と、いうわけ」

サキは話し終えた。

「ふーん。アキラの腕がかなり立つってのは、さっき見て判ったけどや」

「言つとくけど、オレはその腕が怖いんじゃないぞ。持久力があればなんとかなるかもしれない。でも、ぎりぎりかな」

カズヤは、また困った顔をした。サキが言っていることが解らなかったし、サキ自身が本当は何が怖いのかを、言すべきか否かを迷っている顔をしている理由も解らなかった。

しかしサキは言うことに決めたらしい。

暫し考え込むような仕草をしてから、ゆっくり口を開いた。

「なあ、カズヤ。さっきのアキラの動き見て、何か思い出さなかったか？」

「？」

カズヤは首を傾げた。

「昔、空手のお師匠さんが、オレらに見せてくれたことがあるアレ。お師匠さんのお祖父さんが何処かの巫女さんに伝えられたっていう、『瑞穂』って型。あと大樹の森の神社の巫女舞の、武の型にも似てると思うんだ。両方を見せられた時は、似てるなんて思わなかったけどさ」

カズヤは首を傾げた。そんなのはいつものことだ。

「数え年で十二才になったら、お師匠さんが見せてくれたっちゃ。

大樹の森の守人の家なら、知ってなきゃならないってさ」

未だカズヤの目玉は斜め上を向いて探している。

「ほら、こんな時代だから、巫女さんはもう闘う必要がないって、

失われちゃって、お師匠さんしか知らないって言ってたアレだよ。オレら、どっちも真似しても、さっぱりできなかったアレだよ」
ようやくカズヤはくるっと目玉を回すと、サキの言っている記憶を探し出した。

「ウソだあ。だって、お師匠さん、言ったっちゃ。空気と一体になつて、気配無くして舞うように攻めるって。その為には自分を捨てるって、わけ解らない禅問答したっけ……」

「だから怖いんださ。あいつは舞ってた。楽しそうに、すつごく自然体に、それこそ自然と空気と同じリズムで舞いながら攻めてた。それだけの能力を持っているから、アキラはアキラを演じてられるんだよ」

本当にサキは怖がっていた。全く歯が立たない、比べものにならない力を持った、驚を目前にしてしまった兎のように。

「そんなこと、あるかよ……」

そう呟いたカズヤの言葉も、何故か力がない。

それもそのはずだ。サキの自信が、カズヤの自信なのだから。例え間違ったことでも、サキが正しいと言えば正しくなるし、例え正しいことだとしても、サキが違うと言えば違うと信じ、自分は何もできなくても、サキが優秀であれば、自分が褒められた気になる、それだけカズヤはサキに依存していた。

「そう、重くなるなよ」

サキはカズヤのそうしたところを知っていたし、本音を言えばそれが重荷だった。解放されたくもあり、幼稚なままの彼をそのまま受け入れてやるうとも思い、気持ちちは複雑だ。

サキは、自分に依存するカズヤが、ある現実から逃げているのを知っていた。昔、その現実を受け入れるべきか否かを苦しんでいた彼に気付かずに、サキはカズヤを鼻であしらってしまった。その罪

悪感は今も消えず、だからこそ、カズヤを受け入れることで、赦されるような気になっていたのだが、今、サキも、同じ現実を突き付けられていた。今なら、カズヤに打ち明けることで、彼も自分も成長する機会かもしれない。

カズヤに、アキラの真実を打ち明けたのも、そんな思惑があったからだ。

「ところでさあ、カズヤは、超能力とかって信じる？」
「はあ？」

全幅の信頼を置くサキの質問が、あまりに唐突で、あまりに不釣り合いで、カズヤは思わず吹き出した。

「サキさあ、昨日のテレビの特番でも見たのワ？らしくねーっ！昔、低学年だったかや、オレ、お前に同じこと訊いたっちゃ。したら、お前、鼻で笑ったくせに。あー、おかしいの」

腹を抱えて笑い続けるカズヤを、サキは無視した。

「あれはオレが悪かった。謝るよ、ごめん」

サキが意外と真剣そうで、カズヤは笑うのを止めた。

「別に、そんな昔のこと謝られたってなあ……。それより、冗談をマジ顔で言っくなよな」

「本当に、マジ顔でこんなこと言って、オレもどうかしちゃったよな。第一、カズヤ相手に、遠回し表現が通じるわけないのに」

「どうせオレは鈍いですよ。何、アキラが超能力者だったってか」

「近いな。確かにあいつ、オレと二人だけになったりすると、姿消したり、物浮かせたり、わざとして見せてたようだけど」

さすがに、カズヤは頭が痛くなった。まさか、サキが、ここまで非科学的なことを信じているとは。

「あのかなあ……」

「笑いたきゃ、笑えよ」

サキは責めるような眼差しを向けた。その目を見て、カズヤは、サキは何か言いたいことが別にあるのではないかと思い、立ち止ま

って考えた。

「サキ、一体、何が言いたいのワ？」

この時、カズやは、サキが「アキラのことは嘘じゃない」とでも言うだろうと思っていた。しかし、サキは、全く予想外の言葉を言った。

第2部・五月～去年の出来事～ - 6（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第2部・五月〜去年の出来事〜 7

サキは一つ息を吸い込んで、それからカズヤの目を見据^{みす}えて言った。

「カズヤさあ、お前、自分の希少価値^{きせうかち}って考えたことある？」

また遠回しな質問に、カズヤは戸惑^{戸惑}った。

「じゃさ、オレン家とお前ん家、なして鈴木家が表裏二つに分かれたか、知^しってるか？」

「知るか！」

いい加減、カズヤは不安になってきた。未だ夏前だ。脳みそが茹^ゆっておかしくなるには未だ早い。

「神森地区一番の旧家だつてのに、聞かされてないのか」

カズヤの不安など構^{かま}いなしのサキに、カズヤは取り敢^うえず頷^{うなづ}く以外、することがなかった。

二人は遠い親戚にあたる。役所の書類上は、ただの鈴木姓だが、神森地区の誰もが、「表鈴木和哉^{おもてすすきかずや}」と「裏鈴木賢木^{うらすすきさかき}」と彼らと呼ぶそれが彼らの家の昔からの名前なのだ。

珍妙な名字の由来は、彼らの家が大樹の森の神社の表と裏にあるからだ。もとは一つの鈴木家で、神社の氏子の記録から、千年くらい前までも辿^{たど}れる由緒ある家だった。

何故本家を二つに分けたのか。

大樹の森の神社の守人を務めてきた彼らは、幾つかの時代の変動期を乗り越える際、何度か存続の危機に立たされたのだろう。そこで、「表」は常に時代にあつた生活を生業^{なりわい}とし、「裏」は常に変わらず、神社を守ることを生業とする農家として生活することで、どちらかの血脈を必ず残そうとしたのだ。

「そこまで生き残ろうとした理由、解るか？」

サキの質問にカズヤは当然、首を横に振った。未だカズヤはサキが何を言おうとしているのか、さっぱり見当がついていない。

「鈴木家は、知っての通り、大樹の森の神社の守人。もりびと要するに、巫女に準ずる力を持った一族ということになっている。けどその能力は、人間社会で生きてくには不必要で、かえって迫害の対象になっちまってたんだ。だからこそ、神社の為にどちらが最善の方法か判らなかつたけど、「表」と「裏」で役割を分けて、どっちかが社会から自然淘汰されても、残った方が神社を必ず守るというシステムにしたらしいんだよ」

ようやくカズヤにも、話が見えてきた。

「神社に、元来巫女はいなかった。鈴木家の人間が代々神主として仕えていたんだ。ところが後を継ぐべき人間が「幻術を使う鬼」だったから、神主の座はその鬼の弟が継ぎ、追放されていた鬼の子孫が巫女になったと言われてる。鬼の一族を囲い、世間から守るための守人に、鈴木家の人間はなつたんだ。

追放された鬼の行方は誰も判らず、何処からか、その子孫は必ず巫女になるためにやって来る。それも、世間から巫女を守る為なのかもしれない」

「じゃ、何か？アキラは大樹の森の巫女の一族だつて言うのワ？それに、少なくともオレらの両親は、超能力なんて持ってないべ」

「カズヤ、とぼけんなよ」

サキは急に厳しい声を出した。

「そう、お前が昔、超能力の話をした時に、オレが鼻で笑わなかったら、気付くだけの力があつたら良かったんだよ」

カズヤが逃げている現実。触れられたくない思い出。

長い沈黙。それを破つたのは、カズヤの方だった。

「あん時な、オレ、誰にも言うなよって、親サ言われててヤ、でもサキには言いたくて、サキなら認めてくれるって思ってた、でも、ど

うやって言い出したらいいか、子供心に解らなくって、でも、嫌われるの怖くて隠しておきたくって……。

で、あの時は笑ってあしらわれたっけ、隠してれば、お前はオレの傍にいてくれると思ったんだ。でも、現実にはオレは「表」鈴木和哉で、血は絶えてないわけだしな……」

「ごめん、ほんとにごめんな……」

カズヤの告白に、サキは心から謝った。

でもこれで、社会への負い目を共有できる者になれたのだ。未だ中学二年になったばかりの少年二人に、得体の知れない能力は、一人で背負い込むには大きすぎて、誰でもいいから仲間が欲しかった。相変わらず物憂げな瞳で、サキは対岸の釣り人を見ながら言った。「人が捨てた第六感か……。人と自然が言葉を交わしていた時代が本当にあつたなら、今がそうだったら良かったのにな。そしたらオレら、何も隠さずにいられるのに」

「オレら？」

カズヤは聞き咎めた。

「そ。オレも、お前も、偶然アキラも……」

要するに、サキも自分のことを切り出すのにどうしていいのか判らなくて、こんなに回りくどい話し方で本題に辿り着いたのだ。

でも、そんな苦労をカズヤが気付くわけがない。

「え？サキは何ができるのワ？」

突然嬉々とした表情を見せたカズヤに、サキは微笑んだ。

この深刻になれない軽さが、サキにとって救いだった。そんなに深刻にならないでいいんだと、安心できるのだ。

「所謂念動いわゆるってやつ。何だかできるんじゃないかって、ある日突然思っちゃったんだ。」

どうしたらいいかなんて考えるまでもなく、何だかオレは強く念じてみちゃったんだ。そしたら消しゴムが浮くんだよ。

でも、すつごく集中力が必要で疲れたんだ。オレは体力がないっ

け、その一度試してみたきりだから、本当にできるのか判らない。
偶然かもしれないし……」

「わあ、見せてくれよ」

今「すごく疲れた」と言ったことなど、目を輝かせているカズヤの記憶にひっかかるわけがない。それに今回は見せる覚悟で来たのだから、それくらいの鈍感さはどうでもいいというものだ。

サキは目を閉じ、念じようとしたが、止めた。カズヤも気が付いたようだ。

人が来る気配を、二人は感じた。

第2部・五月～去年の出来事～・7（後書き）

次回から第3部・六月～球技大会～を始めます。

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfrania>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第3部・六月〜球技大会〜 - 1

3：六月〜球技大会〜

「あ、ほんと、いた、いたよワ！」

サキとカズヤのシリアスなムードを壊したのは、甲^{かんたか}高い声のコメチだった。彼女は、幼馴染みの間でどのような会話がなされていたか知るわけがないし、知ろうとも思っていなかった。

「まったく、仮にもあなたたちハンド部の部長と副部長でしょ。その部長と副部長が部活さぼって、まったくどうすんのワ。アキラがここじゃないかって言うから来てみたんだけど、案の定ね」

「いや、ちゃんと部員には指示出してここに来てるけど……」

小さく呟^{つぶ}いたサキの言葉は、「そんなことはどうでもいいわよ」とコメチに一蹴^{いちく}された。

「それよりアキラはね、球技大会の練習したいっけ、部活休んでって頼もうとただけなのよ。なのに、何だかカズヤは勝手に怒り出しちゃうし、サキはカズヤの御機嫌取りに行っちゃったしで、可哀相に、彼女、困ってたよワ。どうせさぼっちゃってんでしょ。練習するわよ」

コメチは、振り向くだけで腰を上げようとしない、背の高い二人の幼馴染みの服を引っ張った。土手の上では、他の四人がジャージ姿で待っていた。

「悪い、悪い！」

サキは立ち上がり、バツの悪そうなカズヤを強引に引っ張り、土手を登った。

「で、そいつの御機嫌は、直ったんか？」

アキラは笑顔を作りながら、サキにバレーボールを投げ付けた。サキは咄嗟に、その超スピードのボールを受け止めた。

「痛えなヤ。少しは手加減しろよ、怪力女なんだから、アキラは」
サキは笑って答えていたが、本当のことを聞いてしまった今、カズヤにはアキラの笑顔が乾いたものにしか見えず、合わせて笑ってられるサキのことも、よく解らない。

「要するに、サキはあの女にも、オレらみたいな力があるって言うんだろ」

サキは驚いた表情で、カズヤの方を振り向いた。彼の声が耳を通さず、直接脳に響いてきたのだ。

「やつぱ聞こえてるね、サキ。聞こえるか試してみたんだけど」
カズヤの声は、尚も直接脳に響いてくる。

「何だ？何なんだ？！」

「今、やってるっちゃ。それでいいんだよ」

動揺してカズヤの方を向けば、彼はにつこりと笑っている。

「へえ、これなら、そんなに体力使わなくてもできるなあ。面白いこと」

「だろ。これでテストの答、教えてもらえるし」

「バカ。オレはそんなことしない！」

サキとカズヤは、初めて与えられた玩具おもちゃで遊ぶ子供のように、二人だけの会話を楽しんでいた。当然、他人は二人の間で何が行なわれているか、それこそ全く知る由ない。

「何、黙って見つめ合ってるのワ？ちよつと、気味悪いけど……」

こんなことあまり口にしないシキに言われてしまう程、二人は見つめ合うことに集中しすぎていて、アキラの視線が冷たく向けられていたことなど、当然全く気付いていなかった。

シキの言葉で我に返った二人は、自分たちの今の姿を想像し、思わず顔を背け、会話を止めた。身長一八〇センチ近い男二人が、無言で動きを止めて、しかも見つめ合っているのだ。確実にあまり美しい絵ではない。

「取り敢えず、円陣パスから練習すつぺし。ボクらの場合、みんな何でもできつから、お見合いしない為の練習だと思つてさ」

男子バレー部、一応部長のシキが音頭を取つて、練習は始まつた。こんなに大人しくて、よくまあ、勝負事の部長をやつていられるかと、それは未だもつて全員の疑問だつたりもする。

「どうせ、うちら二人のどつちかがリベロでしょワ。どつちがなつても、どつちかはローテーションの中に入つて、お邪魔虫。嫌よね、ナミ」

「本当よ。あと五センチでいいんだけど、その五センチがないんだよね」

女子二人は、ずっと同じことをぼやいていた。

「楽しみといえば、ローテーションで外に出て、邪魔者にならないことだね」

「あと、優勝賞品だサ」

「あ、残念。サキは一試合一セットしか出せないから、みんな、殆どコートの中だよ」

「シキ……。あなたつて、かわいい顔して、言うこと結構残酷よね……」

「え……。そんなこと言われたつて……」

「冗談、冗談よ。そういうところが、カワイイのよ、シキは」

真面目が取り柄の少年、シキは、コメチにからかわれ、本気で困つていた。

東部中からの伝統の、男女混合バレーボール大会のルールは至つて簡単で、二十五点一セットで、一ゲーム三セット。当然二ゲーム先取した方が勝ちだ。サブ権が移る毎、リベロ以外はローテーションでポジションを替える。各クラスとも一班七人が多いので、こうすることで、コートの外の補欠選手も公平に試合に出られるよう

にしているのだ。

コメチとナミは、外に出られなくても、別にリベロでも構わなかった。何より前衛になることの方が嫌だった。アタックなどできない身長だけに、その気持ちはよく解る。

「リベロは二人で交替でやったらいいべや。一セット目がコメチで、次がナミってやあ」

「いいから放つというワ。言われないでも、うちら勝手にやるからワ」

気の強いコメチは、ポンを睨み付けた。

「でも、やつぱ嫌よねえ」

コメチとナミのばやきは、球技大会当日まで続いた。

第3部：六月、球技大会 - 1（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第3部：六月、球技大会 - 2

他のチームと同じように部活後の自主練習を毎日やっているうち、球技大会当日は、あつという間にやってきた。

アキラたちの班は、一応優勝候補と目^{もく}されていた。そして当人たちも優勝する気でいた。

「五組、集まれえっ！」

当日の朝のホームルームは、校庭で行なわれた。どうせ出席を取って、簡単な注意をするだけだ。アキラは大きな声を出して、校庭の一角にクラスを集めた。

「ええか、目標はうちらで上位占めて、賞品独占や。それぞれリーグ優勝して、決勝トーナメントで会おうな。因^{ちな}みに、オレらは優勝すつから、応援よろしく。」

ってことで、配ったプリントのコート割りの通りの動いてくれな。判らなくなったら体育委員かオレらに訊いてくれればいいから。じゃ、解散……。

おつと、賞品教えとかなあかん。えつと、優勝は、購買利用券一人につき六百円分。二位は一人四百円分で、三位が一人二百円分やて。ってことで、頑張ろうな！」

「おう！」と、クラス全員が、時の声を上げた。

それにしても、アキラは例によって一方的に話しているだけだというのに、何故か彼女が一言気合いを入れると、クラス中が盛り上がる。彼女自体は、熱く燃える性格ではないはずなのに、彼女の性格を知るサキには、それがとても不思議だった。

彼女の不思議な力の一つかと考えたこともあったが、その場になると、どういうわけかサキ自身までもが熱い空気に呑み込まれて盛り上がってしまい、疑問に思っていたことを忘れてしまう。

今もそうだった。例のカズヤと話した日から今日まで、自分たちの能力のことすら忘れ、ひたすら球技大会へ向けて燃えていたのだ。サキは同じ学級委員長として隣に立っているアキラを見やった。そして目が合う。

サキは頭を掻いた。一体、今、何を不思議に思っていたのだろうか。と。取り敢えず思い出せないから、手元のプリントを見て、優勝までの道程を想像してみた。

午前中はリーグ予選。神森中は各学年五クラスで、それぞれAからFまで六つのチームに分けている。

第一予選は学年予選。同じ学年で同じ名前の班でリーグを組んで対戦し、上位二チームを決める。

次の第二予選は班予選。第一予選で上位二位のチームが、全学年で同じ名前の班でリーグ戦をする。

午後は決勝トーナメント。第二予選で決まった上位二チームが、計十二チームでトーナメントを組んで、優勝を争う。確かに、二年五組で上位独占も不可能ではない。

アキラたちの班はBチーム。ライバルは同じクラスのDチーム。男子陸上部と、女子バレー部ばかりの班だった。

「アキラっ、決勝トーナメントで待ってっからワ、予選でコケんなよ」

「そっちこそ。首洗って待ってるや」

アキラが向こうでライバルDチームの女子とふざけている。軽い予選の舌戦というところだろう。

その時サキは、何を不思議に思っていたのか思い出した。まるで何らかの力が働いて、霧が晴れたかのようなだった。

あれだけ不可解な人間なくせに、何故アキラは誰からも嫌われて

いないのだろうか。いや、あれだけの騒ぎを起こしておいて、どうして誰も彼女を避けないのだろうか。普通に考えたら怖くて近付けるわけがない。彼女が望まなくても、一部の不良生徒の類は彼女を勝手に慕っている。そんな学級委員長など聞いたことがない。

何なんだと思ってしまうのは、サキだけがアキラの影の一面を知ってしまっているからだろう。

それにしても、いくらサキの忠告を受け入れているとはいえ、普段のアキラはあまりに陽気すぎて、サキですらよく解らなくなる。一体どれが本当のアキラなのだろうと。

だからこそ、サキはアキラを買っているのだ。矛盾しているようだが、真実だ。得体が知れないアキラだから、彼女がその気になりさえすれば何だってできて、何にだってなれる能力がある気がするのだ。

普通あれだけ表裏の違いがある人間だと知ってしまったら、他人なら絶対信用できないはずなのに、アキラだけは信用を通り越へて、畏れや尊敬に近い念を抱おもいてしまう。

同い年の少女に対して、こう思ってしまうこと自体、とても変なことだと、サキ自身、解くてはいる。

いつも一番前を歩いてクラスを引ひ張るアキラは、いつも一番後を歩いてクラスを見ている静かなサキの方を、たまに振り返かえっては、妖しくも恐ろしくも見える、意味深な微笑みを見せる。

オレのこと観察したって、お前はオレを理解できやしない。知るのを怖こがってるじゃないか……

サキには、アキラがそう言いっているように見える。

どういうわけか、最近振り返る回数が増えた気がする。

今、頭の中の霧が晴れたのも、そういえば、アキラが振り向いてからだ。サキはそう気が付いた。

「早く来いよ。置いてくで」

また不気味な微笑みを浮かべて、アキラはサキを呼んだ。

「お、おう」

サキもまた、何も考えていない素振りをした。気付かれているのも知っているが、そうすることが習慣になってしまっている。たしかに、やはり怖いのだ。

第3部：六月、球技大会、- 2（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第3部・六月〱球技大会〱 - 3

全く危なげなく、アキラたちのチームは決勝トーナメントに駒を進めた。ライバルのDチームも、他に同じクラスからはEチームも、決勝進出をしていた。

「何や、こちら、負ける気せえへんもん」

「アキラのビッグマウスが始まったよワ。こちらDチームはシード引いたつけ、決勝じゃないと会えないから、絶対負けないでよ」

「当たり前や。そっちこそ、一発目からコケんなよ」

「寝言は寝てから言ってちょうだい。覚悟しなさいよ」

「はいはい。そっちこそ覚悟したれや」

アキラ対女子バレー部員の、コート外の大舌戦は絶好調だった。

そこにコメチとポンが参戦していたら、この大舌戦はBチームの勝利だったのだろうが、彼女なりに身長のことをかなり気にしているコメチは、彼女らしくなく余裕がないし、ポンは決勝に備えて、胃袋にエネルギーを補給中で、それどころではなかった。

そしてBチームもDチームも難なく勝ち進み、両チームはお約束通り、決勝戦を迎えた。

同じクラス同士の決勝カードに、当然他のクラスが面白いわけなく、中には帰り支度をしている者もいる。しかし当人たちは燃え上がっていた。何しろ賞品がかかっているのだ。燃えないわけがない。

試合開始のホイッスルが鳴った。

Dチームはすぐにサーブを打ち込んできた。

前衛には、カズヤ、ナミ、ポン。後衛はアキラ、コメチ、シキ。この試合、絶対三セットまでもつれ込むとみて、サキは三セットまで控えさせていた。そのBチームのお家事情を知るDチームとしては、何が何でも二セット先取して、サキをコートに入れさせたくない

かった。それほどまでに、サキの身体能力は脅威だった。

そのような思惑のDチームのサーブは、ライン際ぎりぎりの所を狙って落ちてきた。

「アキラ！行けえっ！」

「うるせえ！行っとる！」

カズヤがつい指示を出してしまうよりも速く、ボールは高く上げられ、ポンがサーブ権を自分のものにしていた。

「ったく、オレに指示出そうなんて、十年早えよ」

ローテーションで、ポジションが前衛になったアキラは「ちっ」と一つ舌打ちし、隣になったカズヤに説教をした。可哀そうなカズヤは返す言葉もなく項垂れている。その間にも、ポンはサーブミスを取っていた。

試合が待つてくれるわけないのだ。

両チームの力は五分。お約束のように試合はもつれ込み、三セツト目に突入した。

待ちくたびれたかのように、相手チームに手をひらひらさせて、おどけてみせながら、とうとうサキがローテーションに加わった。こうなると、Dチームは大変だ。クラスの屋根の三人、カズヤ、サキ、ポンの壁がせり上がってくるし、それを突き破ったとしても、コメチという名リベロが控えている。そして絶妙な場所に、シキはボールを上げるし、間髪入れないクイック攻撃で、アキラの鋭いアタックが突き刺さってくる。しかしそれを、陸上部男子の瞬発力で拾って……。

長いラリーが続くゲームに、ミスは当然許されない。バックレシブで返したコメチ。チャンスボールはすぐに返され、前衛のみならず後衛のアキラまでブロックに跳んだものの、破られ、コメチはまたすぐにレシーブを上げる。前衛が誰も体勢が整ってなく、シキ

が止むなくアタックし、またそれも拾われて……。

一応、このセットのリベロはコメチ。しかし、ナミがローテーションで前衛の時は、サーブを受けるや否や、ポジションを崩してナミを後衛にしてしまう。そうして前の壁を高く保つことで、Bチームは失点を防いできた。

あと一点取れば勝ち、取られたら負けという、嫌な、ドラマチックな状態。ラリーは長く続き、お互いミスをしないように打ち合っていて、相手が自爆するのを待っていた。

ふざける余裕がない程、賞品の二百円の差は大きく、コートの方々は真剣だ。

先に痺れを切らしてしまったのは、Dチームの女子バレー部所属の一人だった。

Bチームの一番弱い所、リベロのコメチを真つ正面から狙い撃ちしてきた。それも、一番対処しにくい場所、顔の高さを目掛けてだ。コメチの方も疲れが出たのか、そのボールをまともに顔で受け、小さな悲鳴をあげて、転んでしまった。

「コメチ！」

BチームもDチームも、誰もがコメチに注目し、彼女に駆け寄ろうとする者もいた。

アキラもコメチの名を呼び、振り返っていた。それがサキには意外だった。彼女なら、どんな場面にも動じたりしないだろうし、第一、彼女が行事に積極的に参加していること自体、アキラの本性を知るサキから見たら、本当は不思議なのだ。

たとえ去年のサキの忠告通りに演じているにせよ、ここまで咄嗟に演じ切れるものなのだろうか。本当の姿が今のアキラで、あの大暴れした去年のアキラは、ただきっかけが掴めずにいただけだったのかもしれないのだろうか。

サキは何気なく、アキラの方を見た。

？

コメチの顔に当たって空高く上がったボールが、とても不自然な動きをしているではないか。それはゆっくりと、でも真っ直ぐアキラの方を目掛け、落下している。誰もが皆、コメチに気を取られ、ボールの動きには気付いていない。それくらい自然を装った不自然な動きだった。

第3部：六月、球技大会、- 3（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第3部・六月、球技大会 - 4

正直サキは驚いた。アキラが購買部のたかが数百円の利用券を賭けて、ここまで勝つことに執着しているということが意外だった。

きつとこんな球技大会など、アキラにとっては取るに足りないことでしかないはずなのに、と思わなくてもない。そしてサキとしては、もう少しコメチの心配をしていてほしかった。

だが何れにせよ、アキラと一年ちよつと付き合ってきているが、最近特に、サキはアキラに驚かされてばかりであることに変わりはない。

と、例の中性的な声が、耳ではなく頭に直接響いてきて、サキははつと顔を上げた。

『サキ、カズヤ、どっちでもええ、決めろ！』

聞こえてきたその声がテレパシーだったと、認識し、理解している暇はなかった。アキラが操ったボールを高くトスし、それは今、とてもいい高さにあつたのだ。

そして何でアキラが、一体何の為になどと、考えている暇などなかった。

「試合終了ーっ！」

サキが最後にきつちりと決め、Bチームは全校優勝と、購買利用券を手にした。

チームで優勝を喜ぶよりも先に、コメチは顔の心配をしてくれるクラスの面々に囲まれてしまい、かえってBチームの仲間は、その輪から外されてしまつて喜びのガツポーズを何処^{どこ}で引つ込めたらいいのか解らない状態だった。

「カズヤ」

「ん？」

サキはカズヤに声をかけた。この騒ぎの中、例の会話をする為に。

『さっきのアキラのあれ、聞こえてたか？』

『ああ。お前から聞かされてたっけ、大して驚かなかったよワ』

『いや、それよか、オレ、アキラがコメチよりも勝つことに執着してたのが、意外でさあ』

『そんなこと言われたって、オレ、サキじゃないっけ、解んないよワ』

『あ、んだなあ』

会話なく見つめあい、くつくつと笑ったり表情だけは変えている姿はおかしいのだが、誰もコメチの顔ばかり気にしているから、サキとカズヤの異常行動に気付くわけがない。

『まったく、他人のこと勝手に言いたい放題で、煩いこと』

と、突然、サキとカズヤ以外のテレパシーが入り込んでくる声。

二人は顔を上げ、固まった。

『そんなに知りたいなら、サキ、解説してやるよ。』

ほら、コメチ見てみ。嬉しそうやる。もしあの時、あのボールを誰も拾わなくて、コメチに駆け寄ってみ、うちら負けて、コメチが責任感じるやんか。コメチはオレと違って行事に燃える女の子やさかい、落ち込んで大変やわ。ま、いつも優しく気イ遣ってくれるさかい、お返しやな。

それにしても、オレのことどう思おうと、一向に構わへんつもりやったんだけどな、やっぱ誤解されるのは嫌やねんな、サキ』

恐る恐るサキとカズヤは、コメチに寄り添っているアキラを見た。この声の主はアキラ以外にいない。でもその彼女は器用にも、口ではコメチを何やら会話をしている。

でも絶対彼女なのだ。コメチと会話しながら、器用にも二人に同時にテレパシーを送ってきているのだ。

無造作に結んだポニーテールで隠されて、その表情全ては見えないが、僅その(わず)かに一覗く口元には、例の不気味な笑みが浮かん

でいる。

『っていうか、超能力者のお二人さん、楽しいのは解るんやけど、使い方、むっちゃ下手クソやなあ。オレ以外にもテレパシー感じるヤツがおつたら、大事な話、全部聞かれてしまうで。頼むからちゃんと防御かけるや、まったく。こっちは聞きたなくとも、オレの方には勝手に聞こえてくるんだよ。ほんと迷惑な話やわ』

サキとカズヤは、ゆっくりとアキラに背を向けた。少なくとも彼女はこの向きを向いていないのだから、明らかに動揺しているであろう自分の表情を見られたくないし、できれば本当は関わりたくない。

ところがそうは問屋が下ろしてくれないようだ。

『聞こえないふりしても無駄やで、サキ。』

お前がカズヤにオレのこと話したの、とつくの昔に知ってたから今、こうしとるんやけどな』

サキとしては、アキラのことをきちんと知りたい。でも怖い。

運動した後の汗とは違う汗が、冷たく背中を流れ落ちる。

アキラは顔を上げ、真直ぐサキを見据えた。

『知りたきゃ、後でオレン家に来いよ。別に取って喰いやしない。知りたいんやろ、オレのこと。ちゃんと教えてやるよ、聞かれたことは全部』

それっきり、アキラからの交信は途絶えた。

表彰式を終え、サキとカズヤは二人で帰宅の途に着いた。他の五人は、未だクラスの輪の中にいた。

「サキやあ、アキラん家サ行くのワ？お前は休めって言われてっけど、オレはさぼるなって言われてっけ、これから道場に顔出すつもりだけ……」

「オレも行くつもり。未だ余裕あるっけ」

「休めよな。今日一日運動したんだから」

「オレのことはオレが一番解ってる。何度も言わせるなよ。未だ平気だし、どうせアキラは一人暮らしたっけ、多少遅く行っても問題ないし」

「そういう問題じゃないべ。ガキの頃みたいに、限度忘れて倒れられつと困るしなヤ。」

それにしても、ほんと、もったいないよな。身長あつて、運動神経もあるのに、心臓悪いなんてな」

「はいはい、大丈夫ですよ」

サキは苦笑しながら聞き流した。「もったいない」話は、もう飽きるほど言われていて、耳にタコができすぎて困っているくらいだ。

結局アキラの家に着いたのは、夜の七時くらいだった。

第3部：六月、球技大会 - 4（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第3部・六月〱球技大会〱 - 5

初夏の午後七時は、未だ明るい。

木々に囲まれながらも、風通しも日当たりも適度に良い場所に、

桂小路邸はあった。

「いい家住んでんなヤ」

「^{あこが}憧れだったんだ、森の中の一軒家ってさ」

森の入り口まで迎えに出たアキラは、二人を大きな家の中に招き入れた。

「で、秘密主義で通っているオレが、何でお前らに自分のこと話す気になったのか、知りたいんだろ。サキだけならまだしも、カズヤまで呼び付けてな」

冷たい麦茶を出して、アキラは二人に質問を用意してやった。「違ってたか？」

「いや、そうなんだけど……」

「ま、オレがこうなるように仕向けたんだけどな」

「え？仕向けた？」

アキラの言葉に、サキは思わず口を挟んだ。

「そう。サキは真面目だから、オレの思った通りの反応をしてくれる。知りたがりだけど、ちょっとオレが怖かったみたいだな。どうして怖いかも答えてやるから、ちょっと勝手に喋らせてもらうぜ。」

サキはオレのこういう性格を解ってくれてるから、今更何とも思わないだろうけど、ちょっとカズヤは解らなくて困るかもな」

サキとアキラは、顔を見合わせて笑った。

「じゃ、お前らのその能力な。三人の共通項だから、とっかかりやすいだろう」

後でカズヤは解ったのだが、アキラは本当に人付き合いが苦手で

少人数だと話慣れしてなくて、冗談抜きで話下手だった。

「オレは去年、サキと同じ教室になった瞬間から、サキが能力者だって気付いてた。当然カズヤも、去年のうちから目エ付けてた。お前ら、能力者の匂いぶんぶんさせながら、いつも一緒に歩いていたからな、判りやすいったらありやしない。

ここでのオレの仕事は、本当は能力者二人を見付け出したら終わりだったんだ。ところが能力者は入学式当日にすぐ見つかった。転校したその日にまた転校じゃ、変じゃねえか。

本来の目的はあったにしろ、オレ自身、前の学校から離れたかったとこだし、見付けたお前らは、まるで能力のことを知りやしない。カズヤは隠してるし、サキに至っては気付いてもいない。そこでオレは残ってお節介することにしたわけだ。

先ず、同じクラスのサキに能力を自覚させることにした。そうすれば、カズヤの方は何とかなるって思うだろう。

大変だったよ。この真面目で常識的なお兄さんを落とすのに、一年以上もかかった。他の仕事がなかったからいいけど」

一方的に喋っているの喉が渇くのだろう。アキラはお茶を一口啜^すった。

「仕事って、お前、オレらと同一年だすべ？何の仕事してんのヤ？」
「悪いなあ、カズヤ。それはちょっとな。仕事ってのは、相手に対して守秘義務つてもんがあるんだよ、な、サキ」

アキラは、自分のことを黙ってくれていたサキに同意を求めた。

「ね、じゃあ知ってて、それで目覚めさせたって、どういうこと？」
カズヤは超能力のことに、興味津々の様子だ。さっきの質問に答えてもらえなかったことなど気にしていない。

「今日までかかったまうような、とても回りくどいことだよ。

ほら、オレがいきなり、『私は能力を持っているあなた方二人を、探す為にやって来ました』なんて言ってみろ。そこの常識の塊のサ

キに、気違い扱いされるのがオチだろ。オレもそこまでバカじゃない。けどな、短気なオレにとっちゃ、めちゃくちゃ大変だったんだぞ、お前ら」

「そんなこと言われたって……、なあ」

「ま、そりゃそうだ。でも、去年のアレは助かったぜ。あのバカ共が勝手に騒ぎ起こしてくれたからな、サキを掴むことができた」

アキラはしまったとばかりに口を抑えた。サキの顔が凍り付いている。

「え、何？あれもお前の演技だったのワ？」

思わずいきり立ったサキに対して、アキラは両手を挙げた。

「違う違う。まあ聞け。あの事件は本当だよ。短気はオレの本性だから、勘弁してくれよ。本当に人間関係苦手で困ってたんだから。

マジで感謝してるよ」

「なら、いいんだけど」

サキは、麦茶を飲んで心を落ち着かせた。

「でもサキ、お前は どうして、オレが気になるのか考えたことあるか？」

「そりゃ、格好といい、態度といい……」

「それだけじゃない。お前は無意識にオレの能力に気付いてたんだよ。自分と似た匂いを感じてたんだ」

「犬かオレは……。もう少し、何っーか、キレイに言えないかなあ」
サキは苦笑した。

「悪かったな、口がこんなんだ。」

ま、話を戻すけど、お前らの持つてる力は、テレパシーの他に、サキは念動でカズヤは瞬間移動。もしかしたら、これから増えるかもしれないけど、もういらないだろ。隠してたくらいだから、力が煩わしいってこと、解ってるようだし。何でもできるってのも邪魔なだけだぜ」

「え、アキラは何でもできるんだ。いいなあ」

カズヤは目を輝かせて食いついてきた。

「カズヤはいいやつだよな、気楽で。羨ましいくらいだよ」
「そんなあ」

アキラはそんなカズヤを本心から羨んでいるように見えた。少なくとも、嫌味で言っではいなかった。

「能力を使わないようにするのって、すごく大変なんだぜ。何でもできちゃうと、能力使わなきゃ生きられなくなっちゃうし、それに能力のこと知られてみる。オレの全てが評価されなくなるんだ。むかつくだろ。だからオレは勉強するんだ。勉強は能力関係ないからな。なのに、誰もオレのことを天才扱いしやがる。努力すれば誰も同じくらいできるようになるはずなのに、これじゃ、余計に力のとバラせやしない」

「でもさあ、力使わないであれだけできるんだっけ、天才って言われてもなあ」

「しっ、叱られつとワ。今、言っただろ。使わないでできることは、他の誰もができて当然だっけ」

「言ってることは正しいのに、失礼だよな、サキは。オレ、年中怒ってるみたいじゃないか」

アキラはサキを小突いた。

これ以上アキラをからかって、反撃されたらかなわない。サキは少し話題を逸らす為に、他愛無い疑問を口にすることにした。まさかそれが、本題へ通じる質問だとは思わずに…。

第3部：六月、球技大会 - 5（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第3部・六月、球技大会 - 6

「そう言えば、前も気になったんだけど、アキラ、標準語だサ。なして？」

「ふん、とうとう本題に首突っ込んできたわ」

「ああ、ごめん」

「何で、ごめんなんだよ。サキ、オレ、前から思ってたんだけどな、ごめんを大安売りすんなよな」

アキラは言葉遣いが悪いから、つい怒られた気分になってしまうのだ。思わず小さくなっているサキなど無視して、アキラは麦茶で喉を潤すと、本題を話し始めた。

「まず、信じようと信じまいと、それはお前らの勝手だけど、オレのことを笑う前に、自分たちの持つてる能力そのものが、世間一般常識の中で、どう思われてるかを考えろよ」

サキもカズヤも、そう前置きしたアキラの雰囲気圧倒され、思わず息を呑んだ。前置きしなければならぬほど、アキラらしいくない突拍子もない話をするのだろう。

「サキが気付いた通り、オレは生まれも育ちも東京。仕事でちよつと問題を起こしてきたから、ほとぼりが冷めるまで、エセ関西弁を使つて、追っ手をまいているところ。」

因みに、仕事のことは詳しく話せないけど、問題つてのはオレの失敗じゃなくつて、オレがわざと火種を播いてきたつてことだからな。

で、ま、オレも未だ中学生だし、仕事にウンザリしてたから、お前ら搜すついでに普通になろうつて思ってたわけだ。

それにしても、連中、オレのこんなエセ関西弁に騙されてんだから、相当おめでたいバカだと思わなか？」

「いや、仕事の相手のことだろ。同意を求められても……」

「あ、そつか。そうだよなあ」

アキラは当たり前のことを言われ、頭を掻いた。本当に話下手だし、しかも自分の失敗じゃないことを強調してしまうところがアキラらしい。

「でも、なして神森に能力がある人間がいるって判ったのヤ？」

「そう言われたからさ」

「誰に？」

「オレには弟がいるんだ。双子でね」

サキもカズヤも声を出そうとして、アキラに目で制された。

「取り敢えず、オレは会った記憶がないんだ。何分、出生届を出す前に攫^{さら}われちゃってね。何で警察に届けないって思うだろ」

それよりも、「誰に」神森に行くよう言われたのか、その質問に答えるよと言いたいのを堪^{こら}え、二人は頷^{うなづ}いた。主導権はアキラにあるのだから。

「オレの家もお前ら表裏鈴木家と似て、とても変わった家系でな、一部の資料では、始祖はちよつと高貴な場所まで昇って、二代目はそこでできた娘とあるけれど、真実はここいらの地域^{おき}の長との間にできた娘が別の場所で生まれ、それが二代目になったと言われている。本来は、滅びた一族の霊鎮^{たましず}めを司る巫女の家系なんだな。

不思議なことに、どんなことがあっても女子が必ず産まれてきていたから女系相続でも問題なかったんだけど、ちよつと問題が起こつて、ぷつぷつりと女子が産まれなくなつちまったんだ。それから現在まで、巫女は他の者に任せて、我々は男系相続で細々と代を重ね、オレまで至つてる。

……言いたいことは解つてるぞ。オレはちゃんと女だからな。これはオレ抜きの話」

二人の視線が、「お前、女じゃないのか？」と言っているのを見

て取ったアキラは、慌^{あわ}てて付け足した。

「女系相続が男系相続になっちまった大本の原因も、やっぱ相続問題だったんだけどな。掻^{つま}い摘んで話すと、今から約四百年くらい前かな、当時の巫女が男子の双子を産んで、次の巫女となるべき女子を妊娠していたにも関わらずに戦地^{おもむ}に赴き、流れ矢に当たって次世代の巫女と共に死亡してしまったんだ。

一族の長である巫女の母は困り果て、当時のしきたりに従って、双子の兄に当たる方に跡を継がせたんだけど、弟の方は不服だったわけだ。そりゃそうだよな、双子だっけ、兄弟に差があるわけでもないし、大体、どっちが兄でどっちが弟かなんて、腹から出てきた順だ。本当のときは、細胞分裂のレベルまで遡^{さかのぼ}らなければ、厳密なことは判りやしない。

要するに弟は、一族の長になりたかったわけで、それが叶わなかった。巫女になった兄は女装で生きること強^{おきて}いられ、男として生きることになった弟は、掟に従い一族の村を出た。悲劇はそうして始まった」

まるでアキラの話すことは、何かの物語の一片のようだった。

「弟は、徹底的に兄の決定に逆らい、邪魔をし、そして最後には、その妻の目前で兄を惨殺した。その時身籠もっていた子どもに、弟は呪いをかけたんだ。

『滅ばしはしない。ただ、苦しめ続けてやる。兄の一族に女子は一切誕生しない。男子が一人生まれたら、その父を必ず殺してやろう。私の子孫は、未来永劫、兄の子孫を殺し続け、生かし続け、支配してやろう。そしていつか正統な方法で、一族の相続権を譲り受けてみせる』と。

そんなこんなで、オレはその呪いをくぐり抜けて生まれた女だから、命を狙われている。

でもなあ、オレは殺されるのは嫌だし、それに守らなくちゃなら

ないものを、代々持つてるから、常に身を隠してるんだよ。今となつては、オレの存在は一部では知られてるけど、生後数日間は死産だったと公表されて、だから弟が身代わりに攫われてしまったんだ。せつかく弟が身代わりになってくれたんだ、オレが成長するまで、オレのことは隠しておきたいって思惑が一族にはあったみたいで、それで誘拐の通報が警察にできずに、もう十三年も経つちまてる。当のオレの意志なんて、当然無視だし、オレが親で、一族を背負う身だったら、同じことをしただろうしな」

アキラはまるで他人事か何かのように、乾いた声で笑っているが、おかしい話だ。何一つ現実味がない話だ。確かにアキラが前置きをしただけのことはある。

でも、でもおかしい…

第3部：六月、球技大会 - 6（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第3部・六月、球技大会 - 7

カズヤは元よりサキまでもが、口をだらしく開けて、まるで理解できてない様子丸出しだった。それでも未だサキの方には余裕が少し残っていたようで、アキラに対して取り敢えず、言葉を発することはできた。

「もう、いいよ。オレにはさっぱりだ。どうでもいいんだろうけど、お前の、その知りもしない弟を捜すより、なしてオレとカズヤを捜す方が先だったのかヤ？まさか、オレらのどっちかが、実はお前の弟だったなんて話じゃないんだから」

「そりゃ、そうだ。ま、そう不思議そうな顔すんなよ。オレの一族、オレやお前らの能力は現実離れしているんだし、オレとしては、お前らの家系が詳しく伝えられてる方が、よっぽど不思議だと思うんだけどなあ」

アキラはぼやいた。自分の話下手の所為^{せい}で、自分の言葉が理解されなかったと思っているのだ。

本当はそうではなくて、サキもカズヤも現実に従って生きてきた頭で理解しようとしていたから、理解できなかっただけだ。しかしアキラも十三才の少女だから、そこまで彼らを理解できないことも当然ある。

「一番始めの質問、答えてくれよ。誰がお前に超能力者が神森にいるって言ったのヤ？本人たちですら気付いていなかったのに」

「オレたちの代わりに、一族の長をしてくれている女性さ」

サキもカズヤも、神森に生まれ育ったものとして、巫女という存在を決して馬鹿にしたりしない。まして大樹の森の神社の守人^{もりびと}の家に生まれた者たちだ。

「けど、ほんと、なしてオレたちなんだろ。それこそ公表してる人もいるのに」

「知るか。オレが訊きたいくらいだ」

カズヤの疑問に、アキラは予想外に冷ややかだった。

「一人はガチガチな真面目人間だし、一人はおめでたいまでに軽い人間だし、全くオレの役に立ちやしない。まあ、取り敢えず見付けたわけだし、次の道は、必ず向こうからやって来るだろうさ。オレはそいつに立ち向かうだけの話だ」

まるで独り言を呟くように言ったアキラの顔は氷の立像のように冷たく、とても十三才の少女には見えなかった。

少なくともサキには、アキラが哀しく寂しく影に包まれ、強く生きることを強いられて揺れる、儚い光のように見えた。

とても理解できない、これまでの数々のアキラの言動は、その不可解な一族と生い立ちとの所為なのだと、そこまで理解できたとしても、彼女の顔に浮かぶ乏しい表情からは、アキラが今、一体何を思っているのかを理解することはできない。むしろ、かえって解らなくなったかもしれない。

「オレの話は終わり。他のみんなには、出身地とかもバラすなよ。他に知りたいことはないか？」

アキラは麦茶を飲み干した。彼女としては、いささか話しすぎたようだ。乾いた氷の音だけが、部屋に響く。

「サキにだけ、いいこと教えてやる。お前が一番に不思議に思ったことをな」

サキは顔を上げた。

「おっと、それ以上反応するなよ。カズヤには聞こえてないんだから」

アキラに釘を刺され、サキは麦茶に手を延ばし、自然に振る舞う努力をした。

「去年、サキがオレに助言をくれた後、先生連中が揃ってオレのことを、サキの言った通りに信じてたのは、オレの仕業さ。本当は全

校生徒に思い込ませて、まるつきり性格の違うオレになっても良かったんだけど、それはリスクが大きいし、オレのやり方じゃないからしなかった。毎朝職員室に教師なら集まるからさ、そこでちょっと記憶を弄^{いじ}ったんだよ」

「！」

「おーっと、また反応しかかった。気を付けてくれよな。それにしても、サキの読みは良かったぜ。生徒連中は単純だからな、お前と教師の言うことみんな、信じてくれたし。お陰さまで、オレは今、柄^{から}にもなく楽しい中学生生活を送らせてもらってるよ。本当に感謝してる」

とうとう堪^{こた}えきれなくなつて、サキは恐怖の表情を顕^{あらわ}にした。しかし、カズヤは気付かない。

「お前がオレを怖いと思つてしまうのは、オレのこういうところを、それこそ自然と感じ取っちゃうからだよ。本当のところ、オレの方がお前のそういう敏感なところが怖いけど、オレは優位に立つことで、怖さを忘れた氣になつてただけかな。」

ま、幽霊の姿を見たり、枯れ尾花だ。要は氣の持ちようつてことさ。オレはそんなに怖くないぞ」

アキラはにやつと微笑むと、立ち上がった。

「何か、食つてくか？大したもんはないけど」

「いや、いいよワ。もう、帰らなきゃ」

カズヤも立ち上がった。まるで自分は部外者で、ただ話の場に付き合っただけ、といった感じた。一方のサキは、未だ茫然とアキラを見ていた。

「なあ、アキラ、今度、テレパシーのコツ、教えてワ。さっき言つてたべ、防御かけろつて」

「ええで、カズヤ。同類やしな、それくらいはお安い御用さ」

珍しく、アキラはにっこりと微笑んだ。重要な話が終わると、標準語がエセ関西弁に戻っている。ということは、いつものアキラに

なった、ということだ。

「サキもやで。お前らの秘密の会話、こっちは勝手に聞かされたくないからな」

サキには、彼にだけ判る不気味な微笑みを、アキラは向けた。

「カズヤには、瞬間移動の仕方も教えてやるわ。サキは体力が心配だから、何も教えてやれへんけど、拗^すねるなよ」

アキラは二人を、森の入り口まで見送りに出た。

「また、明日な。覚悟しといった方がええで。コメチ、お祭り騒ぎを計画しとるようだし、そうになったら、オレも盛り上げにかかるさかいな、体力回復しとけよ、特にサキ」

「おう！」

「いい返事だ、カズヤ。サキも返事せえよ」

しかし、サキは答えず、アキラに背を向けた。カズヤみたいに単純にはなれなかった。アキラも、それは解っている。

『サキ、明日はいつも通りにしろよ。オレは何も変わりやしない。』

オレはお前のこと買ってるからこそ、今日、誰にも話さないことを話したんだぜ』

アキラは、これもまた珍しく、手を振って二人を見送った。

第3部・六月〱球技大会〱 - 7 (後書き)

次回から第4部・六月〱時空の旅人〱を始めます。

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfradia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第4部：六月、時空の旅人 - 1

4：六月、時空の旅人

昨日のアキラの予告通り、コメチは優勝祝いをやろうと電話してきた。当然ナミや、お祭り大好きポンが反対するわけがない。そうなれば、大人しいシキだつてついてくる。

昨日の今日でなければ、サキもカズヤも率先して大騒ぎをするのだが、残念ながらどうもその気分になれない。しかし他の五人の勢いに負け、結局サキは自分の部屋を、騒ぎに提供するはめになってしまった。

「あーっ！サキ、これ最新のステレオだっちゃ。いいな、いいな」

部屋に入るなり、ポンは大きなスピーカーに目を付けた。

「いいだろー。バイトの結晶」

「あなた、まだやってたのワ」

コメチは、すぐに目くじらを立てた。

「だって、健康の為だもん」

サキは自慢のステレオのスイッチを入れた。

「でも、何でこないな立派な家に住んどって、どうしてバイトでステレオ買つてんのや。親に買ってもらえばええやんか。だって、この一戸建、全部お前ら兄弟だけで使つてんやろ？」

アキラは早速寛いで、部屋の中の冷蔵庫から、勝手にお茶を取っていた。

サキの部屋とは、普通の一戸建の二階全部。一階は弟が使っている。同じ敷地内の立派な母屋を改築する時に仮住居用に建てた家で、ちゃんと台所も風呂もある、子供二人が与えられるには、とても贅沢な品だ。

「農家つて、金持ちなんやな」

自分の家のことなどさておき、アキラは呟いた。

「あ、そう言えば、この前雑誌で見たんだけど、このステレオ、フルモデルチェンジして、もうすぐ発売らしいよ」

「シキ……、お前つて、可愛い顔して意外とキツイこと言うよな。」

悪気ないのは解つてんだけど……。ま、いいけど。次の目標はパソコンだっけ」

「いい加減、バイト辞めなよ、サキ。先生にバレるよワ」

ナミが心配そうに、控えめに言っても、「うん、バレてる」と、サキはお構いなしだ。

「でも、パソコンの前に、この間、ギターも買っちゃったんだよ。アコギ、欲しくなっちゃって」

サキは周りに合わせて気分を立て直していたが、カズヤは未だだった。

第一、サキとカズヤでは、脳への刺激の伝達速度が違う。

カズヤは、昨日は部外者気分でいられても、時間の経過と共に当事者気分になってきていて、今、まさに、その気分は最高潮。昨日の帰り際のサキのようだった。

この、二人の間の約一日のずれが、いつもサキが兄貴役になつてしまふゆえんなのだろう。

「えー、サキ、見せて」

シキは、その買ったばかりのアコースティックギターを、何故かきちんとつま弾いている。

「なして、ギターなんか弾けるのワ、シキ」

「ヒ・ミ・ツ」

誰一人として、テンションが一人低いカズヤなんかに構ったりせず、サキの玩具に群がっていた。

「サキさあ、どうせ身体弱いんやし、そないに楽器好きなんやったら、ハンド部なんかせんと、うちの部活に来ときゃ、ええやんか。なあ、コメチ」

「え、わたしは嫌よ。幼なじみで、ずっとクラスも一緒に、この上部活まで同じなんて」

「そんなもんか」

「アキラには、幼馴染みはいないのワ？」

「おらんなあ。同じ所に長居すること、あんましあらへんかったし。だから、ほら、エセ関西人なんやわ。一貫した方言、よう喋れへんようになつてしもて」

「だからか」

「やつぱ、判るか」

「うん、変だもの」

「んだ」

「そろそろ、ここの訛りもうつるかもしれへんで」

「やー、楽しみ。アキラが『んだ』なんて言ったら、あたし、ひっくり返っちゃうよワ」

楽しそうに他の皆と喋るアキラは、平然と嘘をついている。

「カズヤ、何や、元氣ないやんか」

アキラはにやつと笑った。まるでカズヤの心の動きを、すっかり見透かしているかのように。

『昨日は、いい返事で別れたのにな、カズヤ。サキはあんなに不愉快そうだったわりに、結構騒いでるじゃないか』

『オレはサキじゃない。それにオレ、昨日はよく解らなかつたけど、よく考えると、アキラ、変だ。よく平気で嘘つけるなヤ』

『オレの脳みそに言葉を送るんだって、よく意識してみる。サキの方にも聞こえてるぞ。ホラ、お前を見てるじゃないか』

アキラは「トイレ」と言って、席を外した。

『見えない相手とだって、集中すれば話せる。試してみるよ』

『お前は、どうして、平気な顔して嘘つけるのワ？』

『よくできました。ご褒美に答えてやるよ。』

オレはな、目的の為なら手段を選ばないし、出身地なんて、この場において言う必要も、重要性もないからだよ。オレは今を楽しみたいし、他の連中が楽しんでいる場に水を差したくない。だから、陽気なオレを演じるんだ。

それに、ここにいる全員は、オレが暴れた記憶を失くしたふりをしていることを、知ってるんだ。それでいて、こんなオレに合わせしてくれてるんだぜ。オレとしては、それに応えて楽しむことが、礼だと思ってる。そういうこと。そっち戻るぞ』

アキラは予告通り、勢いよくドアを開けた。

第4部：六月、時空の旅人 - 1（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第4部・六月、時空の旅人 - 2

「帰国っ！」

珍しいアキラのギャグに、一同は一瞬凍り付き、それから爆笑した。

「うわっ、オレ、それ、次使っ」

「嫌だ、アキラ、それをずっとトイレで考えてたの」

「ボク、もうダメ……。アキラが言うなんて……」

「シキ、笑いすぎよ。あたしもうつっちゃう……」

「そないにウケるとは、思ってたなかったな。困っちゃうやんか……」
「後始末しろよな、アキラ」

サキまで腹を抱えて、苦しそうに笑っている。とうとうカズヤも笑い出した。

きつと、彼女なりに考えたのだろう、本当に。ギャグの質はどうであれ、カズヤは、自分の為のギャグだと思い、気分転換するチャンスだと気が付いた。これを逃したら、アキラは何も教えてくれなくなってしまうだろう。それはとても困るのだ。

全員は、暫く笑い続けた。ギャグが面白かったわけではなく、アキラがギャグを言ったということが、面白かったのだ。アキラも困り果て、一緒になって苦笑していた。

笑いが一段落つき、一同は雑談で盛り上がっていた。もう誰も、テンションが低い者はいなかった。

「サキやあ、何本ギター持ってたんのワ？」

楽器が弾けないながら、カズヤはサキのアコースティック・ギターをいじっていた。

「んー、そのアコギだろ、あとそのエレキだろ、押入にベースも入ってる。貸すならいいけど……」

まるでカズヤにねだり取られるのを警戒しているようなサキの様子がおかしかったのか、それともカズヤが自分から話題を提供できるようにになったのに満足したのか、アキラは少しだけ、二人に微笑みを見せた。少なくとも、カズヤはその微笑みを見て、ほっとした。

「サキ、絶対ハンド部じゃなくてバンド部の方が向いてるべや」

ポンも楽器コレクションを弄^{いじ}った。彼のレベルも、カズヤ並みだ。それ以前に神森中にはバンド部はない。

「ほんまや。面白いもんも持つとるんやな。サンポーニヤまで……」
アキラも半ば呆れ顔で南米の楽器を掴^{つか}み上げた。

「ああ、それ。南米の特集をテレビで見てやあ、吹いてみたくなつて、つい買っちゃったのワ」

全員がため息をついた。サキはただの、凝り性の買物魔だ。

「ならさ、サキ、演奏したくなるすべ」

カズヤはサキに、何やら思わせぶりの質問をした。

「ま、そりやまあなあ……」

「んじゃ、文化祭、オレらでバンド組んで出てみない」

「はあ？」

今度は、全員が大声を出した。まさかカズヤに限って、そのようなことを言い出すとは、誰も思っていなかった。

「今日は何なの？ 言いそうもない人が変なこと言う日だこた……」

コメチは例によつて、思ったことをはっきり口に出したのだが、それは皆が思っていたことだ。

「えー、だって、吹奏楽部は二人もいるし、サキとシキは何だかギター弾けるし、ナミはピアノ習ってるし、なあ」

一番呆然としていたのはアキラだった。いくら気分転換しろと言ったものの、何もここまで気分を変えてほしいとは、一つも思っていない。

「何、言うとなんのや、カズヤ。言うのは簡単やけどな、實際やるんは大変なんやで。なあ」

アキラは一同に同意を求めた。しかし、彼女の思惑通りにはいかなかった。

「面白そう！やるとしたら、どんなのやるのワ？あたし、ピアノしか弾けないけど」

「やっぱ、サキはギターだっちゃね。ボクはベースの方がいい」

「オレ、何やっぺしなヤ」

「カズヤ、お前、言い出しっぺなんだっけ、少しは責任持てよ」

「足りない楽器は、バイトでも何でもしましょ。サキにできて、わたしらにできないわけないっちゃ」

「コメチ、そういう例えは、オレ、すごく嬉しくないけど……」

「いいってことよ。決定。はい、アキラはこれでも吹いてて」

コメチにサンポーニヤを放られ、アキラは反論する機会を失ってしまった。こうなると置いてけぼりのアキラにできることといったら、肩を落としてため息をつくことだけだ。

「アキラ、どうせ学校生活を楽しみたいんなら、これくらい派手にハジけなきゃ」

コメチは、アキラの本音を抉^{えぐ}るようなことを言った。

「けどなあ、バイトって、お前ら中学生やんか。何ができるっちゃうねん」

「アキラ、周りを見てごらんなさい。人手欲しがってる農家なんて腐るほどあるんだから」

「オレン家なんか、小遣いけっから手伝えって言われてただけだよあ、いっつも無視してたんだよな。損したなヤ」

「ポン、それ、ボクにやらせてよ」

アキラは言葉を失った。

『サキ、今こそ救けてくれ……』

『やんだこた。コメチのが正しい』

『鬼や、お前は』

サキは知らんぷりを決め込んだ。

アキラは完全に乗遅れた状態だった。

第4部：六月、時空の旅人 - 2（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第4部・六月、時空の旅人 - 3

言葉を失ったままのアキラなどお構いなしに、話は進む。

「取り敢えず、ギターがサキで、ベースはシキ。コメチはサックスで決まり。欲しい楽器はドラムセットとキーボード。ポジション決まってるのがポンとアキラとオレで、楽器さえあれば、ナミは決定と……」

カズヤは言い出しっぱの責任を感じたのか、手元のメモに必要と思ったことを書いている。

「こんな時だけ責任感出すなよ」と言いたいのを、アキラはようやく呑み込んだ。

「お前らなあ、ドラムとキーボードで何ぼすると思うてんのや？ 農作業の手伝いだけで、買える額か？ コメチなら判るやろ」

「アキラ、あんまり目立つの嫌かもしれないけど、あなた、何もしないで目立つてるのよ。悪足掻き^{わるあが}は止めなさいね」

コメチはお姉さん口調でふざけた。アキラの悪足掻きなど、コメチには見え見えだった。

「それに、誰が新品買うなんて言ったのよ」

「クラス全員で、文化祭で何かやるって言うたら、どないすんのや？」

らしくないアキラの台詞に、一同はまた笑った。

「誰が、何やりたいって言い出すのワ。うちのクラスに限って、絶対ないっちゃ、それは」

サキは腹を掻き^{むし}きつている。

悪足掻きにも程がある。

「わたし、賭けてもいいよワ。明日のホームルームで、文化祭どうするって議題出したら、めんどーいって、例によって誰か言うつよワ」

「コメチ、それ、賭けにならないっちゃ」

「あ、それもそうねえ。じゃ、誰が言うか、当ててみようか」

「はいはいっ、オレが言う」

「だからポン、それじゃ賭けにならないってば……」

「あ、んだなヤ」

アキラ抜きで盛り上がる六人に、わざと大きなため息をついてみせたアキラだったが、誰も彼女など相手にはせず、どういうわけか、一人テンションが低いのはアキラになってしまっていた。

翌日のホームルーム。球技大会の感動冷めやらぬ様子の二年五組に、担任の中野 葵は手を焼いていた。いつものホームルームも手を焼くことは焼いているのだが、今日は余計に性質が悪い。

しかしここは担任。逃げるだけでは能がないし、要領は心得ている。去年一年間で、だいぶ鍛え^{きた}られた。

葵は騒ぎにめげることなく、手短に必要事項を言い終え、司会を学級委員二人と交替し、戦場から身を退いた。

「はい、優勝チームのキャプテン、桂小路です。先日はお疲れ様。それと、応援有難う」

「いつからキャプテンになったのワ？アキラ」

間髪入れないサキの突っ込みに、クラスは笑った。作り上げられたアキラは、司会業が巧^{うま}い。

「本日のお題はこちら。文化祭、何するか」

サキが黒板に書いたことを、アキラは読み上げた。

「と、いうことで……」と、アキラが言っているそばから、野次が飛んだ。

「めんどーい！」

ポンが第一声を上げ、思わずコメチは遠慮なく吹き出し、ナミがポンを小突いていた。

別にポンが言っても言わなくても、その場の展開は同じだった。

「んだ、めんどーい」

「クラス全員まとめるなんて、絶対ムリ！」

「多数のやりたいことが、全員のやりたいことじゃないしやあ」

「んだ。やる気ないヤツに強制させる労力、自分のやりたいことに使いたいし」

アキラとサキは黙って、一通り言わせておいた。いつものことだから慣れたもので、一段落したところで意見をまとめ、妥協案を提供すると、大概上手くいく。それこそ、このクラスを黙らせることは難しいのだ。

「何や、全員まとめるのが無理やって意見で、全員まとまってるよ
うやけど、おかしいよな」

黙っていたアキラの指摘に、クラス中は笑った。たしかにアキラの言う通り、妙にまとまっている。

「ま、それは置いて、さっきから聞いとると、少数で何かやりたいヤツと、何もやりたくないヤツとがおるみたいやな。そんでもって、クラス全体で何かやりたいってのは、誰もおらんと。ここまでは問題あらへんな」

「うーい」とクラスが一致して返事をする。

「じゃ、これで第一段階クリアや。何かやりたいってヤツは、後でオレかサキの所に来てな。注意事項説明して、個人計画表を渡すさかい。」

問題は、何もやりたないってヤツやなあ。オレは学級委員やさかい、そういうの許すわけにはいかへんのや」

クラス中からブーイングが起こった。

「しゃあないやんか、学校行事は授業と同じで全員参加が義務なんやさかい。」

そこでオレの提案なんやけど、何かやりたいってグループの何処

かに、必ず手伝いでも何でもええから、何らかの形で参加してほしいねん。

クラス参加やったら、何も名前いらんのやけど、個人計画表は名前がないとダメなんやわ。どのクラスも、クラス参加が当たり前で、その外に個人参加したいヤツが計画表出すんやけど、こちらはクラス参加せえへんやろ。したらオレらも、学校から追求されるねん。名前のない生徒は何なんだって。そんなん、オレかて説明できへんし。

だから、うちのクラス全員の名前が揃^{そろ}つて、たくさんの個人計画表を出したら、誰も文句言えへんやんか。どやるか。

でもな、本当に参加するんやで。サボるヤツは、オレが許さへんからな」

「アキラ怒らすと、むっちゃ怖いもんな」

誰かが野次を飛ばした。これが笑える冗談になるのは、アキラが暴れたことを憶えていない、ということになっているからだ。

「じゃ、オレの提案に反対意見あるヤツ、おるか。なかったら、今日のホームルーム終わり。来週、もう一度この議題で話して、最終確認。ということ、終わり。葵ちゃん、このまま全部終わりにしちゃってええ？」

担任の葵は頷^{うなづ}いた。

「アキラあ、アキラたちは何かやるつもりなのワ？」

自分の席に戻ろうとするアキラに、誰かが訊ねた。

「ヒ・ミ・ツ。責任者はカズヤやさかい、オレの口から言えんのや。じゃ、帰ってええって」

アキラはふざけながら、帰り支度を始めた。

第4部：六月、時空の旅人 - 3（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfradia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第4部：六月、時空の旅人 - 4

「あ、ちょっと待って、待って！」

帰り支度をしている仲間の背中に、カズヤが声をかけた。

責任者にまつり上げられてしまったカズヤの「明日さ、サキん家サ集まるべ」という呼び声に^{こた}応え、一同はサキの家に集まった。

「で、なして集まったのワ？」

サキは全員分のお茶を出した。

「えー、せっかく秘密ってアキラが言ってたのに教室で話し合うのも何だし、今日は土曜で時間あるつけ、グループ名とか、どんなイメージでやるとかを決めようかと思ってさ。ほら、ホームルームで用紙提出しなきゃならないんだし」

全員が目丸くし、言葉を失ってカズヤを見た。天然パーマの天然パーの言う言葉じゃない。

「珍しく建設的なこと、言うやんか」

「そんなあ」

ようやく口にできたアキラの微妙な皮肉に当然気付くわけなく、単純なカズヤは照れて頭を掻いた。

遠慮のないコメチだけがぶつぶつと吹き出し、サキが彼女の脇腹を小突いた。

「それだけしつかり考えてんなら、何かいい案、あるんだべ」

「何、教えて」

何だかカズヤの手に負えなくなりそうな雰囲気、両手を振ってカズヤは慌てた。

「いや、そうじゃなくって。いいのが浮かばないつけ、集まってもらったんださ、もう」

「何だ、だらしのないの。やっぱカズヤだもんね」

コメチにはつきり言われ、カズヤは小さくなって言葉を続けた。

「だって、これだけ個性強いのが集まってんだぜ、みんな。オレが勝手に決めるわけにはいかないっちゃ。いいんだよ、『鈴木カズヤ with 二年五組の仲間たち』でいいなら」

「ん〜、オレはそれでもいいよワ。積極的だなヤ、カズヤ」

のんびり言うポンに、それこそ大慌てで「いや、そこはオーケー出すとこじゃなくて、ツツコミ入るところだって。オレ、嫌だよ」とカズヤは全否定して、カズヤは話を続ける。

「もう、名前はいい。例えば演奏する曲だって、それぞれ好きな曲とか違うだろうから、誰かのコピーバンドをやってステージに上がるなんてあり得ないわけだっちゃ」

その指摘に誰もが頷く。

「すると、オリジナルをやるってことになるわけだろ。音楽のこともなんかまるで解らないオレらが、一体どうすんのかなと思って」

脱線しかかった話を最後まで話し終えることができて、カズヤは一気に脱力した。

「まあ、カズヤがそこまで考えたんだから、良しとしなくっちゃね」

「な、コメチ、さっきからオレのこと、かなりバカにしてないか」

「気の所為よ。で、どういう話し合いするの、これから」

コメチは軽く受け流した。

「ほな、オレの方から一つ。楽器の件なんやけど、ちょっとした知り合いが、ドラムセットとキーボード二台、中古やけどキレイなやつを、セットで十万で譲ってくれるって人がおるねん。もし良かったらオレが買って、一人一万五千円を、オレに返すってのはどうやるか。で、五千円が多くなるやけど、これは全員のお茶代ってことで、今日みたいな時に使う為に、サキに預けたいんやけど、どやる」

「一万五千円くらいだったら、オレらでも何とかなるけど……」

一同の表情がぱつと明るくなったが、去年から同じクラスの間だけは、アキラの家の事情をふと思い出した。

「でも、アキラ、あなた一人暮らしたっちゃん。生活費、大丈夫なのワ？」

「心配すんな。オレの金、どう使おうと、誰も何も言わへんさかいな」

この上なくアキラらしい台詞なのだが、そういう言葉は中学生らしくない。

「それより、アキラ、あなた、やる気になったのワ？」

「自分がやりもしないことに、簡単に十万出してやるようなお人好しに、オレが見えるか。その辺、コメチはよう知つとるやんか」

しれつとアキラは言った。

「そりゃ、まあ……」

平然と言つてのけるアキラに、コメチはちよつとだけ考え込むような仕草をし、そしてすぐに顔を上げた。

「ほんと、その通りだっちゃん。甘えさせてもらいましょ、アキラ。ついでに分割払いで頼むわ」

「オーケー。そうこなくっちゃ」

アキラも明るく答えた。コメチのこういう割り切りの良さが、アキラも気を遣わずに済む、お互い気楽な面なのだろう。

「じゃ、次は真剣に、グループ名考えましょ。個人計画表に書くんだから」

「それと、一応曲のコンセプトもね」

「オレさあ、B級アイドルっぽいのが好きかも。イマイチっぽくて面白いつちゃん」

「ポンはB級アイドル……って、どういうのよ」

「オレ、プログレ」

「ボクもサキに同意見で」

七人ですら話がまとまらないのだ。紙に書いているコメチも必死

だ。

「もうっ、プログレって何よ。サキ、あなた、民族音楽が好きだったんじゃないのワ」

七人でのまとまりない話し合いの結果、ようやく決まったグループ名は……

《Time Traveler Boys & amp; Girls》

しかし、まさかこのベタベタな名前に、何やら意味があることなど、七人が知っているわけがない。

彼らの全てには意味があるのということに……

第4部：六月、時空の旅人 - 4（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第4部・六月、時空の旅人 - 5

ようやくグループ名を決めることはできたものの、専門知識のない彼らでは、曲のコンセプトを、誰もやりそうもないこと、としか決められなかった。

「ま、いいってことよ。それよか、決まってるないポジション決めなきゃ」

「あ、オレ、やっぱり吹奏楽部の部長として、フルート吹くさかい」

「お前、バカか。なしてバンドでフルートなのワ？」

「イヤ、プラスバンドやさかい……」

サキの突っ込みに、アキラは抜け駆けし損なった。

「見た目的には、オレがドラムだべ。すると、アキラとカズヤの手が余るなあ」

「んじゃ、オレが作曲するさかい、唄うのはカズヤでええやんか。

言い出しつぺなんやし、どうせ、カズヤ、お前、何も楽器できひんのやろ」

「え、まあ、んだけど……」

「つつーか、鈴木カズヤ with 二年五組の仲間たちなんだし」

「いや、だからそれは冗談だつて……」

何やら必死なアキラの様子に、堪えきれずにコメチは口を挟んだ。
「懲りないわねえ、アキラ。抜け駆けは許さないわよ」

口籠もるカズヤなど無視し、コメチはアキラを捕まえた。これでまた、抜け駆け失敗だ。

「ぬ……抜け駆けつて何やねん」

「何、寝言言つてんのよ。あなたの顔、知らない生徒は、校内には一人もいないくらい、有名なのよ。そういう人にこそ、前サ出てもらわないと」

コメチの言う通りだった。入学早々に悪名を馳せた、背の高い女生徒を知らない生徒などいない。

「ま、作曲はやってもらうとして、音楽をやってる者として、気になるところがあるのよね、わたし。」

カズヤ、ちよつとこの音で声出して。アキラも、オクターヴ下げで合わせてみて。ほら、やっぱり」

つい乗せられて、二人は声を合わせた。

「あーっ、そっくり！」

「でしょ」

コメチは五人に親指を立てて得意げな顔をしていたが、反対にアキラは頭を抱えた。コメチが弾いたギターの音に合わせて出した声は、迂闊だったと後悔してしまうほど、カズヤとアキラの声質は似ていた。

「気にすんな。いいことだよ、オレらのステージの為には」

「何が、気にすんな、だ。オレ、絶対嫌やねん」

「意外と往生際悪いよね、アキラって」

シキにまでそう言われ、いよいよアキラは頭を抱えた。

「可愛い顔して、結構キツイこと言いよるな、シキは」

「そんなに嫌ならさ、同じツインヴォーカルでも、メインはカズヤにやってもらおうよ。どうせアキラなら、それこそ何でもできるっちゃ。何でも屋さんになってもらうつぺし」

「シキ、大好きやわ。やっぱ一番優しいのは、シキだわ」

アキラは諦めたものの、彼女の抜け駆け劇にかき消され、カズヤもヴォーカルは嫌だったのに、その一言が言えず、気が付けば強引にヴォーカルの座に据えられてしまった。

彼が落ち込んだり、拗ねてみせたところで、誰一人として構ってあげるような者はいなかった。気付いた者すらいなかったのだ。

可哀そうなカズヤなど放っておいて、話は進む。

「ところでやあ、練習とかってどうすんのワ？運動部は市大会予選、そろそろ始まるっちゃ」

「ああ、んだなあ。カズヤ、うちらはいつだったかヤ」

「八月の頭。バレーはいつだったつけ、シキ」

「夏休み入ってすぐ。ちゃんとこっちの練習にも顔出してよ、カズヤ」

「あたしも来月中旬」

「みんないいわよね。わたしらなんか、そこら中に応援演奏で引きずり回されて、休む間もなく盆のコンクールでしょ。秋には文化祭だし。アキラはソロコンテストだったちゃ。市予選は夏休み中でしょ」

「オレは平気やねん。どうせやり慣れた曲で出るさかいな」

「できる人はいいいわねえ……」

「日々の練習の賜物たまものって言うんや」

「んだなあ……。みんな忙しいみたいだし、いつそ誰かん家で強化合宿なんちゃって。アハハハハ」

ポンは冗談のつもりで言った。サキの家だって、そんな息子の道楽に付き合ってくれる程、優しくないのを知っていた。

「あ、それ、ええやんか、ポン」

「はあ？」

予想外の展開に、誰もが驚いた。

「オレン家やったら近所に誰も住んどらんし、うるさい親も住んどらんし、防音やし、完璧やんか」

「ぼ……防音って……」

彼女の家を見たことがない四人は特に、言葉を失った。サキとカズヤだって、この展開は予想外だ。

「何なら今から来てみるか。どうせ誰もおらへんのやし、構わへんで」

珍しく積極的に自分の一面を明かそうとするアキラに、六人は結

局強引に案内されて彼女の家にやって来た。

第4部：六月、時空の旅人 - 5（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第4部・六月、時空の旅人 - 6

「でっけー……」

「さつきは、よくもまあ、いけしゃあしゃあと、『農家は金持ち』なんて、言えたわねえ」

突っ込み役のコメチは、アキラの脇腹を小突いた。

「ま、ええってことよ。どうぞって、あれ、オレ、鍵かけ忘れてたみたいやわ」

アキラは引き戸を開けた。

やはりどこか感覚がずれている。

「ねえ、アキラ。とやかく言つつもりないけど、あなた、意外と可愛い靴が好きなのね……」

玄関に揃そろえて脱いである、アキラらしくない可愛い靴に、コメチは思わず本音を言ってしまった。

「オレのじゃねえよ。オレ、こんなに足ちっこくないやんか。ちょっと人が来とるみたいやわ」

「来てるって、不用心な……」

「知ってる人だって」

「そういう問題じゃ……」

アキラは気にする様子もなく、奥へと入っていった。

「やつは亜里ありさんだ。来てたんだ、お待たせ」

「あら、お帰りなさい」

とても小柄な女性が、缶のお茶を片手に一人で寛いでいた。こちらにもアキラの帰宅に動じた様子はない。

「ひ……アキラちゃん、ダメじゃない、鍵かけなきゃ。用事がこっちの方にあつたから、注文の服、ついでに届けに来ただけ、鍵がかかってないのを放って帰るのも心配じゃない。だから上がらせ

てもらったのよ」

「そりゃ、どうも。悪いねえ」

口ではそう言っても、全然アキラは悪^{わる}怯^びれていない。

「ねえ、黒いズボンばかり、もう止めましようよ。作る方はつまらないわ。一応デザイナーなんだから」

「いいやん、好きなんやもん。実用的だし」

「いや、その実用的とデザインって、案外対極にあったりするのよ」

「まあまあ。それより、手間かけさせて悪かったね。神社にでも行って来たんか」

「えっ、ええ……。神森に来たら、やっぱりあの神社を見なきゃねえ」

亜里と呼ばれた女性は、確かに一瞬動じた。神森に来たら神社を見て帰る、というのはごくごく当然のことで、別に動じることはない。何しろ神社の中にある樹齢千年を超える御神木は、市の文化財として、市の配布する名所巡りのスポットとして掲載されているのだ。当然立派な御神木の写真を撮りに来る人は少なくない。だから別にデザイナーである亜里と神社と関係付けるものがなくても、神社を詣^{もつ}でることには何ら不思議はない。

瞬間、動じてしまった亜里はそこまで考えた。アキラの異様なまでの勘の良さには、これまで何度も驚かされてきたが、それでも一瞬どきつとさせられる。神社を詣でたことで、変な勘繰りをされる可能性もあるということだ。

亜里は慌てて「何、アキラちゃん、可愛い子連れ回してんの」と茶化してみたものの、全然様にならない。

亜里のそんな心配をよそに、アキラはそのことには全く関心を示さず、次の話題を振ってきた。

「そうだ、丁度ええ。なあ、文化祭、衣装どないすんねん。まさか制服か？」

「え、どうすんの」

「オレが訊いとんねん」

「あ、そっか」

「何、衣装って、アキラちゃん」

「うちら、バンド組んで文化祭出るんやけどな、せつかく亜里さん来とるきに、注文しよかと思てな。亜里さん、今、暇かなあ？」

「あら、大歓迎よ。じゃ、ちょっとイメージ描いてちょうだい」

亜里は荷物の中から、小さなスケッチブックと色鉛筆を取り出した。

どうせ子どものお絵描きだろうと思っていた。今までもデザインを注文する相手の大雑把な絵には泣かされてきている。でもその絵を元に話を聞いていくと、デザインが見えてくるのだから、これは必要な作業だ。

一式受け取ったコメチは一瞬考え、すぐそれを隣にいたシキに渡した。

「シキ描いてよ。あなた、絵、巧うまいいから」

「はいはい」

コメチのああでもない、こうでもないという注文にもめげずにシキが完成させたイメージイラストは、亜里の予想を超えていた。

「あらあら、素敵なデザインね。私が縫いやすいように手を加える程度で平気よ、これ。あなた、デザイナーに向いてるかもよ」

別に子どもの道楽に付き合うだけなのだから、自分のデザインに拘る必要などない。初めから言う通りにしてやるつもりだったのだが、本当に目の前の少女のデザインは目を引くものがある。しかし本職の亜里の気軽に言った一言で、コメチは簡単に逆上のぼせ上がった。いた。

「完成まで二週間ちょうだい。取り敢えず、すぐに端切れでミニチュア作ってみせるから。それで良かったら、採寸して取りかかるけど、急ぐかしら？」

「別に。あ、柔道が武道館で試合あったよな。こつちまで来てもらうのも何だし、その帰りに寄らせてもらうとすると、来週になるけど、ええかな」

「私は大丈夫よ。じゃ、そういうことで、そろそろ失礼するわね。遊びに来たところを邪魔しちゃって、ごめんなさいね」

「ええねん。せつかくだから、晩飯食ってきやええのに」

「だって、アキラちゃん、ベジタリアンなのに、他人に合わせて作るんですもの。具合悪くなるの判ってるから、失礼するわ」

「えー、オレ、最近、無精卵は食えるんだぜ」

「あら、良かったじゃない。でも、失礼するわ。お店もあるし。ほら、予定外の留守番しちゃったしね」

亜里は荷物をまとめて帰っていった。

第4部：六月、時空の旅人 - 6（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第4部：六月、時空の旅人 - 7

「へえ、アキラってベジタリアンだったんだ」

カズヤとシキは、初めて聞いたことだった。

「そうなのよ、大喰いしそうなキャラクターなんだけどね」

「そ、痩せの大喰いなんだけど、メニューによったら、ほんとに小食なのよ。調理実習、大変だったらありやしない。

知らなかった頃、アキラったら格好付けちゃってさ、無理して食べて、吐いちゃうわの大騒ぎ。アキラが保健室サ行つたのよ、ね」

「そ、あの時はビビったっちゃね」

「いや、あれは面目ない。やっぱり食肉となって出された以上、食べなきゃ浮かばれないやろな、牛も、と思てな」

「意外な一面よね」

「そんなんだから、徹底して動物性のもの、ダメだよ。ケーキも気を遣ってるようだし」

「無精卵だったら平気やで」

「バターは平気なんだ」

「あれは、動物が死んでないやろ」

「ベジタリアンだったから、給食残すんだ。偏食だとは思ってたけど」

「牛乳も平気なのは、それも動物が死んでないから？」

「そや」

「そんなもんなのか」

「そや。そろそろ、練習室でも行くか。こっちやねん」

アキラは自分の話題が一段落すると、一同を地下室に案内した。

「ち……地下室って……」

細い階段を下りて開けたスペースに、一同は言葉を失い呆然とした。

「ここなら防音やる。大音量の練習にええやんか。オレ、ここでフルートの練習しとんねん」

そこは、教室一つ分の広さの部屋だった。

「普通の家庭に、こんなもん、普通ないよワ」

「つつーか、お前、何者だ？」

「くせ者」

ベタなギャグで質問をかわすと、アキラは今度は二階へ案内した。「寝泊りはここでええやる。二十畳はあるし、確か、屏風があったさかい、そいつで男女仕切れば、問題ないやる」

誰も何も言わなかった。地下室のある家だ、屏風の二つや二つあったところで驚くまい。この家を見れば、アキラの経済感覚がずれている理由が、解ったような気がする。当の本人は、ずれていることすら気付いていないようだ。

「ところで、さっきの女の人だけど、洋服屋さんのワ？」

「そ。コメチやナミなら知つとると思うけど、中央通りにあるやろ、『ARI Tanimori』ってブランド。結構流行つとるようやけど、その亜里さんや。谷森亜里つちゅうねん」

「えーっ、ウソーっ！」

女子二人は大声を出した。それだけ有名な店だった。

「なして、そんな店の人と知り合いなのワ。洋服、いつも適当じゃない」

普段の制服姿だつて流行とは程遠い。そんな人間がちよつとは有名なデザイナーブランドを身につけているとは考えにくい。

「そうやな、あんまり酷い^{ひと}から、個人的に亜里さんと友人のオレの親が、オレのお目付け役を頼んでったんだよ、あの人に。そうでもない、オレの格好が酷くなると思ったんやろな。内緒みいだっけ、オレは気付いてないふりをしてやってるけどな」

「へえ、親の知り合いなんだ」

「あの人、一般向けの服よりも、ファッションショーとかの変わっ

た服のが、業界じゃ有名だよね。どうしよう、ナミ、わたし、褒められちゃったよワ」

「良かったっちゃ、コメチ。デザイナーでも目指したら」

「頑張っちゃおっかな」

ファッションなど全く興味のないアキラや、男子たちなどお構いなしに、二人は盛り上がっていた。合宿の話など、どこかへ消えてしまいそうだった。

「で、合宿するとしたら、勿論夏休みやろ」

「んだなあ」

アキラは、マイペースに男子たちと話していた。

「もし何だったら、全員が詞なり曲なり、なかったらイメージだけでも持つて来たら、オレ、曲作ってみるけど。グループのイメージは、さつき何となく見えたつけ、曲調だけでも決めとかなあかんやろ。イメージあれば、オレ、夏休みまでにメロディ作れるさかいなどやろ」

「曲が先でもいいっちゃ」

「それはあかん。オレだけのイメージになっちゃうやんか」

「あ、んだなあ……」

「じゃ、そういうことで決まりな。コメチ、ナミ、聞いとらへんな。各自で作詞若しくは作曲、ダメなら何でもええさかい、自分のイメージ伝えるもんを、オレの所に持つて来ることな。したら、オレが夏休みまでに曲作るさかい」

「あら、すごい。さっすがアキラ」

「おちよくんなよ、コメチ。アレンジはみんなでするんやから。サックスのソロ、たくさん入れるで。覚悟しいや」

「あら、嬉しい」

「それと、楽器は今日頼んだら、納品は来週になると思うんだ。そしてら、ポンのドラム、特訓せなあかんし、夏休みまでが大変だぜ。部活もあるし」

アキラは全員にハツパをかけた。何故か一番やる気があるようだ。
「そうよ。衣装負けしないようにしなきゃ。何たって、『A R I -
T a n i m o r i 』ブランドよ」

コメチはもう、服のことばかりだ。

その服は柔道の応援の帰りに、店に寄って発注することにした。
小さな人形に合わせて作られたミニチュアは、コメチが宝物にする
と言って、持ち帰ってしまった。

夏休みまで、残り二週間。

ポンはアキラにみっちりドラムの基礎を仕込まれ、曲作りは着実に進んでいった。

アキラたち七人の、一番無邪気で楽しく平和だった時間が、流れていった。

第4部：六月～時空の旅人～：7（後書き）

次回から第5部：七月～Junior high school life～を始めます。

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfrania>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第5部・七月〜Junior high school life - 1

5・七月〜Junior high school life

週に一度のホームルームの時間。

いつもと変わらない昼休み。黒板は落書で白板と化し、校内放送のスピーカーのメッシュには、枯れてしまった花と安っぽい造花が突き刺してある。

板に模造紙を貼って作った学級目標「清く、正しく、美しく、明るく楽しい学級」。毛筆で書かれたその上に、更に黒々とx印が、「清く、正しく、美しく」の部分にだけ、液だれの跡も生々しく施されている。

いつものように予鈴が鳴ると職員室を出て、五時間目開始のチャイムと同時に教室に着いた、担任の中野 葵は、目と耳を疑った。東中から数えて二年間、初めて、気持ち悪いくらいに静まり返った教室がある。慌てて外に出直して、本当に自分のクラスか確認したが、間違えてはいない。

「起立、礼、着席」

サキの号令に、不気味なくらいに揃って、全員が従っていた。

何か企んでるわね……

葵は直感で悟った。伊達に二年間、この学級委員が治めるクラスを受け持っていない。

このクラスは落ち着きがないと、先だつての学年会議でも注意されるほど、確かにこのクラスは騒々しい。でも授業態度が悪いわけではない。そんなことをしたら、鬼のような学級委員が黙っているわけがない。

ただ、今の席順になるまでの四月から五月半ばの一カ月半の間に、席替えを毎週のようにしていた現実に、落ち着きのなさを席替えに

頭^{あたま}れていると指摘されても、葵には返す言葉もない。

個人的見解としては、自由と責任の関係を自覚していれば、それでいいとは思っているのだが、名前を憶える前に席替えされて困っている教師がいるのも事実だ。

その落ち着きないクラスが、ようやく席替えしないで、一カ月半も落ち着いているのだ。夏休みまであと半月、何とかこのままでいてほしいと願っているのだが、どうやら無理らしい。葵の直感は、今日は席替えの日だと教えている。

葵は極力平静を装って、教壇に立った。これしきのことに動じては、教師は勤まらない。しかし、席替え後のクラスの騒々しさを思うと、頭を抱えたくもなる。想像通りとなれば、隣と階下の教師から、叱られてしまうのは必至だ。

「じゃ、ホームルーム始めるわね。じゃ、学年から議題は特にないけど、先週の続きがあつたわね。アキラ、サキ、お願い」

「はい」

アキラとサキは、何やら目配せをしながら、いつもの定位置に着いた。

「じゃ、先週の続き。オレらの所に個人計画表を持って来てくれたのは六つ。要するに、各班でやりたいことらしいんで、いちいち振り分ける必要がなくなつたわけや。まったく、学級委員思いのクラスで、オレらは涙が出てきよるわ。何やるか、知りたいか？」

「知りたーい」という声と、「知られたくない」という声とが半々だった。

「どないすつか。知られたくないのもおるようだけど、でもな、どうせ知られるんやさかい、発表しちゃうか」

アキラはサキに同意を求めると、サキは首を横に振った。

「何でやねん」

「オレは恥ずかしいし、驚かせたいし。お前だって、自分のこと考えてみ」

「あ、えらい恥ずかしいわ」

「だろ」

「と、いうことで、やっぱ発表せんわ。オレが恥ずかしいもん」
クラス中からブーイングが起こった。これは当然だ。

「悪い、悪い。じゃ、言うしかないな、サキ。A班は出店。何でも屋って、何すんねん。B班は体育館で発表。中身はもう少し秘密。CとDは教室使用で創作劇。これも、中身は秘密にしといた方がええな。Eは教室使用でおばけ屋敷。Fは、なんじゃこりゃ。釣り堀？どこでやるねん？」

「目の前にあるべや、立派な川が」

「おおつ、頭ええやんか！つつーか、大丈夫か、これ。ま、えっか。そういうこと。それぞれ協力して、手伝ってやることな。終わり。

葵ちゃん、終わっちゃった」

「あら、あら、困っちゃったわね」

アキラとサキは自分の席に戻り、葵は教壇に戻った。

「何かないかしらね、最近気になったこと。質問でもいいわ」

「じゃ、はい」

立ち上がったのはアキラだった。

せっかく順調なホームルームだったというのに、葵は、忘れかけていたさっきの自分の直感が、実感に変わった気がしてきた。何しろ相手が悪すぎる。

「何、アキラ？」

「そう露骨に警戒せんといてわ。オレ、ナイーブなんやさかい、傷ついちゃう」

誰かが「いいぞ、アキラ」と、野次を飛ばした。

確かに、葵の顔は強ばっていた。相手がアキラでは、つい自然とそうなってしまう。何しろアキラときたら、見た目のみならず、札付きの頭脳派不良なのだ。厄介なことこの上ない。

「ごめんなさいね。そんなつもりないんだけどね」

「先生なら、言い訳せんで、素直に認めてほしいわ」

アキラは意地悪な笑みを浮かべていた。本気で言っていないのは解っているのだが、からかわれていることには変わらない。自分より年下の子供なのは百も承知なのだが、アキラだけは、成績でも判るが、どうも自分より器が大きい気がして、手に余る。

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfradia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

「ところで、何かしら、アキラ」

アキラのことだ。どうせ解っているくせに、葵に喋らせてその綻びを追求して、自分の思い通りに事を運ぶ気に決まっている。葵はそういうアキラの性格を充分解っていた。

しかしその性格を解っていても、葵の教師としてのモットーは「誠実であれ。生徒を一人の人間として、対等に接するべし」。そんな葵に、質問を回避するということは、どんなに無駄と思える質問でもできるわけがない。

それでも教師も所詮は人間だ。子供同士に苦手な人がいるように、大人にだって苦手な人の一人や二人いる。アキラのように切れる頭を持った生徒に苦手意識を持つのも仕方のないことだ。思わず身構えてしまうが、葵にとってアキラは嫌いな生徒ではなく、むしろ気になってしまう生徒だった。

「せや、何聞こうと思うたんやっけな」

明らかに、アキラは葵で遊んでいる。

「ああ、そうだ。席替えをする理由を訊こうと思って。席替えをしちやいけない理由じゃないで」

葵の直感実感を通り過ぎ、もはや現実になりつつあった。しかし、席替えがしたかったら、質問形態が逆なような気もするが……。

「なして、席替えって、せなあかんの？」

「何故って、一般論としては、やっぱり前と後ろ、窓際と廊下側での不公平をなくすこともそうだけど、慣れると煩くなるからよ。

けど、あなたたちは慣れなくても煩いけどね」

「そう、そこ！もう一回、言ってえな」

「慣れると煩くなるからよ」

「その後も」

「！」

ようやく葵は、アキラの作戦に引がかかったことに気が付いた。何をしても無駄な連中なら、今更席替えの効果なんて関係ないのだから、どんどん席替えをしてやるうという魂胆こんたんなのだ。道理で質問の形が、いつもとは違うわけだ。

ところが、少し葵の考えていたことと、アキラたちとの思惑は違っていた。

「じゃ、別に席替えしたところで、何も変わりやしないってことだべ」

「はいはい、みんな、静かに。そこでルールを作ろうと思うんやけど」

ホームルームの主導権は、アキラの手に移った。

「席替えしたい人」

それでも挙手は、半分はいた。

「でも、今の班がいい人」

満場一致で手が挙がる。

「逆に、今の班が飽きた人」

この質問には挙手がない。

「今の場所がいい人」

「今の場所が嫌な人」

この質問は、当然半々だ。

「じゃ、また、オレの提案なんやけど、班のメンバーはそのままで一週間毎に時計回りに場所だけローテーションで変えていくってのは、どうやる。その時、班の中でなら自由に席替えをしてもええねん。こうすれば、窓側も廊下側も、前も後も公平やる」

「賛成！」

クラス中から拍手が起こり、担任が口を挟む隙は全くなかった。クラス全員で、粗方昼休みにでも、こうすることを打ち合せても

していたのだろう。だから、妙に手順がいいわけだ。

葵は苦笑した。完璧にやられた感じた。

「んじゃ、今度こそ、今日のホームルーム終わりやねんな」

そのアキラの言葉を機に、クラス中が昼休みを再現しだしたのだ。席替えの勝手なルールは、アキラだけではなくサキもいるから、まあ良しとしても、この騒々しさは我慢ならない。

「静かにしなさい！」と葵は大声を上げたが、誰の耳にも、その声は届かなかった。

「オレの勝ちやね、葵ちゃん。まだオレのこと、解ってないね」

ふと目が合ったアキラが、葵にそう言った。そこで葵ははっとした。

アキラの口は動いていなかったし、この騒ぎの中、何故アキラの声だけ鮮明に聞こえたのだろう。

アキラは何とも形容しがたい笑みを浮かべ、葵に背を向け、騒ぎの輪に入ってしまった。

思わず呆然としている葵の姿は、生徒たちから見たら、ただ騒々しいクラスに為す術なく困って、啞然としている姿に見えているのだろう。

「葵ちゃんが静かなうちに、騒いどこうぜ！」

誰かの声に、ようやく葵は言うべきことを思い出した。

「未だ、授業中よ！いい加減、席に着きなさい！」

しかし、誰も葵の絶叫など、やはり聞いてはいない。

未だ三十路前の若年教師の無力さを痛感し、そしてアキラとサキを少しでも信頼してしまったことを後悔しながら、最後にもう一度だけ、無駄と知りつつ大声で注意をした。当然誰も反応を示すわけなく、トランプや将棋、お喋りに興じている。

葵は大きなため息を一つつくと、開き直って、自分もトランプの

輪に入ることにした。

取り敢えず注意はした。誰にも聞こえなかった。ということは、遊んでも誰も聞こえないし、まして他の教師にバレるわけがない。ならば自分も、生徒も、楽しんだ方がいい。そしてチャイムと同時に職員室に逃げてしまえば、この賑やかなクラスでの仕事は終わるだ。後は覚悟を決めて、お叱りを受ければいいだけだ。

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfradia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

「葵先生、大変だったみたいですね。顔、疲れ切ってますよ」

職員室で頼杖をつく葵に、隣の席の男性教師が声をかけてきた。

彼は隣の四組の担任だ。

「すみません。煩^{めづ}かったでしょう」

「大変ですねえ。例の問題児ですか？」

転任してきたばかりの彼が、アキラのことを指して言っていることなど、すぐ判る。

「ええ、まあ……」

扱いにくくはあるが、問題児ではないと言いつ返したかったところだが、葵はやめた。自分が、何故アキラが気になって、無理を言つて担任にもらったかを説明できないのに、転任してきたばかりの人に、アキラの魅力が解るわけがないのだ。そして教師からすれば扱いにくい生徒であることは理解できる。それでもアキラが問題児扱いされるのは、違う気がしてならない。

しかし葵自身が、そのアキラの魅力を言葉にすることができないのだ。

「その問題児に惹かれちゃって、どうしても担任をさせてくれって頼み込んだのは私ですからねえ。ここで、へこむわけにはいきませんよ。」

それに、あの子たち、独特の何かがあるんですよ。特に学級委員の二人がね。私だけじゃなくてクラス中が、あの二人に惹^ひかれちゃってるんですよ。今日のホームルームの議題は、傑作でしたよ。何しろ……」

楽しそうに目を輝かせて話し出した葵に、四組の担任は啞然とした。担当教科の授業を五組でもするが、あの妙な団結がやりにくいうえ、委員長の二人は頭の回転が速くて、うっかり誤魔化せなくて

嫌なのだ。それだけに、葵が楽しそうにしているのが理解できない。音楽教師だから気楽なのだろうと思うことにして聞き流す。

「葵先生、お電話です。外線三番お願いします」

他の教師の声に、葵は卓上の電話を取り上げた。

四組の担任は、内心ほつとした。電話がなかったら、葵は永遠に話し続けそうな様子だったからだ。

元々、市の厄介払いの為にできた中学校だ。そこに集められた教師たちも、体制から見たら厄介な者たち、つまり理想を高く掲げる者たちばかりだ。

とはいえ、教師とて一人の人間。気をつけて生徒と対等に接していたとしても、それが個々の魅力を理解仕切れているとは限らない。アキラに対する教師の評価が典型だ。そして、彼女はその教師たちの思いを知っている。だからこそ、葵はアキラに認められているのだ。

一方の葵ときたら、「誠実であれ」を守ることで精一杯だが。

「はい、お待たせ致しました。中野です」

にこやかに取り上げた電話だったが、一瞬にして葵の表情は変わった。

「あ、お世話になっております。はい……はい……ええ……はい……

……はい、解りました。そう伝えます。はい、失礼致します」

葵の顔が、彼女らしくなく、みるみる険しくなり、彼女は受話器を置くなり、何も言わずに立ち上がると、音楽室へと向かった。

その頃、音楽室は部長の権限で、フルートパートに占領されていた。先日渡したソロコンテスト用の曲の練習に、アキラは音楽室の録音機器を使っていたのだ。

「何かが違うねん。なあ」

「先輩、同意を求められても……」

完璧主義者のアキラに同意を求められ、可愛い後輩二人は困り果てていた。彼らにとって、アキラの完璧主義は意外だったし、彼女の演奏のどこに悪いところがあるのか、彼らには解らなかったのだ。「だって、先輩。殆ど初見^{ほとん}だサ。全然間違えてないし、強弱も完璧で、どこが気に入らないんだか」

「先輩、全国大会行ったことあるんでしょ。市大会なんて、余裕だっちゃねえ」

「アーホ。あんな賞、世間一般の基準だったらまだしも、そんな時の審査員の気分に基づいたもんやで。そんな賞もろても、オレが納得せえへん限り、何にもならへんのや。そんな甘ったれたこといつまでも言うとするから、いつまでたっても息漏れが抜けへんのやで」

「はい」

「げっ、ピッチがこんなところで意味無くマイナス。……あ、息漏れしとるやんか……」

自分の演奏にぷりぷり文句を言いながら、アキラは細かく楽譜に書き込んでいる。結構まめな性質だった。

「先輩って、言葉と外見とやってることと成績、全部ギャップありますよね」

「そうかあ」

「はい、思いつ切り」

「どういうところ？」

「すんごく美人なくせに、その、オールドタイプの不良スタイルでしょ。そこへもってきて、わけわかんない関西弁でしょ。不良の格好してるくせに、やたら成績良いし、口悪くて態度も悪いくせに学級委員やってるし、絶対その格好の人は部活なんてやりそうもないのに、今みたいに、くそ真面目に追求してるじゃないすかヤ」

「おいおい、ボロクソ言ってないか、オレのこと」

「だって、そうなんですもの」

「オレは普通のつもりなんやけどなあ……」

アキラは再び、楽器を手にした。

「も一度録音するさかい、スイッチ頼むわ。終わったら、コンクールの曲、三人でやるで」

「はい。先輩、いきますよ」

アキラはフルートを吹き始めた。

その音は、普段の彼女からは全く想像もつかない、澄んだ繊細な音色だった。一体彼女は、何を思っただけで吹いているのだろうか、彼女を知っている人は思うに違いない。

何しろ楽器を吹いている間は、あの言葉遣いは聞こえないから、外見だけが彼女のイメージなのだ。外見だけなら、この音色とぴったりだ。

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfradia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

「アキラ、いる？」

「あーっ！」

突然開いたドアに、アキラは悲鳴にも似た声を上げた。

入ってきたのは、険しい表情をした葵だった。

「えっ？」

「何すんねん。せつかく巧くいつてたのに」

「あら、ごめんなさい。でも、何？」

録音していることなど知らない葵は、勢い良くドアを開け、大きな声でアキラの名前を呼んでしまったのだ。フルートパートの三人が、大きな叫びを上げたのは言うまでもない。特に後輩二人は、アキラの表情に縮み上がっている。

「録音してたのに、もう……。で、何？」

アキラは、露骨に不愉快そうな表情を見せた。

なのに葵のセリフは負けていない。

「アキラ、これ以上、制服を崩さないでちょうだい。何なのよ、そのサスペンダー」

アキラのスカート丈は、既に諦めている。上靴だって、言っても無駄なのだ。判ってはいるのだが、新たに違反を見付けると、一応注意せずにはおれない、悲しい教師の性だ。本当は、こんなことを言うつもりではなかったのだが。

「何や、そんなことか。だって、痩せちゃったんだもん、しゃあないやんか」

アキラも全然気にしていない。もうこれで、この件を注意することはないだろう。どうせ言っても無駄なのだ。

「それよか、ちょっと聴いてえな。さっき録音したやつなんやけど、

ピッチのずれがひどいし、楽譜通りに吹いても納得できへん。どうしたらええやろか？」

アキラはテープのスイッチをいれた。

「アキラ、ちょっと吹いてみて」

聴き終わった葵は、次にアキラ自身が吹いた演奏を聴いてみた。

プロ顔負けの演奏だ。音楽教師というよりは、プロの演奏家を目指していたことがあつた者でさえ、一体この演奏のどこが気に入らないのか解らなかった。

人間だからこそ、微妙なピッチのずれは当然なのに、アキラはまるでロボットか何かのように、それを許さない。正しくは違う。彼女はピッチのずれすら表現の一つの手段として、自分の思い通りにしようとしているようだ。

挫折して教職に就いた者に、その姿は美しすぎるくらいだった。

楽器がアキラの身体の一部になっていて、曲を身体全体で表現しようとしている。彼女自身が未だ迷っているから、曲にその気持ちが顕^{あらわ}れている。

天才だと、葵は思った。教えることは未だあるかもしれない。アキラは教えたら、それ以上のものを、その頭に、その身体に貪るように何もかも取り込む、貪欲な器のようだ。

天才と、誰からも呼ばれるだけの能力を持って生まれながら、どうして平凡であることを望むのだろう。平凡な葵から見たら、その理由は永遠に解らない。テストではわざと二、三問空白にして出したり、そういう手の抜き方まで、卒がないのだ。

非凡なアキラが平凡になろうとしたところで、内から滲み出るものまでは隠せないということが、聡明な彼女に解らないはずがないのだが、彼女は本当に解っていないのだろうか。

葵は暫^{ひまじ}く聴き惚^ほれていた。

「な、どやろ？」

アキラに訊かれ、葵は我に帰った。

「どやろつて、悪いところはないわ。ただ、表現方法に迷ってるでしょ。それが伝わるわ。自分なりの解釈を考えたら、もっと良くなると思うわ」

「うーん、解った。ところで、何かオレに用があつたんじゃないんか」

「あ、そうそう、忘れるところだったわ。そのソロコンテストのこと。あなた、野球よりハンドの応援は絶対行くって言ってたけど、それができなくなっちゃったのよ」

「ええっ！？、中学生の部、ハンドの試合の前日だったやんか。何で一般の部の演奏まで聴かなあかんの。うっとおしい。オレ、全然興味ないし」

アキラは全身の力を込めて拒否した。

ハンド部の市大会は、ソロコンテストの市大会の翌日の予定。サキとカズヤが出るというのに、応援に行かないだなど、アキラとしてはあり得ない話だ。

それは担任である葵も同じ気持ちだろうに、葵は非情にも言い渡す。

「あなたはここ、神森中の代表としてではなく、一般人の桂小路晃として出場しなくちゃならなかったのよ。その代わり、中学生の部には出ないでね」

「そんな、いけずやわ。オレは中学生なんやから、中学生の部に出て、それから気分良くハンドの応援行きたかったんや。」

だってオレ、ポンも、ナミも、何とか応援行つたんや、バレーは遠くて無理やけど、近くでやるのは行きたかったのに、勝手なことを言いよつて。それ、葵ちゃんが決めたことじゃないやろ」

「そうだけど」

ぷうと頬を膨らませた顔が普段のアキラからは想像つかない仕草で可愛くて、思わずアキラの言うことを全部叶えてやりたくなくて

しまうのだが、そういうわけにはいかない。葵はその反則的な可愛
い仕草に惑わされないよう、慌てて顔を背けた。

「だって今の演奏だって、聴いたやろ、葵ちゃん。とても一般の部
で通用するようなもんやないやん。ったく一体、何処のどいつが、
そんなふざけとこと言いよったんだか」

アキラはめちやくちや怒っていた。

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfradia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

「葵先生、お電話です」

葵は他の職員に声をかけられ、にこやかに受話器を取り上げた。それが、後にアキラを怒らせることになる電話だった。

「あ、お世話になっております」

『中野 葵先生？去年、東部中の顧問をしていらした先生ですよね』
「はい」

電話の相手は、ソロコンテストの主催団体の、市の幹部の人間だった。

葵は緊張した。自分が何かしたお咎めか、素行の悪いアキラへのお咎めか、何れにしても、取り敢えず身に覚えがないのだが、緊張する。

『さつき、東部中の方に電話しちゃったんだよね。そしたら、去年全国大会に行った、桂小路さん、神森中になったって言われちゃってねえ……』

電話の相手は、葵がますます緊張していることなど全く気付きもせずに、勝手に用件を喋りだした。

『彼女、今、練習中？』

「はい」

『あ、気にしないで。換わってほしいわけじゃないんだ。放課後だから練習してて当然だし』

「ええ」

『とにかくこっちの用件だけ、彼女に伝えてもらえるかなあ』

「はい」

葵はいよいよ身構えた。アキラの素行が悪すぎて、出場停止を申し渡されるのではないかと、びくびくしていた。

『彼女の申し込み用紙を見てね、審査員の先生方からクレームがつ

いてね……」

葵はとうとう硬直してしまった。まさに最悪の事態が宣告されようとしているのだ。

こんなことになるなら、もっと厳しく注意しておけばよかったと後悔することが、数え切れないほど思い浮かぶ。葵にとっては重要なことではないから見逃したこともある。そういうことの積み重ねが、結局素行が悪いと言われる外見を作り上げてしまうのだ。つまりは自分の所為^{せい}でアキラが出場停止になってしまふということになるのだ。

葵の中では妄想が膨^{ふく}れ上がり、それに反比例するように身体は小さくなっていく。

今から謝って済むのなら、いくらでも謝ろう。葵はそう覚悟して、受話器の向こうの言葉を待った。

「彼女が中学生の部に出ては、レベルが違いすぎるんだよね。他の子の迷惑になっちゃうから、一般の部で出てほしいって。彼女は一般でも全国に通用するはずだから、そう、伝えてもらえるかな」

葵は耳を疑った。

素行不良で出場停止処分ではないらしい。そればかりか、アキラの実力を高く買ってくれているようだ。

「はい、解りました。そう伝えます」

もう天にも舞い上がる気持ちというのは、こういうことなのだろう。

正直驚いていた。誤解されやすいアキラの性分を知っているからこそ、すぐに悪いことが思い浮かんでしまふのだが、アキラは本当に実力があるのだ。それを審査員にちゃんとアピールできていたとは、まるで思ってもいなかった。かえって、今までの心配が阿呆^{あほう}らしい

「じゃ、頼みますよ。楽しみにしてますから、我々は。じゃ、失礼しますよ」

葵は喜びを隠しきれない様子だった。顔は緩みっぱなしだ。

が……

アキラのことを思い出すと、俄かに気が重くなった。表情もみるみる険しくなっていくのが、葵自身判った。

吹奏楽部がどの部活を応援に行くかという、部の話し合いの時、絶対ハンド部だけは行くと、譲らなかったのだ。

それに、アキラのことだから、自分の実力を過信されることは迷惑千万だと、それこそ主催者連盟まで直に電話をしかねない。それだけは、葵の方が勘弁してもらいたい。

「はい、失礼致します」

急に気が重くなってしまった葵は、受話器を置くなり立ち上がり、音楽室へ向かった。

そのようなやりとりが、電話であったのだ。直談判されてはかなわないので、司令の出所だけは言えない。

案の定アキラは葵の予想通りの反応をしてくれて、葵は心の中で笑った。評価されていることを全く喜ばないというところが、如何にもアキラらしかった。

そういえば、アキラはあまり、褒められたりされて喜ばない。むしろ怒り出すこともしばしばだ。その表情は心からのものなのに、喜びとか笑いとかは、どうも計算尽くで造られた大理石の彫像のように、心が籠もっていない。

「アキラ、あなた、謙遜しすぎよ」

謙遜などではないことは重々承知なのだが、一応普通の人間に取るであろう態度を、葵は取った。

「人間、完璧になんかはできないものよ。あなたは人間に与えられ

た限界を超えようとしている」

「オレの例えは抜きにして、今の話は聞き捨てならないね、葵ちゃん」

思わず本音を言ってしまった葵だったが、思わず後悔してしまった。アキラの瞳が鋭くなったのだ。

「人間に限界が与えられているのは当然だけど、善くも悪くも人間がここまでに大きくなったのは、その限界を超えようとしてきた人間がいて、そいつらが何世代もの長い年月をかけて超えてきたからじゃないのか。人間の進化が善い方向に進んでいるとは、簡単には言いがたいけれどさ」

葵は身震いした。

たかだか十三才を過ぎたばかりの少女が、二十五才になる担任教師相手に、人間観を述べているのだ。

二年目にして、葵はアキラの正体を垣間見たような気がして、そしてその正体がとてつもなく怖ろしいもののような気がして、背中を冷たい汗が流れていった。

「た、確かにその通りね」

辛うじて言葉を押し出すと、アキラの表情が緩んだように見えた。

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfradia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

まるでアキラに試されているかのような感覚に囚われ、葵は固まっていた。思わず本音が出てしまったことに気づき、アキラも元に戻る。

「ま、そんな話、どうでもええわ。オレは謙遜なんかしない。だってことだけ、解ってもらえりゃええねん」

目の前にいるのは、いつもの教室にいる、ちよつと人を小馬鹿にしたような態度を取る、悪戯好きのお祭り人間、アキラだった。

「そ、そうね。ああ、さっきの話に戻るけど、作曲者とかその曲のできた歴史背景とかを調べれば、あなたなりの表現の参考になると思うわ。それと、今の私のくだらない話は、なかったことにして」

アキラが元に戻ったことをいいことに、葵も普通に振る舞うことにした。その所為か、アキラが「なかったことにできるなら、歴史なんて生まれてねえよ。人間なんて、存在し得ないさ。第一、オレは限界のある人間なんかじゃない」と呟いていたことなど、聞こえていなかった。

「あ、あとね、アキラ。文化祭なんだけど、開校記念ってことで、オーケストラ呼ぶのよ。あなたが去年実績作ってくれたから、予算が取れたのよ。だからよろしく。後で楽譜渡すから、曲はお楽しみにしててね」

優しいけれど、結構調子がいいのが葵だった。

「はい」

珍しく、アキラは素直に返事をした。実際のところ、言い返すのが面倒臭くなっただけだったが、それは別にソロコンテストの件でもなく、文化祭でオーケストラと共演することへの緊張感の所為でもない。何しろ、彼女には緊張の糸などというものは存在していなかった。

ただ、自分を買い被られることに対する疲れと、自分を装い続けることの疲れと、つい本音を出してしまった疲れから、面倒になっ
てしまっただけだった。

結局、アキラは練習も早めに切り上げて、下校してしまった。

「疲れたなあ、今日は。ああ、もう、苛々する！」

アキラは、自宅の入り口にさしかかったところで、とうとう大声を出した。ここ迄来たら、誰もいない。

ため息をついて、アキラは森の入り口に一步踏み込んだ。

！

ただならぬ気配を感じた。それは、アキラだけが感じるもの。

まさか？……でも、何故……？

アキラは意を決して足を踏み入れた。

森が拓（まひら）け、一眩しい光の中に、アキラは一人の女性を見た。

木の幹を撫で、まるでその木と会話をしているかのような風情の女性^なは、まるで何処ぞ大名家の姫君のような衣装^{まよ}を身に纏っている。

まるでそこだけ時間が止まっている。

風が流れ、木々がそよぎ、女の長い黒髪が揺れた。

「み……水鏡さま……」

アキラは風変わりな名前を呟き、その女性はゆっくりと振り向いた。

「お帰りなさい。学校は楽しかったですか？」

振り向いた女性は、アキラが現世の美しさを持っているとしたなら、それとは正反対の、この世のものとは思えない、たおやかな美しさを持った女性だった。

「お久し振りでございます。何時、いらしたのですか？」

アキラはその女性の前で礼をした。

「つい、今しがたですよ」

水鏡と呼ばれた女性は、頭の上に乗せている、角隠しのようなものを整えた。振り返った時に、少しずれたようだ。

今日は厄日か……？

アキラは思わず天を仰いでため息をついたが、すぐその表情は隠した。

相手が悪すぎる。

「だいぶ頑張っているようですね」

「それほどでもありません」

アキラは水鏡を家の中へ導き、和室の上座に座布団をしつらえた。水鏡と呼ばれた女性は、何ら臆することなく上座に腰を下ろすと、優しい眼差しをアキラに向け、ゆっくりと口を開いた。

「あなたはこちらから連絡を取らないと、全く報告してくれませんかね。」

わたくしが夢で垣間見た、二人の少年は見付けましたか？」

「はい、既に」

水鏡は「やつぱりね」と薄く笑い、アキラは「申し訳ありません」と頭を下げた。

「で、能力には目覚めたようですか？」

「はい。この程、目覚めさせました。わたくしの出生を少し語るはめになってしまいました」

「それでいいですよ」

水鏡は微笑を絶やさずに、でも表情を変えることなく優しい声で語りかける。

「言われるままに見つけ出しましたが、あの二人は何者なんですか？」

「彼らは、あなたの守護者の一人なのです」

「え、あの者たちが『夏青葉』？」

そんなことは聞いていないと、アキラは表情を崩し、思わず立ち上がりかけたが、それでも水鏡は動じた素振りを見せない。

「そうなのですよ。どちらがかは、未だ判りませんけどね」

水鏡は優しく、そして平然と言った。

アキラは、さすがに緊張気味だった。水鏡こそが、アキラの一族の代わりに長を務めてくれている者なのだ。

この女性には、アキラですら頭が上がらない。例え事情を教えてくださいたくないことを不満に思っても、そのことを攻めることすらできない。

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfradia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

「随分楽しそうに、学校生活を送っているようですね、アキラ」

「ええ、お陰さまで。水鏡さまがご覧になられた少年たちとその仲間たちが、わたくしに大変良くしてくれます。このような普通の生活を、わたくしごときが送れるような日が来るとは、五年前のあの日以来、思いもよらないことでした」

「そうでしょうね。でも、わたくしは、こういう日の為に、あの少年たちを捜させたのですよ」

「はい、感謝しております」

アキラは心の中で、少しため息をついた。

だったら情報は小出しにせずに、事前に与えてもらいたいというのが本音だ。

アキラとしては水鏡が嫌いではなく、むしろ尊敬の念を持って好きなのだが、この口調は少々肩が凝ってしまう。

「ところで、水鏡さま。今日は一体、どうしたのでしょうか。滅多なことでは、わたくしに会いに来ることなどありません」

アキラは早く本題に入り、さつさとこの会話を終わらせたかった。今日は疲れているから、早く横になりたいのだが、この人が現われるときは、大抵何かしら問題やら何やらを持つてくる。早く問題が解れば、早く片付けて、寝られるのだ。

「あなたが報告を入れてくれないから、様子を見に来たのですよ。それに最近、あなたは情勢を見ていないのでしょうか」

「あ、申し訳ありません」

思い当たる節があるから、アキラは思わず恐縮してしまった。

「別にいいですよ。普通の中学生らしくて」

いちいち緊張して、身体中が筋肉痛になってしまふ。それでも、アキラは神妙な面持ちを続けた。

アキラがどう思っているかなど、水鏡が気にするわけがない。にっこり微笑みを向けて、水鏡は語りかけた。

「実は、谷の巫女が早逝してしまいました。そこで、新たな巫女決めの儀式をせねばなりませんりました」

「まさか、わたくしも出ねばならないのですか？」

早く片付けて、さっさと眠ってしまおうという野望は、さっそく打ち砕かれた。

「当然でしょう。本来ならば、十三才の誕生日を迎えたあなたが、巫女になるべきなのですから。過ちが起こる前のしきたりを、あなたは知っているはずです」

「はい」

アキラは一応素直に返事をし、項垂れた。

「娘が十三才になったら、その母たる巫女は女長に、その祖母たる女長は女長老になり、娘が巫女になるしきたりです。

しかし、長一族は生命の危険から逃れる為に、常に行方を晦^{くら}まさねばならなくなりました。皆、十三年前の雪の日に産まれた双子の死にそうであつた姫御子は、谷を出た後すぐに死んでしまったと思うております。

でも、現実にはあなたは丈夫に育っています。谷の者は彼^かの国を知りませんから、あなたの存在を知らないのです。この国であなたの存在を知っているのは、弟御子^{おとみこ}一族の当主だけ」

「でも、何故今更、わたくしは戻らなくてはならないのでしょうか？」

「しきたりですから」

生命の危険があるという事情を知っているはずなのに、水鏡は「しきたり」という一言で、アキラの疑問を切り捨てた。

「あなたは、呪いをくぐり抜けて産まれた姫御子です。誤った歴史は修正せねばなりません」

口調は柔らかいが、有無を言わせぬ雰囲気、水鏡から漂っていた。

アキラはより深く頂垂れた。

アキラの一族の永い歴史の責任が、ようやく誕生してしまった姫として生を受けたアキラの身に、降り掛かってきてしまったのだ。逃げ出してしまいたいのが本心だが、抗えない責任は、あまりにも重たすぎる。アキラの細い肩には、とても大きすぎる。それを知っているながらも、アキラは自分に課せられている責任から逃れることはしない。逃げ出してしまいたいのだが、もう一人の自分が、それを赦してくれない。

自分の犯した過ちではないのに、その責任だけは負わねばならない、この理不尽さに、アキラは唇を噛んだ。

「そなたは空蝉うつせみの一族の長。初代菖蒲しよぶさまの示された道を生き、それを超えるのです。そして、青風月王せいふうげつおうを捜し出し、共にこの世から不必要な存在を滅ぼし、自然で満ち溢あふれる世界に修正してから、神々にお返しするのです。人間の創り上げた歴史を、なかったものにしてしまふ、それがあなただけに授けられた能力。守らなくてはいけない能力」

アキラは躊躇ためらいなくため息をついた。

目の前の美女は、アキラに人間を絶滅させるように嗾けしかけているのだ。水鏡や、アキラ自身も人間なのにな。

空蝉の一族が……

アキラは、心の中で苦笑した。

菖蒲という名の、一人の女性から始まった、アキラの一族、『空蝉の一族』。

過去の姿を引きずったまま、魂だけを失った者たちという意味が込められている。始祖、菖蒲自身がそう名付けたと言われている。

何故、そのような名を、始祖自身が名付けたのか。

少なくとも弟が兄を憎むあまり殺してしまうような、歪^{ゆが}んだ性格を持って生まれた一族なのだろう。一体、何を生業^{なりわい}にして生きているかは不明だが、「一族」と呼ばれる集団であることは、何か所以^{ゆえん}があるのかもしれない。

ただ、今の水鏡の言葉によると、アキラを含め、空蟬の一族の住まう谷の者たちは、人間を全滅させようとする、過激な自然論者のようだ。

それは、おいおい解ること。

第5部・七月～Junior high school life～・7（後書

次回から第6部・八月～生れ故郷～を始めます。

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfradia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第6部・八月〜生まれ故郷〜 - 1

6：八月〜生まれ故郷〜

滅多なことでは現れない水鏡がアキラの前に現われてから約二週間が過ぎ、学校では夏休みが始まった。

本当なら、部長という立場上、一カ月を切って迫るコンクール前に休むなど、到底できないはずなのだが、親の急病で海外へ行くなどと理由を付けて、アキラは部活を休むことにした。

アキラ自身のレベルに問題はないし、練習に取り敢えず差し支えないだろうから、葵は別に何も言わなかった。海外赴任の親に会う方が、アキラにとっては大事なことだ。

しかしアキラは再び現われた水鏡と共に、アキラの生れ故郷、彼女の一族が住まう『谷』と呼ばれる土地に、瞬間移動で行っていた。

アキラの一族の故郷の『谷』。

この『谷』は、『瑞穂の谷』と、そこに住まう民人たちは呼んでいる。

そこは、普通の交通機関を使って辿り着ける場所にはない。何処にあると説明することすらできない。何処にでもあつて、何処にもない、そういう存在としか言うことができない。だから、初めてのアキラも瞬間移動で行くことしかできなかった。

瑞穂の谷は、文明とかけ離れた場所にあるばかりか、谷そのものが、文明とかけ離れたような生活形態を取っている。

瑞穂の谷人は、僅かばかりの平地で自給自足の生活をしながら、日々の鍛練を怠ることなく野山を駆け回っている。その生活形態や、身に付けた能力などは、いわば忍びの者と呼ばれるもののそれだ。

瑞穂の谷人は、千年もの昔からここに住み、伝説の中で生きている。明治の時代になっても、彼らは公に出ることはなかったし、出ようともしなかった為、戸籍を持たない。山人として明らかにされてしまった者もいただろうが、瑞穂の谷の人間は逃げ切った。だから日本には存在していない人間とされ、それ故に日本の法というものに縛られることもないし、だから殺人を犯しても罪に問われることもない。

結末すら忘れられた迷宮入りの事件の殆どが、彼らの起こした事件と言っても過言ではない。無論、彼らは無益な殺生はしない。彼らは自然の法則に従った生き方を基本としている。殺人を犯すときは、彼らなりの理由がある時だった。

殺人ばかりではない。逆に遭難者を助けることもある。しかし遭難者たちは目が醒めると必ず病院にいるものだから、僅かに脳裏に残る瑞穂の谷人の姿を、幻として片付けてしまっていた。その方が谷人としては良いのだが、それでも、その幻を信じる者はいる。そういった者たちは、瑞穂の谷のことを『忍びの里』とか様々な名前を付けて呼び、その神秘性と話題性からマスコミに取り上げられたこともあるが、決して見つかりはしなかった。

そんな瑞穂の谷人は、現代になっても何故、その昔ながらの生活形態を崩すことなく生き続けようとしているのか。

風の速さで山を越えたりするような能力を高める必要性が、一体現代の何処にあるのだろうか。その能力は、かつて戦国時代の武将たちが、情報収拾などの為に求めたもので、このご時勢にアナログなままでは生きていけるはずがない。

つまりはそういうことなのだ。彼ら瑞穂の谷人は、そういう情報を扱う仕事を、生業なりわいとしていたのだ。先祖から伝来の、闇に紛れるような特技を生かした情報収拾能力などは、他の誰にも真似できる

ものではないが、それだけではない。彼らは、最新の情報收拾能力も会得していた。

谷の中枢に存在するもの。それは全世界のコンピュータの、どんな小さな端末にも繋がる、最新の文明の利器。逆に、どんなに堅いガードのコンピュータも、この谷のコンピュータ『マザ』のアクセスには、そのガードを開く。個人も、企業も、国籍も、コンピュータの機種も、マザの妨げにはなり得なかった。そのコンピュータを開発したのも、瑞穂の谷人だった。

瑞穂の谷人とは、そのマザを駆使し、世界中の全ての端末から情報操作をし、あらゆる国の政治、経済、ありとあらゆる場面に潜入し、どんなに些細なことからトップシークレットと呼ばれる人しか知らないような情報にまで介入し、操作し、世界をそうして支配している者たちだった。

何故そういうことをするのか。文明とかけ離れた生活を送りながら、どうして文明世界に介入するのか。

谷の者たちは、一定年令になると、谷を出る。谷を出て、その驚異的な情報收拾能力で、他人に仕える。そして主人とした人の野望を叶え、その野望を持つ人間同志を衝突させ、どちらに勝利を与えるかを瑞穂の谷人たちで決定し、殺し合いをさせて、最後は人間を滅亡に仕向ける。

全ては、美しい自然を神に返すという思想に基づいた行動だ。

例えば、どんな政治抗争も、結局は瑞穂の谷人の決定に従って行なわれているにすぎない。それを知らない野望を抱いた人間たちは、望みを叶えてくれる瑞穂の谷人を手に入れ、有頂天になって欲深くなり、結局はその瑞穂の谷人の掌の上で踊る道化のようになっていく。まるで哀れな獲物だ。

先日サキやカズヤに秘密にしていたアキラの仕事も、この類たぐいのことだ。

第6部・八月ゝ生まれ故郷ゝ - 1 (後書き)

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfradia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第6部・八月〜生まれ故郷〜 2

瑞穂の谷を作った人間、表舞台では女性としては最高の位にまで昇り詰め、谷では菖蒲しょうぶと呼ばれる者は、この谷に隠居してからというもの、歴史に残る政治抗争を裏から操ってきた人と言われている。記録に残るそのやり口は、まるで人間を憎む悪魔のように、徹底している。悪意に満ちた人間は、利用するだけ利用して、それから遠慮なく滅ぼすものだ割り切った仕事。それは現在でも谷人の教育に影響を色濃く残している。

「この世界は人間によって汚けがされている。わたくしは、愚かな人間を地上から一掃し、真の人間のみ、生き残る道へと導こう。わたくしは愚かな人間が憎い。どうしてあやつらは、自然の叫びを聞かぬのか？ どうして共に生きられぬのか」

瑞穂の谷人はこの菖蒲の言葉を胸に深く刻み、千年以上もの年月を闇の者として、人間の影として世界を支配し続けて生きてきた。

その中で、長一族おさが『長』たりえた理由。それは直系の子孫が時代を先読みできる明晰な頭脳と超能力を総じて持ち、特に長女だけには数々の特殊能力が必ず備わっていたからだ。ただその力がいいものだとは限らない。悪意に充ちた人間を憎むうち、長一族は全人類を憎しみの対象とし、そして更には他人と身内との区別すらできなくなってしまうようになってしまった。だからそこに争いが生まれてしまったのだ。

身内に呪いをかけられて、長となるべき女という性が生まれなくなってしまった真の長一族は、その居場所を特定されぬよう谷人の情報網からも逃げ隠れ、そのくせ存在をアピールするかのよう、谷人としての仕事、人間滅亡工作はしながら、生き延びてきている。生存が確かなくせに、女ではないからと谷人の前に姿を見せない

長一族。瑞穂の谷では、女長となるべき者が生まれて、戻ってくる日を待ち望んでいた。

そしてその待ち望まれている者が、アキラこと、桂小路 晃^{かしろうじ}なのだ。

谷での自分の身分を知られない為に、アキラは人気のない森の中へと瞬間移動した。

「わたくしは、ここで別れます。あなたはわたくしが教えたことを忘れずに、正面からお入りなさい。それと、儀式が終わるまで、あなたの本名は伏せておきなさい。混乱が起こりかねませんから。あと、わたくしのことも伏せておくように」

アキラは水鏡に言われた通り、谷人たちが外界から戻るときに使う、正面の出入口へ向かった。超能力を使えることは、即ち長の一族であることの証。その長一族であることを伏せるように言われているのだから、入り口の門をくぐらないわけにはいかない。

それにアキラ自身、水鏡に言われるまでもなく、自分の出生を証すつもりはなかった。面倒なことは、極力避けたい性分なのだ。きつと捜し求めていた長一族の姫が現れようものなら、この谷の老人の数は喜びのあまり死んでしまいかねないし、お祭り騒ぎになった拳^{かっ}句に担^かぎ上げられるのが目に見えている。彼女にしてみれば「冗談じゃない」という状態になるのは必定^{じやうてい}だ。

「名は？」

入り口で、門番はアキラに訊ねた。

「名は、『菖蒲^{しょうぶ}妃』、『晃^{あきら}緑^{りく}妃』、『創^そ翔^{しょう}妃』」

アキラは門番の謎かけに答えた。

ここで自分の名前を答えてはいけない。

これは部外者の侵入を防止する為の策だ。瑞穂の谷に戻るのは初

めてのアキラだったが、仮にも正統な長一族の者、このしきたりく
らいは教えられている。

『菖蒲』は、始祖の名。

『晃緑』『創翔』は、兄弟殺しの双生児の名だ。この二人以降、
女性の尊称の『妃』を冠する長は消え、代わりに男性の尊称『王』
を持つ者が長となった。男性でありながら、『妃』の尊称を付けら
れたのは、後にも先にもこの双生児だけだ。

何れにせよ、アキラは谷の者と認識され、生まれて初めて、故郷
の瑞穂の谷に足を踏み入れた。

十三才の女子の全てが、巫女となる資格を有した者。条件を満た
しているとはいえ、門番の合い言葉に答えただけで、アキラが何の
疑いもなく谷に入れたのには、谷の生活形式上、そういう初めて帰
る者が珍しくないからだった。

瑞穂の谷人という者は、常に谷にすることはなく、むしろ成人し
てからは、殆ど谷に戻ることはない。大抵の者は結婚の時と、出産
の時、巫女の代替りの時くらいしか戻らず、谷に腰を落ち着けるよ
うになるのは、六十才を過ぎてからだ。

逆に子供たちは、幼い頃から谷で育つ者もあれば、義務教育を終
えるまでは外界で親と共に暮らし、それから谷で鍛練をする者もい
た。そのような習慣だから、巫女決めの儀式に現われるような娘の
顔など、知らなくても不思議ではなく、アキラも、外界で親と共に
暮らしている娘の一人と思われたのだ。

谷に来る前に、合い言葉だけでは不用心ではないかと、アキラは
水鏡に疑問をぶつけた。

「そんなことは、ないですよ」

水鏡は、穏やかに答えた。

「別に谷に入ることはいいいです。ただ、入り口からは出られない
のです。出口は谷人しか知らないし、鍛練をしていない者は出られ

ないのですからね」

「それは、何なのでしょう？」

「教えられません。あなたは、この巫女決めの儀式に参加することで、身を持って憶えなければならぬのですから」

微笑みを崩すことない水鏡だが、相当すごい仕掛があるのだろうと、アキラは推測していた。

第6部・八月ゝ生まれ故郷ゝ - 2 (後書き)

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfradia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第6部・八月〱生まれ故郷〱 - 3

宛がわれた小さな一棟で一晩明かし、アキラは日の出と共に目を覚ました。

洗顔をしに井戸に向かったつもりだったが、何となく、谷を流れる小川を遡るように、散歩をしていた。

はつきり言ってしまうえば、アキラにとって、巫女決めの儀式などとは、心の底からどうでもよかった。どんな儀式であれ、自分に決まってしまうことは火を見るよりも明らか。超能力を使わなくても生れつき運動神経はいいし、感覚は鋭敏なものを持っている。嘘でもつかなければ、本当に巫女にされてしまう。

しかし巫女の座に据えられてしまうのは、アキラにとっては牢に繋がれたも同然で、大迷惑以外の何物でもない。

巫女といえども、この谷の巫女は一般的な巫女とは違い、谷に落ち着くわけではなく、むしろ外界と呼ばれる一般社会に揉まれ、与えられた任務を全うしなければならない。逃げ出すことができないその苦痛は、十三年間の任期を全うするか、長が急逝して地位が繰り上げられてしまつか、巫女自身がうっかり死んでしまつかまで続く。谷の外にあっても自由はないのだ。

冗談じゃない。ようやく人並みな生活を送らせてもらえるようになったのだ。巫女になどなってしまうたら、身動きできない重さの足枷が、与えられてしまうようなものだ。ただでさえ、アキラには『運命』という名の、抗いがたい、最大の足枷が付いている。もう、これ以上余計なものがぶら下がりでもしたら、水底から浮かび上がれず溺れてしまうようなものだ。これ即ち溺り殺し。

木々を縫って枝を渡り、アキラは滝壺に行き当たった。その音は

アキラの心を洗い、彼女は久しぶりに心が落ち着くのを感じた。

「こんな静かで小さな所にさえ、何世代にも渡って人の運命を支配してしまうような争いは起こるし、争うことで、巫女を決めたりする。しかもその儀式をオレはこれから受けようだなんて、アホくさい。オレが今こう考えていることだって、オレの中に偽善的なオレの存在があるからじゃないか。」

仮にも、オレは空蝉の一族の長。人間を憎み、人間を殺しながら生きてきて、そうしなかったら生きていけない人間じゃないか。よくもまあ恥ずかしげもなく、争うことが醜いみたいなことを、一瞬でも考えたもんだよ、オレも」

アキラは一人ごちた。たまにはこうでもばやかないと、自分自身に疑問を持って、前に進めなくなってしまう。

この美しい風景は、アキラの心を望みもしないのに洗う。

「でも、こんな綺麗な景色の所から、人間を憎むことを性とした一族が生まれたんじゃないか。どんな綺麗な景色でも、人間の表面の取って付けたような心を動かすことはできても、奥底に澱んでいる心までは洗い流すことはできない。これがこの世界の人間の本質なんだな。」

そうだとしたら、これじゃオレはこの世界の人間を、自分と共に抹殺する以外に道がない。哀しいねえ。なんだか、ほんとに腹立たしいや。同じ過ちを繰り返すバカが多すぎて」

アキラは服を脱いだ。

「とにかく、今は巫女にはなれない。もつと普通の生活をして、普通の人間と交わって、人間ってもんを見極めないと。滅ぼすべき種なのか、否、真の人間を真の世界へと導くべきか。」

人間の未来は、どういうわけか、こんなオレの掌の上^{てのうば}。支配欲の強い人間だったら、こんなオレの立場、喉から手が出るほど欲しいんだろうな。こんなうつつとうしい力、オレはいらぬのに。オレ的には、まともな人間に出会ってみたいよ」

アキラは滝壺に飛び込んだ。

朝日を受けて煌めく飛沫^{しぶき}はとても冷たく、気持ちが良く、アキラはまるで人魚か精霊かのように泳いだ。

アキラの身体は、十三才の少女の、しかも身長が百六十七センチもあるような、立派な体躯^{たいく}の持ち主なのにも関わらず、女らしい曲線はまるでなく、かといって男らしいというわけではなく、鍛え上げられてはいるが、針のような鋭さと細さを兼ね備えた、顔立ちや言葉遣い同様の中性的な身体つきだった。

アキラは泳ぎ終わると岩に腰掛け、長い髪をきつく結び上げ、妖しく鋭い視線を、太陽に向けた。

「我が名は晃緑^{いっしやく}。日光に照られてた緑から生まれるものは、生物を生かす酸素と、それによつて生かされる人間どもの生み出す廃棄物。そして闇。日光から生まれる影。

……そう、私は光と闇を内に秘めた、男でも女でもないもの。今の私は、女ではない。私は女ではない……」

まるで自己暗示でもかけるように、繰り返^{くりかえ}し呟^{つぶや}く言葉は、アキラの口から血でも吐くかのように、苦しそうに押し出されていた。

「よっしゃ、行くか！」

そう大声を出してあげた表情は、いつもの硬くて強い表情。

アキラは立ち上がると、粗末な麻布の着物を身に纏^{まと}い、岩から跳躍で高い木の枝に跳び乗った。まるで忍者のように。

「ま、何が出るかはお楽しみ**の**びっくり箱つてとこかな。期待しましょ」

アキラは呟いて、谷の集落に戻った。あまり戻るのが遅すぎると、不審に思われて抹殺部隊が結成され、追われてしまったら堪らない。逃げ延びる自信はあるが、面倒なことはごめんだった。

こんな谷なら、人一人抹殺することに抵抗などないに違いない。

第6部・八月ゝ生まれ故郷ゝ - 3 (後書き)

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfradia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第6部：八月、生まれ故郷 - 4

巫女決めの儀式は夕方からと聞かされていたので、それまでの時間、アキラは勝手気儘きままに過ごすことにした。生まれて初めての土地だが、本来であれば自分が支配していたはずのこの土地を、じっくり観察してみようと思いたち、ゆっくりと村を歩いた。谷人はそんなアキラに奇異の目を向けるでなく、ただ黙々と、決められている一日の日課を行っていた。その日課とは何のことはない。ただ食事を作り、片付け、洗濯をし、そして口に入れる日々の食料の手入れや世話だ。

あまりにもものんびりとした光景に、アキラは戸惑いを禁じ得ない。身内に殺されてしまったり、世界に争いを起こしたりする人間たちの集落のはずなのに、この生活の取り巻くゆったりとした時間の流れは一体何なのだろう。目の前にいる人たちは、世間にあきあきしてしまった隠遁者いんとんしゃのような、およそ争いごととは関係ないような人々ではないか。

そもそも本当に今日の夕方、少し血の匂いのするかもしれない、巫女決めの儀式が行なわれるのだろうか。それすら疑問に思ってしまうほど、ここの生活はのどかすぎた。

谷の平地は基本的には開墾かいこんされ、田畑になっていたのだが、幾つかの社の前は広場やしろになっていて、そこで鍛練している少女が一人いた。

谷の人間であれば、この時間に鍛練などしているわけがない。とすれば、彼女は巫女決めの儀式の参加者だ。

巫女決めの儀式そのものに反対のはずのアキラなのだが、この少女を見て、どういうわけか少しほっとしてしまう。ここの空気は清浄すぎて、アキラの心の奥底に沈めた不安が、無意識のうちにざわつくのだ。

熱心なこと。オレとは大違いだよな。

アキラは少女の動きを目で追いながら、感心していた。きつと彼女は、アキラとは反対に、巫女になりたくてしかたがないのだろう。だから、儀式に備えて鍛練しているのだろう。

本当ならば、こういうやる気のある人間が選ばれて然るべきなのに、儀式はその能力の有無を、無意味にわざわざ競わせる。

「私の動きでも研究しているんだったら、何処か行つて下さるかしら。こんな所でぼうつとしてるってことは、あなたも巫女決めの儀式に出る人でしょうから」

少女はアキラに気が付いたのか、突然動きを止め、アキラに詰め寄ってきた。

「おっと、そんなんじゃないよ。オレにはオレのペースがあるんでね」

両手を胸の前に挙げて軽く降参のポーズを作り、アキラは一步後ろへ退がったのだが、自分を睨む少女の目に、アキラは見覚えがある気がして止まった。

くるつと記憶を探り、一人の人物に思い至る。

「あ、あんた、紅緒ちゃんじゃない？」

「？」

少女は不審そうな眼差しを遠慮なく向けた。

「やつぱさうだ。オレだよ、アキラ。ガキの頃、よく遊んでくれたじゃないか。ほら、人形のアキラだよ」

「え、あ、ああ！」

紅緒と呼ばれた少女は、驚きの声を上げた。

「あの……、嘘でしょ？」

「さうだよな。だつてさ、オレが動けるようになって二、三日もしないうちに、紅緒ちゃんは今引越しちゃったからな」

アキラは懐かしそうに言った。

「待つて。アキラちゃんは今目が見えていないって、あなたのお母さ

まが言つてたけど」

「それは違つてたんだ。オレ、見えていたんだけど、喋れ^{しゃべ}なかったし動けなかったから、意思表示できなかっただけ。オレは何もかも憶えてるぜ。」

ところで紅緒ちゃん、あ後は、ずっと谷に？」

「その、紅緒ちゃんつての、やめてよ。私の名前は『こうりゅう』つていうのよ」

『こうりゅう』と名乗った少女は、地面に木の枝で『紅龍』と字を書いた。

「へえ、紅の龍か。格好いいじゃん」

アキラが名乗らなかったことに対して、紅龍は少し眉間を顰^{しか}めたが、谷の人間は簡単に本名を明かすものではないから、そこで追求はしなかった。そしてアキラも知らん顔だ。

それでもアキラの雰囲気は、至極和やか^{なご}だった。努めてこうしていないと、他人を突き刺すような眼差しで、他人を無意識のうちに拒否してしまう。それに、自分が何者だかを悟られないようにしなくてはならない。

とにかく、幼馴染みとの対面は、なかなか良い雰囲気だった。

「で、あ後はずっと谷に？」

「ううん。今回は巫女決めの儀式に参加する為で、谷に来るのは三度目かな。アキラちゃんは？」

「オレは谷は初めてかな。今日はオレの後見についてくれている人の命令で、オレも儀式に参加しに来たんだ。オレは嫌だったんだけどね。ははははっ」

もともとごちないアキラの笑いは、自然と消えていった。紅龍の眼差しが、アキラも儀式に参加すると聞いた途端、鋭く、憎悪の色に染まったからだ。それは明らかに、アキラを敵と見做^{みな}した色だ。

何なんだよ。うっかりオレが巫女になんか選ばれちゃったら、もう死ぬしかないって顔しちゃってさ。

大体、巫女決めの儀式って、一体何するんだよ。他の連中は親から聞いてるからいいよ、オレは何も教わってないんだから、巫女にならない為の対策を練ることすらできないし。

ったく、水鏡さまは何処にいるってんだ。もうちょっと情報をよこすとかしないか、普通。

アキラが心の中でばやいていても、その声が聞こえる人間は何処にもいない。

ぶいっと背を向けて、再び鍛練を始めた紅龍の後ろ姿を見ながら、アキラは遠慮なくため息をついた。

第6部・八月ゝ生まれ故郷ゝ - 4（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfradia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第6部・八月ゝ生まれ故郷 - 5

何となく夕方までだらだらと過ごし、そして呼ばれるままに、アキラは社の前の広場に行った。そこには十三才の少女が十人ほど集まっている。

「今現在、瑞穂の谷に籍を置く十三才の女子は十七人。うちここには十一人いますが、不在の者は、巫女になる資格を放棄したものと見做し、十一人で巫女決めの儀式を始めることにします」

正装をした三十代半ばの女性が、谷にいる全員に宣誓するように、大きな声で儀式の始まりを告げた。

「巫女は、将来、菖蒲妃しょうぶひの直系の子孫、正統な長一族が戻られる日まで、この儀式を行なうことで選出されます。一度巫女になれば、十三年間の任期を全うするか、その生命を落とす日まで谷に戻ることはなく、最前線で任務を遂行してもらいます。」

その後谷に戻り、女長として十三年の任期も控えていることも、忘れないように。我々瑞穂の谷人を纏める、重要な役目です。これからその力量を問うため、ある試練を課します。我々は外界の者とは違い、戸籍を持たぬ者。そのことを肝に銘じ、慎重に行動を取りなさい」

即ち、死の危険すらあることを、示唆しそしている。アキラは内心驚いた。恐怖心ではなく、あっさりと生命を賭けてしまう、その儀式の厳しさにだ。

そしてその言葉は、周囲に緊張感を齎した。

「巫女は、神の声を聞かねばなりません。生れつき聞こえる者、聞こえぬ者、これからの試練で、それを我々は見極めます。方法は、この瑞穂の谷を囲む七つの山の頂を越え、その頂にあるものを揃え、早くこの広場に戻ってくることです。何を揃えるかは、ここではお教えできません。ただ始祖菖蒲妃の教え、晃緑妃と創翔妃の過ちを

思えば、神の声が聞こえ、謎は簡単に解けるでしょう。では日没と共に開始します。準備をなさい」

正装の女性は社の中に入っただけだった。

「あれが、今のこの谷を治める女長、先々代の巫女ですよ」

「あ、みず……」

アキラの後ろに、いつのまにか水鏡が立っていた。アキラは思わず名を呼びそうになったが、谷に入る時の約束を思い出し、思わず口籠くちゅうもった。

「今まで、どちらにいらしたのですか？」

「わたくしの社です。おいでなさいな」

アキラは水鏡に導かれ、彼女の住居へと向かった。

巫女志願者は何の反応も示さなかったが、道すがら出会う谷人は、驚きの表情を見せながらも、水鏡に深々と頭を下げていた。

「どうしてあのような表情をするのでしょうかね」

「あなたも、すぐに判りますよ。さあ、ここです」

「えっ？ここは女長老の社じゃ……」

アキラは水鏡の顔と、案内された社を見比べた。

代々この館の中の女長老は、滅多なことでは外に出ず、日がなみず簾の向こうで微動だにせずに座禅を組み、儀式以外では姿を見せずに声だけで指示を出すことで有名だった。先代に至っては簾の向こうで床に臥ふせり、助言をくれる以外姿を見せることもなかったと言われている。

「わたくし、水鏡さまって女長だと思っていたのですけど、違かったようですし、と言うと女長老さまにお仕えしている特別な方だったんですね」

アキラの質問に、水鏡は何も答えずに、中に入るように示しただけだった。

本来、女長老の社や、女長の社に足を踏み入れられるのは、その女性の身内と、仕える巫女だけだ。真の長一族のアキラは入れて当然なのだが、何も知らない谷人からすれば、水鏡という人が、長一族でもない者を連れて歩いてるように見えたから、驚きの表情をしても当然だ。

「女長老は、わたくしです」

「はっ？何をおっしゃるのですか？だって、水鏡さまは三十才になられていないでしょうに」

さすがのアキラも、この発言には驚いた。長老という名の付く立場の人が、このように皺しわ一つないはずがない。

水鏡は暗がりで蝋燭ろうそくに火を灯した。

薄明りの中に浮かび上がる無数の鏡の中に、平然と水鏡は立っていた。

「あなたは仮にも、空蟬うつせみたちの長。仕事から離れてもよいとは言いましたが、情報収拾は怠おこたらないようにとの言い付けは、あまり守っていないようですね。あなたには、『マザ』に直接アクセスできる『コピー』を渡しているはずなのに。」

知っているでしょうが、『マザ』には、わたくしの個人情報も入っていますし、使いようによっては、長の居所の分かってしまうようなものなのですよ」

浮世離れた人間が、コンピューターを語っていることがおかしいのだが、今はそれどころではない。

「え？だって、『マザ』は、谷人みなで使ってるんじゃない……」

「大丈夫。『マザ』でも、深層部分の情報にアクセスする方法は、わたくしと長一族しか知りませんから、大事な情報は誰も解りませんよ。」

今、どうしてあなたを招き入れたかと言うと、あなたは人のことを覗くのぞのが嫌いな性格だから、わたくしのことを調べようとしたかもしれないし、わたくしも何れ話さなければと思っていました。今回は丁度いい機会ですので、わたくしの真実の姿について、時間

まで聞いてちょうだいね」

水鏡は、無数の鏡の間に腰を下ろした。

蝋燭の淡い光に照らされた彼女の顔は、二十五才くらいの若い女性
性の顔。

しかし、アキラは息を呑んだ。

第6部・八月ゝ生まれ故郷ゝ - 5（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfradia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第6部・八月〜生まれ故郷〜 - 6

息を呑んだアキラの目に映ったのは、無数の鏡に揺らめいて浮かび上がる、皺だらけの無数の老婆の顔。

「先程の女長は、実質的な谷の運営を任された、巫女上がりの長です。わたくしは、過ちの双生児の誕生した折から、修正の双生児が産まれるまでの、守護の女長老。長の力の封印と覚醒を司るものです。」

鏡の中に齢を閉じ込める術を与えられ、先代、そしてわたくしとの二世代で、約四百年を生きてきました。ここにある鏡は、わたくしが二十五才の時から年に一枚ずつ増やし、齢を閉じ込めてきたものです。精神は変わらずとも肉体の衰えは押し止めることはできません。ここには百五十枚位あるでしょう。わたくしも忘れませんでした。」

アキラは水鏡の微笑む瞳に、全神経を集中した。鏡を見てはいけないと、本能がそうさせる。

「わたくしをこの任務から解き放つ者よ、くどいようですが、長の証たる超常の力を、今は使ってはなりません。真実が自ずと明かされる時、初めてその力を谷で使いなさい。よいですね」

「はい、解っております」

言われるまでもない。始めからそのつもりだった。

もう少し平凡でいたいのだ。普通の中学生として、普通に喜怒哀楽を好きなだけ表現し、運命を忘れていたいのだ。

「ところで、妃よ、あなたの瑠璃色の瞳は健在ですか？」

「はい、ご心配なく。黒い色にしていますけど」

「なら、結構。行きなさい、あなたの本能の赴くままに」

水鏡は蠟燭の火を消した。それは、もう行きなさいという合図だ。訊きたいことは山ほどあったが、有無を言わさぬ暗闇に、アキラは女長老だった水鏡の前を辞した。

「あれ、べ……紅龍」

外に出たアキラは、女長老の社の前に一人でいる紅龍を見た。二人の間に風が流れた。

紅龍の瞳の中には、彼女の名前のような、憎しみの炎の龍が燃えている。

「谷人が、女長老さまが娘の一人を招き入れたって驚いていたから、まさかと思って来てみた」

紅龍は喋りだした。

「女長老さまは、あまりお姿をお見せにならない方らしいから、谷人の中でもそのお顔を知らない人も多いと聞いてるわ。当然、私たち巫女志願者が気付くわけもない。

アキラ、あなたは一体何者なの？ どうして女長老さまに目をかけてもらってるの？ 昔のあなたを知ってるからこそ、私はあなたにだけは負けたくないわ！」

「紅龍……」

アキラに宣戦布告して去って行く、紅い炎の龍の背に、アキラはその名を呟くことしかできなかった。

勝つしかないんだな、オレは。勝って、全ての責任を負うしかないんだな。所詮平和なんて、このオレには似合わないんだ。オレが今、平凡でいられるのは、水鏡さまのお陰。他人に頼って自分だけいい思いをするなんて、オレらしくない。今は人間を見極める為に平凡を装っている、そう思え、オレ。今までの一年半の出来事も……

アキラは髪をきつく結い直し、気合いを入れた。

それにしても、どうして『瑞穂の谷』なんて名前にしたんだ。人間滅亡を画策してるような谷を……

瑞穂とは、瑞々しい稲穂が実る様、ひいては日本の美称だ。谷は日本の中枢であり、美しい所であるという意味合いを含めている。そのことは解っているのだが、どうも違う気がしてならない。

センスのなさに、ご先祖さまを笑っちまうよ。それでもここは、オレのもの。オレの全て。そうだから、悪いけどオレは、サキやコメチがいくら善い人間だと解っていても、人間を殺してしまうんだろうな。

ま、オレの知ったこっちゃない。人間を滅ぼすものは人間。オレ自身、自分だけ生き残っていたいなんて浅ましい生存欲は持っていない。一緒に滅びるつもりなんだから、誰にも文句は言わせない。いいじゃないか……

アキラはがらりと雰囲気を変え、儀式に臨むべく、女長の社の前の広場に向かった。

早すぎたのか、そこには紅龍しかいなかった。

「あ、ああ、アキラ。あなた、いつ来たの？全然存在感ないよ。そんなので、あなた、巫女どころか生き延びることもできないわよ」

そりゃ、あんた、いくら自分が殺気立ててるからって、みんなが殺気立ててくるとは限らないだろうに。それこそ死ぬよ。

アキラは言いたいことを呑み込んで、「うん、自分でも危ないとは思ってるよ。でも、手を抜いてるわけじゃないんだけどなあ」と、作り笑いをしてみせた。

「そりゃ、手を抜いたら本当に死ぬよ。どうせ偽物の戸籍しかないんだから」

そう言って笑う紅龍の声を、アキラは遠くで聞いていた。

周囲を取り巻く空気が醜く濁り、いきり立てば立つ程、アキラの心は閉ざされ、小波一つない湖の水面のようになっていった。何故かは解らないが、アキラは、彼女らしくなく、穏やかだった。それ

は自分の進む道を、覚悟したからかもしれない。

覚悟は決めた。もう、迷わない。

第6部・八月ゝ生まれ故郷ゝ - 6 (後書き)

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfradia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第6部：八月、生まれ故郷 - 7

「集まりましたね。では、始めます」

定刻に全員が揃ったのを確認すると、女長は社から出てきて言った。「何か、質問はありますか？」

「はい。参考までに、女長様が巫女になられた時の、所要時間を教えて戴けますでしょうか。参考にさせて下さい」

「そうですね」

質問を投げかけた一人の少女に、女長は優しく微笑みながらも、馬鹿にしたような視線を投げかけた。

「少なくとも、あなたよりは速かったですよ」

アキラは、吹き出さないように、精一杯堪えた。女長の方が一枚上手だ。

平常心、平常心と。何処ぞのバカのお陰で、思わず目的を忘れるところだったよ。

アキラは、水鏡に聞かされていた昔話を思い出した。

「巫女決めの儀式は、晃緑と創翔の、過ちの双生児の次の代から生まれました。兄殺しの原因は、二人とも男に生まれ、能力の差は見た目には殆ど無かったというのに、表向き、長男であるという理由で、晃緑が巫女の位に就いてしまったことでした。

本当は歴然とした差があり、当時の女長老様が神託を受けた上での決定でしたが、巫女を辞したい晃緑妃と、どうしてもなりたかった創翔妃の二人は納得しないと考え、二人の祖母である女長白橡様が、『もとより資格のない者に位を与えるのであれば、いっそ外界の習わしに従い、先に産まれた者が位に就くべし』と言ったのです。せめて二人が双生児でなければ良かったのにと、思っても仕方ないことを思っています。

何れにせよ、晃緑妃は巫女として最前線に赴き、誰もが疑つていたのに、晃緑妃自身は決して信じて疑わなかった弟の創翔王の裏切りに遭い、その生命を失います。たまたま同行していた晃緑妃の身重の妻が、超常の力でもって、今際いまわの際の晃緑妃を瑞穂の谷へと運ばれ、晃緑妃は女長老と女長の立ち会いのもと、遺言を残されました。

『自分は不本意ながら、中継ぎの儀式を受けて、巫女の力を手に入れてしまったが、それは過ちだった。長老や長がご存命の間に、このしきたりを変えることは叶わなかったが、この晃緑の遺言と思し召し、どうかお聞き届け願いたい。』

我が弟、創翔王により、我が子らに呪いがかけられてしまいました。今後、私の子孫に女子が産まれることは決してなきようにというものです。

彼は私の双子。その言霊に宿る力の程は判ります。残念ながら、きっと私の子孫に女子は産まれないでしょう。そして、私の子孫は子を成すと、創翔王の子孫はその父親を殺しに来るといふ、長い支配の呪いです。きっと、女子が産まれないという呪いの効力が、初子のみに有効なのでしょう。それでも女子が産まれるのを阻止する為に、彼は我が子孫を殺し続ける支配の呪いもかけたのでしょう。

我らは、創翔王の一族という、同じ空蟬の血を持つ最大の敵を作ってしまった。彼らに生命を狙われながら、谷を導き、谷に生きることは不可能です。

私は死にますが、私の妻と子、孫たちは、空蟬の一族として任務は果たしますが、谷には戻らないように、行方を晦くらまさせて下さい。この身体の文様だけは、生命に代えても創翔王には渡せませんから。

そして過ちの発端となった巫女の位は、谷の十三才の全員の少女の中から選んで下さい。能力を見極める為の儀式を執り行い、そう

することで、お互いが認め合えるようにして下さい。

女長は、十三年の任期を終えた巫女が、繰り上がりでなるようにして下さい。女長老も、やはり繰り上がりでお願いします。少し大所帯になってしまいましたが、そこは、それこそ年長者に従うようにして下さい。お願いします。

私は空蟬の一族です。しかし、空蟬だからと言って、何もこれ以上、肉親まで憎む必要がありませんようや？

確かに、創翔王を殺してしまえば、我が子にかけられた呪いは解けるでしょう。

でも、ここで敢えて頼みます。創翔王を殺さないで下さい。この呪いは、彼の苦悩を理解できなかった私の、当然の罰なのです。ですから、呪いの返しはしていません。私は、この罰を受けねばなりません。憎しみは憎しみを生むだけです。共存の道を探して下さい。子孫が男子であろうと、守るべき文様は刻まれて産まれ続けるのですから、我々は生き延びればいいのです。ですから、我々が行方を晦ますことを、何卒、何卒なにこそお許し下さい』

晃緑妃はそう言い残し、息絶えました。

こうして巫女決めの儀式は生まれたのです。晃緑妃の気持ちを無駄にすることはできません。過去の過ちを繰り返すほど、愚かなことではないのですから。解りますか？」

その話を水鏡から聞かされた時、「はい」と、アキラは確か答えた気がする。

今思えば、いくら正論を言っているとはいえ、せめて儀式の具体案くらい示してから死んでくれればよかったのにと、考えてしまう。

そう、わたくしは女長。巫女の位を通り越し、既に長の位を

父から譲^{ゆず}り受けている。つまり、巫女決めの儀式は必要ないではないか、とは言ってられないな。身分を明かせる状態ではないのだから。

ならばこの儀式で巫女になり、この儀式の必要性を見極めてやればいい。そして女長として、この儀式の中から巫女を選んで、オレは外界へトンスラしてやるんだ。まだまだやるべきことは、外にある。谷の位よりも、一族として為すべき仕事の方が、先決。なんたって、オレは空蟬の長なんだから……

アキラは、谷の理屈ではなく、彼女の理屈で自分を正当化した。もう、後戻りはしない。前へ行くしかない。

第6部・八月〜生まれ故郷〜 - 7（後書き）

次回から第7部・八月〜瑠璃色の瞳〜を始めます。

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfrania>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第7部：八月〜瑠璃色の瞳〜 - 1

7：八月〜瑠璃色の瞳〜

日が沈み、辺りは夕暮れの空に包まれた。

「では、行きなさい」

女長の声を合図に、少女たちは一斉に駆け出した。が、アキラだけは別だった。社の広場にある榊さかきの木に凭もたれかかり、今更ながら、まるで考えごとの最中のような。

オレは、オレの信じる神に祈る。この愚かな過ちを繰り返さない為にも、この未熟者のオレに、神よ、力を貸してくれ。

アキラは心の中で呟つぶやくと、顔を上げた。しかしその顔を谷人たちの方へは向けることなく、谷を取り囲む七つの山に向かい、駆け出して行った。

先を見据えるアキラの目は、瑠璃色の輝きを放つ漆黒の瞳。

それは白色人種の青い瞳とは全く異なるもので、虹彩そのものが発光している。そしてその瞳は、木、火、土、石、水、風、獣、ありとあらゆる自然界のものと語ることのできる人間の証とされる。

「その昔、遙か太古の時代、人間が未だ自然界の一員であった頃、特に黒色眼の人間は、瑠璃色の光を発する瞳を持っていたと伝えられています。他にも輝きの色はさまざまありますが、瑠璃色の光は黒い瞳の者だけのもの。夜になると、その瞳は猫のように輝き、とても美しいものでした。」

お前の瞳は真っ黒です。どんな人よりも黒く、光ない夜の深い闇のように美しい。だから、お前の瑠璃色の光は闇夜を照らし、過ち

を正しく導く燈^{ともしび}。その澄んだ輝きを、お前は失くしてはいけないよ。それはお前の身分を示す、闇の世界では重要なものなのだから。その光を失くすことは容易^{たやす}いけど、再び取り戻すことは難しい。

忘れてはいけないよ。お前は、その瞳の輝きを見る度に、自分の生き方を見出ださなくてはいけないのだから」

「どんな生き方？」

「それはお前自身が見付けること。ただ、その瞳をみんなが失くしているということは、人間が自然界の一員ではなく、自然を支配しだした所為^{せい}なんだよ」

「ふーん」

それは遠い過去の記憶。アキラの両親が、アキラに教えてくれたことだ。

父さま、母さま、お二人の仰^{おつしやう}られていたことが、今、ようやく解った気がします。

ただ人間を滅亡に導くだけでは、瑞穂の谷の意味はない。人間は、絶滅させてはいけないのですね。生き残る価値のある人間を見出だすこと、それが瑞穂の谷を統^すべる長である者の、役目なのです。

……逆を返せば、存在価値のない者は、容赦なく殺してもいいって、歪^{ゆが}んで解釈することもできるけど。

だって、オレは結局空蝉^{うつせみ}であって、殺してしまいたいくらい憎んでいる人間がいる。サキやコメチやみんなと知り合って、人間という種族を、理由なく憎んではいけないということは学んだけど、でも、最後にオレに生きる力を与えているのは、アイツを殺してしまいたい、という欲求だけだし。それさえ果たしちまえば、オレは空蝉の一族の長としての使命なんか放棄して、さっさと死んじまいたいくらいだよ。

まあ、とにかく生かされている間は、果たすべき役目は果たしましょう。理由なく人間全てを憎むのもやめて、人間を滅亡から守り、

存在価値ない人間を抹殺し、本来あるべき姿に、世界を戻しましう。

なんて、本当なら真っ先に抹殺されるべき人間のこのオレが、憎しみほど虚しく、滅びに至る近道なんだよって、人間に警告しなくちゃならないなんて、笑止千万だよ、まったくもう……

解っちゃいるんだよ、憎しみは何も産まないなんてこと。オレも、誰もみんな。でも、駄目なんだよな、これが。

アキラはそんなことを考えながら、山に一步足を踏み入れた。と、足元が掬すくわれるような感覚に襲われ、瞬間、高い木の枝に跳び乗った。

「まったく、しょっぱなから単純だねえ」

足元を見てみると、獲物を捕らえ損なった網が、宙に揺れている。また少し視線をずらすと、そんな初歩的な罠に引っかかってしまった、情けない少女がいる。

「救けてあげたいけど、これもルールだからね。ここで捕まって良かったって思うかもよ。死ななくてすんだわけだし」

アキラにとっては精一杯の慰めを言っただけだったが、内心は当然だと思っていた。

罠にかかっていた少女は、女長に所要時間を訊ねた、あの少女だった。

「まさかこのくらいの罠で、オレに死を覚悟しろって言ったのかよ。だったら冗談じゃねえ。オレを仕留めたかったら、それこそ死ぬ気でかかってこいってんだ。水鏡さまも、オレのことを知らないわけがないんだからよ」

アキラは余裕たっぷりだ。木の枝に座って、悠長に鼻歌など唄っていた。

「お、戻ってきた」

アキラは、彼女を目がけて飛んできた鳥を見て手を差し伸べると、

何やら鳥の鳴き真似をした。すると飛んできた鳥は、アキラの鳴き真似に応えるかのように囀った。こえす

「ありがとう、助かった」

暫く会話を交わすかのように鳴き真似をしていたアキラは、お礼を言いながら鳥を空に放った。

「ったく、危ないったらありやしない。彼に聞かなかったら、余裕こいて殺されてたな、オレ。えげつない罠、仕掛けてんじゃないよ、なあ」

独り言を言いながら、アキラは立ち上がった。その目は緊張していた。

第7部：八月、瑠璃色の瞳 - 1（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第7部・八月、瑠璃色の瞳 - 2

アキラは瑠璃色の瞳の持ち主。自然界の全てと語り合うことができる者。当然さっきの小鳥とも会話をしていた。

『油断しちゃダメだよ。空にも地面にも、罠が一杯あるよ。綱やトリモチ、吹き矢も仕掛けてあるし、刀を持った人間も潜^{ひそ}んでる』

鳥は自分の敵ではない人間であるアキラに、頼めば情報を提供してくれる

彼の情報によると、上下左右、何処^{どこ}もかしこも油断はならない。

身分を隠している以上、空を飛ぶことも瞬間移動することもできないし、大きな動きは隙がでやすいので、跳躍だつてままならない。

四方八方から飛んでくる石礫^{いっしやく}、手投剣、目潰^{つぶ}しなどをかわしながら、アキラは先を目指した。

瑠璃色の瞳に映る自然たちが、何が何処に潜んでいるかを教えてくれるのだが、蟻^{あり}の這い出る隙間もないほど仕掛けられた罠を教えられても、実は大して役には立たない。

何しろ、判断する間もなく飛んでくる攻撃だ。今まで培^{つちか}ってきた咄嗟の時の身のこなしの方が役立つというものだ。こんな所で今までの修業が役に立つとは、アキラといえども正直思っていなかった。こんなんじゃ、いつそ勘に集中した方がいいな。瞳に頼つたら、かえって危ないよ、こりゃ。

アキラは、瞳の輝きを消した。瞳の輝きがなくても、語り合うことはできる。

瑞穂の谷人も、動物をある程度なら使役することは可能だ。

しかし、アキラのはそれとは全く違う。アキラは動物を使役するのではなく、人間同志で頼みごとをするように、動物たちと対等に接しているのだ。だからこそ、拒否されることも稀にはあるが、自

分たちと対等に接してくる珍しい人間に対し、動物たちは快くアキラの頼みを引き受けてくれる。

アキラは、最初の山の頂に着いた。

大して高くない山の、広くない空間で、炎が赤々と燃えていた。「ったく、悪趣味だよなあ。これを持って、残りの山を越えろって言うのかよ。エゲツないったらありやしない。片手が塞が^{ふさ}っちゃうし、山火事には気を付けなきゃならんし、面倒やなあ」

アキラは、落ちている枯れ枝を拾った。

「？」

変な匂いがし、アキラは慌てて飛びのいた。匂いの物質が何であるか考えるよりも先に、ガソリンが雨のように降り注いできたのだ。「危ないじゃないか。こんなん浴びたら、火が燃え移っちゃうじゃ

……！」

アキラは燃え盛る炎の中心を、よく見た。

「冗談じゃねえっ！いくら何でも、赦^{ゆる}されないだろ、こんなの！」

黒焦げの人形は、大きさからして、少女のもの。ガソリンの雨に巻き込まれ、炎に包まれてしまったのだろう。

「赦さない。絶対に赦さない。こうなったら、オレが巫女に絶対なつて、オレがここの支配者だつてこと、きつちり思い知らせてやる。こんな馬鹿げたこと、さつさと止めさせてやるわ。女長にも、女長老水鏡さまにも、誰にも文句は言わせない！」

アキラは一人、怒りを顕^{あらわ}にした。彼女が理性を失わずに、感情を表に出すことは、極めて珍しいことだ。

怒りが込み上げれば込み上げるほど、アキラの感覚は研ぎ澄まされ、彼女の能力は高められていった。

音もなく風を切って走り、木々を飛び移り、しつこく迫ってくる追っ手を巻きながら、仕掛けてある無数の罠をかわし、ゴールをひたすら目指す。彼女の鋭敏な神経は、先に何があるかを感じ取る為

に、遙か彼方まで伸ばされていた。

一瞬の判断で、走る、感じる、かわすという三つの動作を行なうのは、それはとても疲れることだ。しかし目的の為であれば気にもならないし、疲れに身を任せていたら、次の瞬間疲れたと感じることもできない、一つの死体と成り果ててしまう。

この巫女決めの儀式とは、情け容赦ないゲームだ。無数の黒子の死体が、それを物語っている。

アキラは五つの山を越えた。集めたものは四つ。

火の灯る枯れ枝。鉄の剣。花の咲いた山野草。一握りの土。

今まではそこにあるものを手にしてくるだけで良かった。しかし五つめは、アキラも迷わされた。

そこにあるのは小川と木々、そして鉄の罾が、さも持つて行ってくれと言わんばかりに置いてある。

瑞穂の谷人は、鉄の罾を持つてして人間を狩る者。従って、罾を持つて行くべきか。

自然界を崇める者たちとして、水を何とか持つて行くべきか。

それとも木を手折^{たお}つて行くべきか。自然を崇める者として、木を傷つけてもよいかを考える。

「危ない危ない。始祖が罾を選ばせるわけがないよな」

アキラは木に近付いた。

「あなたの枝を一つ下さい。その枝を私は大地に植え、新たな生命を吹き込みましょう。枯れ枝で飾り枝を作り、あなたに感謝の意を込めて捧げましょう」

アキラは緑繁る木に語りかけ、落ちていた枯れ枝を薄く削つて、ぜんまい状の飾りをたくさんぶら下げた枝を作り、祈りとともにそれを捧げた。それは彼女の両親から昔教えられた、自然界の生命を傷つけるときの、感謝と許しの請い方だった。

アキラは祈りを終えると、「ありがとう」と一言呟き、木の枝を

一つ手折った。そしてその枝の切り口に枯草を巻き、小川の水を含ませた。

アキラの解釈。それは、世界を構成する自然界の生命。

「水まで持つて来させるなんて、性格悪いわ、ここの連中」

アキラは次の山を目指し、五つ目の山を下った。

第7部：八月、瑠璃色の瞳 - 2（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第7部・八月、瑠璃色の瞳 - 3

アキラの瞳は死体に慣らされてしまっていた。

始めの怒りを忘れたわけではないが、これが人間の習性というものなのか、感覚が麻痺したのか、死体を見ても、生命を終えた一つの生物の形にしか見えなくなってしまっている。

まったく、こんな自分が怖ろしいよ。でも、これが空蟬か……

：

アキラは、取り敢えず今の心理を肯定し、先を急ぐことにした。

道中の記憶を確認する。死んでしまった者と罨に捕らわれ身動き取れない者の数は九人。ということは、アキラの前には紅龍ただ一人がいるということになる。皮肉なことだ。

アキラと紅龍は、六つ目の山の頂で出会った。出会った彼女の手には、アキラと同じものがあつた。

「紅龍、先頭だろ」

「ま、ね。お先に」

紅龍は、使役術を使って小鳥を呼び寄せると、さつさと出発した。「どうせ同じもの選ぶんだから、隠すようにしないでもいいじゃないかな、もう」

アキラも鳥の鳴き声を出した。

辺りは夜の闇に包まれている。大抵の鳥はねぐらに帰り、今活動している鳥といえば、梟ういふくしかない。

彼女の呼びかけに、梟は音もなく彼女の肩に舞い降り何やら小さく囀さえずると、再び空へ舞い上がり、アキラと一定の距離を保って、彼女に付いてきた。

夜の闇では目視できないが、六つ目の山を下った紅龍が、数百メートル前方を走っている気配を感じる。このくらいの距離であれば、

逆転は可能だ。

「悪いねえ。こんなくだらないゲームに付き合わせちゃって」

アキラは、自分に付いてきてくれている、音を立てずにはばたける鼻に語りかけ、スピードをあげた。

アキラは風よりも速く走った。

黒子の追っ手が、色々な飛び道具を使って、アキラを背後から追いかけてようと、色々な手段を使って彼らを攪乱し、何とか逃げおおせねばならなかった。

さすがのアキラも、身体中が傷だらけだ。しかしそれらを気にしていいたら、それこそ死んでしまう。

「ああつ、もう、うざってえっ！」

アキラは逆に後ろを向いた。彼らを傷つけないよう、逃げることで先を急いだが、きりが無い。こうなったら彼ら黒子を殺さないまでも、暫く動けないようにするしかない。

とはいっても、祈りの為の飾り木を作る為の小刀しか持っていなかったアキラは、黒子が投げる手投剣を受けて、それを投げ返すことしかできない。

アキラには、先に行く紅龍のことなど気にかかる余裕など、全くなかった。

黒子は、アキラが横に逃げることも想定して、手投剣を広範囲に渡って投げた。

木々が不自然に騒めいた。それはアキラにだけ聞こえる声だった。

「紅龍、伏せろ！同化は止めろっ！」

あらかじ

黒子の投げた手投剣は、彼らが予め仕掛けておいた仕掛け弓に当たり、一斉にアキラと紅龍に矢が雨のように降ってきたのだ。

木に同化して、黒子をやり過ごそうとしていた紅龍は、アキラの一声で難を逃れ、彼女を追っていた黒子が、代わりに犠牲となって、首から血飛沫ちしぶきをあげて倒れた。

真つ直ぐ先を目指す紅龍は、別の黒子に二つ目の山で手にした、鉄の剣を振り降ろそうとしていた。

「頼む！あいつを軽く苛めてやつてくれ」

アキラは、とうとう梟を黒子に差し向けた。たかが儀式で、不必要に人が死ぬのは止めさせねばならない。

梟は紅龍と黒子の間に音もなく舞い降り、黒子の肩を鋭い爪で抉り、足首を嘴でちぎった。

「それくらいでいい。戻ってくれ」

アキラは梟に呼びかけ、彼はそれに従い、アキラの肩に止まった。馬鹿げたことに付き合わせて、本当に悪かった」

人間の言葉に応え、梟が甘えた声を出すなどあり得ない。紅龍は目を疑ったが、それを口にするのは癪に障る。

「ば、馬鹿げたことだなんて！神聖な儀式を冒瀆するの」

紅龍は違う理由を見つけて、アキラに喰ってかかった。しかしアキラは冷たい視線を投げただけだった。

「同化は止める。この谷は情報産業会社なんだから、オレらの行動パターンなんて、分析して罫をしかけてあるぜ」

「その、谷を侮辱するような言い草は何？」

「何だよ、戦時中の非国民を見るような目で、オレを見るなよな」
アキラは、逆上する紅龍とともに話をするつもりはなかった。それがかえって、紅龍の敵対心を燃え上がらせてしまう。

「鳥は鳥でも、自分のペットでも使役したのかしら。それじゃあ失格ね」

「何でここまできてペットかなあ。彼はこの森の夜の主だよ。疑うなら使役術を使ってみればいい。多分言うこと聞いてくれるから。まあ、オレは使役術じゃなくて頼んだんだけどさ」

「ものは言いようね」

紅龍の嫌味にアキラは返事をせずに、七つ目の山へ向かった。

首を射抜かれて転がる死体。断末魔の黒子の叫び。

夜の月明かりに、生命の最後が浮かび上がる。軽々しく命を賭けてしまったゲームの、死をも怖れぬ敗北者の姿。

二人は並走しながら、最後の山の頂に立った。

そこは禿^はげ山。何もなかった。

さすがに、二人は顔を見合わせた。

「まあ、何もないなあ」

「……」

余裕のない紅龍は返事もしない。

「なあ、紅龍、ここはお互いの思惑が影響し合わないようにしよう。オレは何を持っていくかは決めているから、オレはお前の姿が見えない所まで戻る。決めたら合図を出してくれればいいからさ、それでどうかな」

このアキラの申し出に、やはり紅龍は何も答えなかった。それだけで、アキラには充分意志が伝わった。沈黙が精一杯の答えだ。

紅龍は勝つ為に、この屈辱的な申し出を受け入れた。屈辱に耐えている紅龍に、アキラは何も言わずに、今来た道に戻った。

第7部：八月、瑠璃色の瞳 - 3（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第7部・八月、瑠璃色の瞳 - 4

紅龍は、アキラの姿が見えなくなると、近くにあった木の幹を蹴った。

「ちくしょう……」

紅龍が悔しげな表情を見せたのは、この瞬間までだった。振り向いた時には、その表情はゴールを目指すことだけを考えた者の顔だった。

危ないところだったわ。始祖杜若妃の愛したものに拘つてみたけれど、アキラが夜の森の主を使役したとはね。ならば、私は夜の動物の王を使役してみせるわ。

それにしてもアキラ、もう何を持っていくかを決めているって言うたけど、何を持ってくつもりなのかしら。ま、いいわ。狼は私が使役しちゃうから、アキラは困るはずよ」

紅龍は狼を使役した。なかなか高度な術で、瑠璃色の瞳を持たない者には大変なものだった。

紅龍は合図の音を鳴らし、使役した狼とともに山を下りた。と、どうだろう。山の中腹で、アキラは追い付いてきたのだ。しかも彼女は七つ目のものを手にしていない。

紅龍は、心の中で万歳三唱をした。アキラは紅龍に先を越され、手に入れないはいけないものを、手に入れられなかったのだ。心のどこかで不自然さを感じながらも、勝利を目前にした紅龍には、都合がいい解釈しかできなくなっていた。

余裕のありそうなアキラは、紅龍を追い抜くでもなく、余裕ない紅龍が能力以上の速さで走れるように並走しているようだった。

山を抜け、平地に出た。罨も黒子も、もう姿を見せないところを見ると、やはり最後は実力勝負させるのかと思いきや、突然大地と

同化していた黒子が、二人に襲いかかってきた。

アキラは当然黒子の存在を知っていたのだが、驚いた紅龍は、咄嗟に懐の短剣を黒子に投げた。

「紅龍、殺すな！相手はロボットじゃない、人間なんだぞ！」

あの乱暴なアキラらしからぬ台詞であることなど、紅龍が知るわけがない。

喧嘩を売られて逆上している彼女なら、猛々しい紅龍と同様に振る舞いをしそうなものだが、今のアキラは黒子の鳩尾に拳を入れて気絶させて、その場を切り抜ける。

普通になりたいから殺さないんじゃない。この馬鹿げた儀式を止めさせるなら、オレは態度で示さないといけない。

もしこのオレがこの地球上の人間を滅ぼすか否かを見極める者なら、始めから否定して殺してはいけない。始めは敢えて肯定しなくちゃならないんだ。少なくとも、オレは初めて、今の友達を大事にしたいと思っている。だから、人間を滅ぼしてはいけない。だから殺さない。

アキラは自分に言い聞かせた。

ゴールが見えるところまで来て、二人は全力疾走する。僅かだが、紅龍が先を行く。

紅龍の頭の中には、勝利の喜びしかなかった。何故ここまでアキラに拘るのか解っていないまま、アキラに勝った喜びを感じていた。

と、紅龍は、宙に浮いたような感覚を覚え、次に引力に従って地中深くに吸い込まれるような、不快な感覚に襲われた。ふと見た足元には地面がなく、観音開きの大きな扉が、地獄の入り口のように口を開けていた。上を見れば、アキラも落ちてきている。

死の扉……。一度落ちたら戻れない……

その扉を隠していた土や草や木も傾れ落ち、紅龍が手にしていたものも、彼女の腕から零れ落ち、使役していた獣や鳥は難を逃れ、紅龍から離れていた。彼女には何も残されていなかった。

それは侵入者の群れを飲み込む為の大掛かりな罠。その深さは計り知れず、仮に落ちて生命があっても、穴の中から扉を開くことはできない。

紅龍は落ちながら、子供の頃に聞かされた、死の扉の話思い出して、自分を呑み込もうとする闇の口を見下ろした。

！流れ星？

炎の流星が、開き切っていない扉にぶつかり、彼女を目がけて反射してきた。音速を超えた流星は紅龍に体当たりし、そのままの勢いで重力に逆らい、足元確かな地面に紅龍を降ろすと、自身は扉の反対側の地面に降り立ち、ゴールを目指して走りだした。

全ては一瞬のうちに起こった。

アキラは超常の力を使いしなかったものの、生まれついていた能力の違いを見せつけた。

右手にしなやかな若木、左手には一握りの土と、花を付けた山野草。口には松明を咥え、腰には鉄の剣を帯び、その頭上を梟が追っている。

さっきの流星は、アキラが口に咥えた松明が尾を引いたから、そのように見えたのだ。

紅龍も全力疾走した。負けは決まっている。

アキラに対する敵対心は失せ、それでも全力疾走するのは、アキラと、儀式に対する礼儀だ。もう自分は持つべきもの何一つとして持っていない。

それにしても、自分とアキラとの、歴然とした能力の差は、一体何なのだろう。普通の修業では、とてもあの速さは出せるものでは

ない。一つの疑問が、紅龍には浮かんた。

まさか、この人……？でも、あの方は死産であつたと聞かされている。でも、あの速さは説明がつかないわ。呪いを跳ね返して産まれた姫でもない限り、あり得ないはず。

そうだったら……もしもそうだったら、どうして無益な儀式を受けるのかしら？名乗り出れば済むことじゃない……

紅龍の思うところの「無益」とは、儀式が無益なのではなく、アキラにとっては無益だということで、アキラの思う「無益」とは、全く反対の意味合いだ。

アキラがゴールしたことで、谷は新しい巫女の誕生を喜ぶ、華やかな雰囲気変わった。

しかしどうだろう、紅龍は気付いていたのだが、アキラはその手に六つしか、持つべきものを持っていないのだ。これでは一つ足りない。

第7部：八月、瑠璃色の瞳 - 4（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第7部・八月、瑠璃色の瞳 - 5

二人はそれまでの労を^{おぼ}勞われ、それぞれに部屋を^{あて}宛がわれ、そこで祭の準備が整うまで待機するように命ぜられた。

呼ばれてその部屋から出る時には、アキラは巫女の衣装を身に纏^{まと}い、滅多なことでもない限り、外界でも瑞穂の谷でも出会うことは難しくなってしまう。

動くなら今しかない。それが禁を破る行為でも。紅龍は突き動かされるように自分の部屋を出た。

「アキラ……」

「早く、中へ」

アキラはまるで、紅龍が来るのを待っていたかのように、彼女の声が聞こえると、部屋の奥へと引き込んだ。

「解ってるさ。訊きたいことがあるんだろ、紅緒ちゃん」

アキラは暗い部屋の奥の壁に、腕組みをしながら寄りかかって、一見寛いでいるような素振りだ。

「単刀直入に訊くよ、アキラ。あなたは長一族の血を引く者ではないの？ もっとはつきり言うと、死産と伝えられてる、呪いを跳ね返して産まれた姫ではないのでしょうか」

そう言われることを予測していたアキラは、別に驚くでもなく自然体だった。

「ああ、さっきのことか。そんな丁寧語になるなよ、所詮オレはオレなんだし」

「でも、あれは尋常じゃ……。それにそうだったら……」

「そ、もしそうならば、わざわざこんなアホなゲームをしないで済むのに。そう思ったんだろ」

紅龍は頷いた。

「その一族、数多あまたの天皇、皇太子に仕えたり。長たる姫は、神々、精霊、風木火土金水、獣と語り合える、黒く、瑠璃色に輝く針の瞳を持ち、超常の力を発揮する者なり」

紅龍は、まるで教科書を暗唱するように、スラスラと言った。

「しかし、過ちの双生児の誕生により、長一族には姫御子が産まれず、憎しみの弟御子一族に追われ、行方を晦くらませり」

アキラもその後を続けた。

「憎しみの一族に追われているというのに、瑞穂の谷人は、抱いてはいけない憎しみという感情が、如何いかようなものを忘れてはいないか？」

今だって、巫女決めの儀式の参加者は、我先にと相手を憎み、走ってきていた。これでは過ちは正されない。

昔は誰もが瑠璃色の瞳を持っていたのに、自然を支配し、人間同士で憎み、支配権を争ううちに、輝きを失ってしまったんだ」

「あ……」

紅龍は、言葉を失った。

「オレの……、わたくしの本名は『晃緑けいりょく』」

伏せていた目を開き、アキラは紅龍を見据えた。その瞳は、瑠璃色の光を放つ、漆黒の瞳。その名は、過ちの双生児の兄御子と、全く同じ名。

「オレは、オレなりの考えがあつて、無駄とも思えるアホなゲームに参加した。紅龍妃けいりゅうひ、あんたの望みは充たされる。もう人が来るから、戻った方がいい」

有無を言わさない威厳が、アキラには備わっていた。

結局紅龍には、アキラの言ったことが理解できなかった。紅龍の願いは唯一つ、この瑞穂の谷の巫女になることだけだ。他に何の願いが叶うと言うのだろう。

解らぬままに、祭は佳境に入っていた。

「そなたの選びし七つのもの、その理由を聞かせてほしい」

祭は女長老の社の前で行なわれていた。

祭にも、やはり女長老水鏡は、姿を見せずにいた。

この祭は、新しい巫女の誕生を、姿を見せない女長老に報告する意味合いがある。

女長は、新しい巫女に質問をした。

「それではお答え致しましょう」

アキラはよく響く声を上げた。

「鉄の剣、松明、花咲く山野草、一握りの土、若き木の枝、夜の森の主の梟、そしてわたくし自身。

わたくしたち瑞穂の谷人は、自分を自然の中の一部と考え、自然を滅ぼす人間を消滅させる使命を帯びたものです。その為に、強すぎる自我は必要とされず、自然の中に自分を埋没させねばならないそれが始祖杜若妃が求めた条件です。わたくしは、始祖の愛したものを持つて参りました。

わたくしは剣を振り、火を用いて人間を狩る者です。花咲く山野草を愛する者です。それ故、わたくしの一存で殺すことは許されず、土と共に同行を願いました。

生命ある木の枝を手折ることは、無抵抗の者を傷付ける行為です。それ故、枯草に水を浸して傷口を覆い、新しい生命を与える約束を交わしました。願わくば、巫女の社前に挿し木し、育てたいと考えております。

梟ふくろうは夜の鳥。昼であれば、鷺を選びましたが、今は梟の時間。わたくしは狩られる者ではなく、狩る者なので、音を立てずに獲物を狩る梟を選びました。

そしてわたくし自身。生かすも殺すも、行為全てがわたくしの意志によるものです。わたくしは、わたくしの行為に自信と責任を負う者です。それ故、以上七点を女長老さま、並びに女長さまの前に、この任に就く者の証としてお持ち致しました次第です」

アキラは説明した。儀式や形式は、取り敢えず守らなくてはならない。少なくともそう思っていた。

「その者を、巫女として認めましょう。始祖杜若妃の意志を、正しく継ぎし者です」

女長老の社の中から、水鏡の音が響いた。

「ではあちらへ」

アキラは女長に促され、谷人の響動めきの中、三階建ての建物くらしいの高さの、篝火の揺れる櫓に登った。

第7部：八月、瑠璃色の瞳 - 5（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第7部・八月、瑠璃色の瞳 - 6

揺らめく炎の中に浮かび上がった巫女は、とても美しく、凜としている。この後十三年間、最も美しい年令を、彼女は巫女として最前線に赴くのだ。^{おもむ}

谷人はその美しさを讃え、更に大きな声を上げた。谷人の誰もが、彼女の出生を知らずに讃えていた。

アキラは手を挙げ、その声を制した。あまりにも慣れた手つき、その落ち着きように、谷人は水を打ったように静まり返った。

「この度、巫女決めの儀式により、女長老さま及び女長さまから巫女に任命された。今手懸けている仕事の都合上、父母の名も、本名を明かせぬ。暫し、^{しば}わたくしの話を聞いてもらいたい」

アキラの雰囲気、誰もが圧倒されていた。

「先ずは、今日の儀式において、^{はかな}儚く生命を失ってしまった者の冥福を祈りたい。わたくしはその犠牲者の上に、こうして立っているのだから」

ここでアキラは大きく息を吸った。

これからここに立った目的を果たすのだ。

「そして、わたくしは疑問を投げかけたい！」

アキラは一層大きな声を張り上げた。

「過ちの双生児の誕生より四百年、長一族は行方を晦まし、未だ弟御子一族に追われている。

何故、弟御子一族は長一族を追うのか。それは、憎しみという感情に囚われているからだ。それは周知の事実。しかし兄御子^{じゅうぎょくひ}晃緑妃は、敢えて弟御子^{おとみこ}創翔王をお生かしにされた。それは何故か。憎しみは憎しみしか生まぬという重大な教訓を、我ら子孫に残す為ではなかったか。

それなのに、今日の巫女決めの儀式なるものに、その教訓は全く生かされていないではないか。今日参加して、わたくしはそう感じた。共に巫女を目指したものは、同じ参加者を憎み、行く手を阻む為の谷人をも憎み、そして先を目指していた。そのような者が巫女になってもよいものだろうか。

たしかに、わたくしたちは人間を殺める^{あや}集団だ。しかし彼らには理由があり、今日の犠牲者には殺されるべき理由がない。今日の儀式に際し、わたくしは殺人を犯していないと誓える。このような血で汚された儀式によって選ばれた巫女などに、選ばれたとしても、わたくしはその地位に座っていたくはないというのが、本音だ」

アキラによつて生まれた沈黙は、白けに変わった。今決まったら、かりの、たった十三才の少女は、何やら傲慢^{しうまん}とも感じることを言っている。

アキラはこうなることを予想していた。それでも言わねばならなかった。その為に、自分は巫女になったのだ。

「今後、一切の流血を禁ずる。退く女長が、十三才の娘たちの中から次の巫女を、神の御名において指名すること。先代晁緑妃の教訓を生かさねばならない」

突然命令をした巫女を、女長は慌てて静止したが、アキラは黙るうとはしなかった。

「昔からのしきたりじゃ。真の長一族の者以外、変えることはできぬ！」

誰かが言った。

「巫女とは、神の御声を聞く者。それでも変えられぬものか」

アキラは声に答えた。

「冗談じゃない。声を聞いたなどとは、口先だけで何とでも言えるもの。真の長は、瑠璃色の針の瞳を持ち、神と言葉を交わすものだ」
「まあ、よい。わたくしは巫女になることを辞退しようと思っっているのだ。わたくしの代わりに、最後までわたくしと共に進んだ紅龍

妃を、巫女とすればいい。彼女なら、もう少し人間と自然界との関わりを理解できれば、巫女の役割を立派に果たせる器の者だ」

「それは、わたくしが許しませぬ！」

谷人の誰もが驚いた。滅多に声を出すことない女長老が、声を荒げたのだ。

そして次の瞬間、谷人はもっと驚かされる。

「黙れ、水鏡妃よ！」

たった今選ばれたばかりの生意気な巫女が、女長老を一喝したのだ。

「そなた、わたくしに命令できる立場ではなからう。真の長一族の血を引かぬ女長老が。」

わたくしの素性を知っているからこそ、わたくしを縛り付けておきたいだけなのは、充分解っているぞ。自分が解放されたいだけに、このわたくしを縛ろうとしていることもな。

真の長一族より、谷を守る為に守護の力を与えられたのなら、真っ先に谷のことを考えよ！今、わたくしが巫女に就けば、かえって混乱を招くことくらい、解るはずだ！」

女長老への巫女の無礼に、無数の非難の声が上がり、その場は収拾のつかない状態になった。それでもアキラは大声を上げた。

「静まれっ！お前たちの望むものを見せてやる！」

アキラは手にした榊さかきの小枝で、顔を隠した。

「止めなさい、止めるのです！」

水鏡が悲鳴にも似た声を上げたが、アキラはその声を無視した。

「我が名は晃緑。神々と、この瞳の色と、我が名にかけて、巫女決めの儀式における流血の一切を、今後禁ずる！」

榊の小枝を下ろした後に現れたのは、瑠璃色に輝く漆黒の瞳……

「こうすれば良いのだらう。こうすればそなたたちの気は済むのだ

ろう。わたくしの存在を公にすれば、奴らはわたくしを狙いに来るのは明白。弟御子一族の情報収拾能力が侮れぬことくらい、そなたたちでも知っているだろう。

それでもわたくしは、そなたたちの為に、女長老が付けて下されたこの呪われた本名を明かした。そなたたちが、このわたくしに軽率な行動を取らせたのだ。この罪は重いぞ！」

滅多なことでは姿を見せない水鏡が取り乱して櫓の上のアキラに縋り、谷人たちは声も出さずに平伏していた。

第7部：八月、瑠璃色の瞳 - 6（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第7部・八月、瑠璃色の瞳 - 7

「紅龍妃よ、そなた、巫女になれ」

「そのような勝手なことを！」

水鏡と紅龍は、同じことを言った。

「本名を明かしたあなたは、巫女ではなく、正式な長にならねばならないのですよ」

「何を今更。谷には立派な女長聖流妃がいるではないか」

「晃緑妃、呪いを跳ね返して生まれし姫君よ、あなたは責任重きその座を前にして、逃げ出そうというのか？決められた運命から逃げようとするのか？」

紅龍は自分で言いながら、自分に驚いた。儀式の前であれば、どのような手段を使っても巫女になりたかったはずだったのに、今は逆のことを言っている。

「……今更、長だの何だのと、四百年もの永きに渡って、守るべき谷人からも行方を晦ませていた者が、長など勤まるわけがないし、いなくても谷は動く。偉そうなことを言えるわけがないよな」

アキラは自嘲気味に言った。

「十三年前の雪の日、身分を偽った長夫婦が密かに谷に戻り、双生児を産んだのを、長老方はご存じであろう。」

一人は泣き喚く男子、一人は産声を上げぬ女子。

過ちの双生児の一人、兄御子晃緑妃は今際の際に預言をした。再び双生児が産まれたならば、それは修正の双生児。運命に翻弄される者たちであると。修正の双生児の一人でも欠けてしまえば、瑞穂の谷は滅びてしまうと預言はなされているはずだ。

わたくしは谷を滅ぼす最後の長にはなりたくない。紅龍妃は我が母から聞かされて知っているはずだ。このわたくしには双子の弟がいたけれど、今は行方不明で捜していると」

紅龍は頷いた。確かに聞かされていた。だが、あの女性が長の妻だったとは知っているわけがない。

「あの姫は死産だったはずじゃが……」

「そう、それは正しい情報だ。しかし真実ではない。」

真実は、青風月王は生後間もなく弟御子一族の長、氷河王の手の者に連れ去られ、現在は氷河王からも連れ去られ、行方不明だ。

弟御子一族も女子死産の情報を信じ、守るべき身体の彫り物が弟にあると思い込み、そして連れ去ったようだが、誤りに気付いた時には時、既に遅しだ」

アキラは静かに語った。先ほどの激昂した姿は消えている。

「水鏡さま、紅龍、オレはこの谷を守る為にも、弟を捜し出さねばならない。それが長の義務だと思う。」

我々の誕生は神々の運命たものかもしれないけど、我々の未来はこれから作らなきゃならない。オレらはその為の修正の双生児なのだから。

逃げるんじゃない、運命から逃げられるものなら逃げてみたい。

でも逃げられないから、このオレは」

アキラは自分の言葉に戻した。本音を語るのに、堅苦しい言葉は不似合いだ。

「ならば何故、無益だとお感じになっていた儀式に、敢えて参加されたのでしょうか。身分をお明かしになられれば、それこそ無益な殺生は避けられたでしょうに」

「ここに連れて来てくれた女長老さまに、身分を明かすなと言われていたし、そもそもどんな儀式をするのかも教えられていなかった。それに自分自身、巫女になりたくなかったから、できることなら参加したくなかった。」

でも女長老さまは参加は義務だと仰る。そう言われたら逆らえない。

そして参加してみて知った儀式の内容に驚いて、逆に巫女に選ばれようと思ったわけだ。そうしなければ儀式を廃止できるだけの権限を持つことができないから。

ただ、知らなかったとはいえ、谷の娘を無駄に死なせてしまったことは、赦されるものではないな。それでも謝らせてもらおう」

アキラは頭を下げた。他人を納得させる為には、これくらいしなくてはならない。

「オレは行方を晦ませてきた。しかし、もう存在は隠さぬ。氷河王を狩り、過ちを修正せねばならない。隠れ続ければ、氷河王からは逃れ、オレ自身の生命は守れるだろうが、結末はオレを見つけてくれない。」

ならば、オレは先を目指す。谷人から行方を晦ませはしない。それは約束する」

女長老水鏡妃は、あれ以来声を出していない。

「だから、この四百年もの我が一族の争いを終わらす為に、どうかオレを谷に縛り付けないでくれ。紅龍、巫女になってくれ。水鏡さま、紅龍を認めて下さい」

「私ごと小者でよろしいのであれば、微力ながら、真の長に従います」

紅龍は答えた。

「晃緑妃よ、わたくしもあなたの決定には逆らいませぬ。確かにあなたは谷のことを考え、そして結論を出したのだから」

水鏡も言った。

「有難うございます、水鏡さま」

アキラは頭を、深々と下げた。

「ところで、晃緑妃のご両親は？ご健在のはずであろう。未だお若いのだから」

「……」

誰かの言葉に、アキラの顔が凍った。

「我が父母、風螢王^{ふうけいおう}と銀星妃^{ぎんせいひ}は、共に五年前、彼の地で氷河王の手
の者に殺された。

呪いの言霊は生きているが、しかし安心しろ。見ての通りオレは
女で、しかも丈夫だ。何も怖いものはない」

「なんと頼もしい一言だ」と、あちこちから聞こえたが、アキラ
にはそれが悲しかった。怖いものはないかもしれないが、自由も何
もないのだ。

「水鏡さま、先程のご無礼をお赦し下さい。ご自身よりもこの私の
ことを慈^{いつく}しんでくれたことを、知らないわけではありません」

アキラは水鏡に土下座をした。そして櫓^{うぐい}から身を乗り出し、宙を
歩いて紅龍の頭上に立った。長一族であることの演出だ。

「紅龍妃よ、先程の私の言葉を胸に刻み、女長老、女長の善き相談
者になれ。始祖杜若妃の意志を継ぐ者となれ。あの儀式を生き延び
たのだから」

紅龍は宙に立つアキラの、輝く瑠璃色の瞳を見据えて言った。

「畏^{かしこ}まりました。必要とあれば、最前線のわたくしをお呼び下さい」
「有難う。そして女長聖流妃よ、我儘をお赦し下さい。巫女紅龍妃
をお導き下さい」

「畏まりました。わたくしどもは、あなたさまが青風月王を連れて、
この瑞穂の谷にお戻りになられる日を、心よりお待ち申し上げてお
ります」

優しく微笑んだ女長聖流妃に一礼すると、アキラは瞬間移動をし、
瑞穂の谷を後にした。

第7部・八月〜瑠璃色の瞳〜 - 7（後書き）

次回から第8部・九月〜定められている七人の運命〜を始めます。

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfradia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第8部・九月〜定められている七人の運命 - 1

8・九月〜定められている七人の運命

自分の家に戻ったアキラは、普段と変わらないアキラだった。

「ああ、水鏡さま、口では赦^{ゆる}してくれたけど、ほんとに怒^{いら}ってらっしゃるだろうな」

アキラはため息をつきながら、電気のスィッチを入れたその時だ。暗闇の中から「如何^{いか}にも怒^{いら}っておる」と、水鏡の姿が浮かび上がった。

「うげええええっ！」

「はしたない声を……」

「でも……」

叫んだアキラを冷静に窺^{たしな}めた水鏡に、当のアキラは言い訳を飲み込んだ。

驚かせたのは、あんただと。

「神出鬼没とは、まさにこのことですね」

アキラは精一杯の皮肉を言った。赦^{ゆる}してくれるかな、などと心配していたことなどあほらしくて、そんなもんは忘れた。

一方水鏡の方も、普段と変わった様子など微塵^{みじん}も見せず、自分の話を始めた。

「谷の巫女は紅龍妃でも良いでしょう。あなたが長としての自覚を持ったのだから、これは喜ばしいことです。

しかし、わたくしはあなたたち長一族の代わりをする為に生まれついた者です。ですから、わたくしはあなたに遜^{へりくた}った態度を取るつもりはありません。第一、あなたを育てたのは、他ならぬこのわたくしですから」

「先程は、本当に申し訳ありませんでした」

微笑む水鏡に、アキラは再び謝罪した。

「真の長として、自分の我儘が正しいと示す為に、私の至らない頭では、あの方法しか思い付かなかったのです。

でも、私は間違っではないかと思っっています、あの選択は」

「さつきも言っただけでしょう。わたくしは、あなたの選択をとやかく言える者ではないと。

わたくしとて、あの儀式が善いとは思っていませんでしたし、あなたが真の長であることの自覚を持ってもらいたくて、儀式に参加させたのですし。ただ、誤解されたら嫌ですからわたくしも、これだけは言わせてもらいます。

わたくし、確かに百五十年余の寿命を生きてきていますが、別にあなたに解放してもらいたいとは、一度たりとも考えたことはありませんよ。これはわたくしの寿命なのです。この力が親に備わっていたから、女長だった白橡妃しらおうきみが、あなた方一族の行く末を案じられ、わたくしの親を女長老として迎えたのです。過ちが先ではなく、わたくしたちの能力が先にあったのです。

……それにしても、予定は未定とはよく言っただけですね。わたくしはあなたに、谷に落ち着いてもらいたかったのですよ、本当は」
「それは無理です。わたくしの性格を、水鏡さまは一番ご存じのはずです。誰もわたくしを縛ることはできない」

その後のため息か沈黙が怖くて、アキラは間髪入れずに口を開いた。

「確かに、確かにその通りです」

水鏡は微笑んだ。アキラのその気持ちが解るのだ。

「ところで、あなたの今後のことですが、あなたは紅龍妃に、もつと修業を積むように言っていましたね。そこでわたくしも、未熟なあなたに修業を課します。

大地、海、豊饒を祀っている神社を一つ、あなたに任せます。そこで来るべき日の為に修業をなさい。これはわたくしの命令であり、

あなたに与えられた義務です」

また巫女騒ぎかよ……

「役目から逃げられたなど思っているようでは、まだまだ未熟ですよ、アキラ」

アキラの心を見透かしたようなことを、水鏡は言った。

「はい……」

逆らう気力など、アキラには残っていなかった。

「では、残りの夏休みを楽しみなさい。始業式はいつですか？」
まったく水鏡の質問は予想もつかない。

「は？八月の二十六日ですけれど……？」

「その日の午後、あなたの担任の先生とお話をしたいので、先生に予定を空けておくよう、頼んでおいてくださいね」

「はあ？」

アキラは、水鏡からしてみればはしたない声を出した。

「わたくしは、桂小路 晃の保護者ですよ。何の不思議もないですよ」

優しく微笑む水鏡に、アキラは何も言えなかった。水鏡ときたら、見かけによらず、結構頑固な性格なのだ。アキラが何と言おうと、結果は何も変わりやしない。ましてアキラが我儘を通したばかりだ。

水鏡は「では、その日に」と言い残し、巫女騒動の冷めやらぬであろつ瑞穂の谷に、瞬間移動で戻って行った。

「その日になんか、オレは会いたくねえってんだよ！」

アキラは、完全防音の自宅で、大声を出した。

確かに水鏡は美人かもしれない。しかし、時代錯誤も甚だしい瑞穂の谷人で、しかも女長老。

いつも訳の判らない和服を着て、訳の判らない角隠しのようなものを被っていて、とても共には歩けない。困ったことに、それが普通だと信じているし、頑固だから谷の生活をそのまま貫きそうな気

もする。

冗談じゃない。

ただでさえ人目に付きやすい容姿なのに、ド派手な衣装で登場では、今までようやく築き上げてきた自分のこれまでのイメージが、音を立てて崩れてしまう。

しかし水鏡は止められない。それならば、せめて好奇心旺盛な力ズヤとポンの目に付かないことだけを祈るしかない。

まあ、ポンはデリカシーが少しはあるからいいとして、一人っ子の坊っちゃん育ちのカズヤは悪人ではないにしろ、過保護なサキの所為で、人と人との付き合いの最低守るべきラインに気付かないことがあるような人間に育ってしまったている。

こいつが一番危険人物だ。訊かれたことに答えないと、余計に首を突っ込んでくるに違いない。

文化祭の為の合宿もある。

頭痛の絶えない夏休みになりそうだ。

既に痛い頭を、アキラは抱えこんだ。

第8部・九月〱定められている七人の運命〱 - 1（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第8部・九月〱定められている七人の運命〱 - 2

恐怖の八月二十六日がやってきた。

さすがのアキラも、その日は朝から気が滅入^{めい}っていた。

「お早よう、アキラ。今日は正午にそちらに行きますからね。わたくし、その時間帶しか時間を作れませんでしたので、担任の先生にお願いして下さいね」

「は、はい……」

そんなに忙しいなら、別に来ないでもいいじゃんかよ。

アキラは心の中でぼやいた。

「ああ、そう言えば、あなたの担任の先生は、あなたの部活の顧問でしたね。何と都合の良いことでしょう」

「はあ……」

全然、都合なんか良くねえよ……

「では後ほど。わたくしは、一度谷に戻ります。いいですね、正午ですからね」

につこり笑って念を押し、水鏡は姿を消した。

「ああっ、もうっ、ふざけんなっ！」

とうとうアキラは叫んだ。こんなに悪気ない立ち振る舞いで、精神的圧迫を受けたのは初めてだ。

アキラは観念し、真面目に制服を着ていた。入学して以来初めてのことだ。

スカート丈は今更どうにもならないが、ボタンを閉めて、スカーフをリボンに結び、きちんとベストを着ている。その格好が始業式の二年五組に衝撃を与えたのは、言うまでもない。

「せーんせ」

始業式も終わり、部活のメニューを聞きに来たアキラが、こんなに可愛い声を出すのは初めてのことだった。

「何？」

葵は身構えた。

「そんな身構えんといてよ、葵ちゃん。前に言っただろ。今日、オレの保護者が来るって。それで、ちよつと頼みがあるんや」

アキラは彼女らしくなく、ちよつと困ったような顔をしていた。

「お願いっ、変な人なんやけど、気にせんといてわ。作法室空けてもろて、そこで会ってくれないかな。正午に来るんやけどな」

「何だ、そんなこと」

手を合わせたアキラに、葵は思わず笑った。アキラがそこまで困るとは、相当な人なのだろう。

「変な人って、どのくらい変なの？」

「何て説明したらええんだか……。純和風の究極のマイペース人間、加えて超美人。そんでもって、どっかしら感覚がずれてるんやわ。冗談を言うような人じゃないんやけど、とにかく変なんやわ」

「……解ったように解らないわ」

「上品なんやけど、世界が違う人だよね」

「どうして世界の違う人が、あなたの保護者なの？」

「そこでつつこまんといてな。オレ、すごく真剣なんやさかい」

「はいはい」

「あー、冷たいの」

「冷たくないわよ。じゃ、練習メニューは、午前中は個人練習。午後は一時からパート練習、セクション練習、三時から合わせで、五時上がり。これでどう？」

葵は、ちゃんと時間取ってあげたでしょ、と言いたそうな、得意げな顔をした。

「何や、いつもと同じじゃんか。何が冷たくないだ、充分冷たいやん」
アキラはげんなりした顔をしてみせた。

「そんなこと言わないの。ほら、基礎練習は部長がいないと始まらないんだから」

「はい」

アキラは、肩を落としたまま音楽室に向かった。

鬼部長と名高いアキラの基礎練習だったが、今日は殆ど身が入らない。水鏡のことが気になって、さっぱり上の空になってしまっていた。

水鏡の腹の底が知りたかった。どうして葵に会いに来るのか、皆目検討が付かなかった。巫女をやらせる話と葵に会う話。どこがどう繋がるのだろう。第一、何処の神社の巫女を自分にやらせるのか、アキラは全然聞かされていないのだ。

正午になる少し前に、アキラは午前中の練習を切り上げた。副部長のコメチに、自分が午後の練習に間に合わない場合、フルートパートを見てくれるように頼み、心重たくなる現実に向かうべく、校門前で水鏡を待った。

「アキラ、お待たせしました」

アキラは目を疑った。亜里の店の柔らかい色のスーツを着た、現代風の水鏡がいるではないか。しかも例の角隠しもない。

正直驚きはしたが、アキラは安堵の気持ちを禁じ得なかった。

「どうかしましたか？」

「いえ、あの、水鏡さまも、洋服をお召しになられるのだかと、正直驚きまして……」

「わたくしだって、まさかいつもの格好で来るわけにはいかないことくらい、常識で解りますよ」

「済みません……」

心配を見透かされ、アキラは小さくなった。

「よお、アキラ。痩^やせたよな、お前」

「夏^{なつ}ばてでもしたんだべや」

最悪……

アキラは背後からの声に、振り返りたくもなかった。

「昼休みだろ。弁当食わないのワ？」

うるせーよ、と言いたところだが、水鏡の手前、それだけは言えなかった。口を開けば汚い言葉のアキラとしては、サキとカズヤを前にしながら、沈黙を守らねばならなかった。そしてこれはとても辛いことだ。

「葵ちゃんにお客さまなんだ。放つといてくれないか」

アキラは、精一杯の返事をした。

「ああ、んだからか。その真面目な制服。驚いたよな、サキ」
「んだ」

アキラは、完璧無視を決め込んだ。

「今、担任を呼んで参ります。少々お待ち下さい」

アキラは葵を呼びに、職員室に向かった。

「何だ、あいつ？」

「さあ……。制服は真面目だし、変なモン喰ったんじゃないのワ？」
あまりのあっけなさに、サキとカズヤは拍子抜けし、顔を見合わせた。

第8部・九月〱定められている七人の運命〱 - 2 (後書き)

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第8部・九月、定められている七人の運命 - 3

「あの娘の友達か？」

「あ、は、はい」

呼ばれて初めて、アキラの連れてきた客に二人は気が付いた。それだけ水鏡は静かに立っていた。

どうして気が付かなかったのだろう。見たこともないような美女が、自分たちの前にいるではないか。

しかし、その緊張は一分ともたなかった。

男というものの悲しい性か、サキは恥ずかしそうに俯いて、カズヤは口の端がだらしないこと極まりない。

「名は？」

「鈴木和哉。カズヤこっちは鈴木賢木。サカキ」

慌ててサキの分まで自己紹介したカズヤが可笑しかったのか、水鏡は口に手を当てて笑った。そして、旧知の間柄の人間を見るように、カズヤとサキをじっと見つめて言った。

「あの、強がりの娘をよろしく頼みますよ。わたくしは、あの娘の保護者をしている、水鏡と申す者です。では……」

水鏡は、遠くからやって来るアキラの姿を認め、情けない姿の二人を後にして、歩き出した。

「水鏡さま、こちらでございます」

アキラは、学校内で唯一和室の、茶華道部の部室でもある作法室に、水鏡を案内した。中では、アキラに先入観を植え付けられた、葵が畏まって待っている。

「どうぞ、楽にして下さい。突然お伺い致しまして、誠に申し訳ありません。わたくし、水鏡と申す者です」

アキラの先入観に従い、葵は水鏡の素性を疑問に思っても、何も訊かずに頭を下げることにしていた。

「このような他愛のないことで、大切なお時間を割いていただいたというのも恥ずかしいのですが……」

「何でしょう？」

「実は、この娘を退部させてもらいたいのです。もつと厳密にお頼みするのであれば、午後四時には、下校させてもらいたいのです」

「はあ？」

あまりにもあっけない用件に、アキラと葵は、同時に声を上げた。「どういうことでしょう。確かに、退部しなければ四時下校は難しいでしょうけど、何も……」

「そうですね。この娘ならば、自分のことは、さつさと順序立てて行動できるでしょう。けれど、今回ばかりは、そうもいかなさそうなので」

葵が濁した言葉を読んで、水鏡は言った。

例の巫女騒ぎのことか。いくらオレが平凡な生活を望んでるからって、何も葵ちゃんに頼まなくてもなあ。

アキラは心の中で文句を言った。

「では、その、退部はいつからでしょう？」

「そうですね。早ければ早いほど良いのですが」

「と、言われますと、期日ははっきり決まっていらないですね」

「そういうことですね。この娘の準備が整い次第の話なので」

「では、少し待ってもらえませんか」

「何か？」と、水鏡は問い掛けた。

アキラは葵に驚いた。初対面の、しかも水鏡を相手に、全然物怖じすることなく話ができるとは、想像していなかったのだ。

「実はこの秋に、ソロコンテストがあるのですが、彼女は一般の部で出場が要請されるくらいの実力があります。できましたら、それが終わってからにしていたきたいのです。全国大会が終わるのは、年末になってしまいますが」

水鏡は暫く考えていた。それから、考え込む水鏡を見ているアキラに言った。

「解りました。年末まで待ちましょう。わたくしも、この娘の演奏を聴いたことがありますですね」

「有難うございます」

葵は頭を下げた。

「アキラ、わたくし、あなたのそのような表情、初めて見ましたよ。余程この地は、あなたには良い環境だったと見えます。一瞬の不安、そしてその後の心底安心しきった表情。本当に珍しい」

「え？」

振り返って微笑む水鏡とは対照的に、アキラは顔を緊張させた。今の水鏡の言葉の内には、アキラに平凡であることを許さないような厳しさがあつた。

そう、平凡であることを自ら捨てると宣言したアキラにとって、早速そう言われてしまうということは、この上ない失態だ。

当の水鏡は別に何の気なしに言ったのかもしれない。逆に、アキラの宣言を受けて厳しくしたのかもしれない。

何れにせよアキラは、他人の言葉に含まれる意味に気付かないようでは、谷の長が失格だと思い込んでいる。

アキラは、赤面を隠すために、窓の方へ顔を背けた。

？

生温い風にはためくカーテンに、人影が映っている。

あの、大馬鹿野郎どもめ……

アキラは泣きたくなつた。どうしてカズヤは、予想通りの行動を取ってくれるのだろう。

水鏡と葵に目礼をすると、アキラは窓辺に歩み寄り、カーテンに映る人影に向かって、一発拳を見舞った。手応えはあり。

「自業自得だ、カズヤくん」と、サキの呆れ声が、遠くからして

いた。

「どアホ」

アキラは、聞こえないくらい小さな声で、カズヤに向かってつぶや「呟いた」。

「丁度いいわ。アキラ、窓を閉めて、席を外してくれるかしら」

「はい」

アキラは水鏡に言われた通り、窓を閉め、席を外した。聞こうと思えば聞けるのだが、そんな小細工は水鏡に通用しない。水鏡が葵に会いたがっていた理由は、この会話がしたかったからだということだけ解れば、アキラはそれで良かった。

その後は、葵の態度から推察ができるのだ。

第8部・九月〱定められている七人の運命〱 - 3 (後書き)

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第8部・九月〜定められている七人の運命 - 4

アキラが席を外してから二、三分。ようやく水鏡は口を開いた。

「あなたさまを信用し、あの娘の真実をお話しします」

葵は今度こそ本気で身構えた。

たしかに、信じられないくらいに謎が多い生徒だ。何が出てこようと、驚くまいと心に決め、葵は居住まいを正した。

「あの娘の一族は、空蝉うつせみの一族と呼ばれています」
水鏡は口を開いた。

「空蝉……。蝉の脱け殻のことですね」

「ええ。無です。あの娘は憎しみに駆り立てられて、虚しい無の人生を送るか、それ乗り越えて生を得るか、二つに一つの人生しか持ち合わせていないのです」

聡明な葵は、水鏡が自分に何かを頼もうとしているのではないかと、何故か感じた。

「私に、一体何ができるのでしょう?」

葵は訊ねた。

「信じるか否かは、あなたさま次第。わたくしは、あなたさまがあの娘を想っていて下さる心に賭けたいと思い、今日は来ました」

水鏡は大きく息を吸った。

「あの娘は、科学では納得して貰えない能力を持っています。それ故、数奇な運命を背負い、流され、生まれながらにして生命を狙われる身です。

勿論、あの娘には何の非もありません。全ては生まれる前から定められた宿業。強いて理由を付けるならば、あの娘に備わった能力が、祖先の誰よりも強いからでしょう。

あの娘だけに与えられた能力は、あの娘の心一つで、人類の滅亡

を引き起こせる力です。その力を悪用せんと欲する輩は多く、それらから、あの娘は身を隠しているのです」

突拍子もない話に、葵は言葉も出ない。

「早合点はしないでください。わたくしは、あの娘に人類を見極めてもらいたくて、この地に來させたのです。よい環境で暮らせば、あの娘は人類を滅ぼそうなどと思うことはありませんから。」

大丈夫、わたくしの期待通りです」

「そうではありません。そんな身なら、ソロコンテストで公に出^{おおやけ}てしまつて、大丈夫なのでしょううか？」

「大丈夫。自分の身を守る術^{すべ}を持っているから、あの娘は自分の意志で決めたでしょう。心配には及びません」

水鏡は、内心ほくそ笑んでいた。葵は水鏡の思惑にはまっている。

非現実的なことを信じるかどうかは解らないが、アキラの生命を話題の中心にすれば、葵はアキラを心配し、葵は水鏡の話を聞いてくれるだろう。

水鏡は、サキやカズヤだけではなく葵までも、アキラの、運命という逆らいがたい潮流に取り込んでしまったのだ。

「あの娘が本当の生を得る為に、どうしてもあなたさまのお力添えが必要なのです」

「何でしょう。私にできることならば」

葵は、それがどういふことになるかも解らずに、アキラのことを考えて言っていた。

「ここ神森の方々は、信仰心が厚いと聞いております。あの娘も、ここではないにしろ、巫女の家系に生まれました。

先ほどの下校時刻のお願いの理由ですが、あの娘もそろそろ巫女の修業をしなくてはならない年令になったからです。但し、その素性を知られてはならないのです。確か六人……男の子四人と女の子二人でしたか、わたくしの神託ではそう出ました。素性をこの六人に知られてしまいますと、あの娘は今の平和な生活を失い、修羅の

中で生きねばならぬのです。その六人を道連れにして。

あの娘が、自分本位の人間ではないことは、あなたさまはお解りかと思えます。でもそれは、あの娘に大きな負担となり、返って全員を早く死に導いてしまいか、或いはあの娘が人間不信に陥おちいって、禁断の術を使ってしまうかも知れません。あの娘にとって、理性と狂気は紙一重の距離でしかないのですから」

葵は水鏡の話に、背筋が寒くなるのを覚えた。確かにアキラの感情は計り知れないほど深く、アキラはそれを隠している。それを日常的に感じているからこそ、水鏡の話が怖ろしく感じるのだ。

「六人を引き離せるなら、これ程簡単なことはありません。それができないのです。」

あの娘たちは、いわば運命協同体、繋ぎ止めているのは修羅なのです。平和のうちに繋がっている今の状態が続けば、修羅に堕ちることはないでしょう。

それにあの娘は、自暴自棄になりやすい性格です。六人がいなければ、自分を縛るものが何もない状態になり、自分の生命を狙う者の前に出ていって、闘ってしまふ。自ら進んで修羅に堕ちていく。それをどうか、どうか止めて下さい。わたくしは、あの娘が苦しむ姿を見ていられない……」

後は葵次第の賭けだ。だからこそ、水鏡は誠心誠意を込めて真実を話し、葵に懇願する。賭けが失敗に終わらないように。

「転校でもない限り、七人を引き離さないことは、私にはできることです。そもそも私の方から頼んで担任をさせてもらっているくらいですから。」

それにしても、あなたは先程言われましたが、アキラには憎しみに駆り立てられる虚しい人生が、有意義な人生かしかない。それならば尚更、あの頭のいいアキラに限って、憎しみに駆り立てられるなどないのでは？ 第一、誰をそこまで憎むのです？」

葵は素直に疑問を口にした。

「確かに、あの娘は頭がいい。でもそれは普通の環境で育っていればです。」

しかしそうではない。表向きは事故死になっていますが、あの娘は九才の時に、目前で両親を殺されているのです。為す術なく、ただ両親が死にゆく様を見せ付けられて、一体何処どこに激しい感情をぶつければよいでしょう。ですが、何処かにぶつけるには、あまりに大きすぎる憎しみです。そのやり場のない感情を持て余し、今の彼女は半ば無の存在になりつつあるのです。

それでもあの娘は強く生きていこうとしています。ただの平凡な少女になりたくてもなれない。それでも平凡でありたいと願う一方、定められている運命に立ち向かって行こうとしているのです。

鎖でがんじがらめになっても、涙一つ見せずにその身を細らせ、近くて遠くにいる弟を捜しているのです」

葵は思わず肩を抱いた。空元気だと解ってはいたが、普段笑っているアキラが、まさかそのような目に遭っていたとは、想像だにしていなかった。

「ご心配しないで下さい。私にできることなら、何でも致しますから」

力強い葵の言葉に、水鏡は深々と頭を下げた。

第8部・九月〱定められている七人の運命〱 - 4（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第8部・九月〜定められている七人の運命〜 5

「まったく、ぐだぐだうるさいなあ」

作法室から出てきた水鏡を人気のないところまで案内すると、アキラは自分の教室で、フルートパートを率いて練習を始めた。水鏡は勝手に瑞穂の谷に帰れるから、余計な心配は要らない。

ところが練習に戻った教室には、運の悪いことに、天然パーの力ズヤがいた。もうその眼差しは興味津々。

「お前な、明日、大会なんやる。さつさとバレエ部行けよ」

「大丈夫だって。オレ、上手いもん。^{うま}それより、さっきのお姉さん、お前の姉ちゃんか？」

「あー、もう、さつさと消えてくれよ！」

アキラは心の底から頼んだ。

別にアキラは、カズヤが何に興味を持とうと、本当は一向に構わなかった。興味を持つということは、ごく自然の成り行きで、アキラには侵すことのできないカズヤの領域だ。そしてアキラは、自分が静かにフルートを吹けさえすれば良かったのだ。

自分はカズヤの領域に干渉しない分、自分の最低の環境を侵されたくはなかったのだが、実際のところ、今はその最低の環境すら、カズヤは侵している。そして彼はそのことに気付いていない。

「オレには姉貴なんていねえよ」

「じゃあ、誰？」

「あーっ、うつせーんだよ！」

彼女は机を叩いた。^{たた}

この男、マジでウザいんだけど。どこまでオレのこと苛^{いら}つかせるつもりだ？

事実、カズヤは日々安穩に暮らしてきた一人っ子の坊っちゃんだ

から、今みたいに他人のことを考えずに、自分の欲求を充たそうと、つい振る舞ってしまうことがあった。アキラが平凡になる為に、自分の本性を抑え込んでまで周りと協調するところとは、まるで正反對だ。

ただし、アキラは面従腹背で何を考えているか解らない反面、カズヤはお人好しで素直。悪く言えばただの単純馬鹿だ。

机を叩いたアキラの態度に、思わずカズヤは警戒した。

アキラが、以前見た、理性の吹っ飛んだ状態になってしまったら、サキですら敵わない相手をどうにかできるわけがない。何しろ自分はサキに敵わないのだ。そんな自分がサキに敵わないアキラを抑えられるわけがない。今この場には頼みのサキがいないのだ。

ただ、未だ、自分が取っている態度が、アキラにどう思われているかは解っていないようだった。

勢いで立ち上がったアキラは、極力感情を押し殺した声で、「サックスパートと練習して来てえな。オレ、このうすらバカとけりつけないあかんさかいな。コメチにこう言えば解るから」と、可愛い後輩二人に言くと、カズヤをキツと見据えた。

あまりの鋭い眼光に、カズヤは一步下がった。

教室にはアキラとカズヤだけしかいなかった。

「まったく、そのガキっぽいところ、いい加減直せよ。あの過保護なサキの所為だせいよな、それは」

誰もいなくなると、ある程度の状況を知っているカズヤが相手だから、エセ関西弁は消えて、悪いながらも標準語にアキラは戻る。「サキのやつ、他人の心配するよりも、自分の心臓の心配しろってんだ。」

ま、今日のところは我慢して、お前の悪いところを教えてやるよ、このおおぼけナスの、うすらとんかちめが」

アキラの口から、意外な悪態が出てきたのに、思わずカズヤはぶ

つと嘖^ふき出した。

「お前さ、よく笑えるよな。他人がが怒ってんのにさ、感心しちゃうよ」

爆発しそうな怒りを堪^{こら}えて、アキラはぐつと腹に力を入れた。すると……

「あ、ありがとう」

アキラは肩の力が抜けていくのを、はつきりと感じた。他人が本当に怒っている空気すら読めないのだ、この男は。今、アキラの目の前にいるのは本当のバカだ。

だからサキが放っておかないのか……

アキラはサキに同情した。だが、アキラはサキほど人間が優しくはない。厳しいことをはつきり言うことが、アキラにとっての優しさだ。

「お前さあ、オレがお前の無神経を馬鹿にしたの、気付かないわけ？」

「あ、そうだったのワ」

ようやくアキラも、カズヤが遠回しにいつて解^とってくれるような人間ではないことに気付いた。だからと言って、カズヤの人格を受け入れるつもりはない。逆に、手厳しくいくつもりだった。

「あのお方はな、オレの保護者だ。普通なら親が保護者だけどな、オレは違うんだ。いいか、耳の穴かっぱじってよく聞きな！」

アキラの言葉通り、カズヤは耳の穴をほじった。そしてアキラは、その耳を引っ張り、耳元で大声を出した。

「オレの両親はな、オレが小学校三年の時に死んでんだよ。二人仲良くなっ！」

「……」

頭がキーンとして何も言えないのもある。しかしそれよりもシヨ

ツクが大きくて何も言えずにいるカズヤに、アキラは更に追い打ちをかけた。

「どうだ、満足したか。これがお前の聞きたがっていたことだよ。黙り込んでお前のような鈍感な人間でも、どんなことが他人に不快感を与えるか、ちよつとは解る時もあるんだな。意外だな」

自分の触れられたくない過去を語るといふ、自虐行為を取り、そうすることでカズヤを「鈍感だ」と傷付け、傷付けられて何も言えないカズヤを更に痛め付け、冷たい視線を突き刺し、例の無表情のまま鼻で笑い、アキラは教室を出ていった。

第8部・九月〱定められている七人の運命〱 - 5（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第8部・九月〜定められている七人の運命〜 6

傷付いたのは、カズヤではなくアキラだ。その構図はカズヤでも理解できた。というか、理解させられた。アキラは相手を傷付け、そして更に自分を傷付けていた。

カズヤは「ゴメン」の一言も言えなかった。

始めはアキラが何を怒っているのか解らずに呆ほうけていたが、アキラの自虐行為を見て、カズヤは自分が取り返しのないことをしてしまったような気がしていた。

自分の無神経な態度が他人にどれだけ不快感を与えるか、アキラはそれをカズヤ自身に気付かせるために、敢えて自虐行為を取ったのではないだろうか。

それに気付いたカズヤの心の中には、アキラに一番言わせたくないことを言わせてしまった無神経さを、恥じる気持ちで一杯だった。

家にいれば、一人っ子のカズヤはそれなりに甘やかされていたし、友達の間においても、必ずカズヤの隣にはサキがいて、厳しくもあったが、とやかく気を遣つかってくれていた。

要するに、生まれてこのかた十三年、気に入らないことや思い通りにならないことなど、何一つなかったのだ。

確かに、カズヤの欲望自体が大したことなかった所せい為もある。しかし、その小さな欲望でも、誰かがどうにかしてやるということとは、感心できることではない。助けてくれる人がいるから、カズヤだつて甘えるのだ。

欠点をアキラに怒鳴られて、カズヤは初めて気が付いた。今まで生きてきて、初めて他人に欠点を指摘されたことに。

面倒なことは避け、考え込むような場合には早々に割り切り、自

分を客観的に見つめ直すようなことはしないカズヤが、初めて冷静になって考え込んだ。

考えるということは面倒なことだ。

だから、物事を一面から見ただけで思い込んで、多方面から見ることがやめる。他人の意見を鵜呑みにする。自分が悪く思えてくるのが判るから、考えることを拒絶する。

だが、カズヤを含めた大部分の人間は、自分たちが意識下でそのような卑怯な逃げ道を作っていることすら、気付かないふりをして忘れている。他人にそれを暴かれたときには、全ては意識下の出来事なのだと言い切るが、本人たちはそれが言い逃れではなく、本当にそう思い込んで、信じているのだ。

何しろ人間という生物は万物の霊長であるから、都合のいいことを思い込むことができるという、他の生物には到底真似のできない素晴らしい芸当がある。それはまさに人間だけに与えられた、神にも優る力というべきだろう。

もし人間が、自分の逃げ道が、自分の意識によって為されたということをはつきりと思い知らされたら、どうするのだろう。

更に自分を虚構で塗り固めるか、さもなければ、例えばうつもない深い自己嫌悪に陥って、立直ることが不可能になってしまつか、「次回から気を付けるね」と笑って済まし、軽く流すかだろう。

そしてカズヤは、一番後者の、深刻に受け止めながらも行動までは深刻に落ち込んだりしない、建設的なタイプだった。これは一番の大物だ。

目を背けていたいことに気付かされ、認識させられ、不快感を与えられたというのに、カズヤはアキラに対して腹が立たなかった。

今までのカズヤだったら、「そりゃ、言いたくないようなこと言わせて傷付けたかもしれないけど、そっちが勝手に言ったんだサ。

そうすることでオレのこと傷付けようとしてたんだ。それをオレの所為にされちゃ、こつちが不愉快だ」と、口に出さないまでも、心の中にしこりの一つや二つ抱えたままだったろう。

そんなカズヤなのに、どうして腹も立てず、建設的になれたのだろう。答えは簡単だ。

カズヤはアキラに恋してしまっていたのだ。

同情ではない。風が吹いたら飛んでしまいそうな程、見た目はか細いくせに、鷲のように鋭い眼光をたたえて、強く地に足付けて立っている、そんなアキラに、カズヤは恋してしまっただ。今までカズヤの心の中に巣食っていた初恋の少女、その力強かった少女と全く同じ眼差しをした、桂小路 晃という少女は、十年の月日を心の中に居座っていた初恋の少女の居場所を、いとも簡単に奪ってしまっていた。

尤も、カズヤ自身、自分の感情の変化に気付いていなかった。

「水鏡さま」

アキラは確固たる意志を抱き、またそれを口調に顕にし、座っている水鏡に声をかけた。水鏡は谷には戻っておらず、アキラの帰宅を待っていた。

「水鏡さま、オレ、あなたに指示された場所の巫女をするけど、やっぱり東京に来年戻る。希望ではない、もう決めた」

言葉遣いの所為ではなかった。水鏡の身体が凍り付いたのは。

アキラは返ってきた沈黙をもとめせず、自分の決めたことを話し始めた。有無を言わせない雰囲気は、その話し慣れた自分の言葉遣いから感じ取れる。

水鏡は静かにアキラの次の言葉を待った。

「オレは水鏡さまに言われるまま、ここに転校してきた。仕事も途中にして来たのは、水鏡さまが、神森に二人の超常の力を持った者がいるか。一人は《夏青葉》なつあおばだから捜せと言ったからだ。

水鏡さまなら、本当は名前まで知っていたはず。それを敢えて教えなかったのは、目立ちすぎたオレを弟御子一族から隠すための時間稼ぎをさせようと思っていたからだって、オレは解ってたんだ。だからオレは、仕事を途中で放棄して、ここに来たし、今もこうしてここにいる」

アキラの強い視線に、水鏡は少しだけ目を背けた。

第8部・九月〜定められている七人の運命〜 - 6（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第8部・九月〜定められている七人の運命〜 7

「別にオレは文句を言おうとしているんじゃないありません。むしろこの生活を与えてくれた水鏡さまに、感謝してもしきれないと思ってる。」

アキラは視線を逸^そらせた水鏡に向かって、一方的に喋り続けた。

「ここの生活は、オレの憧^{あこが}れてた生活のままだった。だからこそ実感させられた。オレの平凡な生活は、オレの両親が殺された瞬間に終わった。いや、生まれた時から与えられていなかったんだろって、そんな気がする。だって、平和に任せて安穩と暮らしていると、かえって気分が休まらないんだ。」

オレはせっかちだから、こういう静かで穏やかな生活つてのが合わないみたいだ。だから欲しいもんがあつたら獲りに行く。

待つてたつて焦^じれたいばかりだ。向こうから来てくれるわけがないの、解^とつてんだ。

オレはあなたに導かれるままに《夏青葉^{なつあおは}》を見付けた。次は青風^{せいふう}月^{げつ}。あなたは何の為に、オレに夏青葉を捜させたかを考えたら、答えは一つ。オレの為、谷の為、青風月を見付けだす為じゃないか。あなたは仮にも女長老。谷のことを第一に考えるべき立場にある人。だったらオレは、あなたの望むままに動く。自分の性格に従つて生きる。だから区切り良く、三年になったら東京に戻る。

大体、オレら一族は逃げてばっかだから弟御子^{おしみこ}一族に追われるんだ。このままじゃあ終わりは来ない。だから、オレは逃げない。所詮血塗られた人生、どうせ同じ道ならば、後の世代に平和を伝えたい。

オレは平和の為の戦争はないと思つてる。必要悪なんて認めない

けど、そいつがなかったら、人間が変わるきっかけなんて生まれな
いとも思ってる。だからオレは、自分が認めない必要悪になる。

オレは初めて大切にしたいと思う人たちに会ったけど、それはあ
なたのお陰だ。

オレは人間そのものを憎むことはしなくなったし、不思議とこい
つらの為なら、憎まれてもいいから必要悪となつて守りたいと思
うんだ。

安心して下さい。オレは世界を滅ぼしたりはしない。誰にもこの
術は教えない。その為にも、この術を狙う弟御子一族は邪魔な存在
だからオレは目立つた行動を取つて、奴らの長、氷河王ひょうがおうを引き寄せ、
奴らを狩ります。

お互い顔を知らないけれど、きっと血が引き合うだ運命のはずだ
から。絶対にオレは氷河王を狩る。だって、オレは空蟬うつせみですもん」
アキラは一気に話しきり、相手の反応を見守つた。

そんなアキラを見て、水鏡はため息をついた。

アキラにとつてそれは、とても意外なことだった。水鏡なら、静
かに何かしら言うと思つていたのだ。

しかし水鏡からすれば、今日、葵に頼んできたことが、全て無駄
になってしまったのだ。ため息をつかずにはおれない。

「そなたには、二つの人生が用意されておつた」

「決められているということ自体、オレには不愉快だけど、どうせ
今こうして選んだ道が、そのどちらかではないのですか。つまり、
オレがそのどちらかを選ぶことも、決められていたこと」

まるで吐き捨てるようなアキラの言葉に、水鏡は隠さずうなづに頷いた。
「確かにその通り。」

そなたは光を抱いた闇の女王。日光という名の通りの光の娘にな
るか、日光に照らされた緑から生まれる陰という存在になるか、そ
れを選ぶ人生だった。

……そしてそなたは陰の道、修羅に堕ちることをやはり選んでしま

った」

「育った環境とオレの性格を考えたら、そうなることは必然でしょう。あなたならば、初めから判っていたはずだ」

そのアキラの言葉に、水鏡は答えなかった。まして、知っていたとしても、抗^{あらが}おうとさつきまでしていたことなど。

代わりに、水鏡は預言をした。

「何れにせよ、そなたは青風月王を見付ける運命です。それは定められている未来。」

近道をして遠回りをして、そなたの一番身近な者として、青風月王はそなたの前に現われることになっています」

「そりゃそうじゃないですか。唯一の身内ですよ。一卵性双生児ではないにしろ、やはり双子なんですから」

「……そう、今の瑞穂の谷の長にはお解りになれぬでしょう。いくら長とはいえ、あなたはまだまだ子供。」

それに、あなたは家族というものを知らなさすぎている。一番身近な者とは、何も家族だけではありません。それはあなたの心が決めることなのですから」

「？」

アキラは首を傾^{かし}げた。不快ではあるが、家族というものを知らないということは、否定できない事実なのだ。知らないことを余計に反発するわけにはいかない。アキラは謙虚になることにした。

「つまり、水鏡さまは、例えば今オレの周りにいる、……そう、先程お会いになったカズヤみたいなのが、青風月王だった、という感じで身近にいるかもしれない、そうおっしゃられているのでしょうか。勿論、例えばの話ですよ。冗談じゃない、あれが青風月王だったら、こっちが困ってしまう」

アキラは大きな口を開けて笑った。

さっきカズヤを痛め付けてきたばかりだ。仮にも双子なら、もう

少し自分に似た人間を例えにすれば良かったと、あまりに可笑しくなってしまったのだ。

だが、水鏡は笑っていなかった。

「それと、重要なことをもう一つ。わたくしは神々から見せられている、あなたの未来を知りすぎています。

あなたが修羅を生きているのであれば、わたくしは水鏡としてあなたの前に現われることは、もう二度とありませぬ。用件がお互いある場合は、マザを紹介するか、巫女紅龍妃を通さねばなりませぬ。そういう巡り合わせなのです」

突然の話に、アキラは戸惑いを隠せない。

「え？何故でしょう。未だあなたには、教わらねばならぬことが…」

しかし水鏡は何も答えず、全身で答えることを拒絶していた。

第8部・九月〱定められている七人の運命〱 - 7 (後書き)

次回から第9部・九月〱初舞台〱を始めます。

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfradia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第9部・九月ゝ初舞台 - 1

9・九月ゝ初舞台

翌朝、空模様は酷く荒れていた。昨日の天気とはうって変わって、台風が来たわけでもないのに局地的な暴風雨に見舞われていた。

荒れていたのは空模様だけではない。神森中学校二年五組も荒れていた。

あろうことかその中心はアキラで、彼女の雰囲気を感じ取ってクラスの間は勝手に騒ぎ出し、サキ一人の手に負えない状態。

諸悪の根源は机の上に足を投げ出し、ガムを食べながら、授業中にイヤホンをカシャカシャ言わせて音楽を聴いている。

サキはホームルームの為に黒板の前に立ちながら、全てを投げ出して逃げ出したい心境になっていた。

この状況では、ホームルームはいつになっても始められない。

「アキラ、ホームルーム」

呼びかけに返ってきたのは、凄味の効いた視線だけ。こちらは全然悪くないのに謝りたくなってしまふ。それに負けないう、サキはもう一度声をかけた。

「アキラ……」

「……」

「は……はははっ」

二人の間を、冷たい空気が流れた。

「ったく、いつまでもうるっせーガキどもだなっ！ちったあサキの言うこと聞けや、スカタンどもめつつっ！」

アキラがクラスに一喝入れたのと、外で大きな雷が鳴ったのとは、殆ど同時だった。この二つの雷に、クラスはさすがに静まり返った。^{ほんと}

この学級委員長、今に始まったわけではないが自分勝手極まりない。

『アキラ、一体どういつつもりなの？』

サキはとうとうテレパシーを送った。

『ほおう、早速テレパシーですか、裏鈴木賢木くん。さすが、素晴らしい能力を秘めていらっしゃる』

アキラは皮肉たつぷりに返事した。

誰にも聞かれない会話ならば、それこそ言いたい放題だ。

『ちゃんと聞け。どういつつもりか答える』

『……』

『答えるつつつてんだよ』

『何なんだよ。お前はオレの何なんだ。偉そうな口、きいてんじやねえよ。関係ねえんだよ、お前になんか』

二人はそっぽ向きながら、テレパシーを交わしていた。

『はあ？何が関係ないだ。そんな言葉、それこそ十年早いんだよ。』

そりゃ、中身は関係ないかもしれないけど、お前、今、集団生活してるんだっけ、その辺自覚持てよ』

『頼むから放っておいてくれ。オレだって、哀しくなる時くらいはあるんだ。オレはパーフェクトなロボットじゃないんだ』

珍しいアキラの泣き言だが、それならばもう少しおらしくしろと言いたい。そう思うから厳しい言葉をサキはぶつける。

『パーフェクトだろうとなかろうと、集団の中で自分の感情を優先させるんじゃないよ。オレがそんなこと、今までしたことないっचा？』

雨がしとしと雨に変わってきた。

『今のお前は、お前らしくない！』

サキは思わず教卓を叩いて、大声を上げていた。クラスの不審気な注目に、サキは慌ててごまかしにかかった。

『あはははは……。悪い悪い。ちよつと立ち眩^{くら}んで……』

こんな台詞、心臓に持病を抱えるサキだから通じる。

『そうさ、一度だってお前はしちやいないさ』

サキが爆発したことで、アキラは少ししおらしくなった。彼女らしくない態度だ。

『でもそれは、オレがお前に強制したことじゃないし、オレは滅多に感情を表に出さないじゃないか。そりゃ、腹立って暴走することはあるけど、普段、細かいことで感情に振り回されたりはしていないはずだ。もう、これで最後だから、今日だけ、オレに有給休暇をくれよ。頼むから、今日だけ放っておいてくれ……』

『確かに、お前が感情を見せないのは認めるけど、それを交換条件にするなよ』

サキはそれだけ言うと、アキラを放っておくことに決めた。彼女が追い詰められていることは判るし、それ以上責め立てていい結果が生まれるとも思えない。

それにこれ以上黙っていると、クラス中に怪しまれてしまう。現に、ポンはさっきから、アキラの方ばかりを見ていた。

ポンにテレパシーが聞こえているわけがないとは思っていたが、勘の鋭い人間ではある。ポンは他人との付き合いにおいて、気配りのきく人間だから、何かがあるということだけはバレてしまいかねないのだ。

アキラは黙ってガムを噛み、サキは静かになったクラスを前に、ホームルームを一人で仕切り、ポンは何も知らない顔をして、クラスはそれこそ何も知らない。

表面上の付き合いが、まるで氷の上を滑る水のように涼やかに流れていた。

緊迫したホームルームの中、ちらほらと空席があった。

男女バレー部だ。今日は市の体育館で、中総体が行なわれていたのだ。

男子バレー部については、県体会の出場権を獲得する自信があっ

た。その最大のライバルは、去年まで一緒に練習をしていた東部中学。

「先輩、去年の優勝校、東部中に潰されましたよ！」

「やったべや！うちら、東部中よりも強いっちゃ」

やる気と自信さえあれば、人間は結構実力以上の力が発揮できたりする。それに転勤族ばかりの東部中の人間と違って、農作業の手伝いをしている神森中の生徒は、基礎体力がしっかりしていた。あとの違いは、技術だけだ。

第9部・九月ゝ初舞台ゝ - 1（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfradia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第9部・九月、初舞台 - 2

あれだけ激しかった雷雨は上がったものの、重苦しい灰色の雲は未だ空に垂れ込めていた。

そんな空模様の下で、アキラは音楽室の横に付いている非常階段の踊り場で、フルート片手に手摺りに凭^{もた}れ、ぼうつとしていた。その表情は重たかった。

「おーい、危ねーぞーっ」と、下からサキの声がした。しかし、アキラはその声に反応を示さなかった。

暫^{ひさし}く何やら声をかけても反応が無い。仕方ない。サキは一階から四階まで駆け昇り、アキラの肩を叩いた。

つい一気に駆け上ってしまった所為で、苦しそうに肩で息をするサキに、それでもアキラは無反応のまま宙を見つめている。

「あああ、そっけないのワ。

まさかアキラ、さっきのこと、よっぱど気に入らなかったのワ。悪かったよ、ゴメン。オレが言い過ぎたから、機嫌直してくれよ、なあ」

アキラは完全無視を決め込んでいるのか、全く無反応で、顔の筋肉一つ動かさない。いつものようにゴメンの安売りをするとも言ってくれない。

「ううう……。オレ、泣いちゃうよワ」

サキがそう言っつて、鼻の下を掻いてから、頭を掻き^{むし}つた。それが彼の困ったときの無意識の癖だ。ふざけて^す拗ねてみせた時、アキラはようやくサキの方を向いた。そして開口一発。

「あ、いつ来たんだ？お前」

「へ？」

「あ、いや、考えごととしてな。悪いな」

あまりの発言に、サキはここにきた用件を、思わず忘れそうになった。

「で、何？」

本当はへこんでしまっているのだが、ここまで見事に「何？」と言われている、無視を責めることもできない。サキは気分を切り替えた。

「ま、いいや。あんな、男バレー、三位だって。東部中を下して三位」

「ふーん」

息を切らせてここまで来たサキに、その返事はあまりにそっけなかった。

「何だよ、冷たいな。ちつとは喜べよな、カズヤとシキが出てるつてのに……」

サキはそこで口を噤んだ。

アキラの眼は本当に何処^{どこ}も見えていなかった。今の空のように濁ったまま、現実をシャットアウトしているようで、声をかけずらい雰囲気だ。

「サキ、お前、どうしてもいつも穏やかなんだ？ どうやって、自分の感情を制御してるんだ？」

サキは細い目を真直ぐアキラに向け、何気なく振り向いたアキラと目を合わせた。今のアキラの心を理解するのに、サキには言葉はいらなかった。

「お前、喧嘩っ早い以外は、オレのことを完璧な人間だと思ってるだろ。お前の方が、よっぽどすごい人間だぜ」

ははっと乾いた笑い声を立てたアキラの心が、寄せては返す波のようにサキの中に流れ込み、そしてすぐ引いていった。多分この共鳴のような心の動きは、アキラの感情だと確信できる。

どうして、いつも自己嫌悪してんだよ……

ちよつとだけ、サキはいつも伏し目がちな^{まぶた}瞼を、人並みに開いた。

ほんの一瞬だけだったが、アキラには、サキが別人のように見え

た。始めて見るその表情はすぐに消えたが、アキラはもとに戻ったサキの顔に、その表情をいつまでも重ねた。

色白のサキは、切れ長で涼やかな目の、とても綺麗な顔を持っている。

「どした？何か付いてるのワ、オレの顔」

「いや、お前の目って、実はわざと細くしてるのになって思ってた。そう言いながら、アキラは自分の心が多少晴れていくのを感じた。

不思議だった。

「ああ、晴れてきた」

サキは手をかざし、雲の切れ間から出てきた太陽を見やった。

「あのな、今日の天気、多分オレの所為だ」

突拍子もない話に、サキは「え？」とアキラの顔を凝視する。

アキラは、階段の手摺りに腰掛け、空を仰いだ。

「まだまだ未熟者だな、オレは。しっかりしなきゃな、もっと」

「充分しっかりしてるさ、お前は。それよか、そこ、危ないよワ。

錆びてるし」

貧乏揺すりをするアキラに、サキは降りろと言つように手を伸ばした。天気の話など、どこかへ飛んでしまっていた。

「平気だって。落ちたって、飛べばいいんだから。……今日、ごめん……」

珍しく素直に謝ったアキラに、サキは少し戸惑った。「悪かった」とは言うのだが、「ごめん」とは決して口にしたことがなかったアキラだけに、それはサキに深く届いた。当のアキラは、照れ隠しの為にフルートを吹き出した。サキはその音に聴き入った。

「おい、サキ」

アキラに名を呼ばれ、聴き入っていたサキは現実には引き戻された。「危ないから降りろって」

サキはもう一度腕を差し伸べた。と、アキラはその腕を取った。

白くて細い腕。なよやかな指。

いつもは驚掴^{わしづか}みするくせに、掴まれたその手の感触が、何故かいつもと違って、サキは慌てて手を引つ込めようとした。すると、白い絹のハンカチのような軽やかな腕なくせに、サキの手を離すまいと強い力で、その手は彼を引き寄せた。

「空、飛ぶか」

アキラはそう言つと、サキの返事を待たずに、手摺りの外に身を投げた。

第9部・九月ゝ初舞台ゝ - 2 (後書き)

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

思わず「うわっ」と叫び声を上げそうになったが、まさか大声を出して人が駆けつけでもしたら、まったく言い訳ができない。そう思っこらてサキは声を堪えた。

しかし落下するような感覚は一瞬。すぐに普段と変わらない状態になる。おずおずと目を開け、辺りを見渡すしてみると、二人はしっかりと宙に立っていた。

サキが目を開け落ち着きを取り戻したのを確認すると、止まっていたアキラはサキの手をしっかりと握り、どんどん高度を上げた。

「うわぁ、最高ーっ！」

「だろ」

サキの声に、アキラは嬉しそうだった。

下に広がる緑の田圃に感激して思わず声を上げたのだが、アキラが嬉しよそうにしたことが、サキにはもつと嬉しかった。彼女は自分から善い感情は表に出さない性格を熟知しているから尚更だ。

「もつといい所、連れてってやる。行くぞ」

珍しく、アキラの声が弾んでいる。

「何処？」

サキの質問に対するアキラの答を聞くよりも先に、まるで宇宙空間を通り抜けたような、あまりのスピードに肉体が置き去りにされてしまうような、何とも不思議な感覚が、サキを襲った。それは正直不快な感覚だった。

思わず足元も確認する前に、がくりと膝が崩れ、その長身をアキラが支えた。

「！」

その足元を改めて確認して、思わず血の気が引く。

「心臓、大丈夫か？瞬間移動してみたんだけど」

「ここは？」

そこは遠くに水平線を望む、高い木のでっぺんだった。

「大樹の森の神社の、一番高い木の上。オレ、ここ好きなんだ。オレの両親がご健在であられた頃を思い出せるからな。当時の純粋なオレのままです」

アキラは遠い目をした。さっきとは全く違い、心の底から穏やかな表情だった。そしてそれは、サキが初めて見る表情だった。

両親を想う少女は、すっかり晴れ渡った空を見て、ぽつりと呟いた。

「父と母が亡くなられた日も、こんな悪意のない、澄み切った晴れた日だった」

サキは思わず息を呑んだ。

「だって、お前の両親って、海外転勤じゃなかったのワ？」

「あ、あれ。オレ、お前に言っただけ。あ、昨日力ズヤにむかっついて言っただけだ」

アキラは腕組みして一瞬考える仕草をしたが、すぐ思い出してさっさと言う。

「あのな、オレの両親、オレが小学三年の時に死んでんだ。今の両親は、オレの為に桂小路家に籍を移してくれた、義理の両親なんだ。オレの血縁はいないから、オレ、孤児院に入れられちまっただけ」

あまりにあっけらかんと言われてしまって、それ以上サキは何も訊けなかった。

「今日、不機嫌だった理由、言えるか？」

サキは話題を変えた。

さっとアキラの顔が、またいつもの、陰を含んだ氷の彫像に戻った。

「昨日、オレと一緒にいた人、憶えてるだろ」

「ああ、忘れられないキレイな人な。お前の保護者で水鏡っていう

者だって……。何だか変わった名前だよな」

「そう、血の繋がりがこそないけど、あの人がオレという人間を育ててくれた、お告げをくれた巫女さん」

「って言ったって、あの人、二十歳そこそこじゃないのワ？」

「あの方は、ずっとあの容姿だ」

事情を知らないサキは、きつと単純に若作りなんだと思っているだろう。アキラは別に詳しく説明するつもりはなかった。

「で、どうしてその人と今日の不機嫌が、関係あるんだ」

「もう、二度と会えないって言いを残して、去っていつてしまわれた。」

オレは感謝こそすれ、何も不満はないのに、オレの選んだ人生を悲観して帰られてしまわれた。オレのことを思っ下さっているのに、オレは何時も裏切っばかりで……」

アキラの声は、淡々としていた。こういう時は感情がないのではなく、むしろ感情を抑えている時だ。

「人生って、これからどんどん変わっていくもんだサ。今から決め付けてどうすんだ」

当然のことだが、サキはアキラの事情をいまいち把握しきっていない。まして、アキラが東京に戻って闘うつもりだということなど、知るわけがない。

「サキ、オレは以前言っただぞ。オレを普通の人間だと思うなっ。ま、いいけど、そんなこと」

アキラは依然、感情の籠もらない声だった。

「オレの人生は二つの道があっ、一つはオレ自身の平和。もう一つはオレ自身は生き地獄だけど、オレの後の世代の平和を招く道だっ」

「お前のことだっけ、生き地獄を選んだんだろ」

先が見えすぎる話にため息が出る。なのにアキラときたら、サキ

が自分のことを解っていることが嬉しいのか、表情がちょっと明るくなっていく。

「大当たり。冴えてるね、サキくん。だって、オレ、別に人生楽しんでないし、むしろ早く終わってくれたらって待ってるくらいだし、生きるんだったら、誰かの喜ぶ顔見ることが目的にしたいしな。それだって、自分の為に生きてるじゃんって言われたら、全然反論できないけどさ。」

けど、純粹に自分の欲望の為にだけに生きるってのは、どうも性に合わないし」

「その所為さ。その水鏡って人が去ってたのは」

「……」

一瞬、アキラの顔が固まった。その表情を見逃すサキではない。

第9部・九月ゝ初舞台ゝ - 3 (後書き)

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfradia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

「冷たいこと言うようだけど、誤解すんなよ」

サキはそう前置きをして続けた。

「オレはアキラの自業自得だって言ってるわけじゃない。ただ、もしオレが、その水鏡さまって人の立場だったら、オレも会いたくないよ、お前に。」

だって、自分の娘のような存在の人間がだよ、わざわざ地獄に堕ちに行くって言うてるんだぜ。地獄っていうくらいだから、取り敢えず酷くってめちゃくちや辛い所なんだろ。だったら取り敢えず止めたくなるし、助けたくなるのが親の情じゃないのワ？でもお前のことだから、何かを実現する為には自力で何とかしなきゃとか、手助けされる覚えはないとか、それじゃ意味がないとか、まあ難癖つけるだろうし。

そんな聞く耳持たない相手に、本当に手出しできないって決まってるんだったら、見ない為には姿を消すしかないっちゃ。手助けや心配が迷惑になるんなら。

ま、取り敢えず参考までにオレの意見だけど」

サキは偉そうなことを言っている自分が急に恥ずかしくなり、照れ笑いをした。

「お前ってさ、本当お人好しだよな」

アキラはそんなサキの顔を、まじまじと見て言った。

「よせ、照れる。どこがお人好しだか」

サキは顔を背けた。

「さて、戻るか」

アキラはサキの手を取った。表情は晴れ晴れとしていたが、深く刻み込まれた憂いは消えていない。それは両親を失った所為なのか、それともその過去を知ってしまった自分の色眼鏡なのか、サキには

判らなかつた。そこに触れてはいけないことだけしか判らない。

「飛べるっていいな」

話は終わったのだから、サキは話題を変えた。

「だろ。ところで前から気になつてただけどき、お前、あんま他の連中と比べると、方言使わないんだな。どうして？」

「え、理由なんかないよ。訛^{なま}つてる相手なら、こつちも訛るけど」
「器用なヤツ」

「お前もじゃんか」

「生命の危険がかかれば、そうもできるよつになるもんさ。こつちはエセ関西弁だけだな」

二人は神社の裏手に降り立ち、それぞれの家へと帰っていった。

時間は少し戻る。

夏休みに入つて暫くして、ハンドボールの市大会とアキラのソロコンテストが平行してあつた。

「えーかつ、オレはソロコンの出場、午後遅いんだつけ、ぎりぎりまでお前から見てるぞ。」

つまりだ、オレの見ている前で負けてみる。どうなるか、お前から判つてんな。」

アキラはハンドの試合場でサキとカズヤに圧力をかけておきながら、試合が始まるとすぐに、ソロコンテストの会場へと向かつた。

別に意地が悪いわけではない。会場の空気に楽器を馴染^{なじ}ませておかないと、どんな楽器も音が不安定になつてしまふ性質がある。演奏中の楽器のピッチのずれを防ぐ為にも、よく吹き込んで、楽器を温めておかないとならないのだ。

しかし、サキもカズヤもそのようなことは知らない。そればかりか、アキラがいなくなつていたことにすら気付かずに、必死の思いで試合をしていた。

神森中は、サキの心臓のおかげで他に例を見ない作戦で試合を運ぶ。スポーツ万能のサキの心臓に負担をかけずに、それでいて点数を確実に取るため、ぎりぎりまでサキにはボールを回さないようにし、コートの中で休ませているのだ。大抵のチームはそのことを判つてはいるのだが、ここぞという時のサキのセンスの良さに翻弄ほんろうされている。これは屈辱的なことだ。半病人に弄もてあそばれるなどということとは。

一方アキラはずっと「信じらんねえよ」を連発していた。

「あの人、最優秀候補なんやろ？あんのピッチのぶれ、恥ずかしくねえのかよな。」

引率の為に隣にいる葵はため息をついた。

「あのね、あなたのが……」

「オレは普通。」

葵は問答を繰り返すことを止めた。

もう、アキラのことは受け入れることに決めたのだ。それに、いつも同じ答えしか返ってこないのが判り切っている所為もある。結果は、ハンドボールもソロコンテストも堂々の一位だった。

大抵の人間は、夏休みに入って用事がないと、一日十二時間睡眠になつてしまうのがオチなのだが、七人はアキラの家で寝泊りし、バンドの練習に、宿題に力入れていた。やりたいことを子供みたくに無邪気に燃えていられるのは今しかないと、何気なく感じていたのだ。

そして、再び元に戻る。

夏休み明けて三日後、二、三年は実力テスト。結果はいつもと似

ていて、アキラの一位、サキの二位に始まり、シキが七位に浮上しナミも十二位。コメチの十七位、ポンは大健闘の五十三位、カズヤは何とか四十九位だった。

何しろ大御所、桂小路 晃の特訓が苛酷極まりないものだったと言え、この成績は納得ができる。

とにかくこの実力テストが終われば、晴れて試験勉強から解放されて、文化祭の支度の本腰を入れられるようになるのだ。

第9部・九月ゝ初舞台ゝ - 4（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第9部・九月、初舞台 - 5

文化委員会は《生徒たちの反逆》をテーマとし、教師に一切の口出しを許さずに運営していく方針を打ち出した。教師も、責任の範囲内で点検はするものの、生徒たちの挑戦を受けて立ち、何処^{どこ}までやれるのかを試しているといえば聞こえはいいが、はつきり言っただけ^{なま}ながら楽しんでいた。

近所の酒屋からビールケースを大量に借りてきて、教室に二面舞台を作って劇をやるクラスあり、飲食店あり、予定ではかなり密度の濃い文化祭が出来上がるようになっていた。勿論、その中で、アキラたちのように、バンドを組んで演奏するものも少なくなかった。彼らのステージは、公平を期すためにくじ引きで決められるはずだった。

T・T・B・Gは、やる気のないクラスメイト数人を裏方に積極的に雇い入れ、練習に熱を入れていった。歌はかなり辛辣な詞もあり、夢見るような幻想的な詞もあり、曲も激しかったりせつなかったりと似たものは一つとしてなく、人真似を嫌う彼らしい凝りよう^うだ。

実際のところ、音楽の授業で作曲まがいを教わった程度のド素人に、コードを教えてみたって曲に反映させることなどできるわけではない。結局殆ど^{ほとんど}が音楽経験者のアキラやコメチ、ナミ、サキのアレンジでできあがっていた。それだけ経験者が多かったからできたこと^とだと言える。

ヴォーカルの高音部はアキラ、低音部はカズヤのツインヴォーカルでやることになっていた。二人の声は、ユニゾンになると一人の声のように溶け合って、二人で唄っていることを気付かせないほどぴったりだった。

文化祭は九月半ばの土日に行なわれた。

七人の出番は全員参加の吹奏楽と新設校の初文化祭の目玉、オーケストラの次。幸か不幸か、そんな立派な団体のすぐ後だった。

朝は早いわ、前は上手^{うま}いわで、これでは緊張してしまう。

ただ、裏を返せばそれだけ、観客を集める手間が省けるというから楽だというものだ。

「ねえ、ちょっとお。TV局がね、午前の部のステージを撮るんだつてよ。どうする？」

コメチが息急き切って走ってきた。

「どうするって、どうせ編集されるべや。若手注目のフルート奏者アキラ目当てなんだから」

「何言ってんのよ。その目当てのアキラはここにもいるっちゃ。バカじゃないの！」

「でも、目的は天才フルート少女、桂小路晃^{あお}なんだから、こっちは無視されるべ」

「もう、知らないっ！あなた、つまらないったらありやしないわ。まったくもうっ」

「悪いなあ、つまらん人間で」

サキは落ち着いてチューニングしながら話相手をしていたものだから、コメチは興冷めして、ナミとかポン、カズヤを煽^{あお}りに行った。シキは緊張して立てなくなる可能性があるから、さすがのコメチは怖ろしくてシキの所へは行けない。

「コメチ、何処で何油売つとんのや？部活放っぽってや。合わせするさかい、すぐ来い」

話題のネタにされていることを知らないアキラが、フルート片手にコメチを呼びに来た。

「あ、アキラ！TVがねーっ！」

「はいはい」

聞いても痛くも痒くもない話に、軽く返事をして、アキラはコメチを引っ張って行って、十分くらい経ってから、他の吹奏楽部員をぞろぞろを引き連れて楽屋に戻って来た。

そこには緊張した面持ちの仲間がいる。

「何や、カズヤ。もしかして、緊張してんのかよ？」

さすがのアキラでもシキはからかいにくいのか、手近にいたカズヤに声をかけた。

「当たり前だべ。心臓口から飛び出そうだよワ」

「あはやねーっ。緊張するだけ損やで」

アキラはカズヤに何かの洋服を投げて、ステージへと消えていった。

「お……い、あれ、アキラらしくねえぞ、なあ……」

カズヤはすぐ隣にいたシキに同意を求めた。

「うん、まあ……いいんじゃない。あれもアキラなんだったらさ」

シキは緊張のあまり、あまり雄弁ではなかった。

体育館のステージ使用のバンドは、勿論T・T・B・Gだけではなかったが、大半は午後の部に集中していた。

オープニング・セレモニーが始まった。

「オレ、帰りたいよワ」

カズヤとボンがせわしないのと反対に、シキはじーっとして動かない。

ファン・ファールが鳴り響いた。開校して第一回目の文化祭だ。文化委員長、学校長、生徒会長が次々と儀礼的な挨拶をし、それからプログラム第一番、吹奏楽部の演奏が始まった。

彼らが演奏するのは、コンクールの課題曲と自由曲、他に乗りのいい曲を二曲。それからアンサンブル・コンテストに出場する、金管八重奏、木管五重奏、それとパーカスアンサンブル。

吹奏楽部の次に控えているのは、一同の反対側のステージ袖に待

機しているオーケストラ。ここまでは、健全な中学校の文化祭の姿だった。

「おい、アキラ、あれとやるんだべ？すんげーこた」

ポンが相も変らずそわそわしながら言った。

「ああ、んだから、この服かあ」

カズヤは、さっきアキラから投げ渡された洋服を広げて言った。

「まさか、制服じゃあ合わないもんな」

「おい、もう少し落ち着いてやれって。可哀相に、シキとナミはがちがちに凍っちゃってるっちゃ」

いつも物静かなサキが、やはり静かに一喝入れると、カズヤとポンは小さくなった。

「んでもや、コメチがいたら、もっと煩うるくなってたべな」
「んだなや」

でも結局二人は話し始めてしまうのだった。

第9部・九月ゝ初舞台ゝ - 5 (後書き)

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

「カズヤ！さっきの服よこせっ！えーかつ、こっち見んなよ」

緊張して吹奏楽部の演奏など耳に届いていない五人は、突然現れたアキラの乱暴な声で、吹奏楽のステージが終わっていたことに気付かされた。反対側の舞台袖に控えていたオーケストラと吹奏楽部が入れ替わり、下りた幕の内側で忙しく準備を始めている音がする。

アキラは幕が下りると同時にステージ袖に走ってきて、跳び箱の陰で着替え始めた。

「アキラ。あなた、髪の毛ほどこいていた方がいいわね」

葵がアキラのかいがいしく彼女の身形を整えている。

A R I - t a n i m o r i ブランドの白いシルクのブラウスと黒くて引きずるくらい長いフレアーギャザースカート。アキラはそれを着て、真直ぐ立った。いつも適当に結んでいる低めポニーテールをほどくと、その真っ直ぐで艶やかな黒髪はウエストまで届く。

「アキラ、綺麗よ」

コメチが褒めると、「服がだろ」とひねくれた返事をして、ステージ袖から中央を見据えて凜と背筋を伸ばした。

独特の気品がある。

アキラは、先ずあり得ないことなのだが、多くの者に傳かれて育ったかのような自信と気品を身体中から放っていた。誰もそこまで具体的に感じてはいないのだが、逆に誰もが、この細くて折れそうな少女に気品と威厳が備わっていることだけは感じていた。

幕が上がり、静かに湧き上がるようなチューニングの音が、聴衆をぐっとひきつけ、袖にいる六人も一時緊張すら忘れた。

それからオーケストラを照明が包む。浮かび上がった指揮者の合

図を見て、アキラはすつと明かりの中へ出て行った。スポットライトにも動じないその姿はまるで場慣れしたプロのようだ。

曲は誰もがテレビや映画で聴いたことのあるクラシックの曲ばかりで、それはアキラの為にフルートが中心の曲だ。

殆ど夏休みを一緒に過ごしてきた六人がその曲をいつ練習したのか知らないのに、アキラは難しいであろう曲をいとも簡単に、そして流麗に吹きこなしている。

フルートを吹いている時のアキラは、いつもの粗野なところを綺麗に隠し、まるで身体が楽器の一部と化しているような凜とした音を奏でる。

演奏が終わり、指揮者がマイクを取ってアキラのことを「ソリストは二年五組の桂小路 晃さん」と紹介して、初めてアキラが吹いていたのだと、大抵の生徒は気付かされたのだった。それぐらい意外なことだった。

アキラが肩の力を抜いて、リラックスできるような曲を吹いていたというのに、袖の六人は緊張しきっていた。つい今しがたまでステージでサクスを吹いていたコメチまでが、急にガチガチになっている。

「っだよー。お前らまだ緊張してんのかよ？オレなんか、TVカメラ向けられてはりきっちまったぜ」

あまりにもらしくないことを言って、アキラはケタケタ笑いながら戻ってきた。

「オレのありがたい演奏、実は聴いてなかったな、バータレどもがつ」

そんなアキラにつられて、一同は多少緊張が解れていくのを感じた。

幕を下ろしてで準備を整えている間、外では人がざわめいていた。オーケストラの演奏で生徒たちの拘束時間は終わったから、それぞれがそれぞれの持ち場に戻るのだろう。

「コケたらごめんな」

アキラとカズヤはバク転の練習をしている。ちなみに、七人中でバク転ができないのは女子二人だけだ。

「幕、開けるぞ」

準備が整ったのを見計らって係の生徒は七人に声をかけた。

「O・K」

カズヤがゴーサインを出した。

必死の思いでシンセサイザーにプログラムした水の流れる音や小鳥の囀りこえす。そしてポンのスティックが四つ数えたのを合図にステージのフットライトが逆光で踊る二人を照らして激しい音が始まる。

髪を降ろして激しく頭を振るアキラと、ハリネズミのように髪を立てて舞台を走り回るカズヤがそこにいる。

まるつきり大人の顔立ちのアキラと少年のあどけなさを残したカズヤの顔の対比が、歌の中での誘惑する者とされる者の演出通りの姿だ。

そして他の五人はステージ上の傍観者になって、時には静かに、時には激しく音を奏でてヴォーカル二人が表現する迷いを見守っている。

この二人の発声はのびやかで、滑舌がいいから歌詞がはつきり聴き取れる。更にアキラの声は硬いガラスの声で、普段の喋り声しゃべりは男子に近い音域なのに、唄うとハイ・ソプラノまで軽くこなすのだ。例えば悪魔の呻きうめから高笑いのようなものまで。

外に出ようとしていた生徒の流れが、明らかに止まって戻ってきた。

確かに始めから観客はそこにいたが、彼らのステージが終わるまで殆ど頭数が変わらなかった。

話題性はたしかにある。何しろケンカっ早い頭脳派不良美少女桂小路 晃と、頭脳派虚弱體質運動人間鈴木賢木がバンドをやるだけ

で、それは誰もが気になるというものだ。しかし単純に、七人という大構成でありながら、オリジナルだけをやるというのは、中学生の文化祭では珍しい。誰もがその話題を耳にして、興味を持っていたのだが、聴こえてきた音は話題以上の音で、純粹に音楽を聴きたくてなつて足止めされている。

ただそのきつかけとなつた話題を蒔いた^まのは、流行に敏感なコメチの仕組んだことだとは、他の人間はまるで知らなかった。

第9部・九月ゝ初舞台ゝ - 6 (後書き)

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第9部・九月、初舞台 - 7

「お疲れエ」

たった三十分のステージだったが、張り詰めた緊張感の所為で、
疲れがどつと出てきた。

「いいわよね、アキラは。緊張なんて知らないでしょ」

「ああ」

あつさり認められて、ナミは肩を竦めた。

「それってサキもじゃないのワ？ボク、隣で緊張してたのに、全然
平気そうだったっちゃ」

シキがまだ緊張の解けていない強張った面持ちでサキを見やった。
「ああ、オレ、緊張すると身体に悪いから、緊張しないようにする
癖ついてるなあ」

ニッコリと糸のような目を細めて、サキは微笑んだ。

「ま、とにかく終わり良ければ全て良し、と」

ポンが手を打って、話をそこで締め、一同は笑った。

「さ、後片付けすっぺし」

取りあえずステージ袖に置いておいた個人の楽器を、本当はいけ
ないのだが自宅に持って帰って再登校しようというのだ。

「いいこと、ポンが自転車を裏門に回して待ってるから、こっそり
行くのよ」

「へいへい」

一同は周囲を窺いながら、そっと裏口へ荷物を運び出そうとした。

「あのう……」

裏口からそつと抜け出そうとしたところを、一同は突然後から声
をかけられた。その声に、コメチとナミは小さく飛び上がって驚い
たほどだ。

「あ、スミマセン。桂小路 晃さんですかあ？」

「え？はい。あ、ああ」

学校の人間だったら、この現場を上手く逃げる為に笑顔の大安売りをしてやる。そのつもりで振り返ったアキラは、TVのカメラを見た途端にあからさまに声をトーンを下げ、不機嫌そのものを露骨に表情にまで出していた。

しかし、TV局の人間が怯んだのはその声ではなく、ステージの上の彼女とのギャップだった。ステージ衣装のままかと思えば、それはなんと時代錯誤の制服で、彼女はそれを普通に着ている。

「何ですか？」

何をされるのか分かっていながら、アキラは無愛想に尋ねた。相手の思惑などお構いなしだ。

「今日のことでですけど、今日、三回ステージに立ちましたよね。それぞれ違う雰囲気だったけど、将来は音楽活動するの？どの方面の音楽を続けていくつもり？」

彼女のことを知るわけがないTV局の人間は、全くアキラを中学二年の子供と見て話しかけてきたが、それは大きな誤算だった。

「さあ。どっちもやるかもしれないし、どっちもやらないかもしれない。そして、どれもやるし、どれもやらない。何れにせよ、あんなに言う必要ない」

「え？」

アキラのなぞなぞのような返答に、リポーターは、アキラがバカなのか、自分がバカにされているのか、とにかく解らないけど不快だと言わんばかりの顔を見せたが、すぐに仕事を思い出して、表情を引っ込めた。

アキラは、たとえ一瞬でも不快な顔を見せたりリポーターを見て満足気な顔をし、パイと横を向いてキーボード二つをサキの腕からひたたくって先を行こうとした。

「あ、ちよっと！まだ質問終わってないんだけど！ねえっ！」

仕事だから、当然大人は呼び止める。アキラはその声に足を止め

た。

「ソロ・コンテスト全国大会で最優秀を取る自信はある？今日のバンドでコンテストやオーディションに出場する気ある？所詮マスコミ関係の人間の聞くことなんて、こんなところでしょ。」

ソロ・コンはまだしも、バンドのことはオレに聞くな。そんなことにいちいち答えていられるほどヒマ人じゃねえんで、オレは」

アキラは振り向きもせずになんて言おうと、荷物を自転車に積み出した。

「やめといた方がいいですよ。悪いことは言いませんから。アイツ、そんなに優等生じゃないから、気に入らない人間を見ると、無性に苛め^{いじ}たくなる悪魔的な人間なんですよ」

サキは、呆然としているリポーターにそつと耳打ちした。

「アイツは頭が異常にヨロシイから、俗な質問する人間が大嫌いなんですよ」

サキはそう言って、彼もまた皮肉な笑みを浮かべた。「何なら、オレが彼女の代わりになりましょうか？」

サキもいい根性をしている。ちゃっかりアキラに便乗して言い出したことを言っているのだ。

リポーターは肩で息をした。

ここは神森だ。変わった風習を守り続ける、変人の集まった土地だからしかたない。そう思うことにした。

「い、いや、結構。こっちは彼女の音楽について聞きたかっただけだから。悪かったね。彼女にも謝つてよ。じゃあ」

リポーターはカメラマンを促して、逃げるようにその場を後にした。

「さっき、張り切ったなんて言ってたのにや」

カズヤはアキラのキーボードを一つ受け取りながら聞いた。

「お前、本気でオレがあんなこと言おうと思ったのか？まったくん

だ誤解、本気なら侮辱に近い」

「でも、そう言ったべ」

「ああ、言ったさ。けど、お前らの緊張を解す為に決まってんじゃねえか」

「え？」

不機嫌の塊のようになってしまったアキラの後ろ姿を、カズヤは理解できずに目で追うことしかできなかった。彼女が永遠に相容れ^{あい}ない存在のように感じて、何故か肩が落ちていった。

第9部・九月〜初舞台〜 - 7（後書き）

次回から第10部：十月〜野外活動〜を始めます。

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfrania>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第10部：十月ゝ野外活動ゝ - 1（前書き）

本文中に、真似してはいけない設定があります。

交通法規では認められていないので、決して真似しないで下さい。

第10部：十月～野外活動～1

10：十月～野外活動～

文化祭という行事を終え、ようやく一息付けると思いきや、野外活動という二年生のメイン行事が、山の合宿所で行なわれることになった。

一日目は市内自由行動、二日目は登山、三日目は野外炊飯とオリエンテーリング、キャンプファイアー、そして最終日は体験学習といった、密度の濃い予定だ。

「ねーっ、牧場サ行くべな、ね」

ポンはここ数日、この言葉しか口にしていない。

文化祭が終わって、この野外活動の計画を練り始めてからというもの、ずっとこの調子だ。

朝は「おはようございます」の代わりに、昼は「いただきます」、帰りは「さようなら」の代わりに言うものだから、周りの人間は堪らない。

「ねえっ、牛乳美味しいし、ソフトクリームも美味しいし、ヨーグルトだってあるし……。ねえったらあ」

「……」

ポンの食い意地は今に始まったことじゃないのだが、ここまで続けられると、呆れ返って言葉も出ない。あの有名な牧場の何処に、ポンの食い意地を活性化させる魅力があるのだろう。

「牛もいるよ。馬もいるし、羊さんだっているよワ。ね、んだから行くべな。ねえってばあ」

「ポン、頼むから、もういいよワ。目当てはこれ？」

シキは堪えかね、ガイドブックのある箇所を指差した。そこに書いてあったのは「ジングスカン」という文字。

「あ、バレたあ。あははははっ」

「今更バレたって……」

照れ笑いをするポンに、一同は閉口した。

しかし、実のところ、ポンがイチオシしなくても、初日に牧場に行くことに、コメチ以外は賛成だった。

「何で牧場なのワ？今更牛なんか見たって、あなたたち農家じゃないから行きたがるのよ。見飽きるほど見ているわたしの身にもなつてよね」

「まあ、それは一理あるけど……」

「ただでさえ田舎モンで、そんなのが更に田舎に行くのよ。せめてちよつとは市街地にいましょうよ。せつかく出かけられるんだっけね」

だからと言って、市内でウインドウショッピングしようとは、つまらなさすぎるというのが、男子たちの意見だ。「ウインドウショッピングなんて、くそくらえだ」と言うのはカズヤ。「腹の足しにもなんねえ」と言うのはポンだ。

結局コメチが折れて、B班は有名牧場に行くことにしたのだが、コメチはやはり不満顔だ。

当日は、七時半に駅の三階の新幹線コンコースに集合予定。

「うちの父親が、明日会社にくいついでに、送っていつてくれるって」

突然前日にナミから電話があり、彼らは全員自宅待機していた。アキラの所には七時に来ると言っていた。

遅い……

荷物チェックを何度もしながら、アキラはエンジン音を待っていた。

！来た来た。

「アーキーラっ！おっはよーっ！」

朝っぱらからテンションの高いコメチの声がした。

「今行く」

アキラは大きな荷物を軽々と持ち上げ、引き戸を足で閉めて鍵を掛けた。

「あのね、ちよつと予定が狂っちゃってね、てこずっちゃったのよ」

「ええねん。車は楽やねんから。で、解決したんか？」

「ええ。あなたにも協力してもらうけど」

「は？」

アキラは呆然とした。目の前にはセダンが止まっている。どう考えても、七人乗れないし、ピストン輸送するには遅すぎる。

「どうすんねん、これ？オレ、荷物持ってってくれたら、電車で行くけど」

「大丈夫よ。解決してきたから遅くなっちゃったんだっけ」

ナミの父親にお辞儀をしたアキラは、ポンがいないことに気が付いた。

「ポンは？オレが最後やる？」

アキラの質問を無視し、コメチは車の中の面子メンツに話し掛けていた。
「サキ、カズヤ、どっちがアキラなのワ？」

「おい、何のことや？」

何だか嫌な予感がしてきたアキラは、車の中を覗のぞき込んだ。
「あなたの下敷きのこと。アキラはカズヤの上ね」

よく見れば、ポンはナミの下敷きになって隠れていたのだ。

「ちよ、ちよつと待ってくれよ！シキ、お前、交換しろよ」

アキラは慌てた。

「冗談。アキラの方が軽いし、背は高いから隠れるっちゃ」

「そういう問題じゃねえっ」

アキラは助手席のドアを開けようとしたが、当然ロックされている。

「何照れてんのよ。往生際悪いよね」

「おいっ！」と叫んでドアを揺さぶるアキラに向かって、ナミま

で笑って言い放つ。

「簡単に言っなよ、ナミまで。二人ともオレより軽いじゃんか。オレは背が高い分、重いんだよ」

「でも、その背で五十キロないんだすぺ？栄養失調じゃないのワ？」

「オレは食事には気を遣ってる。ええーい、そんなことどうでもええんや。シキ！替われっ！」

「イヤだよ、ボク。一応男子だから」

時間がないから車に乗ったものの、アキラはずっと騒いでいた。

第10部：十月、野外活動 - 1（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第10部：十月の野外活動 - 2

十月も下旬になると、朝晩の冷込みは厳しくなる。

コンコースでぎゃあぎゃあ文句を言いながら、肩を寄せ合って出発の時間を待つ。校長や実行委員長の挨拶などくそくらえだ。大体、朝っぱらからこんな所でこんな人数が集まって出発式をすること自体が、そもその間違いというものだ。これさえなければ、あと三十分は余計に寝ていられたものを、この場所では寒すぎて、挨拶の最中に居眠りすらできない。

それ以前に、朝の通勤通学のラッシュ時間帯に、これだけの人数が駅構内に群れを成していること自体が迷惑なような気がしなくもない。

ようやく出発式は終わり、学年総勢約二百人が、新幹線ホームに移動し、やって来た新幹線に素早く乗り込んだ。

それから約一時間弱、車中は当然騒々しかった。

牧場行きたい代表のポンが、車中で予定の確認を始めた。市街地にいたい代表のコメチの意見は完全に黙殺され、結局彼らの行き先は牧場となったのだ。

「牧場行きの電車、地下ホームなんだって。乗り遅れたら大変だよ。 たった五分で四階から降りるなんて」

「で、もしもの時は、何分待ち？」

「一時間半」

「え？」

「だから、一時間半」

「何それーっ。無理だっちゃ」

「んだから、ダッシュするよワ」

牧場に行きたいポンにとって、別にダッシュはどうということではない。彼はにっこり笑っているが、他の面々はそう笑ってはい

れない。

「ポン、調べとくから任せろって言ったの、お前やんか。もつとマシなルートないわけ」

「いや、面目ない。これしかないよワ」

「信じらんない。この荷物持って走るのワ？わたし、あなたたちと違って体育会系じゃないんだから」

案の定、コメチは文句を言った。

解らないでもない。四日分の荷物だ。

「今更往生際悪いぞ、コメチ」

サキがうんざりしたように、それでいて諭^{さと}すような口調で言った。

「いちいちうるさいわよ。あなた、わたしの親じゃないんだからワ」

コメチとサキは幼馴染みの所^{せい}為か、とにかくよくぶつかり合う。仲が良い証拠なのだろう。

「まあまあ」と、シキとナミが間を取り持って、その場は取り敢えず収まった。

駅に到着し、一同は他に牧場を目指すグループと先を争うようにして新幹線から降りると、地下へ階段で急いだ。エレベーターは無いし、エスカレーターは遅いし混雑している。そしてコメチは煩^{わづ}かかった。

「ちよつとお、荷物重たいんだから、もう少し気を遣ってよ」

「じゃあ、先^まず、中のくだらない荷物を捨てろワ。どうしてこんなに荷物が増えるかなあ」

それでも、少しは二人の荷物は男子が持ってやっていたが、荷物がが多いのは女子の特権だ。滅多に平日に私服を着る機会などないのだから、毎日だって違う服を着てお洒落していたいのが女心つてものだ。男子はそれを解^とっていない。

「くだらないって何よ。全部大事なんだから。中身知らないくせに」
「じゃあ聞くけど、ドライヤーっているか？バスタオル何枚入ってるんだ？大体、私服そんなににいるか？宿舎^{ほくせん}じゃ殆どジャージでいる

つてのに」

「細かいことで煩いわねえ。ドライヤーなかったら風邪ひくじゃないの。あなた、わたしが持ってきたパンツの枚数まで聞きたい？」

「質問を摩^すり替えるなよ」

コメチとサキの喧嘩はだんだんヒートアップして、もう誰も止められない。このやりとりを走りながらするくらいなら、もつと速く走れるはずだ。

あまりの煩さに耐えられなくなったのか、アキラが一番に抜け駆けをした。

「オレ、先に行って、切符全員分買うとくさかいな」

「あ、アキラ、荷物持ってやるよ」

「ええねん」

アキラは手を出したポンの好意を断り、大きな荷物を抱えたまま駆け出した。

「体力あるやつちゃなヤ」

感心しながら六人は急ぎ、地下にようやく辿^{たど}り着いた。改札ではアキラが、「急げ」と手招きをしていた。

「おい、コメチとナミは？」

静かになったとは思ってはいたが、まさか二人が失踪していたとは、四人はアキラに言われるまで、気が付いていなかった。

「お前らなあ、さっきのコメチじゃないけど、一応体格のいい男なんやさかい、ちつとは気を遣ってやれよ。二人はか弱い女の子なんやさかい」

「なーにが、『か弱い女の子』だ」

「サキ、お前、コメチが関わると一言余計だぞ」

アキラはサキの小さな独り言を注意した。

「それより、どうする？ 電車、出ちゃうべや。行っちゃうかヤ」

「カズヤ、班行動だよ」

シキが釘を刺した。無頓着な天然パーのカズヤなら行きかねない心配があつた。

「ったく……」

サキは、露骨に嫌悪の表情をしている。ポンは「ジングスカン」と呟くばかりで、シキはおろおろしっぱなし。そしてアキラは相変わらず無表情のままだ。

第10部：十月、野外活動 - 2（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

向こうから二人が現われた時には、既に電車は出発してしまっていた。

「あら、行つてて良かったのにワ。うちら市内歩いてたつけ。ね、ナミ」

「え、……うん、まあね」

コメチの発した第一声に、五人は当然啞然としてしまった。大らかなポンや、優しいシキまでもがだ。ナミはいつものように、気の強いコメチに引きずられている。

「一体、何処サ行つてたのワ？」

極力感情を押し殺した声で、サキはコメチに問いかけた。

「何処つて、コインロッカーに決まつてるっちゃ。あんな重い荷物、持ち歩きたくないもの。判り切つたこと聞かないでワ」

あっけらかんとコメチは答える。サキの怒りに気付かない彼女ではないが、ここであらうしくするような彼女でもない。そしてサキもこのコメチの性格を知っている。

「何なのや、自分勝手に。お前が煩いから、少しでも負担軽くしてやろつて、せつかくアキラが走つたつてのに。オレらだって、お前らの荷物、少し持つてやつてたんだつてのにや」

サキは精一杯堪えて言つた。

「ああ、そうね。ありがと。けどね、あなた、比較の対象間違えてない。体力に見合つた荷物でしょ。こつちが感謝してもらいたいくらいよ。わたしたちが来るまで休めたんだからワ」

コメチは強い。シキやポンやナミ、カズヤまでもがオロオロしているのなどお構いなしに、サキと睨み合っている。サキと口喧嘩できるのは、コメチくらいだ。

「何か文句ある？」

コメチは居丈高いたけだかに言った。

パチン！

「何よ！」

とうとうサキが手を出した。

コメチは頬を抑え、涙が落ちないようにサキを睨み付けた。その涙は気持ちいが折れた涙ではなく、単に痛みに対して反応して出てきただけのものだということを、精一杯表情で主張している。

「馬鹿じゃないの。手をあげれば済むと思ってるの」

「ああ、もう、うるせーんだよ、自己中女」

険悪なムードは、最高潮に達した。

「ごめんなさい。あたしがいけないのよ。タクシーで行きましょう。ね、ね」

ナミは二人の間を取り持とうとしていったのだが、サキとコメチの二人に凄まじすごまれて、余計に萎縮すくしてしまった。

そんなナミを見て、珍しくアキラが、しゃがんでナミと目線を合わせ、「気にすんな」と慰めてやる。

「すぐ手が出るんだから。サイテー」

痛みで涙声になってはいるが、コメチは睨み付けることだけは忘れずにいた。

「何度も同じことで手を出されてるくせに。学習能力ない猿じゃあるまいし」

サキも負けてはいない。言うだけ言うと、「オレらもロッカーさ入れて来っぺし」と、コメチに背を向けて歩き出した。男連中は、その後に続いた。

「この件に関しては、オレは何も言わへんけど、コメチも意地張ってんじゃねーよ。あいつ、コメチの性格、誰よりも解ってるやんか。こういう場合、素直になった方が格好ええで。泥沼化する前に、コメチが動いた方がええ。」

今更引けない気持ちも解らないでもないけどな、言いにくかったら、泣いて抱きついちゃえよ。オレとあいつと、最低二人はコメチのことを理解してやれるで」

とり残されて泣きだしそうなコメチを見て、アキラはそつと耳打ちし、彼女もロッカーに荷物を入れに行った。

「ありがと、アキラ。あなたが優しいの、わたしだけでも解ってるよ」

「オレが優しくかったら、誰もが優しいやんか。オレは性格も性別も中途半端なんやわ」

振り返らずに言うところが、アキラの気障^{キザ}なところだ。

サキかなり怒っていた。相手に怒っていたし、怒ってしまった自分に対しても怒っていた。本当は手を上げるつもりなどなかったのに、噛み合わないやりとりで苛^{いら}立って、つい手を上げてしまった自分に自己嫌悪だ。

乱暴にコインロッカーに荷物を投げ込む彼は、いつものサキらしくない。

「なんだよ、サキ。ここ、もう空きがないっちゃ」

カズヤが自分の入れる所を探そうとして、ないことに気付いて言った。

「サキ、先に戻っててよ。あの二人、もしかしたらどっか行っちゃうかもよ」

「それは、まさかあのコメチでもしなと思うけど……」

サキはそう言ったものの、シキの言ったことも気になって、女子二人の所に戻って行った。

「シキ、ナイス」

「大成功」

それが四人の作戦だったことなど、怒っているサキが気付くわけがなかった。

「これでナミがこっちサ来たら、完璧なセッティングなんだけどな
ヤ」

「ま、ぜーたくは言わんとな」

「にしても、あのサキに手を出させるなんて、コメチもコメチだっ
ちやね」

「でもやあ、サキだって、コメチだからって甘えがあるんじゃない
のワ」

「あ、んだよな」

四人はゆっくりと戻り始めた。と、向こうからナミが来るではな
いか。

「なんかね、あの二人の邪魔しちやいけないような気がしてワ。ん
だっけ、あたし、トイレって言って来ちゃった」

「ナミ、ナイス」

五人はこっそり、物陰からサキとコメチの成り行きを見守ることに
した。

第10部：十月、野外活動 - 3（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第10部：十月ゝ野外活動ゝ - 4（前書き）

10 - 1 同様、本文中に、真似してはいけない設定があります。
交通法規では認められていないので、決して真似しないで下さい。

「何であなただけが戻って来たのよ」

先に口を開いたのは、コメチの方だった。

「んなの、こっちの勝手だろ」

サキはブイと横を向いた。

何となく、その態度はサキらしくないと、長い付き合いのコメチはすぐに気付いた。そしてそのらしくない態度は、サキがコメチに作ってくれた、膠着状態（じょうちゃく）を脱するチャンスだと、彼女は思った。

でも実際のところは、コインロッカーの件を説明するのを、サキはただ面倒臭がっていただけだった。

「ごめんなさい」

俯（うつむ）いて、照れくさそうに、コメチは消え入りそうな声で言った。

「無理すんなよ。これ以上憎まれ役になるのはごめんだっけな」

「性格悪いわね、昔っから。それでも本気で謝ってんのにワ」

「悪かったな、性格悪くって」

そう言いながらも、サキは片膝を着いてコメチと視線を合わせる
と、少し赤くなっている頬に手を当てて言った。

「痛かっただろ。謝んのはオレの方だよな、ごめんな。確かに女に
手を出すなんて最低だよな」

「あら、性別なんて、あなたは気にしてないのかと思ってたよワ。

アキラと喧嘩したっちゃ」

「からかうなよ。あいつは例外。マジで強いから、本気出さなきゃ
こっちが危ない」

「それもそうね」

二人は笑った。

「ったく、勝手なこと言いよって。後でどついたる」

アキラが齒軋（はきし）りしていたことは、言うまでもない。

一方、覗^{のぞ}かれていることなど知らないサキは、コメチの額に自分の額をコツンと当てて、コメチの目を見て微笑^{ほほえ}んだ。
「な、これで終わりにすつぺしな」

「そうね」

サキの細い目が針よりも細くなり、コメチも微笑んだ。

「おらおらおらおらあっ！」

「ちくしょうっ！　たく、ヨロシクやってんじゃねえよっ、勝手なこと、さんざ言いよって」

これ以上隠れていたら、もっとすごいことをやりそうな気がして、五人は乱入した。至極^{なご}和やかな雰囲気は壊され、いつもの騒々しい七人が揃った。

結局牧場へはタクシーで行くことになった。

勿論、運転手のおじさんを口説^{くど}き落として、朝と同じような乗り方で無理矢理に乗り込ませてもらったのだ。

決して良い子は真似してはいけない。

牧場ついて、まず始めにしたことは乳絞りだ。これが結構難しい。あの何でもできるアキラでさえ、手間取っていた。できたのはサキ、コメチ、ポンだけで、三人は農家の出だ。ある意味当然とも言える。それから工場見学をし、チーズなどの試食品を食べ尽くし、満腹したところで乗馬体験。アキラは名誉挽回とばかりにヒラリと馬にまたがり、障害を飛び越してみせた。彼女ならできて当然なのだが、その理由を知る者は一人もない。

「こんなの、牛と同じださ」と、負けじと馬にまたがったのはサキとポン、カズヤ。残されたコメチとナミ、何故かシキはポニーに跨^{またが}り楽しんでいる。

飽きたら羊の囲いのなかで鬼ごっこ。そして、待望のジンギスカン。

「ところで……」

「ん？」

ポンはシキに声をかけられて振り向いた。

「ジングスカン、食べられる？」

「……そうなんだ、困ってたんだ」

ポンは立ち止まった。「だってやあ、今の今まで羊と遊んでただぜ。さすがのオレでもできないんだよな」

「よく言うよ。そんなのだったら、ポン、牛肉も鶏肉も食べられないはずだっちゃ」

シキは素直に思ったことを言った。

「それを言ってくれるなよ、シキ。あれはそういう目的だって、物心ついた頃から解ってるからいいんだよ。それよか、なあ、サンドイッチでもそこで買ってやあ、どっかで食うべ」

「エライ！よく言った。それでこそ、豊かな国の住人やわ」

「大変よ。これから嵐がくるわ」

「なんだ」

全員がポンをおちよくったが、お人よしのポンはニコニコしながら「雨具準備するかあ」などとふざけている。

結局サンドイッチとソフトクリームで昼食にし、それからアーチエリーに挑戦した。これはもう、ガイドブックお決まりのコースだった。

ひともんちやく

時間きっかりに、朝、一悶着した駅に集合し、宿舎に迎うバスの中で、七人は爆睡していた。

「何なのや、こいつら。よく眠ってるこた」

「遊び疲れたんじゃないのワ」

「でも、サキとコメチ、朝っぱらから駅で大喧嘩してたぜ、行きに」

「あ、見た見た。あれはヤバイ。アキラまでおろおろしてたよな」

「で、もう仲直りしてた」

「天才連中は解んねえよ、どうなってんのか。こいつら妙に仲良いしな」

「でもやあ、こう、幸せそうだと、鼻の穴にポツキー詰めたくなっちゃうよな」

「やめとけ、アキラだ……」

徹底的に笑われているのにも気付かず、眠っている時だけ平凡な人間の輪の中に入れてもらえるアキラは、静かに寝息をたてていたが、まさかB班の平凡なメンバーを自分の不可解な世界に引き込み、二度と平凡な世界に戻れなくしてしまうなど、その時アキラは夢にも思っていなかったし、他の六人も、いつもの日常が失われていくなどとは、それこそ夢にも思っていなかった。

第10部：十月、野外活動 - 4（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

二日目の登山。

「アキラなんてやあ、頂上で風に飛ばされたりして」

「あはははは、ありえるー」

「ばかやろー、ベジタリアンをなめるんじゃない。良質の蛋白質、ちゃんと摂ってるんやさかい。お前ら肉食獣めが」

昨夜の説明会の最中に喋りすぎて叱られたというのに、アキラは朝礼中にまた喋っている。

この朝礼は、登山の中止を告げる為のものだった。

窓の外では夜中から降り始めた雨が、止む気配なく続いている。

これでは二〇〇メートルを超える山を登るなど以ての外だ。

山の天気は変わりやすいということで、違う山の登山も学校側は考えていたが、麓の天気が持ちこたえていても、その山も雨天との情報が入って打つ手がなくなり、この朝礼だ。

「この雨、ポンがジンスカン食べなかったからじゃないのワ？」

コメチがくすくすと笑いながら、ポンの柔らかな横腹を小突き、

ポンは「あはっ、バレたあ」と笑っている。

宿舍の体育館に集められ、中止の旨を説明されながら、生徒たちは勝手にこそそと喋っている。

「じゃあ、今日も自由行動かヤ？」

そこまで都合良くはなかった。

学校行事というものは、そこまで生徒に甘くはない。

「だからつつつてやあ、何もこんな雨の中カッパ着て、溶岩流の跡なんか見に来させるかよ、普通」

「だって、ただの溶岩が流れた跡だべ。流れてるってんならいいけどやあ」

「うわ、マジで意味ねえ」

「つーか、流れてるとこなんて危険だから連れてこないって」

生徒たちは、皆、文句たらたら言いながら、足場の悪い道を歩いていた。

「絶対ここ、登山以上に危険だつちゃ。足場、むっちゃ悪いし、こけたら痛いよワ、これ」

「もう、こけたよワ」

「一組と二組と交替で、午後はナントカ地熱発電所見学だつて」

「ふざけんじゃねえよ。誰が行きたがるってんだよな」

「腹の足しにもなんねえ」

「先生も何考えてんだかなーっ」

「これじゃ、教室で授業受けてた方がマシだよな。居眠りできるもん」

あちこちから悲鳴が聞こえてくるのは、誰もが悪い地面に足を取られて転んでいるからだ。この状況に文句を言わない者はいない。

実際、教師たちも音をあげていた。

雨だから自由行動では、学校としての示しがつかない。建前としての行動だから地熱発電所も簡単に廻る程度で切り上げて、早々に宿に戻り、朝しなかった宿舎の掃除をしてから、宿舎内で自由行動になった。

とはいえ、やれることといえば、体育館で球技をするか、部屋で駄弁^{だへ}るくらいしかない。

動き盛りの中学生には退屈極まりないというものだ。

酷く退屈だった二日目が終わりに、三日目。素晴らしい秋晴れの日だった。

三日目の日程は、午前中は各クラスのA、C、E班がオリエンテーションリングをして、B、D、E班が野外炊飯で豚汁とカレーを作る。午後はその逆だ。そして夜はキャンプファイアーを囲む予定だった。

「カレーと豚汁なんて、まったく芸がないいったらありやしない。ちよつと、ポン！うちは肉抜きなのよ！」

「ええ〜っ?!」

肉を鍋に入れようとしているポンを見咎め、コメチはその手をピシリと叩いた。

「仕方ないでしょ。アキラが食べられないんだからワ。文句言わないの！」

うう、と言葉に詰まって唇を尖らせるポンを、ナミが宥める。

「ねえ、ポン。豚汁はけんちん汁にするけど、ほら、カレーの肉はちゃんと後乗せであるから」

「ナミは優しいなあ。じゃ、ちよつくら一仕事してくるよワ」

現金なポンは空の飯盒片手に、喜び勇んで何処かへ駆け出して行った。そして戻ってきたその手には、炊き立ての飯盒が握られていた。

「いっただ〜きま〜す」

出来上がったカレーと豚汁と炊き立てのご飯を前に盛り上がるB班の後ろで、「きゃ〜っ！ご飯が空〜っ！」という悲鳴が聞こえても、七人は完全に聞こえないふりをして食事を続けていた。

午後の日差しは強かった。十月半ばだというのに、半袖になりたくなるほどの陽気だった。しかしこれから道無き道を進むというのに、半袖になるのは無謀だ。それぐらいのことは、神森の人間は判っていた。

「優勝賞品、何だべな」

「そりゃ、いいもんだっちゃ」

「サキ、今日の調子は？」

「バツチリ」

「じゃあ……」

七人はスタートの合図とともに、飛び出していった。例によって、賞品という言葉は原動力となる。

オリエンテーリングのコースは六コースあって、各クラスチームが違うコースで同時にスタートし、前のチームがスタートしてから十分おきに次のチームがスタートする。しかも同じクラスの班が、同じコースをやらないよう、ばらばらになってもいた。

「何もそこまで、徹底しなくてもなあ」

「んなことどうでもええねん。えーか、目指せ賞品やで」

七人はとにかく一つめのポイントを目指した。

コンパスを持っているのがアキラとサキ。地図を持っているのがカズヤとポン。ナミはトランシーバーを持たされるはずだったのだが、何故かポンが持っている。コメチとシキは、仲良く救急セットを持っていた。

第10部：十月、野外活動 - 5（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第10部：十月、野外活動 - 6

大体コンパスだけでは先に進めないはずの競技なのに、地図とコンパスを簡単につき合わせただけで、先頭のアキラとサキは、始めから絶好調とばかりに飛ばしていた。予定外に登山がなくなった分だけ、サキの体力が温存されている所せい為もあるだろう。

「そのまま真直ぐ行くと、ポイントあるよワ」

「おう！」

ポンに言われ、そのまま小走りに行つた先頭の二人は、カズヤが止める間もなく、藪やぶに隠れていた小川に突入。ポンは舌を出している。

「お前、知つてたな、ポン」

「あははははっ」

「アキラ、やつちまえ！」

「おうよ。二度とひつかかるものか」

アキラとサキは、ポンを小川に引きずり込み、気が付くと、全身ずぶ濡れになるまで、全員で水遊びをしていた。暫しばくはしゃいでいたが七人だったが、そのうち、自分たちがたつた一つしかポイントを見付けていないということを思い出すと、慌ててずぶ濡れのまま次のポイント目指して走り出した。

「ポン、もう、お前のことなんか信じないで」

「ええ、ちよつとは信じろよ」

「誰が信じるか、この前科一犯め」

今度は全員で頭をつき合わせて地図と睨にらめっこし、そうしてルートを決めたら、ポンやカズヤのちよつとした悪戯いたずらに引つ掛かることなく、アキラとサキは迷わずポイントへと確実に辿たどり着いた。

ポイントを見付ける度に、持たされたトランシーバーで報告すると、どうも自分たちの順位はどんどん上がって、あれだけ道草をし

たというのに、トップになっているらしい。

それに気を良くし、午前の部の人間が土から抜いて藪のなかに投げ捨てたのか、隠されていた九つ目のポイントをコメチは見付けると、地図上とは全然違つところにポイントを移動し、草までかけて隠している。

「コメチ、何もそこまで……」

「いいのよ。どうせこのコース、五組はもう使わないんだっけ」

「これで、差は広がるばかりだっちゃんね。ざまあみろってんだ」

「あああ、あたしたちって、悪人だっちゃんね、完全に」

「何を今更」

「そうそう」

悪いなんて口先だけの話だ。

「なあ、明日の夕飯、何だったかや？」

「またあ。いつもそればっか」

七人は余裕たつぷりに休憩していた。

「あー、こちら5 B」

「おい、ポン。さっき報告したべや。今更白状すんのかワ。オレらが9ポイント隠しましたって」

ちよつぷり慌てるサキを手で制し、ポンはトランシーバーの応答を待った。

「まさかあ。あ、先生、オレ、東海林しやうかいだけど、明日の夕飯が気になつてやあ。何だったかや？ちよつとそれだけ教えてくんない？気になつて動けなくなつちゃって、オレたち」

『……勝手なこと言うな。動けないのはお前だけだろが、東海林。大体、こんなことで交信してくるな』

「あつ、そりやねえべ！……勝手に切りやがった。冷てえの」

「それが普通よ、ポン」

「さあ、行くぞ。ラストは近いぞ。ポン、賞品が待ってつとワ」

「あつ、んだ。そいつがオレを呼んでいたんだった！」

「……」
賞品の一言で、弾かれたように歩き出したポンに、思わずメンバーは笑った。

野生児のような七人は、本気を出せばとにかく速い。

「地図によると、この土手の真下に最後のポイントがあるんだけど……」

カズヤは地図をみんなの前に広げた。

「もつとまともなルート誘導できひんのか、カズヤは」

一同は足元の斜面を見下ろした。そこは明らかに道ではなく土手の部類だ。下りられないほど急ではないが、坂と呼ぶには急斜面すぎる。

「いや、面目ない」

思わずカズヤはアキラに謝った。

「等高線見てないんだよ、カズヤは」

「仕方ないっちゃね、カズヤだし」

「なんだ。何せ天然だからワ」

言いたい放題だが、本当は全員でルートを決めているのに、言葉が強いアキラの勢いに負けて、カズヤがすっかり謝ってしまったが為に、全部がカズヤ一人の責任になっている。

「いいわ。埒^{うち}があかないから、そのまま真直ぐ行きましょ」

コメチは何も考えずに行こうとした。

「おい、オレはお前のこと氣イ遣ってんだぜ。回り道した方が、安全だって」

「あなた、何年わたしと付き合ってたんのワ、カズヤ。甘く見ないでよね」

「そういう問題かよ、おい」

「さあ、行くわよ」

牧場は嫌だとこねていた人間がこれかよ……、と、誰もが心の中で思っていた。しかもたった二日前なのだから、おかしい話だ。そ

れでもコメチの性格を知っているから、誰もそのことを口にしたりしない。

しかし今から下ろうとしている土手は、見れば見るほどかなり急勾配で、思わず躊躇^{ためら}ってしまうようなスキー上級者コース並みの斜度だった。

「コメチがいいんなら、ええやんか。ナミはどうやねん？」

「多分、何とかなると思うけど……」

「それじゃ、行ってみよう！」

無謀にも、そこら辺に生えている木の枝や草に掴^{つか}まりながら、一人一人手を取りながら、慎重に七人は土手を下り始めた。

第10部：十月、野外活動 - 6（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第10部：十月、野外活動 - 7

「きゃあああつ！」

そこにいる誰もが、誰か一人くらいは滑るだろうと予想してはいたが、案の定、ナミが悲鳴をあげながら滑り落ちて行った。

転がり落ちるほど急な崖^{がけ}ではないので、彼女は土手の下まで滑り落ち、尻餅^{しりもち}について止まった。

「痛い！」

「そりゃ、当然だ」

「バカ、茶化すなつてば、ポン。ほら、コメチ、救急箱貸して、早く。ナミもジャージまくつついてワ。今、行くから」

シキは手際^{てぎわ}良く言つと、巧^{うま}くバランスを取りながら土手を滑り降りた。

彼のよく気が付くところは女性的で、普段も男としては少し軟弱そうに見えるのだが、すぐに急斜面を器用に滑り降りたり、怪我に対する冷静なところなどは、意外なくらいに頼もしい。

「あ、どうせすぐそこなんですよ。だったらポイントチェックだけしてきちゃつてよ。ボク、ナミの手当てしちゃうからワ。結構擦り剥^むいてるから、消毒したいんだ」

手際よくナミの怪我を処置しながら、シキは待っている五人に言つた。

「それでいいなら、そうしちゃうよワ」

ナミの状態が大したことないのを見たポンは、さつさと立ち上がり、コメチはそんなポンを視線でねめつけたが、シキはそれを制した。

「待たれるのも落ち着かないしさ。ほら、サキもここにいた方がいいよワ。肩で息してんじゃん」

「あら、ほんと」

シキが気付くまで、誰もサキの健康のことを気にすることを忘れていた。

「サキ、お前、シキの言う通りにしとけよ」

健康のことでもなければ、サキに命令などできないカズヤは、こぞとばかりに言ってやった。

しかし「いいや、行く」と、すぐに拒否される。口を尖^{とが}らせる様は、まるで駄々っ子だ。

「いいじゃん、すぐそこなんだっけ、最後の感動の瞬間に立ち合ってたってなあ」

「ええやんか。本人が一番判るやろ、自分の身体なんやし」

あまりの駄々っ子ぶりに、思わずアキラが助け舟を出し、それでも不満そうな顔をしていたカズヤとの間を取り持った。

「じゃ、行くか」

五人はナミとシキを置いて、最後のポイントを目指して先へ進んだ。

「ねえ、そろそろでしょ」

コメチの声が、気持ち弾んでいる。

「んだな。あの小川の向こうの、少し高くなってる所の裏側くらいかな。地図ではそうなってる」

「よっしゃ、賞品だ！」

「あ、待ってよ、ポン」

走り出したポンを、コメチが追った。

「元気やねえ、若い二人は」

「何、年寄りくさいこと言ってるんだよ、アキラ」

「悪いなあ、老けてて」

アキラがそう言って笑った時だ。

「きゃああああっ！」

「何だ、またこけたんか？」

三人は走り出した。

よく聞けば、コメチの叫び声に混ざって、ポンの叫び声まで聞こえる。

「何だ、何なんだ？」

尋常ではない声に、三人はいよいよ不安になって、走る速度を上げた。

「あつ、どうした？」

途中でコメチを背負ったポンが、トランシーバー片手に突進してきた。それはもう必死の形相で、三人とすれ違ったことすら気付いていない。当然、呼び声にも気付かない。

「こつ、こちら5 B、5 B！さつ、最終ポイントに、くつ、くつ、熊があつ！現在退避中！現在退避中！」

三人は顔を見合わせた。

「今、ポン、何て言ってた？」

「熊とか言ってたよう……」

「オレはまた、親子連れの猪が突進して来たのかと思っただぜ」

二人の後姿を見やりながら、アキラは余裕綽々だ。

「さあて、猪を走らせたものでも、見に行きますか」

「え？行くのワ？」

「当然やん。じゃ、どうやってポイントチェックするんだ？」

びくびくするサキとカズヤを引き連れて、アキラは最終ポイントへと向かった。

三人が三人とも、自分たちの持っている特殊な力を使うという発想はない。

藪に隠れてポイント地点を覗くと、たしかに黒い毛むくじらの物体がそこにいる。

「あ、あれま、ほんとやわ。ちょっと退いてもらわんと、記号がチエックできへんな、こりゃ」

「どうする？」

「まあ、任せろ」

アキラは二人を一步下がらせると、その二人が止める間もなく、無謀にも熊の前に躍り出て行つたのだ。

二人を一步下がらせたのは、自分のあの瞳の色を見られないようにする為で、アキラは熊にその場を離れてもらうように説得していたのだ。ただ傍から見たら、熊がアキラの眼光に迫力負けして退散したように見えたに違いない。

実はアキラは、熊と語ることに集中しすぎていて、瞳の色を変えた瞬間に世界の風景が変わってしまったことに、気付いていなかった。

「おい、熊、退いたぜ」

振り向いてアキラは絶句した。遙か彼方に、逃げ出したサキとカズヤの後ろ姿があるではないか。

「――！」

ようやくアキラは状況を把握した。

「何で連中まで巻き込まなくちゃなんねえんだよ！誰だよ、呼び出したのは！」

アキラは彼女らしからぬ声を上げ、地面を蹴った。かなり取り乱している。

その時、不気味なほどに生温い突風が、アキラを襲った。

その突風は、シキやナミのいる方向から吹き付け、アキラの身ぐるみを剥ぎ取り、全く別の、見慣れない形の服を与えた。

突風が吹き抜け、アキラが顔を上げたとき、その顔は別人の者になっていた。

第10部：十月、野外活動 - 7（後書き）

次回から第11部：十月、Alfreakenを始めます。

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第11部：十月～Alfreaken～1

11：十月～Alfreaken～

「女王陛下、あの、陣中に怪しい、その……王族らしき方々が……」
赤銅色に焼けた肌に赤茶色の巻き毛で、虹彩が昼白色に発光して
いる黒い瞳を持った、人間の膝丈くらいの人間 小人 が、長い黒
髪を無造作に束ねただけの、二十歳くらいの女に「女王陛下」と呼
びかけた。

女は小人とは正反対に大柄で、全身黒尽くめに近い色の服を着、
硬い金属の胸当てを着け、膝まで覆い隠すような長い皮の脛当てを
履き、全身を覆うくらい長いマントを纏っていた。

全身黒尽くめの女は、赤い小人の呼びかけに振り返りもせずに、
海の上の船団を見つめていた。

海風にマントがはためき、これもまた真っ黒で細身の、一メートル
くらいはある長さの剣を提げているのが、頭になった。

「私の時間が終わるまで、丁重に饗応しておいてほしい」

彼女は感情の籠らない声で言った。

「彼らは……その、王族ではないのでしょうか……？実は、言葉が
通じるのです」

「何だつて？そんなこと……」

言うべきか言わぬべきか迷ったような、控えめな小人の言葉に、
黒尽くめの女は驚いたように振り返ったが、すぐに平静を取り戻し
て腕組みをして考え込んだが、それもほんの僅かのこと。顔を上げ
た。

「まあ、いい。取り敢えずこの記憶は消す。苦界人に、この世界
を汚されるわけにはいかぬからな。私と苦界のことは一切語らない
ように。彼らの言葉のことは気にしないでくれ」

「畏まりました。では、ト・アルフレイアの庭にてお迎え致します」

「宜しく頼む。それと、極力獣たちには近付かないように伝えてくれ。彼らは獣に慣れていない。それに『肉体定まらざる者』たちには、彼らが驚くと思うので、申し訳ないが目の前での変化は避けてもらいたいと伝えてくれ」

「たしかに承知致しました」

恭しく一礼し、赤毛の小人は走り去った。

黒尽くめの女は、小人が去って周囲に誰もいないのを感じ取ると、独り言を呟いた。

「ったく、目眩ましで顔を変えなきゃなんないじゃないか、めんどくさい。」

……しかし、言葉が通じる苦界人とは

まったく初めてだ。参ったなあ……」

振り向いた女の顔は、色白で、釣り上がった大きく黒い瞳。そして、その表情が決して動くことがない氷の彫像。

桂小路 晃……。

大体、このタイミングで誰が呼び戻したんだ、まったく……。こんな迷惑な呼び出しも初めてだ。

アキラはその場を離れた。

石造りの西洋の城にも似た建物。

テレビで見たイギリスの庭のような、計算された野原のような空間。

そこに詠えられた四阿は、気持ち良い風が渡る特別な場所だ。

そこへ戻ったアキラは、山のように出された見知らぬ果物や飲み物を前に、戸惑いながらも手を出している、複雑な表情の六人を見た。

さて、どうしたものか……

アキラは無意識に浮かんだ笑みと、無意識に浮かんだ困惑をその腹の底に沈め、六人の前に立った。

「見知らぬものばかりで戸惑われたでしょう。口に合っていればよいのですが、如何いかでしょうか？」

アキラは、まるで初めて会った人間に話しかけるような態度だった。

突然声をかけられて、六人は驚いて顔を上げた。

「あの、ここ、一体どこなんでしょう？僕たち、オリエンテーリングの最中だったんですけど……」

サキは丁寧な言葉で訊ねた。その口調から、彼らはまるでアキラには気付いていないようだった。

その返事を聞いて、アキラは眉間に皺しわを寄せた。

敢えてこちらの言語で語りかけてみたのだが、彼らは何の疑問もなく理解しているばかりか、自分達が日本語を喋喋っていないことにすら気付いていないようだ。

しかし、その疑問は飲み込むことにした。

自分の正体を明かす気がないのに、その疑問を口にするのは意味のないことだ。

アキラは特上の笑顔で声をかけた。

「さぞや驚かれたでしょう。ここは自然界アルフレイア、と紹介したいところなのですが、現在は穢けがれがある為、アルフレイケンと呼ばれている国です。」

このわたくしは、アルフレイケンの人間の長で、この国を治める女王、タリユーシカ・アレन्दクと申します。タリユーンとでも適当に呼んで下されば結構。

時たま、あなたたちのように、こちらに紛れ込んでくる方もいますのよ。」

アキラは、まるで何事もなかったかのように、不可解な片仮名の名前を名乗り、手の甲を口許に当てて上品に笑ってみせた。全くアキラに気付かない六人はそれに応えてそれぞれ自己紹介し、最後にサキがこう付け加えた。

「どこかに老けた女がいなかったですか？もう一人、一緒にいたはずなんですけど……」

「いいえ、いませんでしたけど……」

「まったく、勝手なこと言いやがって。老けてて悪かったな。大体、てめえらがオレのことを置き去りにしたんじゃないかねえか。」

アキラは表向き表情を変えなかったが、心の中ではいつも通りのことを呟いていた。

第11部：十月、Alfreken - 1（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfreken>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第11部：十月～Alfreden～ - 2（前書き）

今回はこの物語独特の世界観が語られます。

解りにくい点も多々あると思いますが、ご了承ください。

実際六人の目には、よく見慣れたアキラは映っていない。

今、彼らの目に映っているのは、すらりと背が高く、色白の細面ほそおもてで、細い切れ長の黒い瞳の中の虹彩が、光で針のようになる不思議な目を持つ女性だった。

まずおかしいのがその衣服。ぞろぞろと引きずらんばかりの黒装束は、見るからに縁起が悪い。絵本の中の悪役の騎士のようだ。

そしてその化粧も変わっている。顔だけ取り出したら、古代アニミズムの巫女か何かのようで、まるで刺青いれずみのような色で目の周りが唐草模様のような文様が施されている。そして形の良い薄い唇には鮮やかな紅が引かれている。よく言えば、ナンダカという歌手がプロモーションビデオでこんなメイクをしていたような気がしなくもない。

がしかし、六人にとって顔の造りや衣服、化粧などよりも、何よりも印象的だったのは、女の目だった。

六人に向けられていた黒い瞳は普通ではなく、瞳の中の虹彩が瑠璃色に発光しているのだ。しかも猫のように光で針になっている。このような目を人間が持っているなど、見たことも聞いたこともない。

そしてその不思議な瞳の眼光は鋭いのに、それは痛く突き刺さるような敵意などなく、むしろ心地が良い眼光だったのも不思議だった。

暫しその外見に見とれていた六人は、女の声で我に返った。

「多分、そのいない女性は苦界くがいに残っているのでしょうね」

アキラは何喰わぬ顔をして言った。それは六人に言わせると、「タリユーシカ女王は、感情の籠こもらない声で推測を述べた」となる。「その、『くがい』ってのは、一体何なのや？」

食べ物を食べる手を暫し止めて、ポンはタリユーシカに訊ねた。
そしてその質問に、タリユーシカはため息を一つついた。

「苦界人は、四つの世界の歴史まで忘れてしまっているのですよね。
と言っても、まあ、仕方のないことですわ。分化したのは、四万年
以上も前のことですもの」

「四万年！」

六人は声を揃えた。

「どのくらい前だ？」

「どれくらいって……。取り敢えず、猿人発生が約六百万年前で、
ジャワ原人が約百五十万年前で、ネアンデルタール人が約二十万年
前で、クロマニヨン人が四万年前だっけ、現人類の直接の祖先の誕
生と同時くらいだな……」

「って、学校で習っただろ？」

「さっすがー、サキ」

指折り数えながら言ったサキを、他の連中は褒めたのだが、六人
の誰一人として、あまりに壮大な時間の話についていけない。

あまりに桁^{けた}がでかすぎる。

その様子を微笑みながら見守っていたタリユーシカは、導き出し
た筈にゆつくりと拍手して言った。

「そう、ご名答。つまり、現人類の発生と同時に、分化することにな
ってしまったということですよ」

「さっきも分化するって言ったけど、一体何が何から分化するのか、
こっちはさっぱり解らないよウ」

「どういうわけかサキだけが、辛うじてタリユーシカについてきて
いた。」

「たしかに仰る通りですわね。これは失礼致しました」

目の前で見慣れぬ女性がいるところと面白そうに笑っている。少な
くとも六人にはそう映っている。

そしてタリユーシカとして振舞うアキラは、六人の困惑などお構

いナシだ。

「こちらには、そちら人間だけの世界とは全く違った、しかし全生物に共通する世界観と歴史があるもので。ついわたくしどもの正式な歴史を前提に喋^{しゃべ}ってしまいました」

「で、それは？」

タリユーシカの話に、サキは思わず興味を示した。彼にとっては、まるで知らない未知の物語を聞かされているようなものなのだ。

「歴史を語るには、神話を語らなくちゃならないのですが、それは少々難しいですわね。簡単に概要を語りましょうか」

さつきは多くを語るなど言っていたはずなのに、アキラときたら、どついうわけか話す気まんまんだ。

「宇宙の発生に関しては神話的要素が高いから語りません。取り敢えず宇宙とは普遍的なものであるということを前提としましょう。」

ここに一つの星系があつて、そこに生物が存在するといいます。理解しやすいように、我々の住む惑星一つだけに話は限定致します」

一同は目の前の奇妙な女性の話に、思わず身構えた。

「これからわたくしが語る『世界』というものは、我々の眼に見えるものだけではないということを、ご理解戴きたい。」

先ず、我々肉体を持ちしものが暮らす世界を『^{アルフレイア}自然界』、全生物共通の言葉では『アルフレイア』と言います。

生態系ピラミッドという言葉はご存知ですね。この世界にはこの関係が組み込まれ、触れられる肉体、朽ちる肉体で以^もって彩りを形成します。

そしてこれらアルフレイアの生物たちは、その肉体の中に巡りめぐ魂を持っています。それらの魂が肉体での一生を終え、安らぎを得る世界、実体のない魂の世界が『^{テレヘイア}冥界』、『テレヘイア』と言います。

それは死後の世界でもあり、生前の世界でもあります。」

更に、この一つの星系の彩りを創ろうとする意志、巡る魂の中に在って不変の魂の存在を、我々は神と呼びます。

我々アルフレイアの民は、心の拠り所がないと生きられない性^{さが}を持っていますので。それを神と呼ぶのです。その神々の住む世界を、『^{リテイア}神界』、我々は『リテイア』と言います。本来、宇宙とはこの三つの世界から成り立つべきものでした」

タリユーシカはここで一息入れた。

彼女は自分が喋り過ぎていることに気付いていない。

第11部：十月～Alfreaken～-2（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfreaina>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

「でも、あなたは先ほど世界は四つだと……」

「まあ、順番に」

サキの言葉に、タリユーシカは微笑んだ。

「確かにわたくしはそう申し上げた。

でも、この『3』という数字は重要な意味を持つのです。

例えば『神界・冥界・自然界』、『過去・現在・未来』、『有限・無限・無』、『誕生・存在・死』、などなど、いろいろなものが三つで区切ることができる。つまりは宇宙というものを表す数字、絶対安定数なのです」

まったく以って尤^{もつと}もらしい分類に、一同は一応頷く。

その反応を待って、タリユーシカは続ける。

六人に見える目の前の女性の表情は、基本的に変わらない。

「ところが、言っても仕方のないことですが、偶然を支配する神々が人間を創った時に過ちを犯してしまわれた。

誕生は進化の課程の中の必然であるとはいえ、神々は人間の発生に関し、彼らのエゴを反映させてしまったのです。それが神の過ちです」

「エゴ？」

「はい、あなた方に解りやすい言葉を使えばエゴです。神のエゴを受けて生まれた人間は、生態系ピラミッドを崩してしまいました。そのエゴは、煩惱。我こそはと願う強力な自我。

人間は獲物を狩る脚力も牙も爪も持たず、逃げられるだけの脚力も身軽さも持たず、しかしながら草食動物のように植物だけを糧^{かて}とすることもできず、与えられたのは神と同じ姿の二足歩行と器用な手とそれを使いこなす頭脳だけ。

これだけでは野生では生き伸びることは難しいはずでした。

でも、その頭脳は想定外の能力を発揮した。

与えられた頭脳で以^もって、人間は生態系ピラミッドの本来の位置からのし上がり、キャップストーンをも超えようとした。いや、生態系ピラミッドからの脱却を図ってしまった。

そしてその不安定さを隠す為、その不安定さを維持する為に、自然界の生態系を支配し始めました。

本来の自然界には、支配という言葉は存在しません。このような歴史を辿^{たど}り、人間は自然界には存在していなかった、負の感情に囚われるようになってしまったのです。悪の心に」

人間であるタリユーシカは、人間を否定し続けるような言葉を続ける。

「さて、我々生物には魂が宿っている。人間であれ、獣であれ、植物であれ。物百年の生命^{いのち}と言いますから、永く存在している物にすら魂は宿る。

その巡る魂は無垢の存在です。しかし、人間に宿ってしまったその時、その無垢なる魂は煩惱に染まって濁ってしまう。肉体の消失後に冥界^{テレヘイア}に戻っても、その濁りは浄化されることはなく、そのまま次の肉体へと巡ってしまう。そうしたら、人間以外の生物までもが煩惱にとりつかれ、全ての生物が我こそはと願い、争いが起こりかねない。

それはとても危険なことです」

まあ、その論理でいけば、それはとても危険なことだということくらいは、理解できる。

六人は取り敢えず相槌を打ち続ける。

「^{リテイア}神界から見守っていた神は、きっと自分の犯した過ちを後悔したでしょう。世界を彩りで充たそうとする存在なのに、自分達の姿を投影したものたちは、自我によって彩りを壊そうとするのだから。

ではどうするか。

既に生まれ落ちた種に手を加えることはできません。それこそ神の工ゴで瞬時に全滅させるわけにはいかない。だからといって、手を拱こまねいて見ているだけというわけにもいかない。」

当然だ。神という超越した存在が本当にいたとしても、それは認められない。

でも、超越した存在がそれを望んだら、ちつぽけな自分たちが気付く間もなく存在は掻き消えるだろうなと、サキなどは考える。

「では、神々はどうしたか。

神々は、絶対安定数に、新たな教義を加えることにしたのです。

それは四つめの世界を創ること。

『誕生・存在・死』、その他に、認められない初めから存在し得ないものの存在を認めました。

それは『無』とは違います。存在と対義の無ではなく、そもそも存在しないこと。その存在を認め、それを四つ目の世界としたのです。

『4』という数字。それが限界安定数。それ以上は認められなかった」

そろそろ禅問答のような話に、一同は苦痛を感じていたが、すっかり相手は気付かずのめりこんでいる。

ポンやコメチなどは、お構いなく大欠伸だ。おおあくび

「四つ目の世界を創り出しても、悩みが尽きるものではありません。それをどういう位置づけの存在の世界にするか。それは冥界テレヘイアを守る為のものか、それとも乱れゆく自然界を守る為のものにするかと。

そこで神は考えた。人間を創る時よりも考えて結論を出した。

アルフレイア自然界は肉体の世界。肉体は朽ちるもの。

テレヘイアそして冥界は魂の世界。永遠に巡るもので、ここが汚れれば自然界も汚れてしまう。そこで神々は新しい第四世界を冥界テレヘイア

の為に創ることにしたのです。

その名は魔界、ヘクメネセイア。魔の心に染まった、濁った魂の受け皿となるべき世界。これ以上は宇宙の均衡は壊せない。

こうして神は世界を守ろうとしたのです」

そろそろカズヤが欠伸をこっそりし始め、ポンは舟を漕ぎ始めている。必死に話を理解しようとしているナミの視線は宙を泳ぎ、理解できていないのが判る。

それでも目の前の変な女性は気付かずに一方的に話し続けている。これはある意味で苦行だ。

第11部：十月～Alfreaken～-3（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfreai>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

「それなのに……」

苦行を苦行と思っていない女は、尚も一方的に話し続ける。

「必死な神の想いを知るわけがない我々人間の数は、急激に増幅し留まることを知らず、やがては自分の自我を肯定する為に新しい神を生み出し、本来の神々の領域を侵そうとしてしまいました。

このままでは本当に世界が、宇宙が壊れてしまう。

しかし新たな世界を生み出すことは、もうできない。何しろ次の『5』という数字は混沌と破壊を意味し、秩序が失われる数字ですから。

……ああ、あなた方は数の基準が両手の指の数ですよ。我々の基準は片手の指の数。あなたがたにとつての『10』という数字は、『5が二つ』という認識になるのです。

それはそうと、我々にとつて『5』は危険な数字なのです。

そこで苦肉の策でできたのが、あなたたち人間のみの世界。『^{ヘク}苦^{アルフラ}界』、『ヘク・アルフラ』と言います。

ただし、この苦界は独立した世界ではない。それは自然界の中に創られた隔離空間。自然界に適応できる人間と、適応できない人間とを区別する、こちらの世界と表裏一体の^{きわ}際どい空間です。

それでも第五世界を創るよりは不安定ではなかったのです

苦界で濁った魂は^{ヘクメネセイア}魔界へ行き、^{ヘクメネセイア}魔界は完全な閉鎖空間で魂は巡ることができない。そうすれば、苦界といえども自然界の一部であることに変わりはないのですから、肉体は朽ち、苦界も何れ朽ちる日がくるかもしれません」

自分達の世界が朽ちるかもしれない、と言われれば、六人も目を剥く。冗談じゃない！

その表情を見て取った女王は手で制した。

「勿論、隔離空間が開かれ、苦界が自然界に帰ることもありますよ。それは苦界ヘク・アルブラの人間次第ですけどね。

何れにせよ、一度誕生させてしまったものは、消滅させることができないのです。そこに生きるものたちが消滅させなければね」

微笑みながら話すような内容ではないはずだ。なのに目の前の女は余裕の表情を見せている。

サキは疑念が離れない。

「では、あなたたちの言うところの苦界くがいの『苦』とは何なのですか？」

黙って聞いていたサキは、とうとう吹っかけた。

「それは最大の煩惱。人間が我が身を守る為に自然を支配することから覚えた、邪魔なものを排除する方法。それは相手を排除するが、自分にも向けられることがあり、自分自身を苦しめるもの……」

「すなわち戦争」

「その通りです」

タリユーシカとサキは、大きなため息をついた。

サキ以外の五人は、ただ黙って聞いていた。

「ふん」だの「へえ」だの合いの手を入れないと、訳が解らないことでも一生懸命話している人に失礼になるからそうしていたが、正直なところ、本当に訳が解らない話の欠片も理解できないのだ。彼ら五人は、サキがこの話を少しでも理解できている様子すら、心底理解できない。

それはアキラも同じだった。

自分はここが育った環境だから、この考えが自然と身についていて当然だが、これが逆だったら、それこそ短気な自分だ、ふざけんな！と怒鳴り散らしているに違いない。

理解しようとする姿勢のサキに、感心の念が自然と湧く。

「ところでさ、水差すようで悪いんだけど……」

控えめに、シキが口を挟んだ。

「でもここも戦争してるようだけど……」

タリユーシ力は、またため息をついた。

「それには、まあ、言い訳があるのですけど……」

それにしてもアキラは、苦界と自分のことを、あまり話さないようにと小人に頼んだことなど、すっかり忘れてしまっている。

この現状を小人が見たら、開いた口が塞がらないことだろう。

「わたくしはこの国の人間の長であり、この国の王です。しかしこの世界には、人間だけの国が凡そ千年前から存在しています。ですが、彼らは決して自然を支配しようとはしていません。人間の住める環境に、人間が群れを成して生息している。そしてその群れは国家という形態を取っている、それだけのことです。」

ところが数百年前に、このアルフレーケン国から独立した人間だけの国は違つう。

彼らはこの世界の摂理に逆らい、自然を支配し、戦争を引き起こしました。

今現在は小競り合い程度に矢を射かけてくるくらいですが、常に海からこちらの際を窺っている。」

タリユーシ力は視線を海に移した。

今、一同が迎え入れられている皆は小高い所に建っており、海が一望できる。

その海には、大きな船五艘を中心とした船団が、確かにこちらを窺っていた。

「五年前の悲劇を繰り返さぬ為に、我々はこうして見張っているのです。そして様子見程度の攻撃に対抗するのです」

海岸線は砂浜ではなく、絶壁だ。だから上陸も困難だろうが、矢を射かければ届いてしまう場所に、船団は停泊している。

沈黙が流れる……。

第11部：十月、Alfreaken - 4（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfreaina>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

「ねえ、ちよつと」

ずつと黙っていたコメチが、小声で他の五人に声をかけた。タリユーシカが黙るのを待っていたのだ。

「ねえ、あなたたち、ちよつと勝手に動かないでよ。いい、ここはわたしの夢の中なのよ。だから本気顔でこんな話、聞いてないでよ。信じないでよ。お願いだから勝手な動きしないで、もう」

真面目に話をしているサキや、ちよつとした疑問を口にしたシキ、真面目に黙って話を聞いているポンやナミに、馬鹿にしたようなというよりはむしろ、焦りと恐怖に近い眼差しを向けて、コメチは言った。

その思いは当然のことだ。

そのコメチを見て、タリユーシカは微笑を向けた。

「別に信じなくてよいのです。信じて苦界に戻れば、あなたたちは自然界を恋い慕いて苦しむかもしれませんね」

聞こえない程度の声で、「んなわけないっちゃ」と、コメチは顔を背けて呟いた。

その声に、タリユーシカの微笑みの種類が変わる。まるで悪戯いたずらつ子のような意地の悪いそれになった。

「では、例えばあなたの仰おつしやるとおり、今日の前の出来事が夢ならば、どうしてあなたの夢の中で、我々はこうも自由に存在し得るのでしょうかね。

夢の主であるあなたに、どうしてわたくしが疑問を投げかけるのでしょうかね。

そして夢であるならば、この世界はあなたにとっては何の意味があるのでしょうか。

もしかしたら、本当はこちらが現実で、苦界があなたの長い一夜

の夢かもしれませんよ。

また、こうも考えられます。苦界も自然界も両方とも現実であり、両方とも夢なのだと。

夢と現実はあるあたたちの世界のもので例えるならば、メビウスの輪のような関係にあり、疑問を抱けば夢となり、信じれば現実となる。二つを信じ、その境界を断ち切ったら、二つは一つの表面となり得るのかもしれませんが」

一気に捲まくし立てたタリユーシカは、その先のコメチの表情を予想して、小さく「くくくつ」と笑った。

そして彼女の予想通りにコメチは混乱し、怒りに顔を膨ふくらませている。やりすぎだ。

「多分理解できないでしょう。それでよいのです。この世界のことをどう思おうと、それはあなたの自由ですから。

どうせわたくしとあなたたちは、再びこの世界で出会うことはないのでしょうかね。

でも、ここは現実です。だからお友達も自由に動きますから、お友達にお怒りにはならないで下さいませね」

タリユーシカは立ち上がった。

立ち上がった女王は、何も装飾がないシンプルな鞘に納められた長剣を、その細い腰にしっかりと佩はき直し、長い黒いマントを羽織り直した。

「時間です。わたくしは前線に戻らなくてはなりません」

六人の「前線？」との声に、「残念ながら戦場ですから」と、タリユーシカは静かな微笑みを返す。

「いいですか、ここではあなたたちの国の法は通じません。ここにいる間は、この国の王であるわたくしの言葉に従ってもらいます。勝手は許しません。

わたくしはこの国を統すべる者。この国の理性であらねばならぬ者

ですから」

タリユーシカ女王は、女王らしく毅然と言い放った。

「そりゃ、あんたは無鉄砲な子供じゃないだろ。」

子供にそんな一国を背負う責任、果たせるわけがないじゃないか」
上から目線で命令されたことが余程気に入らなかったのか、相変
わらず空気を読めないカズヤが、的外れなことで食って掛かってき
た。

いい加減そういうカズヤの性格を心得ているアキラは、タリユー
シカの顔でカズヤを見据えて言った。

「そう、お察しの通り、確かに国を背負うということは大変です。
でも、わたくし、成人はしていますけど、未だ十三歳なんですけ
どね」

衝撃的な告白に、一同は普通に「ええーっ！同い年だサ」と、憚^{はばか}
りなく大声をあげた。

「数年前に先代国王夫妻を惨殺され、わたくしは即位を余儀なくさ
れたんですけど、そんなに老けていますか？」

アキラは、さっきの老けた女呼ばわりされたことに、嫌味を言っ
た。勿論、誰も気が付くわけがない。

「先代国王夫妻って、あなたのご両親でしょ」

「そうですわ」

可愛らしい言葉遣いなのだが、全く感情の籠らない声で、タリユー
シカは返事をした。

両親のいないところは、アキラと似ていること。老けてるとこ
まで似てるしなヤ。

サキはふと感じた。

しかし、アキラとタリユーシカは似ているのではなく、同一人物
なのだ。

「あのさ、さつきも口挟^{くは}んだけど、女王が人間の法であり、理性で
あるなら、この戦争も止められるんじゃない……」

シキはタリユーシカという名前を呼ぶのが気恥ずかしくて、女王という一般的な名詞で呼んだ。アキラにとっては女王と呼ばれることと自体意外だったが、シキの鋭い指摘に顔が自然と引き締まるのを感じた。

「お恥ずかしい限りですけど、全くその通りですね。」

しかし、この戦には抗いがたい深い理由があるのです。まあ、行きずりの方たちと思って話しましょうか。どうせ忘れてしまっただけなのだから」

アキラは、記憶を消すことを思い出しもしなかった。六人は「忘れる」のではなく、「忘れさせられる」のだ。

第11部：十月～Alfreaken～・5（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfreai>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

目の前の女王は、「時間」だからと身支度を整えて立ち上がったのに、またどつしりと椅子に腰を下ろして話す気マンマンだ。

「自然界から苦界が分かれたということは、人間は全く同じ種であるということです。ここにいるわたくしを見ても判るでしょうが、この瞳以外は何一つ違うところはないでしょう。」

つまり、この自然界に適した人間が残されたとはいえ、苦界に適応した人間が誕生する因子は消えたわけではないのです。この戦は、第二の苦界の誕生を阻止する為の戦い」

六人は、自分たちとは関係のない話なのに、思わず危機感を感じてしまった。

「今から四百年程前、この国の王が即位するにあたり、問題が起きました。」

後継者は双子で、兄が王位を継いだことを不服とした弟が、兄王を殺したのです。ほぼ同等の権利があつたとはいえ、それは殺人の言い訳にはなり得ません。

しかしそれを認められない弟は、自分を支持する人間をこのト・アルフレイアの対岸にある、ル・パルナという地方に集め、人間だけの国を創りました。

因みにこのト・アルフレイアという地名は「自然界を守る」という意味があり、ル・パルナとは「乱れから守る」という意味があります。

パルナ地方は人間が住まうには少々自然環境が荒々しく、我々司祭者が自然に対して畏敬の念を以て祈りを捧げる土地だったので、弟はその荒々しい自然を支配し、人間が住みやすい土地へと環境を変えてしまったのです。そしてより住みやすい土地を求め、王

権を求め、彼らはこのアルフレイア、現アルフレイケンを攻め続けているのです。

このアルフレイケンという国名は、アルフレイアに「穢れた」という意味の語尾を付けた名称になっています。我々はこの不名誉な名称を受け入れるしかないのです」

結局この国の女王は、この国の歴史までも全部話すつもりなのだ。コメチなどは露骨に嫌悪の表情だ。

そして全く反対の表情はサキだ。

「環境を変えらるゝとは？」

「住み分けという言葉がありますでしょう。人間の住みやすい土地、猿の住みやすい土地、熊の住みやすい土地。お互い重なり合う所はあっても、わざわざ侵入しようとはしませんでしょう。」

パルナ地方は、僅かな草木以外の生物が住むには不向きな土地だったのです。それなのに、彼らはただ一つの川を拡張、水路を整備し、環境に適応しない魚を食用として放流し、民であるべき動物を家畜として飼い、あるがままの姿を壊してしまったのです。

住みにくいから住まないというのが自然の姿。それが、住んでみて住みにくい不都合をちよつと改良したのであればまだ許されるものを、住む為に無から改良してしまったのです。この辺の感覚は、苦界人には理解しがたいでしょうね」

コメチなどは、大きく頷いた。

目の前の女王は、コメチの失礼とも思える態度を無視して続けた。女王と名乗っていても、中身はアキラなのだから、コメチの性格は熟知している。だからできることだ。

「この戦は、人間が生まれたことからの必然とも言えるものだと、わたくしは考えています。だからといって、戦を止めることはできないと言っているわけではありません。」

本来、わたくしを含めた生物とは、流れの中で進化をしても、流れを変えての進化をしようとはしないものです。

しかし、人間は違う。流れに逆らって変化を求めるものです。そしてわたくしはその人間。

わたくしだって、苦界にあつて戦を望まぬ者がいるように、戦を望む者ではありません。本当は、平和の為の戦争など認めやしない。戦争から生まれた平和など、と思うことはしょっちゅうあります。

だけどこの国の全生物は、流れに逆らう性さがを持った人間の長であつたわたくしの一族を、この国の王とし、パルナ地方の人間たちに抵抗することを選んだのです。自ら変化　進化しようとしたのです。

ですからわたくし自身、このわたくしが生まれたことで激化したこの戦を、進化の為に必要とあらば、わたくしは自ら認めぬ必要悪に変化しようと決めました。駄目なことなら、それこそどのような裁きでも受ければいいだけのことですからね。

口実にすぎませんが、四百年の長きに渡る戦は、わたくしが何としても終わらせねばならぬのです。

百年の休戦状態を崩しておいて、終戦協定を申し出た奴らは、それに応じた我が両親を、和平のその席において斬り殺しました。

このまま黙って吸収されては、この世界が、宇宙の存在が滅びてしまう。とても危うい状態ながら、取り敢えず現在は均衡を保っているというのに。

わたくしの方法は間違つてはいますが、変化のきっかけとなれるのであれば、後世残酷な女王だったと言われても構わないのです。わたくしの意志は、必ず誰かが気付いてくれて、最善の状態に創つてくれるでしょうから」

タリユーシ力は激した感情を隠しきれず、それを隠す為に無言で立ち上がり、振り返りもせず戸口に向かって歩きだした。

「あ……」

気分を返してしまったのかと、いつも他人の機嫌ばかりを気にするナミが、声にならない声を上げた。

第11部：十月～Alfreaken～-6（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfreaken>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

「先ほども申し上げましたが、ここにいる間は、わたくしの指示に絶対従ってもらいます」

厳しい物言いだったが、ナミを氣遣つて振り向いたその表情は柔らかいものだった。

しかし有無を言わさぬ強い言葉に、思わず六人の表情は硬くなる。それを見て取ったタリユーシカは、その緊張を解すかのような笑顔を見せて続けた。

「と言っても、あなた方の自由を完全に奪うつもりはありません。ただ、安全の確保の為、ここト・アルフレシアの砦からは出ないで下さい。この庭は美しく広いですからね、この中ならば、何処を散策されようと構いません。飽きることはないでしょう。」

でもね、どんなことがあっても、いいですか、わたくしが見張りから戻るまでは、この庭の中から出てはなりません。これは命令です。

ここは戦場で、ここを離れたあなたたちの身の安全の約束はできません。

早く元いた場所に帰りたい気持ちは解りますが、苦界へは歩いても戻れません。時間の心配もしなくて大丈夫です。日没後、わたくしが責任を持って元いた場所、元いた時間に送り帰します故、安全な場所にて待つていて下さい」

タリユーシカはそのまま出て行った。

その後ろ姿に、思わずカズヤは思ったままのことを呟いた。

「送り帰してくれるんだったら、何でいままで引き留めてたんだろな」

あまりに尤もな疑問に、六人は顔を見合わせた。しかしコメチだけは、すぐ自分の思考に戻る。

「何、寝呆けたこと言ってるのよ、カズヤ。これ、夢じゃないなら、映画のロケなのよ、きつと」

コメチはあくまで現実主義だ。

「だとしたら、元いた時間に帰るってところが可笑しいけどな……。でも、あの人が言うように、夢の中ならこんなに自由に会話できるわけないし……」

ま、いつか。よく判ないし」

らしくなくポンまでもが考え込みそうになり、それを自分で止めた。考えても仕方ないことを考えるのは、彼にとっては無駄な時間の浪費なのだ。

「夢か現実かロケかはとにかく、あの戦争は火気類のない戦争みたいだっけ、取り敢えずは安心なんじゃないのワ。取り敢えず外に出ちゃ駄目なんだったら、腹を充たすしかないっちゃん」

ポンは楽観的なことを言っつて、目の前の山のような食べ物に手を伸ばした。

それがコメチには気に入らない。目に見えるもの全ては、ある程度理由がつくはずなのに、この現状は須らく理由が見つからない。

見たことない風景。見たことない食べ物。そして見たことない戦争。

このような場所に長居をしていたら危険だと、身体がさつきから囁くのだ。

「ねえ、何でもいいけど、宿舎戻らない。来られたんだから、帰れないわけないっちゃん」

コメチはドアの外に出ようとした。

「待てよ、コメチ！」

サキは彼女を呼び止めた。

「やめよう。何だか嫌な予感がするんだ、オレ。ウソでもマジでも、あのタリユーシカって人の言っつたことが気になって」

サキの中の何かも囁くのだ。

聞いたことない歴史。聞いたことない神話。そして聞いたこともない哲学。

あの女の言うことを聞いておかないと危険だと、何かが囁いている。

「あああ」

案の定、コメチは大袈裟な身振りをしてみせた。

「そりゃ、あなたの思慮深さといえば、哲学者も顔負けよ。慎重な性格も結構！でも大概にしてちょうだい！いいこと、わたしらは行くわよ。」

でもね、もうちょっと考えてよ。あんなわけ解らないコスプレ人間の話と、わたしたちの疑問に思っていること、どっちがあなたの経験からして現実的？どう考えたってわたしたちの思考方法は間違えてないわ。可笑しいじゃない、こんな話！」

サキだって、コメチに言われなくても解っている。どう考えたって、全身黒尽くめのマントを纏まとって剣を佩はいているような人物が、世界が壊れるだの何だのって、どう鼻眞目ひいきめに見たってマトモとは思えない。しかしこの胸騒ぎはどうにも説明できるものでもない。そうして口籠もっていると、コメチは畳みかけてくる。

「いいこと、わたしたちだって、あなた一人を残して行くわけにはいかないのよ。一昨日だって、それで喧嘩したでしょ。それに、考えるのは戻ってからでもできるっちゃ。アキラだって一人で戸惑っているだろうし」

また一昨日のような大喧嘩になるのではと、傍観者たちはひやひやしながら見守るしかない。大体、一番しっかりしているはずのサキがこんな非現実的な話にどっぷり浸かり、足踏みしていることが全く理解できない。

「でも、コメチ。オレらは山にいたんだ。どうして海があるんだ。山は何処サ消えたのワ？」

そんな揚げ足のようなツツコミが、自分を胸騒ぎの理由なんかでは決してないのだが、目に見える現実の相違点という、コメチにしては痛いところをつかれ、彼女は少し怯^{ひる}んだ。

しかし、たしかにもうどうでもいい。説明できない違和感よりも、仲間の総意の方が大事というものだ。

「ま、いつか。来られたんだから、帰れるさ。コメチの言う通りだ」
そうなのだ。自分たちは、ただ、熊から逃げて、気が付いたらここにいたのだ。

はつきり言って、行くあてはさっぱり判らない。ただ、ぶらぶらと辺りを見回しながら、さながら地方出身のお登りさんのように、庭から出て歩き回るしかなかった。

第11部：十月～Alfreaken～-7（後書き）

次回から第12部：十月～戦場～を始めます。

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfreak>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第12部：十月の戦場 - 1

12：十月の戦場

単なるコスプレイヤーとコメチに認識されているタリユーシカの
小難しい話では、目の前で起こっている戦争というものが、非常に
緊迫感のあるもののようにだったが、この目に映る現実には案外そうで
もなく、まるでほのぼのとした風景だった。まあ、戦争を生で体験
したことの無い人間が作る作品だから、それも致し方ないものだと、
六人は考えながら見学する。

どういうセツトや仕組みか判らないが、精巧にできた獣や人間、
小人が道端で普通に喋っている。更には道行く風や、木々に向かっ
て話しかけている者までいる。この中に於いては、むしろ自分たち
の方が異質な存在なのでは、と、つい錯覚をおこしてしまう。

これはコメチが言う通り、映画か何かのロケなのかもしれない。
ただ、どうしたことが、すれ違う生物たちの殆どと言ってもおか
しくない生物が、六人に頭を下げるのだ。

「？」

六人は顔を見合わせた。

自分たちの何が違うのか、お互いをじっくり眺めても、正直これ
といった違いが見つからない。明らかに違うのは、自分たちは普段
着で、他の人間はこの作品の衣装を纏っていることくらいだろう。

大体、客でもないのにお辞儀されては気味が悪い。自分たちはた
だ偶然紛れ込んでしまった邪魔者なのだ。

暫く六人で考えていたが、「ああ、判った」とシキが声を上げた。

「ほら、黒い髪の間が一人もいないっちゃ」

六人は、そう言えばこの世界に迷い込んだ時に、「王族の方々に
すね」と言われたことを思い出した。この外見だけでその言葉の理

由を考えると、あのタリユーシカとの共通点を見つけられればいい。それは『黒い髪』に『黒い瞳』だ

「黒髪と黒い瞳が、王族の証^{あかし}っていう設定なのかしら」

ナミが疑わしげな顔で辺りを見回して付け加える。「だって、小人には黒い髪と瞳はいるっちゃ」

「でも、あくまで小人だサ。人間にはいないよワ」

確かにシキの指摘の通り、人間の髪の色は、金色や茶色、銀色ばかりで、何故か黒髪は一人もいなかった。髪色のバリエーションは少なかったが、瞳の色は多彩で、宝石のように輝いていた。

「どっちにしろ、登場人物でもないのに設定に組み込まれても、ヤになっちゃウ」

コメチはむつけた。

「それにしても、なんかこう、ほのぼのしてるよね」

始めから言うことなどさらさら聞く気はなかったが、いつしかタリユーシカの『命令』などすっかり忘れ、海を見下ろす断崖の側に、六人は辿^{たど}り着いていた。

当然、ここは砦^{とりで}の庭などではない。

この切り立った断崖絶壁は、きっとサスペンスドラマの『犯人に呼び出されて突き落とされる』シーンに最適だ。しかし今はサスペンスの撮影などではなく、戦^{いくさ}闘シーンを撮影しようというのだろう。海上の大船から小船が数艘^{そう}下ろされ、比較的岩場が少なく岸壁に寄りやすい場所目指して、その小船が押し寄せてくる。

立入禁止の看板もないのをいいことに、六人は揃って岸壁に腰かけ、遠くを見下ろしていた。

「案外リアルなもんだっちゃ、なあ」

「ホント、ねえ」

「コメチ、文句たらたらだったけど、公開されたら見に行く？」

「ばかねえ。行くに決まってるっちゃ。自慢できるじゃないの」

六人は声を立てて笑った。

向こうでは、小船から火矢のようなものだろうか、一斉に陸に向かって射かけられ、その場は騒然となっていた。

迫真の演技というのはこういうものなのだろう。響き渡る悲鳴。投石で沈む小船。少し離れた場所から見ている六人にも、その凄まじさが伝わってくる。

「本気なのかヤ、本当に」

ポンが言ったそばから、状況が急変した。

小船から雨のように射かけられる火矢の火が、一人の人間に燃え移り、悲鳴をあげながら倒れ、悶え、そして動かなくなる。

六人は言葉を失った。

と同時に、辺りに叫び声が充ちた。

「誰、誰が叫んでんのワ？」

コメチが取り乱し、辺りを見回して言った。

「誰もいないじゃない！」

たしかにこの岸壁には誰もいない。だからここで寛いでいたのだ。

六人は思わず立ち上がった。

と、聞こえてくる声がある。

『生ある者よ、出でよ。そしてト・アルフレイアに集え！』

その声は、耳ではなく心に響いてきた。

「木々の精霊たちよ、暫し姿を現わし、ト・アルフレイアに集え！」

緑色の髪の毛と瞳を持ち、茶褐色の肌の小人が、大声を上げて駆け回っている。すると、全ての木々の中から、その木の枝を手にした美しい人間が、苦しそうに悶えながら現われたではないか。

「炎よ、我が許に集え！そして地に戻るのだ！」

逆巻く赤い炎のような巻き毛の小人が炎に向かって手を伸ばし、火の粉を己の身体の一部のように扱っている。

「マジかよっ?!」

「何なのーっ？もう、いやあっ！」

コメチは完全に取り乱している。

「とにかく、ここはさっきの所サ戻るしかないべ」

六人は砦に戻ろうとして、嫌なものを見る。

第12部：十月の戦場 - 1（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfradia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第12部：十月、戦場 - 2

何の気なしに振り向いた海。その海は六人を凍りつかせた。あの小船のうちの数艘の舳先^{へこき}がこちらを向いている。

船足の速い小船は、迷わず六人がいる岸壁を目指して進んでいた。それもただ向かってくるのではない。一斉に矢を番^{つが}え、揃ってこちらに狙いを定めている。

六人が逃げ出すよりも早く、船から合図とともに矢が降ってきた。その矢の雨は、それまでの火矢ではなく、殺害を目的とする鋭い金属の鏃^{やじり}。それが嵐のように六人に向かって降り注ぐ。

何が何だか訳が判らないまま、それでもできる限りコメチとナミを庇^{かば}いながら、一同は矢の雨から必死に逃げた。

今更口ケだの夢だの言っていられる状況ではない。考えるよりも先に逃げるしかない。あんなのが突き刺さったら痛いに決まっている。しかも結構な高さだというのに、何処までも矢は降ってくる。一体どんな腕力だよと、ツツコミを入れる余裕もない。

「伏せろっ！」

サキが突然叫んだ。

「え？」

その声に反応して、誰もが何も考えず、形振り構わず伏せたのに、ナミだけは一瞬戸惑いを見せた。

「ナミっ！」

慌てて傍にいたポンが、ナミを抱きかかえて飛んで、受け身をとった。

しかし、ナミを救ったのはポンだけではなかった。

「あっ！」

受け身をとった二人を庇うようにして立ちはだかり、肩に矢を受けて立つタリユーシカ。彼女は顔色一つ変えず、呻き声すらあげずに立ち上がり、刺さった矢を何事もなかったかのように抜き捨てた。「あの……」

何故か「大丈夫ですか？」という言葉が、あまりに白々しくて言えなかった。

たしかに女王は厚着だし、防具の一つくらいは身に着けているだろう。でも抜き捨てたその鏃には血がついている。

しかしタリユーシカは、その言えなかった言葉になどまるで興味がないうた。その表情を動かすことなく、六人に冷たく命じる。

「わたくしの周りに集まりなさい。ト・アルフレイアに連れて行きます」

その次の瞬間に起こったことは、サキとカズヤにしか判らないことだ。タリユーシカは瞬間移動で、全員を先程の砦の一室に連れて行ったのだ。

「まったく……」
ため息混じりに呟いてはいるが、怒られると思っていた六人は拍子抜けした。

「あれほど言い置いたのに、命令に背きましたね。もう一度言います。死にたくなかったら、今度こそこの部屋から一步も出ないように！」

タリユーシカはそう言い置くと、また一瞬で姿を消した。
脅してみせたわけでも凄んでみせたわけでもないのだが、タリユーシカのその一言は、六人を凍りつかせるのには充分な冷たさだった。

「あああ、何なのよ、もう嫌！」
タリユーシカが姿を消すなり、コメチは憚りなく大きな声で叫び、がつくりと地面に腰を落とした。

嫌なのは、何もコメチだけではない。誰もが同じことを思い、誰

もがこれが夢であることを願っていた。

窓の外では、たった今、目の前から姿を消したはずのタリユーシカが大声を上げて走り回っている。

彼女が六人に構っている間にも、小船から射かけられたロープを伝い、敵方の戦力が既に上陸を果たしている。きっとそれも彼女の予測の範疇はんちゆうなのだろう。走り回ってはいるが、焦っている様子は見えない。

「退ひけ、退ひけえっ！ト・アルフレイアを戻るのだ！無駄死に無用！全速力で戻れ！」

タリユーシカは最前線に辿たどり着くと、たった一人で敵に對峙たいじし、腰に下げている細身の剣をすらりと抜いた。

敵方の人間が、その気迫にたじろぐのが見て取れる。しかし六人は、タリユーシカの抜いた細身の剣に目を奪われていた。

それはとても不思議な剣で、彼女の気迫そのままの闇を発していた。普通の剣ならば、抜刀し、反射して煌きりくのが光だが、彼女の剣は反射して放たれるのが闇なのだ。

タリユーシカは闇を発する不思議な剣をすらりと抜いて振りかざし、味方を皆に退かせる為、一人最前線に立っていた。

「貴様らの目当てはここだ！ここを狙うがいい！」

タリユーシカはその不思議な剣を振りかざし、味方が皆に戻るまでの時間稼ぎをする為、敵に睨にらみを効かせている。

じりじりと詰め寄るのは多勢の敵方ではなく、たった一人で立ち向かっているタリユーシカ。先程の上品な物腰のたおやかな風情からは想像もできない気迫みなぎが漲もよほっている。

「私を倒さねば国には帰れないぞ」

そのタリユーシカの言葉を契機に、敵は雪崩なだれを打ってたった一人の少女に向かって押し寄せてきた。

六人が何よりも驚いたのは、国民の誰もが自国の女王を救けようとはせず、一丸になってト・アルフレイアの砦を目指して逃げているのだ。それは裏切り行為のようにも見えるが、実際は女王を信頼し、女王の足手纏いまとにならないようにしているのだと六人が気付くのに、そう時間はかからなかった。

それ程までに、タリユーシカの気迫は他の誰をも圧倒している。

「あの人、たった一人で何するんだ？」

ポンは建物の中だからか、他人事ひとことのように呟いた。さつき都合良く死に損なった一件で、彼もまた、これは夢の中の出来事なのだと信じていたのだ。

「しかし、肝っ玉座ってる姉ちゃんだこた。見てみ、さつきから一人も殺してないんだ」

カズヤはじつとタリユーシカの動きを目で追って言った。

タリユーシカは、剣の背で、決して人間を殺すことなく、気絶させて倒していた。

第12部：十月の戦場 - 2（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

しかしどう考えても、相手方に勢いがあつて仕方がない。タリユ―シカが一人で足止めできる人数など、どうせたかが知れている。数があるのだから、その隙に^{とりで}砦を狙うのが当然というものだ。

しかし六人に迫る敵影が見えたわけではない。窓の中の安全な場所からタリユ―シカの非現実的な剣技を見ている間は、全ての出来事が現実味のない映像でしかなかった。

と、コンコンとノックの音ももどかしく、一人の大柄な男が入ってきた。

「お客の方、どうかお隠れ下さい」

その大柄の男は、見た目以上に野太い声で、六人に頭を下げた。

「隠れるって……」

六人は言葉を失つて顔を見合わせたが、部屋に入ってきた男は、迷わず火の無い暖炉の一角の石を押した。すると音を立てて壁が動き、隠し通路が現れた。

「すっげえカラクリ！」

「忍者屋敷みたいだサ」

思わず男子たちの目がきらきら輝いたが、男にとっては切羽詰^{せつぱつま}っている状況なのだろう。まったく子どもの相手をしようなど思っていない。「さあ、こちらへ」と、ただ道を示した。

その隠し通路を外から見ると、それはまるで真つ暗い階段が闇に向かつて降りているようだ。

さすがに女子二人はたじろいだ。

「負けそうなのワ？」

サキは冷静に質問した。このような場所に案内されるということは、そういうことなのだと容易に想像がつく。

「そういうわけではございません。ただ、女王陛下のご配慮です。

この光景をお客人方にお見せしたくはないとのこと」

タリユーシカの足止めの隙間を抜けてきた敵兵が皆近くまで迫り、せつかく先に逃げた味方の兵を平然と切り捨てている。溢れる血飛沫^{ぶき}、倒れる人。それはテレビで見えるような残酷な戦闘シーン。それが目の前で普通に繰り広げられている。生となると、確かに見るに耐えない光景だった。

「ま、とにかく、女子から入れワ。狭いから気をつけて」

ポンが女子二人の背を押した時だ。

ガシャ ンっっ！

けたたましい音をたてて、窓ガラスが割れた。
石が投げ込まれたのだ。

サキとカズヤは思わず窓に駆け寄った。

と、きゃーっ！と女子二人は悲鳴を上げた。

そこで一同は信じられない光景を見る。

暖炉で他の四人を守るように立っている大柄な男のその姿が揺らいで大きな熊に変わったのだ。

考えてみたら叫んで当然だ。

一同は熊に驚いて逃げ出して、そうしたらこの不可解な場所に迷い込んでしまったのだ。そしてその熊が突然現れたら、当然驚く。

熊は少しだけ哀しい眼差しを向けたが、自分のすべきことを理解している。

「早くお行き下さいませ」

その声は、人間の姿の声の名残^{なしろ}を残しながら、さらにゴロゴロと野太かった。

「さあ、早く！」

ポンは二人をせかしたが、何が何だか判らず混乱している女子二人の足は竦^{すく}んでしまっている。

割られた窓にフックが投げ込まれた。

「ポン、行つてっ！」

シキは咄嗟とっさの判断でポンの背中を突き飛ばし、三人を隠し通路に放り込むと、自分は扉を閉め、何事もなかったかのような暖炉の前に立ちはだかった。

扉の向こうから三人の大きな声が聞こえてきたけど、シキにしてみればどうでもいい。確かに暗くて細くて危ない階段だろうけど、入口がばれて追いかけられる危険と比較したら、それでも隠した方が安全だとの、彼なりの判断だ。

「あ、あなた方は……？」

熊の戸惑ったような問いかけに、シキはにっこり笑って答えた。

「ここの入り口、秘密なんだから。ボクたちは何とかなるさ」

熊もにっこり笑ったものの、割れた窓から侵入してきた者を見て、絶望を感じていた。そしてその表情は硬い毛皮の下で、シキやサキ、カズヤには判らない。

逆光の夕陽の中、光を放つ不思議な剣を持った、金茶色の長髪の人間が、窓の棧さんに立って部屋の中を見下ろしている。

「さ……サパロージエ！」

熊は小さな声を上げた。

「誰なのワ？」

「敵の王の側近です」

その場にいた者は全員困っていた。

サパロージエと呼ばれる男は、ふわつと軽やかに棧から飛び降り、サキとカズヤ、シキと熊の二組の間に立っているのだ。

これは、それぞれがお互いの身を気遣って、やきもきせざるをえない状況だ。

「我が主あまじ、パルニア国王ゲルダ・アレन्दク陛下が、そなたたちをお呼びになっている。大人しくついてくるように」

左目の下の泣き黒子^{ほくろ}が印象的なサパロージエは、その黒子の所為でまるで大人しい女性のような美しい顔立ちに見えたが、現実には、抜き身の剣を持っている。逆らったら腕尽くで連れて行くといううな、物騒な雰囲気放っていた。

「お、おい！カズヤ！」

こんな右も左も真実すら判らない世界で、カズヤは壁に飾っている剣を手にとったのだ。さすがにサキばかりでなく、シキまでも声を上げた。

「それは、我が主の命令が聞けぬ、ということだな」

サパロージエは剣を構えながら笑った。カズヤが素人であることを、一目で見抜いたのだ。

第12部：十月「戦場」 - 3（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfradia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

当然カズヤだって、自分が素人であることくらい、充分知っている。彼にだって、それなりの目論みがあつて、無謀な行動を取つたのだ。相手を倒せなくてもいい、剣を落とすことができれば、あとは自分の得意な空手で相手を対等に戦えるはずだ。

しかし所詮は中学生の考えること。現実がそんなに甘いわけがない。

一方サパロージエの方も、片手で数えられる回数、剣を合わせるだけで、カズヤが剣こそ使えないが、相当身のこなしが軽いことに気が始めた。自分がやられることはなくても、カズヤたちを簡単に連れて行くことは難しそうだ。

まあ、殺さず連れて来いと命じられているわけだし、この威勢のいいだけの少年の勢いに付き合つてやるのも悪くはない。

サパロージエはそう考え、適当に素人の剣を受け流しながら、その相手を観察していた。すると、このよく動く少年には、どういうわけか隙を見せる一瞬があることに気付く。

さてさて、一体何に気を取られてるのか……？

サパロージエはその視線を追つてみる。

そのサパロージエの観察は正しかった。たしかにカズヤはサキのことを気にしていた。

シキの傍には強そうな熊がいるし、その気になれば、隠し階段に逃げ込むことができる。ところが、サキには逃げ道がない。

カズヤはサキにテレパシーを送り続けていた。

テレパシーは届いているはずだ。それなのにサキは全く動かない。まるでそのようなものが届いていないかのように、カズヤの方をチラとも見てくれない。カズヤはそれにやきもきして目の前の敵を相手に集中できない。

一方サキも、ただ無視していたわけではない。もし、今、サキが動いてしまえばサパロージェの思う壺になってしまう。ただ、カズヤにその理由を伝えようとテレパシーを送ろうものなら、今以上にカズヤの集中力を削いでしまいかねない。それはとても危険だ。

サキは動けない。

動こうと動くまいと、サパロージェという男はサキを攻撃するように見せかけて、サキを目で追って隙を作ってしまうカズヤを攻撃するつもりだろう。

サキは考えた。

目で追う対象が動くものであるか、動かないもの、どちらがましか。答は簡単だ。視点が動かない方がいいに決まっている。

あとはカズヤがサパロージェの見せかけに動揺しないことを祈るのみだ。

「サキっ！シキの方に行け！」

業を煮やしたカズヤはとうとう叫んだ。

当然サパロージェが、そんなカズヤの一瞬の隙を見逃すわけがなかった。

「アホ！」

サキはサパロージェの行動は読めていたから動じない。動じたのは、カズヤの危機にだ。

それでもサキという対象物が動かなかったから、カズヤはサパロージェの切っ先が、サキから自分に移ったことに、頭よりも身体で気付いた。

咄嗟にカズヤは腕を上げ、脇腹にサパロージェの剣を挟み込み、彼が動けないように固定した。当然カズヤ自身も動けない状態なの

だが、若いカズヤにはサパロージェよりも力があつた。ここでカズヤは剣を奪うつもりだった。そのつもりだったのだ。

ちょうどいいタイミングでポンが割れた窓から飛び込んできて、サパロージェを後ろから羽交い締めになると、シキがカズヤを抱え込んでサパロージェから引き離し、サキは藻掻くサパロージェの鳩尾おうちに当て身を喰らわせて気絶させてしまった。

美味しいところを持っていかれ、カズヤは啞然とするしかなかった。

「カズヤ、大丈夫？つて、大丈夫じゃん」

「なんだ、生きてたのか」

「生きてちゃ悪いか」

「悪くはないけど……」

「危ないこととして損したなヤ」

三人は罰の悪そうな顔をした。

「ま、助かったよ。でも、サキ、なしてシキの方サ行かなかったのワ？」

半ば責めるようなカズヤの眼差しに、サキはうんざりしながらも本心を説明する。

「オレはなあ、こいつがフェイントかけてくるのが読めてたっけ、お前が集中力削そがれるようなことしちやいけないと思って動かなかつたんだよ。お前、絶対オレのことしか見ないっけ」

「はいはい、お氣遣い、ありがとうございます。取り敢えず、このお兄さん縛むすっちゃおうぜ」

その表情だけで説教だと判ったカズヤは、さっさと話題を変えた。
「んだな」

「ところでさ、どうやってここに上がってきたのや、ポン？」

「ああ、簡単なんだよ。さっきの抜け道出ると、庭に出たんだ。で、このおっさんの使った梯子はしこで、ここまで登ってきたんだ。そしたら

グッドタイミングだったわけ」

「なんだ、案外間抜けなんじゃん、コイツ」

四人は笑った。

「ところで、さっきの熊さんは？」

「女王さまのところサ報告に行ったんじゃないのワ。それよか、この剣、細いから折っちゃおうか」

「んだな」

カズヤは片膝を曲げ、光を発する不思議な剣を折ろうとした。細身の剣は折れそうなくらい撓しなった。

第12部：十月の戦場 - 4（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfradia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

「待つて！」

剣を手にしたカズヤの頭の中にテレパシーが届いたのと、突然彼らの目の前に女王タリユーシカが、降って湧いたように現われたのは同時だった。

「それは……、それは、弟の……祭具！」

タリユーシカはカズヤの手から、不思議な剣をひったくった。それは尋常ではない焦りようだ。

「つたく、何なんだよ……」

事情がまるで解っていないカズヤの声など、タリユーシカには届いていない。その光り輝く細身の剣を、愛おしそうに抱きしめている。

「やはり本物でしたか。間に合って良かった」

「こいつ、敵じゃないのワ？」

女子二人を連れて息を切らせて戻って来た熊に、サキは思わずきつい口調で問い正した。

「如何にも、彼はわたくしと考えを異にする者の家臣^{いが}。あなたたちの考え方ならば敵です」

思わず何かを言おうとした熊の代わりに、タリユーシカは迷いなく言い切った。

彼女は息を切らせている熊に、人の姿の時に着ていた着物を別室で着るようにと下がらせた。

「この者の名はサパロージエ。確かに敵の王の側近中の側近。ですが、この剣は違います。」

これはわたくしの奪われた家族の欠片^{かけら}。二重誘拐されて、全く行方が知れなくなってしまうたわたくしの弟の身代わりに、五年前に

盗まれてしまったものです」

「うっかり盗まれたりしたってことは、ぞんざいに扱ってたんじゃないのワ？そのわりに、今の焦りようは異常じゃないように見えるけど」

サキに指摘され、タリユーシカはしおらしくなった。

「そうですね。それはたしかに剣ですが、ただの武器ではなく、むしろ祭具です。この世に二つとない宝重でありながら、わたくしの弟の生命と一心同体の祭具、タウラ＝アレンドク。わたくしの剣と対を成すものです」

「一心同体？」

相手が人間だったらいざ知らず、剣という物に対してこの表現は馴染めない。^{なじ}

「王家に生まれた者には、生まれるとすぐにお守りとなる剣が与えられます。この剣は首都の霊廟の祭具の剣でしたが、たまたま我々姉弟のお守りになるという役目を与えられてしまったのです。」

お守りには特別な力が籠められていて、所有者が自分の身を自分で守れるようになる日まで、一心同体であるようになっていきます」

「いや、その一心同体って意味が解ないんだけど……」

回りくどい説明はいらなから、一言で済ませてくれればいいのに、目の前の女性はさっきのように本腰入れて一喋^喋8しゃべりだしかねない。そう思つてサキは、早いうちに釘^{くぎ}を刺した。そうしたら女王ときたら、「え、あ、ああ……」と、一瞬何を言われたのか戸惑っているのだ。

六人は、今度こそ^{はばか}憚りなく全員でため息をついた。

「つまりですね、一心同体という意味は、つまり、これが折られない限りは本当には死なない。」

逆に、弟が生きている間はこの剣は輝き続ける」

タリユーシ力は、失神して捉えられているサパロージエの腰から、鞘さやを外して剣を収め、代わりに自分の剣を抜いた。

細身の刀身ながら、造りは日本刀にも似て冴え冴えと冷たく美しい。そして本当に闇もろはを放っている。

「片刃の剣ですが、まさに両刃もろはの剣のお守り。だから敵はこの剣を盗んで人質とし、弟の生命を握ろうとしたのです。

まあ、わたくしは会ったことはありませんけど、この世界の神が、自らの駒として我々王家を使う為に、このようなお守りを下された、ということですね。自分の駒ですから、勝手に死なれたら困るのでしょう。幼い時代は生死すら自由にさせなかったということです」

目の前の女性は、先ほどは熱心に神々を交えた世界の話をしておきながら、今は『会ったことがない神』と言い切って、やもすると軽んじているようにも受け取れる言い方をする。

「まあ、わたくしのように自分の身は自分で守れるようになれば、年齢が達していなくても成人の扱いになるみたいで、それこそこれだけぞんざいに扱っても、わたくしに影響を及ぼすことはありません。この剣がわたくしを成人と認めた時から、一心同体のお守りの効力は自然と消えるようにはなっているようです。

しかし自分のことを何も知らずに育っているであろう弟の場合、この剣のことも知りません。ちゃんとこの剣を守っておかないと、一介の少年として育っている彼は、自分の意志とは関係なく、あつけなく生命を落としてしまいかねない。

我々はとても大事にこの剣を守っていたのです。なのに敵の甘言かんげんに乗せられ、連中を簡単に城中に入れる口実を与えてしまい、そして奪われてしまったのです」

タリユーシ力は唇を噛んでいた。その表情から、無念が読み取れる。

「ところで、その弟っていくつなのワ？」

「十三歳。双子だったんです」

「へえ」

それはまるでただの茶飲み話で済まされてしまった。

アキラの事情を知っている二人も、彼女とタリユーシカを結び付ける『双子』というキーワードを聞き流してしまっていた。

要するに、もうこのドタバタ劇に疲れて興味を失っていたのだ。

第12部：十月「戦場」 - 5（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfradia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

興味を失ったとは言っても、完全に無関心というわけではない。

「ところで、あんた戻って来て大丈夫なのワ？」

一同は、この女王が前線を放り出して戻ってきたことの不自然さに、今更ながら気がついた。

もうただのコスプレイヤーだとか、ロケだとか、そういうことはどうでもよかった。何しろ本当に生命の危険があったのだから、突き詰めて考えない方がいい、と、彼らの脳内では結論づいたのだ。

「え、あ、ああ」

タリユーシカは今更自分の傷跡を拭いながら微笑んだ。

「ほら、我々人間は夜行性ではありませんでしょ。だから自然の摂理に従い、彼ら人間だけの国の者は寝ぐらに帰ります。そしてわたくしも人間ですから、追いはしません。夜行性の動物を差し向けることもしません」

その女王の発言に、男子四人はあんぐりと口を開けた。

「……そんな、安直な」

ようやつと搾り出した言葉に、「そういうものなのですよ」とタリユーシカは平然としている。

「おかしいだろ」と突っ込もうとしたのだが、タリユーシカの視線が外を向いたのでつられて外を見てみれば、驚いたことに、たしかにタリユーシカの言う通り、敵は船に戻り、引き上げて行く。

これじゃ終わる戦も終わらないだろ……

誰も口にこそしなかったが、思わずにはいらなかった。

「つくづく自分が人間であることが嫌になります。まるで戦をする為に生まれてきたようで……」

沈黙がそこに生まれた。

「ああ、暗くなりましたね」

タリユーシカは鞘さやに収めた光る剣を抜いた。すると、部屋が柔らかな灯あかりに包まれる。

「あつ……」

丁度タリユーシカと対角に座っていたシキが声を上げたのと、そのタリユーシカが立ち上がったのは同時だった。

「サパロージエ、そなたは動けぬ」

夕闇まぎに紛れ、いつの間にか隠し持っていた短刀で戒めいましを解いていたサパロージエは、タリユーシカの背後からその短刀を振りかざしていた。

サパロージエは、タリユーシカの言葉の通り、短刀を振りかざした格好のまま、動きを止めた。

まるで彼がそうするのを知っていたかのようなタイミングで剣を抜いたタリユーシカは、蠟人形ろうじやうのようなサパロージエの両脇に、自分の闇を放つ剣と、ようやく取り戻した光を放つ剣を突き立て、何やら呪文を唱えた。

「さて、教えてもらいましょうか。我が弟ワナレウスⅡアレンデクの行方ゆくえを。」

パルニア国民の良識と言われるそなたです、そなたのご両親に口止めされていたら、腹の底に真実をしまっておきかねませんからね」

「私は……何も知らぬ……」

彼の口だけは、彼の意志に従って動いた。

「まあ、よいでしょう。気紛れな神々のため息が、あからさまに意外な場所に向かうとは考えられませんか。それくらいは、こんな子供のわたくしですら知っています」

タリユーシカはサパロージエの顎あごを摘み上げ、目線を自分に向けさせた。彼はその視線を真っ直ぐ受け止め睨にらみ返す。

「わたくしも調べてはいるように、ゲルダ殿も色々と調べられておられるでしょう。必ずゲルダ殿より先に、我が弟ワナレウスを見付けてみせます。」

さあ、帰ってわたくしの言葉を、お前の主^{あるじ}に伝えるがいい！」

タリユーシカは言い終わると、闇の剣を引き抜き、その切っ先をサパロージェに突き付けた。

「術をかけた。そなたはこのまま捕らえ置いた一艘の船で戻るしかできません」

タリユーシカの視線はまるで氷のように厳しく冷たい。

まるで動きを操られているような不自然な動きで窓に向かうサパロージェは、振り返りざま捨て台詞^{せりふ}を吐いた。

「タリユーシカ」アレンデク。闇の女王よ！しかと今の言葉を我が主に伝えよう。ワナレウス王子を捜す術を、我が主も考えあぐねていたところだ」

アキラは先を越されたと思い込んでいるが、実は相手は全然先んじていないというのだ。

なのにアキラは重大な失敗を冒したのに気付いていない。

「殺さないんだ」

窓から立ち去るサパロージェを、黙って見送るタリユーシカを見て、ナミはぽつんと言った。

「結構見かけによらないことを言っんですね、あなたは」

タリユーシカは苦笑した。

「ごめんなさい」

ナミは責められたわけではないことくらい解っているのだが、条件反射で謝った。

「いいんですよ。それより、夜になりました。これであなた方を苦界にお送りできます」

タリユーシカのその言葉に、六人は何故か違和感を感じた。

再び庭に案内され、そこから自分達が現れた場所へとタリユーシカを案内する。

「ここで気がついたんですけど……」

「そうですか。では、自分たちが来た方角へ向かい、全力疾走して下さい」

なんとあっさりとした返事に、思わず拍子抜けしてしまったのは本心だが、それでも六人は言われた通りに走った。さっさとこの不可解な状況から抜け出したい気持ちなのが勝っている。

が、それは見せかけの儀式にすぎない。実際はアキラの唱える呪文によって戻るのだ。

「

」

六人がアキラの声が届かない所まで走ったのを見届け、彼女は呪文を唱えた。記憶を消し、元の世界に戻る呪文を。

第12部：十月の戦場 - 6（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfradia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

「ねえ、なしてウチら必死に走ってんのワ？」

コメチの言葉に、熊から必死で逃げている六人は我に帰った。

「おい、マジでやばいって……」

カズヤが青い顔をして、^{つぶや}呟いた。「オレら、アキラ忘れて逃げた」

全員の顔から血の気が引いていく。

「うわあ、殺されるう！」

シキが思わず本音を口にする、まるでタイミングを見計らったように声が降ってきた。

「じゃあ、望み通りにしてやる」

声を立てて笑いながら、アキラはシキの首を後ろから軽く絞め、シキは「うわあ」とふざけた。

まるで何もなかったかのような一連の仕草。

主役のアキラまでもが、まるっきり記憶を消し去ってしまったかのような笑い声。

そこには何事も起こっていなかった。まるでそう言い聞かせているよう……

「ま、ええで。ちゃんとポイントはチェックしてきたさかいな。ほら」

記号を書いた紙を偉そうに突きつけ、アキラはふんぞり返った。

「助かるわ、アキラ。さすが」

「^{おた}煽てても置いてけぼりは赦さへんで」

「そこを何とか、ねえ。寛大な心の持ち主でしょ、あなた」

「煽てても何も出えへんで。特に男連中。信じられへんわ。か弱い女子一人残して猛ダツシュで逃げるか、普通」

「いやあ、面目ない」

「ほんツと、悪かったよワ」

「つつーか、か弱いかな？」

「バカ！今それを言っちゃ駄目だよ、カズヤ」

全員でカズヤを押さえ込んで、作り笑いの男子連中を見て、女子も釣られて笑い出した。

いつも通りの光景だ。

「ま、賞品目指して行きまっか」

一同は何もなかったように歩きだした。

彼らにあの記憶は刻み込まれていることは間違いない。でも、その回路は断ち切った。

アキラは隠れてほくそ笑んだ。

もう二度と繋ぐことはあるまいと信じて……。

何もかも忘れたまま、深夜、七人は教師の目を盗んで男子の部屋に集まっていた。

そこまではどの班でもやっているお約束みたいなものだが、この先この班が落ち着いているわけがない。

「なあ、いい加減ヒマなんだけどやあ」

「つつつてもなあ、ポン」

「じゃあ、サキ、昼間のとこサ、遊びに行くつてのはどう？」

「おっ、いいねえ、コメチ。ナミはどうすんねん？」

「ええ」。ちよつとヤバいんじゃないけど、ま、いつか。委員長がいるから」

「うわ、責任被せられてるし」

いい加減喋り疲れたポンのボヤキを受けてコメチが出した提案に、

意外にもカズヤとシキ以外の全員が賛成した。

「何や、珍しい」

さすがのアキラも驚いたようだ。

「ま、シキ君はカナヅチだから仕方ないとして……」

一同の目がカズヤに注がれる。

「カズヤがねえ」

「カズヤはな、オレらの家に伝わる迷信を守ってるんだよ。な、カズヤ」

「黙れよ」

カズヤはサキにからかわれ、頬を膨らませた。

「だって、この迷信深いオレですら守らないような迷信だぜ」

「何や、それ？」

「満月の夜に水に触れると、金色の鬼に喰われるってんだ。でもな、親戚見ても、誰も平気だぜ」

「嘘くせーっ」

「パツキンだつてよ」

ポンなどは腹を抱えて笑っている。

「煩いなあ、もう。オレは眠たいんだ」

好き勝手に言う仲間を放って、カズヤはベッドに潜り込んだ。

「じゃ、別に鬼が怖いわけじゃないんだ」

サキはわざと挑発するようなことを言った。

「当たり前だ！ そんなにオレに来てほしいのか、お前は。さては、怖がつてんの、サキの方じゃないのワ？」

「ばっ、バカっ！」

「サキはなあ、カズヤに気があるんだよ」

形勢が逆転して慌てるサキに、ポンが追い打ちをかけるように茶化した。

結局反対派の二人も連れて、七人は窓から抜け出した。どうせ一階の部屋だ。

勿論、布団の中に旅行かばんを仕込んでおくことは忘れない。

外は満月。枝葉の間から、青い月光が差し込む。

青白い月光と青臭い風。青い夜。

カズヤだって、この風景は大好きだ。

「そろそろ帰るべ」

川から上がり、タオルで身体を拭きながら、カズヤは水中の六人に声をかけた。

何だか誰かに見られているような気がする。それは明らかにカズヤを見つめている視線なのだが、誰がどこから見ているのか定まらない。前後左右、上からも、この空間自体から監視されているような感じがした。

水の中なのに、アキラは長袖TシャツとGパンで、逃げるシキに水泳を教えている。他の四人も戯れ^{じゃ}合いながら、大声でカズヤを呼んでいる。

誰なんだ……？

カズヤは視線を断つように、再び水の中に飛び込んだ。勿論、今感じたことを誰に言うつもりもない。

七人はがむしゃらに暴れ、宿舎に戻ったのは明け方近くだった。

こうして無事、二年生のメインの行事、野外活動は終わった。

第12部：十月～戦場～ - 7（後書き）

次回から第13部：十一月～秋の一日～を始めます。

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfradia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第13部：十一月、秋の一日 - 1

13：十一月、秋の一日

秋の行事は何かと結構忙しい。野外活動が終わって間もないというのに、すぐ陸上競技大会だ。

東中の時から、陸上競技大会のメインは、クラス全員による全校対抗リレーだ。この競技は長いけれど、とにかく盛り上がる。

男女交互に走り、その順番の組立によって、結果が大きく変わるこの競技は、予め走順を紙面で提出させている。これは公平を期す為で、レース中に調整をさせない為だ。しかも走順は競技直前まで非公開。それだけに、提出日まで各クラスで試行錯誤を繰り返して作戦を練る。

アキラたちのクラスは、たまたま男子が一人足りないクラスだった。こういう場合、誰が二回走るのがかということは、勝つ為には非常に重要なことだ。

「体育委員の通達で、アキラ、お前と当たる女子が可哀相だから、男子で競技参加な」

「ええっ！オレだって、女子なのに」

この通達には、クラス中が大爆笑だ。

「つつーか、女子よりもさ、アキラと走ることになった男子の方が、可哀相じゃねえ？」

いくら本人が不服でも、記録が記録だけに、体育委員会の通達に従うより他にない。

あくまで陸上競技大会なので、娯楽競技は少なく、短距離走やハイドル、長距離走などが中心だ。

午前中の競技の最後、男子の長距離走のスタート地点。

校外の畦道あぜみちを走るこの競技だが、辺りの見晴らしがいいお陰で、校庭からでもレース模様がよく見える。しかも放送委員の中継自転車が出るという凝りこりようだ。

可哀相な男子と走るアキラは、いつもの仲間たちと話しながら、スタートを待っていた。

カズヤとポン、そしてアキラは赤いゼッケンを、シキは黄色いゼッケンを付けている。赤は五千メートルで、黄は千五百メートルの選手の区別だ。スタートは同時だが、途中で別れる。

病弱なサキは長距離は欠場だ。

「あああ。何かこうしてつと、自分が女だつてこと忘れちゃいそうやわ」

背の順だと男子の中でも後ろの方になる百七十センチ近い身長のアキラはぼやいた。

「アキラさあ、お前と走るオレらの方が、よっぽど可哀相だと思わない？」

「全然」

「男の面目丸潰つぶれださ」

「そんなん、お前ら持ってたんか」

アキラは男子の気持ちなどお構いなしだ。

普通であることの方が大事な彼女は、誰をペースメーカーにして付いていくしか考えていない。

スタートの号砲が鳴った。最初は一塊だが、すぐに五千メートルの選手が後方に下がる。

「よう、シキ」

「あ、アキラ」

暫く走っていると、シキは後ろから声をかけられた

「あの二人、遅くて一緒に走ってらんねえ」

「大丈夫？後が続かいんじゃない……」

「平気やねん。途中まで一緒に行こうぜ」

アキラは平然と言つてのけた。

先に長距離走を終えた女子は、アキラだけを応援している。数年前までは自分たちよりも非力だったくせに、今では敵わない程成長している男子を、アキラは子供扱いしているのだ。こんなに胸のすく話はない。

「現在のトップは某教師の陰謀で男子の部で参加の女子、桂小路さんです！二位との差は五十メートル以上。一体、痩^やせた身体のとこで走るのでしょうか！」

並走する実況自転車のマイクに入るような大声で、「足だよ、足！逆立ちしてへんやろ！」と、アキラが怒鳴ると、校内は爆笑だ。

「いやー、まさにその通りです。余裕たっぷり返事、ありがとう
ございます」

「ちよつと待て。某教師つて何や？」

「さすがは肺活量が自慢の吹奏楽部。頑張つて下さいね」

「おいっ！」

アキラの呼ぶ声を無視し、実況自転車は二位を取材する為に後ろに下がった。

結果、アキラはつい手加減を忘れ、中継通りに一位になってしま
うのだ。

昼食の時間。当然皆は家族と食事を取る。小学生の頃のように午前中の結果の自慢話をするのではないだろうが、仲良くお弁当を囲むのも、せいぜい中学生までだろう。

アキラは一人、教室で昼寝をしていた。

こんな日に、わざわざ一人分のお弁当を作つて一人寂しく食べるくらいなら、食べない方がましだ。一家団^{だんらん}樂に^{ひが}囲まれて昼寝をする趣味もない。それは彼女自身は気付いていないが、一種の癖みの裏返し
の行動だ。

「アキラ」

葵に呼ばれてアキラは起き上がった。

「お弁当、食べない？」

「担任の責任？」

「ひねくれ者ねえ」

アキラも葵も、当然本気で言っではない。

「偏食のアキラちゃんの為に、おいなりさん作って来たのよ。でも、食べないんだったら、大食漢のポンにでも頼もうかしら。今日のヒローはアキラなのに」

「オレはヒ・ロ・イ・ン！お、さっすが葵ちゃん。むっちゃ美味そうやん」

「当たり前よ」

アキラだって、お腹くらいは空くし、食材こそ選ぶが、あればあるだけ食べられる、痩せの大食いだ。いくらひねくれ者のアキラでも、自分の為に作られたという食事を無視するわけがない。

「特別よ」

葵は得意満面だ。

「何が特別なのさ」

まさかこれ以上ひねくれたことを言ったら、それは嫌味になるとくらい、アキラは知っている。

「だって、あなたを男子の部で出場させたの、この私ですもの」

葵はあっけらかんと言った。これには、アキラも「はあ？」と呆気に取られるしかない。

「頑張つて優勝してもらわなくっちゃ」

「ったく、陰謀の主かよ。安いなあ、オレ」

アキラは葵の作ったお弁当に手を伸ばした。

「大変じゃない。一人で食事の管理するの」

「一人だから楽なんだよ。何が駄目で、何が平気だって、オレ以外は判らへんさかい」

アキラは美味しそうにおいなりさんを頬張った。その姿が葵には痛ましく見えてしかたなかった。

第13部：十一月、秋の一日 - 1（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfradia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第13部：十一月、秋の一日 - 2

午後何事もなく過ぎ、いよいよ最終種目、全校対抗リレーの時間がやってきた。

去年の主流は、遅い生徒を最初に走らせ、最後にいくほど速い生徒を配置する、後半勝負の展開の読みやすいレースだった。しかし二年五組の陸上部の生徒は、最初と最後に最も速い生徒を配置し、中間は速い生徒と遅い生徒をバランスよく配置するのが今年の流行だと言い、そして更に言い加えた。

「けどや、流行だからって同じにしたら、決定力がないんだよね。でも、うちらには決定力がある。何せアキラは男子と女子の二回走れるんだ。これはチャンスだよ」

ということで、陸上部の生徒が出した案は、誰もが手を打って喜んだ。

そして当日、スタートラインに立った女子は、がっかりするのだ。

ルール上、第一走者は女子、最終走者は男子と決まっていた。そしてどのクラスも、最初から十人目くらいと最後から十人くらいに、そのクラスの足の速い生徒を配置している。できるだけ余裕を作り、中盤に配置した遅めの生徒の負担を減らして、そして最後に失った差を挽回するという算段だった。しかし、五組は違っていた。スタートラインにいたのは、反則的な最強の女子、桂小路 晃。もう、これだけで最初からやる気が削がれるというものだ。本気の勝負は二走の男子以降に頼むしかない。

実際アキラが異常なだけであって、他の生徒は大して差がない。彼女が作った差は、四走あたりで縮まり、すぐ順位は四位に落ちた。しかしそれが五組の作戦の範疇はんちゆうだと知らない余所のクラスは大はしやぎだ。

比較的短距離向きではない生徒は、隣に控える生徒を見て、完全

にやる気を失くした。

たしかに五組の前半の選手は、予想以上にあっけなかった。だからこそ、後半勝負の作戦でくるだろうと思っていたのに、何と隣にいるのはハンド部のカズヤ。他にも足の速そうな生徒が数人控えている。実は余所よそのクラスが手薄になっている中盤に、五組は山場を置いていたのだ。

これは大きな誤算だ。どんなに必死になったところで、あっさりと追い抜き去られてしまうのが目に見えている。

そして最後にはサキと、男子としてのアキラがいるのだ。こんな連中など放っておいて、二位を狙うしかない。

そしてお約束通りに五組は一位になったのだった。

「ところで、調子は平気なんか、サキ？」

普段は自転車通学のアキラとサキとカズヤだが、校庭のレイアウトの問題で、学校から近い生徒は今日に限って徒歩通学だった。

「大丈夫。みんな、気を遣つかいすぎだよ」

「って、無責任な発言だと思わん？サキにとっては普通でも、こっちは心配するってこと、解わかってないんだよ」

「まあまあ。せつかく歩きだっけ、あそこサ寄よってかないか」

「それ、賛成」

「何処？」

今まで黙って聞いていただけだったアキラが、二人の会話に興味を示した。

「お前の好きそうな所だぜ。食べられる木の実が一杯あるんだ」

「いいねえ。ここからどれ位？」

「んだなあ……十分位かって、おい！」

サキとカズヤは顔を見合わせた。未だ場所を言わないうちに、アキラの姿が突然消えたのだ。

「せつかちだなあ。場所知らないくせ……」

と、サキの姿も忽然と消える。

驚いたのはカズヤだ。彼は瞬間移動ができないはずだ。

「いっくらアキラが心配だからって、何も……。う、うわっ！」

カズヤは思わず声を上げた。突然足元の地面が消えて、引力に従って落ちるような感覚に見舞われたのだ。

「痛っ！」

「ゴメン」

カズヤが落ちた所は、サキの真上だった。

「カズヤさあ、お前、もうちょっとマシな所に瞬間移動させるよ」

「何言ってるんだよ。お前、勝手に移動したんだサ。どうせアキラが心配だったんだろ」

「また、勝手な誤解を……。っつーか、お前の仕業じゃなかったのかよ」

「オレ、何もしてないよワ」

「オレはできないし」

二人は首を傾げた。二人のいる場所は、これから行こうとしていた場所だったのだが、そこにはアキラの姿はない。一体どういうことなのだろう。

その頃アキラは森の奥深くを彷徨っていた。

アキラも、当然彼女の意志でここに来ていたわけではない。大方カズヤが悪戯で、このわけの判らないところに送り込んだに違いないと思っていた。キノコ取りの達人は決して場所を教えないのと同じ感覚なのだろう。

心の狭いやつだ。オレは食い尽くしたりしないってのに……

アキラはそう思いながら、周りのアケビやら山葡萄やら、手当たり次第に手を伸ばした。しかしおかしいことに、待てど暮らせど二人は現われない。

？

遠くから、風に乗って幼児の泣き声が聞こえてきた。

「平気だつて」

「……でも、でも……」

よく聞くと、泣いているのは一人だけで、もう一人が慰めているようだ。

「ほら、そのお姉さんに訊いてみよう」

二人の男の子は、遠くにアキラの姿を見付け、駆け寄ってきた。

「うわっ、来るなよ！」

理性があるから、隠れはしなかったものの、子供の扱いが大の苦手なアキラは、思わず身を引いた。

「おねえさん、ここ、どこ？」

眠たそうな半分閉じた瞼まぶたの男の子が、泣きじゃくる友達の手を引きながら、しっかりとした口調でアキラに訊ねてきた。

オレに訊くなよな……

第一、本当に何処どこにいるのか判らない。しかし本当のことは言わない方が良さだろうと、アキラは判断した。そのうち、サキとカズヤがやって来るだろうから、それを待っている方が利口だ。

なのに、何故か胸騒ぎがする。

第13部：十一月、秋の一日 - 2（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

泣きじゃくる男の子は、くると癖くせの強い髪の毛に、目鼻立ちのはつきりした子だ。期待に充ちた眼差しを、アキラに向けている。嫌な予感がする。それをはつきりさせないと、いくら二人を待っていても現れないし、アキラは帰れない。

覚悟を決め、あり得ない質問をした。

「君たち、もしかして、表鈴木和哉おもてすすきかずやさんと裏鈴木賢木うらすずきなかきくん？」
「うん！」

勘弁してくれよ　っ！

項垂うなだれるアキラなど気にも留めず、二人の子供は元氣良く頷うなづいた。自分たちのことを知っている人なら、この深い森から出してくれるに違いないと、過剰な期待が込められた声だ。

アキラの悪い予感の的中してしまった。

ここは『過去』としか思えない。

でも、どうやって？

アキラはすぐに推測を立て始めた。

彼女は過去や歴史を垣間かいま見ることはできるが、時間移動はできない。と言うよりは、しようと思っただけのことがない。歴史への干渉がどういう結果を齎もたらすかなど、簡単に想像がつく。

だが、瞬間移動をする時、移動先の空間を引き寄せて移動するのだから、時間も引き寄せられないでもないかもしれない。そもそも移動する時間を超えているのだ。

その理屈に沿って考えると、誰かアキラの知らない能力者が、目的はまるで判らないが、下手に時間と時空を曲げて過去に移動して、たまたま引き寄せられてたぐまった時空軸の近くにいてしまったア

キラが、その歪^{ゆが}みに巻き込まれてしまったのだろう。そうとしか説明が付かない。

何も超能力者はアキラたちだけではないのだが、誰が、どうしてこんな神森という辺鄙^{へんぴ}な場所で時空間を捻^ねじ曲げたのかさっぱり見当もつかない。しかし、今はそのようなことはどうでもいい。ここは過去で、確実な戻り方さえ判ればいいのだ。

アキラが腕組みをして考えている間も、子供たちは瞳をきらきらと輝かせ、この大きいお姉さんが自分たちを救け出す為に手を握ってくれるのを、今か今かと待っている。

アキラは大きくため息を付いた。

本心は、この幼い知り合いを置き去りに、自分だけ帰ってしまいたい。しかし幼い二人をそのままに消えた場合の影響は計り知れないし、年長者として理性が許さない。

慌てて気配を捜せば、十三才のサキとカズヤまでもが、この空間に紛^{まぎ}れ込んでいるではないか。

もし今ここで自分一人が勝手に帰ったとしたら、彼らはここに置き去りだ。いるべき時間から二人は消え、とある時間には年令の違う同一人物が存在してしまうという、何とも不安定な存在が誕生してしまう。

これは世界の安定の為には、非常に具合が悪い。もし、今いる時間と場所がはつきりしていれば、さっきの理屈^{もつ}を以て、アキラは救けに返ることもできるだろう。しかし、アキラはそれを知る手段がないのだ。

だからといって、幼児の二人の目の前で、十三才の彼らを強制的に呼び寄せるわけにはいかない。サキが瞬間移動を知らなかったことから、それは見ていないし、体験していないということは明白。ということとは、過去を変えることになることはできない。

アキラは、泣き出したい心境だった。

「うーん、オレも迷子なんやわ。男の子やろ、泣いたらあかんで」
アキラは引きつった笑みを浮かべ、よく解らない理屈を言って、
幼い二人を慰めた。今はあの十三才の二人を待つしかない。

その待たれている二人は、何も知らない分、気楽なもんだった。
「そうそう、昔さあ、迷子になったから、ここサ見つけたんだっけ
なヤ」

「んだんだ。懐かしいこと」

「で、すつげー強い姉ちゃんに救けられて」
はたと、サキは足を止めた。

「どしたのワ、サキ？」

カズヤも足を止めた。

「なあ、あの不良っぽい姉ちゃん、東中じゃなくって、神森中の制服着てなかったかヤ」

「まさかあ。確かに東中じゃなかったけど、神森中、あん時なかったっちゃ。似てただけじゃないのワ。今時あんな格好の人いないし。けど、変な話だったよな。オレら、いきなり襲われたんだぜ。オレらは何も知らないけど、あの姉ちゃんは知ってそうだったなヤ」
「あれ、何だったんだろなあ」

二人は、変な考えを振り払うように、陽気に歩き出そうとした。
その時どこからか、とてつもなく大きな爆発音がした。

「何や、サキっ？」

「バカ、オレに訊くな！」

二人は音のした方に駆け出した。

その爆発音は、幼いサキとカズヤ、そしてアキラに向かって投げ付けられた、日本古来の火薬弾のようなものだった。一応怪我はするが、殺すだけの威力はない。

「何だ?!」

アキラは咄嗟とっさの出来事に、二人を横に抱えて飛びのいた。どのよ

うな場合であっても、弟御子一族に狙われている自分を知っているから、瞬間移動は使わない。

それにしても、このような道具を使う者は珍しい。それがもし穂の谷の者だつたら、絶対生かしてはおけない。

「姿を見せる！」

アキラは鋭い視線を、一本の高い木の枝に向けた。「どうしてこんな子どもを狙う？」

返事はない。

「答える！次はないぞ」

アキラは石を投げ、そこに隠れていることに気付いているという意思表示を見せた。

第13部：十一月、秋の一日 - 3（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

石を投げつけた木陰から、その顔を仮面で隠した、見るからに怪しげな男が現われた。

「なかなかやるな。どうしてここにいる？」

「道に迷ったんだよ」

男は笑い声をたてた。いきなり攻撃するような気配は、今のところはないようだ。

「それだけできるといふことは、裏の世界を者だな。どうだ、いつそ我らの仲間になれ。我々は何れ天下を取るぞ」

「はあ？」

あまりに突拍子もない話に、アキラは言葉を失った。『天下を取る』だなど、今時、頭のオメデタイ連中くらいしか使わない台詞だ。

普段なら嘘の一つでもついて目的を探るのだが、あまりの台詞にそのような考えは吹っ飛んでしまったし、そもそも無抵抗な幼児を狙うような輩の仲間に一瞬たりとも加わることは、アキラにはできない。

アキラは唾を吐き捨てた。

「超常の力を欲しくはないか？」

その言葉に、アキラは思わず顔を上げた。

この表現を使う者は珍しい。しかもアキラが知っている限りでは、望んで与えたりできるようなものではないはずだ。

この話は事実なのか、ただの甘い餌なのか、確かめる必要性を長としてのアキラは感じた。

「超常の力？超能力のことか？そりゃくれるなら欲しいさ。でも、欲しいと言ったら貰える物なのか？」

アキラは訊ねてみた。「どうせなら、少しでも他人より抜きん出

てみたいさ。でも私じゃなくて他にもいるだろう、そんな甘い話に乗りそうな人間は」

「いるだろうな。でもお前は、そのガキどもが狙われる理由も知らずに庇ってるんだろ」

仮面の男はきつと笑っている。声色で何となく判るのだ。

何だか胸くそ悪い。

「それがどうした。人として当然だろう。だからって、どうして私を誘う」

「お前が思ったよりも強いからさ。

私は裏世界最強の『瑞穂の谷』を滅ぼす人材を捜している。『瑞穂』くらいは知ってるだろう」

アキラは頷き「私的な恨みか？」と訊いた。

「まあ、同業者の利害争いだな。あそこは内輪揉めで忙しいから、今が狙い時」

よく喋る男だが、とにかく敵確定だ。

でも、事情を聞きだすまでは、自分の所属を明かすわけにはいかない。知らぬ顔でいなくてはならない。どうせたった一度の逢瀬だ。

「ふん。どうでもいいや。で、どうしてこの二人を？まさかこんなガキが、その超能力でも持ってるってか？」

平静を装ってはいるものの、実際アキラの心中は穏やかではない。将来この二人の超常の力が公になっおあやけているのだとしたら、それはあまり好ましくない。

「まあな。こいつら、『瑞穂』を滅ぼすだけの力を持っているからな、手懐けるなら、ガキのうちからのがいい。ってことで、こっちに勝ち目はある、来いよ」

十年後に来たら、がっかりするぜ。

聞くだけ聞いたアキラは、ニヤツと笑った。二人の能力を正確に把握しているわけではなく、何かしらの噂に振り回されているだけ

のつまらない男のようだ。

そして超常の力を与えるなど、やはり餌^{えさ}でしかない。本当の狙いは『瑞穂の谷』を滅ぼすことだ。

元の時代に戻ったら、谷のコンピューター『マザ』で、『瑞穂の谷』を狙う一族のリストを洗って、この不審な男を消す準備をしないではない。二人には、しっかり言い含めておけばいい話だ。

アキラは幼い二人に、木陰でじっとしているよう言い付けた。

取り敢えず子供たちを離れた場所に置いたことで、アキラは改めて真正面から仮面の男に向き合うことができるようになった。

「なあ、私はただの迷子だ。だから自分の生命を預けるに相応しい男かどうか、あんたを試したい」

アキラは身構えた。訊きたいことは訊いてしまったのだが、待ち人が現れてくれない。ちよつと時間潰^{つぶ}しがてらに、この男を痛めつけておくのも悪くはない。

「お前、相変わらず無謀だな？」

そんなアキラの思惑など知らない男は、笑い混じりに訊ねてきた。未だアキラの本当の実力を知らないから、余裕でいられるのだ。

「私を同業者と見たんだろう。他人の影として生きる者は、死をも怖れぬよう教育されてきてるじゃないか。それに私は死ぬつもりもないし、お前だって殺す気ないだろう。手を組みたいって言っただけじゃないか」

アキラはそう言うなり、男の背後に回った。男もなかなかの使い手で、すぐに振り向いて、アキラの拳を躲^{かわ}した。しかし、すぐにアキラも次の技を繰り出す。暫^{しばし}くは二人で技の出し合いとなった。

「最強だつて。嬉しいじゃないか」

「え？」

アキラの拳が、男の鳩尾^{みぞおち}に決まった。

「喋りすぎだな、お前は。素性の知らない者に語るなんて、余程私

を子供と思つたか、我々の間では考えられないことだ」

男は咽^むせはしたが、構えを崩すようなことはなかった。

「教えてやろう。私は迷子の『瑞穂の谷人』だ。つくづく運の悪い男だな、お前は」

アキラは高らかに笑つた。

「そういうことかッ！」

仮面で隠しているから表情は判らないが、その声色からは他人を小馬鹿にしたようなものは消えている。

そのようなことなど構わずに、アキラは技を次々と繰り出し、仮面の男はそれに応えた。二人の間に力の差はなく、全く互角だった。

第13部：十一月、秋の一日 - 4（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfradia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

アキラと仮面の男の二人の真剣勝負は、幼いサキとカズヤの目には、あまりに速すぎて見えなかったが、鍛えている十三才の二人には見えていた。

「な、何なんだ？」

『後で説明する。とにかく生きていたかったら、その二人のガキを守れ！オレや自分の名前を口にするなよ！』

アキラは大きな二人が来たのを、気配で察知し、念話で指示を出した。

その争いに自分たちが加勢になど入ったら、それこそ足手纏まといになつてしまうのは一目瞭然りょうぜんだった。

何より、本当の意味でのアキラの本気の姿を見るのは、二人は初めてだった。そしてそれは人間の理解を超えていて、鳥肌が立つほど強かった。

「何か、見たことないか、この風景……」

「んな……そんなわけないだろ……」

カズヤの問いかけを、サキは否定しようとした。違つていることを願っていた。

『カズヤが正しい。お前らは知ってるはずだ、この現場を。だって、ここは……』

アキラの念話が途切れたのは、サキとカズヤ四人に向かって、仮面の男が火薬を投げ付けたからだ。

どうせ方向転換させようと蹴つたところで、衝撃を与えた瞬間に爆発することは判りきっている。それでもそれをそのままにするわけにもいかない。

アキラは自らその爆弾にぶつかりに行き、当然爆発に巻き込まれた。

もし、超常の力が公にできたなら、このような危険な目には遭わ

ないはずなのに、彼女は無謀なことばかりしている。

「あつ！」

起こるべくして起こった爆発に、大きな二人は、足枷あしかせとなることを忘れて立ち上がりかけた。

『どアホ！オレを甘く見るな。自分のこと考えろよ！』

アキラはそんな二人に一喝入れた。爆煙から現われた彼女は、煤すすで汚れてはいるものの、怪我は負っていないように見えた。

「止めた」

と、男の方が、技をかけるのを止めたのだ。

「今は取り敢えず分が悪い。瑞穂の谷の長は、この国の王だ。お前はその下僕しもべで、今は逆らう時ではない」

無抵抗な相手に拳を出すわけにもいかず、アキラも闘争心をしまった。

「どうでもいいさ。こつちだつて、今は、この二人の子供を守るだけ。しかし、お前が『瑞穂』を潰そうとしているのなら、何れ私がお前を潰しに行くだろう。長の手を煩わづらわせることもない」

顔についた汚れを拭い、アキラは今は興味がないふりを装って言った。

「そつちこそ覚悟するがいい。お前はその二人の重要性を知らない。ということ、長も真実には気付いていないことだ。瑞穂の谷を潰す為、私はその二人を手に入れるぞ、必ず。十四年後、そのガキが十七才になったら、また会うだろう。帰れたならば、長に伝えるがいい。その二人の重要性をな」

仮面の男も、まるでアキラのそのような性格を知っているかのような雰囲気だ。

「何を言ってるんだ、お前」

「解らなきやいいのさ」

アキラは不敵な笑みを浮かべていたが、仮面で表情が読めない男の声にも、かなりの余裕が感じられた。

と、アキラの身体が崩れたのだ。仮面の男はすかさず支え、サキとカズヤの方に放り投げた。

殺す気があるならチャンスなのに、だ。

「何をした？」

まるで猫が毛を逆立てたような剣幕で、サキは怒鳴りつけた。

本当は飛び出していきたいのだが、それは知っているシナリオにはない。

「足の怪我さ。さっきの爆薬には痺れ薬が仕込んであつてな。この女はようやく立っていた状態だったはずだ。何しろ子供二人を動けなくするだけの量は仕込んである。」

まったく、強いとは思っていたけど、『瑞穂』の人間だったのなら理解できる。つくづく怖ろしい女だよ。薬に気付いてたくせに、お前らを守る為に飛び込んできたんだ。いつか死ぬぞ、その所為で

ま、こつちとしては大助かりだ」

「ふざけんなつ、この野郎！」

カズヤが無鉄砲にも飛び出したが、まるで子供のようにあしらわれ、人差し指一つで気絶させられてしまった。

「どうする、お前は」

男は低く冷たい声で、サキを挑発した。きっと青白い顔のサキが何もできないことを、男は見取ったのだらう。

「女の方は、身体が動かないだけで、耳は聞こえている。男の方は、完全に気絶している。目覚めていないお前はもうどうなりたいんだ。お前はここの二人を連れ帰れるのか？」

男は笑った。

確かに今のサキの実力では男に触れることすらできない。判っているから腹立たしいのだ。ではこの怒りは何処にぶつけなければいいのだらう。今の彼には、それを発散するだけの体力すらないのだ。

彼は細い目を見開きそして拳を固く握った手を伸ばした。

男は「あつ」と、短い声を上げた。その足が、一步後退した。しかしサキは動じない。力強く伸ばした掌を、一杯に開いた。その手から、信じられない突風が生まれ、その風に呑み込まれるようにして、仮面の男の姿が消えた。と同時に、サキの目は細くなり、いつもの顔に戻った。

今の光景は、誰も見ていない。姿を消した。

第13部：十一月、秋の一日 - 5（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

『サキ……、十年前と同じ行動を取れ』

サキはその声で我に返った。それがアキラの念話だとすぐに気付く。

過去を変えてはいけないのだ。だから、サキはアキラとカズヤを運び、物陰に隠れるようにした。

『ちよつとガキども、そこまで送ってくる』

仮面の男がどうなったのか問わないアキラを不思議に思いながらも、サキは幼い自分たちの元に行った。

「ねえ、お兄ちゃん、どうしたら強くなれるの？ボク、カズヤを守らなくちゃ」

サキは苦笑した。身体が弱くても、自分はいつでも用心棒の気分だった。それは今でも変わらない。

「だからお兄ちゃんみたいになりたい」

「お兄ちゃんよりねえ、あのお姉ちゃんのが強いんだよ。それに君は身体弱いだろ。頑張らなくてもいい」

言っても無駄なのは、自分自身だけによく知っている。

小さい自分は、振り返ると手招きをした。

その時まで幼いカズヤは震えて隠れていたが、小さいサキが合図をすると出てきた。あれは自分がカズヤに命じたことだったわけ

「かつこよかったよーっ！ボクも、ボクもなりたい。ねえ、十年経^た……つたら強くなれる？」

サキは再び苦笑した。カズヤはこの先十年は変わらない。

「お姉ちゃんの手を握って訊いてごらん。答えてくれるかもよ」

アキラはカズヤの潜在能力を、この時に引き出していたはずだ。

この時幼いカズヤが何を伝えたか、サキは知っている。幼い自分が何を思っていたかも、当然知っている。アキラの目が開かないのが、せめてもの救いだった。

「さ、もう行こうか。家まで送ってあげるから」

しかし、自分は家まで送ってあげなかった。

「いいよ、お兄ちゃん。森から出れば、帰れると思うから」

「じゃ、判る所まで送ってあげようか」

幼い自分は、アキラとカズヤを心配して言ったのだ。そしてこの後、二人は小学校の近くの空手道場に直行するはずだ。

『大丈夫なのか？家まで送らなかつたんだろ』

戻ったサキに、アキラは声をかけた。

「大丈夫、そういう過去だから。それより、足見るからな」

サキは断りを入れ、アキラの長いスカートを膝までまくり上げた。『大したことないだろ。あれは殺傷力の低い爆薬なんだ。どうせガキ二人を動けなくして連れ去るつもりだったんだから、強い効果を求めちゃいないさ。それにこれは植物の毒を使ってるはずだから、暫くしたら元に戻るはず』

「何を使ってるんだ？」

『多分……』

アキラの言った草の名を聞いて、サキは立ち上がった。

「それなら知ってる。すぐ治せるかもしれない。師匠から薬草を教わってるんだ」

『まあ、待てよ。取り敢えず戻るか。いつまでも長居しちゃ、あまり良くない影響が出るかもしれないからな』

「どうやって戻るのさ？」

『ま、説明は難しいな。やったことないし。とにかく、お前の部屋に戻るから』

「また、あの嫌な感じが」

『我慢しろよ』

アキラの予告通り、嫌な感覚に襲われて、三人はサキの部屋に戻った。

「きゃあああつつ！何なの、あなたたち？」

「しまった！」

コメチの叫び声と、サキの叫び声は同時だった。

「な、なしてコメチが……」

突然降って湧いた三人に、サキの部屋で彼を待っていたコメチは言葉を失い呆然としていた。サキも、どう対応したら良いか、頭が全く回転しなかった。

『サキ、お前、コメチの幼馴染なんだろ。賭けてみるよ』

音だけで事態を把握したアキラは、サキに指示を出した。しかし実はアキラの方が賭けの先手を打っていた。

「何なの、賭けて。アキラ、何言ってるのよ」

聞こえていないはずの声が、コメチにも聞こえている。サキは冷静になり、アキラの思惑通り動いた。

『アキラ、何か念動してくれ』

『了解』

アキラはサキの思惑が自分のものと合致したことに気づき、彼の言う通りにした。

「ちよつと、何っ！止めて、止めてよ！」

サキは少し後悔した。何もコメチ自身を宙に浮かさないでもいいではないか。

「実は黙ってたけど、オレ、こういうことができるんだ」

「ふざけないでよ！わたしがそんなの、信じるわけないでしょ」

コメチは本気で怒っていた。このような現実離れした悪戯いたずらが、彼女は大嫌いだ。マジックショーなら、必ず仕掛けがあるはずだが、今現実を起こっていることは、全く理由が付かない現象だ。

『コメチ、オレの声を聞くアンテナがコメチにはあるってことだ。力がない人間は、オレのこの声すら聞こえないんだから。』

見てみ、オレの口は動いていないだろ。テレパシーってやつさ」

コメチは頭を抱え込んだ。割れるように頭が痛む。

『始めは信じられないさ。オレだって、自分が信じられなかったもん。でも、本当なんだ』

サキの声まで聞こえてくる。

「もう、止めてえっ!」

コメチは耳を塞いで叫んだ。

「話は耳で聞こえるように言つてよ!」

コメチは床に蹲り、何が何だか判らないままに泣き出した。

第13部：十一月、秋の一日 - 6（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第13部：十一月、秋の一日 - 7

『どうする、アキラ？』

こうなると、コメチはどうにもならないことを、幼馴染みだけに知っている。

『そろそろ目と口くらいは動かせそうだ。それまで泣かせておいてくれ。そうだ、何もなかったかのように、オレとカズヤを見てくれって、お前は薬草を取りに行ってくれれば、その間にオレが何とかする。任せろ』

『頼む』

サキはアキラに任せることにした。その方がいい結果を生むだろう。

「コメチ、オレ、薬草を取ってくるっけ、ちよつと二人を見てくれないか」

泣きじゃくるコメチの肩に手を置いて、サキはそのまま外に出た。

アキラはサキが出て行ってから、暫く^{ひま}コメチを泣かせたままにした。

頑固な現実主義者相手の賭けは失敗。そうと判れば、後は彼女の記憶を消すしかない。

「あ……あ……」

アキラは試しに声を出してみた。未だ、喋る^{しゃべ}には不自由な気もしたが、これ以上時間を置くことは、得策とは思えなかった。

「あ、アキラ、大丈夫？」

コメチはまたしても、非現実的なことを夢だと思い込むことで、心の整理を付けていた。

「こ……コメチ、悪かつ……たな」

「あなた、大丈夫？何かあったのワ？」

「気に……すんな。すぐに戻るさかいな。でも……、ちよつと辛い

から、嫌がることをさせてくれ……」

コメチは顔を顰^{しか}めたが、すぐに頷いた。

『ありがとうな。ちよつと食い意地張つてな、悪い果物食べたら、このザマさ。ちよつとオレの身体を起こして、オレの目を見てくれ』

コメチはアキラの言う通りにした。

『さつきは悪かった。どうであれ、もうコメチにはこんな真似はしないから』

「わたしはいいわ。びっくりしたけど」

『だったら忘れちまいな。忘れるんだ……』

アキラは瞳を瑠璃色の瞳に変えると、コメチに暗示をかけた。その瞳の色に吸い込まれ、コメチはアキラの思惑通りに、今起こったこと全てを忘れていった。

失敗の尻拭^{ぬぐ}いは成功つと……。

アキラはため息をついた。全てなかったことにして、アキラは再び動けないふりをした。少しは回復しても、動くのは億劫^{おっくう}だった。

「ただいま。コメチ、ありがとう」

サキは何事もなかったような顔をして戻ってきた。

「土瓶^{せん}で煎^{せん}じるから、ちよつと待つてろな」

サキは自分とコメチの為に、冷蔵庫から飲み物を出した

「ところでコメチ、何か用？」

「あ、そうそう。今日の打ち上げをやるうって計画だったんだけど……」

コメチも、まるで何事もなかったかのような顔だ。サキは一瞬不審に思うが、アキラが何かをしたのだろう。そのまま受け流す。

「いいねえ、明日は振替休日だし。何時？」

「つて言うか、大丈夫なのワ？二人とも食い意地出して食当たりなんでしょう」

コメチは倒れているアキラとカズヤを見やった。

「大丈夫に決まってるじゃん。アキラとカズヤだぜ」

「それもそうね」

二人は何事もなかったかのように笑った。

「お昼食べた後がいいかしら。それともみんなで食べる？」

「んだな、何ならここで鉄板囲むか」

「あら、ステキ。じゃ、何時がいい？」

「お昼の一時過ぎでいいっちゃ」

「了解。サキ、場所提供、助かるわ」

「そのつもりで、ここサ来たんだべ」

「実はね。じゃ、わたし、これからナミに電話しなきゃ。二人、大丈夫？」

「平気。オレが薬草に詳しいの、知ってっちゃ。これは簡単」

「あ、そ。じゃ、わたし、これで失礼するわね。材料はこっちで準備するから」

「はいはい。じゃ、気を付けて」

サキはコメチを送り出し、薬草を煎じたお茶を持って、戻ってきた。

「芝居が……う、巧うまくなったじゃ……」

アキラが少しだけ身体を動かしていた。

「大丈夫？」

サキはその身体を起こし、お茶を飲ませた。

「ふーっ」

暫くして、アキラは大きなため息をついた。

「どう？」

「お前さあ、どうしてこんな知識あるんだ？親が詳しいのか？」
流暢りゅうたうな言葉が、薬草の効き目を表していた。

「ああ、親はどうだか」

サキは一瞬顔を曇らせ続けた。「教えてくれたのはオレの空手の師匠。オレとカズヤは一緒に教わってたんだけど、カズヤは興味が
ないから全然ダメ」

「カズヤらしいな」

未だ気絶している彼を見て、二人は笑った。

「ところでさ、さつきコメチにはアンテナがあるから聞こえるって、あれ、本当？」

「ああ、あれは嘘。オレならば、アンテナの有無は関係ないからなでも、そういう人もいるだろうけどさ」

アキラはいけしゃあしゃあと言った。

カズヤが起きる気配はまるでない。

サキはそれを確認すると、ちよつと声を顰^{ひそ}めて言った。

「あのさあ、アキラ。ちよつと聞きたいことがあるんだ、カズヤ抜きで。いいかな」

「ん？別に構わないけど、珍しいな。何？」

アキラはカズヤを起こさないように気を遣いながら、ベッドから降りた。

「あ、いや、今じゃないんだ」

その言葉に、いよいよアキラも首を傾げた。

「明日、ここに集まるの昼だからさ、朝一番で来てくれないかな。怪我、大丈夫だろ」

「まあ、傷そのものは掠^{かす}り傷だからな」

「じゃさ、ちよつとつきあってくれよ」

「嫌だ」

「また、その問答かよ。お前もワンパターンだよなあ、アキラ」

「悪かったな。ほつとけ」

二人は忍び笑いをした。もしカズヤが起きようものなら、勝手な誤解をするに違いない。

「その用事さ、すぐ終わるのか？」

アキラの問いに、サキは頷いた。

「じゃ、今日の一件のこと説明しないわけにもいかないだろ。それ

が終わり次第、カズヤを早めに呼び出そう。知りたいだろ」

サキは「そりゃ、まあ」と言う。何しろ十年來の疑問が解けると
いうのだ。

「じゃ、明日朝イチでここに来るから。ま、そういうことで。今日
は助かったよ、サキ」

「いや、こつちこそだいたい昔からお世話になりました……」

半分冗談で下げたサキの頭を軽く引つ叩いて、アキラは姿を消し
た。

第13部：十一月～秋の一日～・7（後書き）

次回から第14部（最終部）：十二月～別れ～を始めます。

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfradia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第14部：十二月、別れ - 1

14：十二月、別れ

きっかり九時にアキラはサキの許に現れた。

「で、何？」

サキに恩義を感じているから素直にここにいるのだが、本心は面倒臭い。

「ちよつと稽古に付き合つてほしいんだ。ほら、昨日、あんまり自分が役立たずでへこんでんだよ」

「はあ……」

アキラは何だかさっぱり解らずに、サキに連れられて道場へ向かった。

「ところで、コメチだけど、あいつに何したの？アキラ」

「あ、ああ、簡単なことだよ。去年の騒ぎの後の教師みたいに、忘れさせたんだ」

アキラは、あの妖しい微笑みを浮かべた。

「ああ、やっぱり」

サキのあっさり受け流した。相手はアキラだ。今更驚いたりしない。

「で、お前に注意があるんだけど、コメチに思い出させるなよ。同じ内容の二度目の封印は難しいんだ」

「了解」

「それにコメチ、かなり嫌がつてたし」

「そういうところ、意外と優しいよな、アキラって」

「ひどいな。意外とって、何だよ」

「いいじゃん、お前をからかうのが面白いんだっけ」

「冗談じゃねえよ」

二人は笑った。

「そうそう。オレさ、昨日思ったんだけど、お前とカズヤの寝顔って似てるなあ。二人とも顔立ちが濃いからそう見たのかもしれないけどさ。」

でもな、カズヤはあの通りの性格の寝顔して、お前は苦しそうな寝顔だったなあ」

話題を変えたサキの言葉に、アキラの無邪気な笑顔が固まった。

「悪かったな、苦しそうで。仕方ないじゃないか」

「それもそうだな。ゴメン……」

「また『ゴメン』の安売りがよ」

本当はこんなことを言いたかったわけではないのだ。「楽にしてほしい」って言いたいただけなのだが、その一言が口にできない。

仕方がないから、つまらない自嘲混じりじちようのため息しか出てこない。

「で、稽古だなんて、実力試ししようなんて思ってるんじゃないだろうな。オレはああいう連中相手でもなきゃ、本気出さねえぞ。大体、何で道場なんだ。手加減は難しいんだよ。ま、頼まれればやってやってもいいけど、昨日の本気」

「まさか。いや、勘弁して下さい」

口の端を上げてにやっと笑うアキラに、サキは慌てて大きく頭を振った。そんな自殺行為はしない。敵うわけない相手に勝負を挑む、そういう趣味はサキにはない。

「いやあ、昨日のお前の動きを見て、ちょっと気になったことあったんだけど、カズヤがいると面倒臭いづいっけな」

サキは道場の扉を開けた。

「何だ、賢木サカキ。やけに早いなあ」

サキが師匠と仰ぐ六十才くらいの男性が、道場の神棚を磨いていた。

「いえ、師匠にお願いがあつて。」

こちら、同級生の桂小路 晃あきらっていうんだけど、師匠、彼女とで

手合せしてくれませんか」

「何だ、いきなりこんな可愛らしいお嬢さんと手合わせしろだなんて。か細いお嬢さんじゃないか」

サキの師匠はアキラを見やって優しく笑った。きっと彼の目には弱い女の子とも映っているのだろう。

しかしアキラはサキの意図が読めた。彼はアキラの動きが見たいのだ。

アキラは考えた。手合せすることで、サキに真実を教えることになりかねない。いや、初めから疑問を持っている人間がそれを見たら、勘のいい彼だ、絶対に気付く。

でも、サキには真実を語らなければならぬ。それが、この二年間世話になったことに対する礼儀というものだ。

アキラは中央で正座をし、きちんと礼をして言った。

「初心者ではありませんのでご安心を。是非、一度お手合せを」

アキラの鋭い眼差しに、師匠は何かに気付いたのだろう。アキラに道着を手渡すと、自身も着替えて準備をし、こうして本気の手合せが始められた。

師匠はいつも通り力強い動きで見ている方が圧倒される。

が、対するアキラは舞っていた。ゆっくりと舞っているように見えるのだが、しかし、師匠が戸惑うほどに速かった。

やっぱり間違いない……

アキラの無駄のない動きは、余計なものなど何もない自然の営み、川の流れ、湖の佇み^{たたず}、風のそよぎ、海の波、全てを表現した、大樹の森の巫女の舞と似ていた。

彼女の纏^{まと}う空気は澱^{よど}みではなく清冽^{せいれつ}な湖面のように止まっている。サキが目指していた形がそこにある。

と、突然アキラは舞を止めた。

「もう、いいでしょう。サキ、オレはお前の疑問に答えられたか？」

オレの型を訊きたかつたんだろ」

自分の型が巫女舞を基にしていることくらいなら、別に答えてもいいと思ったから、アキラはこの話を呑んだのだ。単なる一般人に、『瑞穂の谷』に繋がる知識などあるわけがない。

床に手を着きお互いに礼を交わし、静かに顔を上げたサキの師匠は語りかけた。

「アキラさん、あなた、『姫巫女一族』というものを、ご存じないかな」

予想に反した問いかけに、アキラは思わず息を呑んだ。そして「いいえ」と否定した。

その名は瑞穂の谷人の別称だ。偶然かどうかは判らないが、この師匠が弟御子おごみこ一族の者ではないという、確証はない。

そんなアキラの考えなど知らない師匠は、言葉を続けた。

「そうですか……」。

実はあなたの型は、その姫巫女一族の伝える『瑞穂』の型に近い気がする。しかも、失われて久しい正統派の型に近い」

『瑞穂』という言葉に、サキは少し反応を見せた。頭のいい彼だ、昨日の仮面の男も言っていた『瑞穂の谷人』という言葉を思い出したのだろう。

「失われて久しい型に、どうして近いと判るのです？」

サキの素振りに気付いてはいたが、それよりも瑞穂の谷を知っている師匠がますます怪しく思え、アキラはサキを無視して訊ねた。

第14部：十二月、別れ - 1（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第14部：十二月、別れ - 2

「仰る通り、山奥に身を潜めた謎の一族の話ですから、私も詳しくは知りません。ただ、その『姫巫女一族』の長を捜しているという、とても美しいお方が、この型を私の祖父に伝えたのです。その方が仰るには、将来この地に『姫巫女一族』の長が現われるかもしれないから、その時の為に、大樹の森の守護者の家の息子たちに、この型を伝えるように言われたのです。まあ、もう一人の方は興味なくて駄目でしたけど」

カズヤのことだと判るから、三人は顔を見合わせてくくくつと笑った。

「祖父の話によると、その女性は自らを正統派の継承者であると名乗っておられたそうです。」

我々は祖父の遺言として受け継ぎ、この子の父親にも教えてあります。ただ一般的な型ではないので、稽古の一環として名前も教えずに伝えていたのですが、だからこそこの子は気になったのでしょうな。今、初めて理由を口にしたくらいですからな」

すぐにアキラは気が付いた。全ては水鏡の仕組んだことだ。

「でも、師匠。前にも言ったかもしれないけど、今の型は、大樹の森の巫女舞に似てると思うんだ」

「そうかもな、賢木。繋がりがあるかどうかは知らないが、巫女舞など、何処のものも似たようなものなのだよ」

師匠はゆっくりと立ち上がった。

「賢木の勝手な疑問に付き合ってくれて、私からも礼を言うよ。アキラさん、ありがとう。」

怪我には気を付けなさい。賢木よりも和哉からいろいろ聞いてはいるが、かなり無茶をしているらしいからね。何かあったら、ここで発散すればいい」

「ありがとうございます」

優しい師匠の言葉に、アキラは頭を下げた。

「結局、サキは何が知りたかったんだ？」

帰り道、アキラはサキに訊ねた。

「オレの型と、神社の巫女舞との違いか？それともオレと神社の繋がりが？それなら前にも話したけど、オレは滅びた一族の霊鎮め^{たましず}の為の神社の巫女であって、豊穰祈願の大樹の森とは違うはずだぞ」
「憶えてるけど……」

サキは言葉を濁^{にご}した。正直、それ以上のことは考えていなかったのだ。むしろ『瑞穂』という言葉の関連性の方が気になっている。
「お前には本当のことを言っておくけど、お師匠様が言っていた『姫巫女一族』の長^{おさ}な、あれ、オレのことだ。そして伝えたのはきつと水鏡さまだ」

「え？」

サキはまじまじとアキラの顔を見た。『長』ということは、リーダーだ。でもアキラは明らかに子供だ。

「ま、年齢よりも血統が大事だつてことで。前にちよつと話したよな、オレの一族のことは」

サキは混乱していた。単に自分の疑問の為にしたことが、アキラの本性を抉^くることになるとは、思いもよらなかった。

「……悪かった。考えなしで不用意だったな」

「気にすんな。何れお前には話さなければならぬと思つてたことだからな」

アキラはあっけらかんと言った。

そういう態度のアキラに気遣いは無用だと心得ている。サキは質問を続けることにした。

「じゃ、お言葉に甘えさせて戴きますけど、昨日のあの男も言つてた、『瑞穂の谷』とか、全部関係してるつてことなの？」

「そういうことらしいが、オレも判らない。」

常にオレは生命を狙われている身だし、もしかしたら、お前らに『瑞穂』の型が伝えられていることを、さっきの男は知っていたのかもしれないな。我々の情報網は半端じゃないから」

「オレは、何が何だか解らないよ」

サキは音を上げた。

「解らなくなつていいさ。とにかく、オレが四年後もきつちり守つてやるから」

アキラは珍しく楽観的な意見を言った。

「さ、これからカズヤも交えて事情説明つと……」

「たたく、あいつ、変な誤解しかねないからな、オレは一回自宅に帰つてチャリンコでお前ン家行くから」

そう言い置いて、アキラはさっさとサキの目の前から姿を消した。

「他のみんなが来る前に、昨日のことを詳しく説明しとこうか」

さっきまで一緒にいた素振りなど微塵みじんも見せず、アキラはカズヤとサキを前に話し始めた。

「あの胡散臭い男は、四年後の時間から、十年前の時間に移動したらしい。目的は、『瑞穂の谷人』と呼ばれる一族を滅ぼす為に超能力者を集めているらしい。」

きつとお前らは四年後に誘われて、断るか逆らうかするんだろ。だから子供の頃に戻つて、手懐てなつけようとしたんだろな」

「アキラは昨日、自分も『瑞穂の谷人』とか何とかだつて名乗つてたけど、それ、何なのや？」

事情を聞いていないカズヤは、当然の疑問を口にした。

「ずっと前に話したよな、オレの一族のこと。それが『瑞穂の谷人』って呼ばれてるんだ。ということは、オレがあああの仮面の男が倒そうとしている相手つてわけ。何せオレが『瑞穂の谷人』の長だからな。」

まあ、オレらの一族を目的の敵かたきにしている団体は一杯いるから今更だけど、あの男もそういう団体の一つなんだろ。こっちとしては弟御子おとこみ一族と手を組まれたら困るから、今のうちに潰つぶしておきたい

けれど、それが元でお前らの存在を公にすることは避けたいから、今回は静観することにする。

……考えることが多くてウンザリだよ、まったく」

「いや、うんざりってそんな簡単な……」

カズヤの疑問も尤も^{もっと}なのだが、サキには腕を組んでため息を付くアキラの気持ち^もが、何となく解るような気がした。彼女にとっては生命の危険など当たり前の日常で、自分の身を守るだけのものがある彼女にとっては、ただそれを使うことが面倒なのだろう。それほど当たり前になってしまっているということだ。

第14部：十二月、別れ - 2（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfradia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第14部：十二月、別れ - 3

本当にアキラにとってはどうでもいいことらしく、彼女の興味は男の移動原理の方にあるようだ。

「それにしても、あの男、色々と知ってそうだったな。それに、よく時間移動をしようと思ったもんだ。オレ、しようと思ったことないしから、マジでおっかなかったし。

今回、瞬間移動の原理を、時間まで含めて応用してみたんだけど、運が良かったとしか思えない。だって、オレ、方法知らないで試すしかなかったんだぜ」

何事もなかったから笑い話で済むが、その話を聞かされた今、二人の全身に鳥肌が立っている。

「いや、感覚としては時間と空間を自分の方へ折り曲げて近付けて移動するんだけど、その折り畳まれた部分にいた常人たちが、偶然巻き込まれてああいう事態に陥ったとしか思えないな。きっとあの男も移動し慣れていないんじゃないか」

「っていうと、あの男はこれから先も、ちよくちよくオレらの過去に向かう可能性があるってことか？」

サキは首を傾げた。

「可能性は無きにしも非ず。でも、オレは現在を守ることができるからな、今この瞬間から過去への時間を守ることができる。やっていいな」

二人は何が何だか解らないまま、それでも頷いた。それを受けてアキラは二人の額を軽く指で弾いた。

「ったく、あの足で赤ん坊の頃にまで遡られたら堪ったもんじゃねえな。もしかしたらあの男、失敗してあの時代だったのかな」

アキラはぶつぶつと呟いた。

「でも、どうしてオレらの超能力がバレてんだろ？アキラが長だっ

てばれるのかなあ？」

そのカズヤの疑問は尤^{もつと}もだ。

「それはないな。一族でオレの本名を知っているのは三人くらいで、普段は無関係だし、これからこのままだ。

だとしたら、お前らが公表するか、奴らの側にそういうのを嗅^かぎ分けられる能力者がいるんじゃないかねえの。どうでもいいけど、ああいう連中がこの先現われるって判った以上、オレが黙っているわけないじゃないか」

アキラは楽しそうにしている。

「さつき静観するって言ってたじゃん」

「そりゃ、仕留めはしないさ。だけど黙って待ってるつもりもないね。水面下で調べるに決まってるだろ。そして先方が動き出したらすぐに仕留めるのさ。」

大体、あいつはオレらがあの時代の人間だと思っているわけだから、同一人物を見つけられるわけじゃないじゃん。でもオレらはいつつが未来から来たって知っている。準備は必要だし、過去に干渉したらそれだけの報いがあるってもんだ」

「強気だねえ、姐^{ねえ}さんは」

「先手必勝って言っただよ。お前はいつつも、後手後手だからな、カズヤ」

どうもアキラは詳しくは話さないらしい。しかしそれは、サキとカズヤの信頼度の違いではないようだ、サキは感じた。

「ところでさ、『瑞穂の谷人』っての長は『この国の王』って言うてたけど、アキラ、実は日本の王様なの？」

あまりに突拍子ない言い方に、アキラは遠慮なく吹き出した。

「お前はさあ、そういうことはしっかり憶えてるんだよな」

アキラは嫌味ではなく言った。聞かれたことには、ある程度は答えるつもりらしい。

「まあ、王様じゃないってことはたしかんだけどな、解るように説明してやるよ」

「いいのワ？」

「オレはバカじゃないぞ、カズヤ。話して大丈夫なことしか話さないって、なあ、サキ」

カズヤを笑うアキラの顔が、サキを切なくさせた。

「『瑞穂の谷人』は、過激な環境保護団体だと思ってもらえればいい。お前らとか、他の能力者のことは知らねえけど、オレの能力は自然を穢すものを抹消する為に与えられた力と言われている」

「穢すもの？」

「人間。生態ピラミッドを崩す存在だから」

アキラはあっさり言っただけ。

「何、固まってんだよ。オレはここに来てサキに教育されたっけ、考えが改まったんだぜ。」

確かにオレの能力は、人間を滅ぼすだけのものがあるかもしれない。でも今は、全滅させようなんて思っちゃいないって。自然のありがたみが解らないような人間を消すのに遠慮はないけど」

「え、消すって……？」

「言葉通りさ」

驚きの表情のカズヤなどお構いなしに、アキラはあっけらかんと言いつ返した。

アキラはサキが出したお茶を飲んだ。

「残念なことに、オレは大して人間が好きではない。だから、消すことに躊躇いはない。ぶっちゃけ、どーでもいいってやつ。」

どうせ親もいないし、いつも生命を狙われてるし、こんな状態でどうして人間が好きになれるかってんだ」

たしかに尤もな言い分だと、サキは思う。

「オレらの一族はな、『空蟬の一族』って呼ばれてる。」

同属である人間を憎むことしかできない虚しい心に縛られてしまった一族だからだそうだ。

人間を愛しちや過激な環境保護はできないし、その為に与えた能力が無駄になるっけ、そういう性格を一族の共通のものにしたんだろ。オレはオレだから、別に知ったこっちゃないけど。第一、オレはそういった『決められたもの』ってのが大嫌いなんだ。

だけどその『決められたもの』ってのを意識的に変えようとすればするほど、現実がよく見えてくるもんだ。すると、与えられた性格を事実として受け入れる必然性を身に染みて感じる。

人間なんて、信じるほどに裏切られる。だから信じなければ裏切られない、そう思っていた。

でも神森に来て、サキたちに会って、人間には守るに値する人間とそうじゃない人間がいるってことに気付かされた。ってことで、感謝してるんだぜ、お前らには」

また話し下手がまくし立てるように喋り続けてしまっている。

話が横道に逸れ^そそうになっていることに気付いたのか、アキラはそこで再びお茶を啜^{すす}った。

第14部：十二月、別れ - 3（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第14部：十二月、別れ - 4

「つつーのはいいとして、実は『瑞穂』の長^{おさ}だったオレが『日本の王様』疑惑な。それは、オレを含めた『瑞穂の谷』という組織が、政治や経済を動かす力だからだよ。

オレらは自分たちの目的の為に、各界の有力者に近付く。その野望が我々には邪魔なのさ。だから叶えてやるんだ」

「え、叶えちゃうの？」

「そう、叶えるんだ。

連中の欲なんて、誰かを蹴落としてその地位と名誉と金を得ることばかり。理想や他人の為になんて頑張るやつなんかいやしない。今まで地位に甘んじていた人間と、これからそこを目指す人間、オレらにとってはどちらも同じく邪魔なのさ。だから欲望を叶える為に何人も地位から引き摺り降ろす。そして結局は連中は共倒れさ。本心から高い理想を掲げて、困った誰かの為に滅私奉公できるような精神の持ち主だって判れば、それこそ本気で応援もするし守ってもやるさ。ま、会ったことないけど。

そんな欲の塊なんて、日本だけじゃない、最近じゃ世界中にいて、自己実現したいと強く願えばオレの顧客になるし、そいつらを利用して目的を果たしたいと願う連中はオレらの敵になる。

何も『瑞穂の谷人』だけじゃないんだぜ、欲の塊を利用して目的を果たそうとする輩は。そいつらは『瑞穂の谷人』と同じように陰で暗躍していて、その中に、能力者がいてもおかしくないわけだ」

アキラは、あの妖しい笑みを浮かべた。自然とその笑みは浮かんでしまうらしい。

「昨日の男のことは判らないけど、以前話した、分家の弟御子^{おとみこ}一族の目的は知っている。奴らは人間第一主義の世界を作りたいのさ。そんなんやられたら、それこそ世界が滅びるわ。ああ、やだやだ」

アキラは「サキの入れてくれるお茶は美味しいよなあ」と呟^{つぶ}いて、コップのお茶を一気に飲み干した。

「そろそろみんなも来る頃だし、この話、止めような。こっちがシケてくる」

アキラは椅子に座ったまま、両手両足を大きく伸ばした。

「ねえ、アキラ」

「何や、カズヤ？」

アキラのエセ関西弁が復活しているのだから、この話は終わりのはずだった。

「人、殺したことあるの？」

アキラの顔が一瞬固まり、思わずサキは拳を固めて立ち上がり、それでも何とか堪えた。常識で考えて、誰だってこんな不躰な質問に答えたがるわけがない。サキは思わずその身を震わせた。天然パーにも程がある。

アキラはサキの気持ちに気付いたのか、目で彼に座るように促した。そして口ではさらっと重たいことを言っただけ。

「さあな。直接手を下したことはないけど、自殺に追い込んだことくらいなら、数えきれないくらいあると思うぜ。目の前で死ぬわけじゃないから、オレは何とも思わないけど」

「あ、そう……」

アキラは平然を装って答え、カズヤは別に興味が満たされて終了している。

アキラに止められたから堪えたけど、サカキの怒りは収まらない。そしてそのことに気付いた時、サキは自分の感情に気付かされた。傲慢で尊大で、そして残酷なまでに冷たいことをアキラは平然と言っただけなのに、サキはアキラのことしか心配していないではないか。これがもし赤の他人なら、サキは絶対その人を軽蔑するはずだ。

サキはアキラを守りたかった。彼女を頑^{かたく}なにさせるもの全てから、彼女を守りたかったのだ。そしてそれは限りなく不可能に近い。報われない恋の行方に、サキは一人困惑するしかない。

「さあ、今度ルール違反したら、ぶつ殺すからな。飢えた人間の気配を感じるさかい」

アキラがそう上っ面で笑うと同時に、階下からポンの呼び声が聞こえてきた。

そして何事もなかったかのように、お好み焼きパーティが始まるのだ。

時間は淡々と流れる。

「先生、アキラのソロコンのテレビ、今日放送だったっちゃね」

「そうなのよ……」

授業の準備の為に職員室に来たサキは、葵に話しかけた。

「どしたのワ？」

葵の気乗りしない返事に、サキは訊いた。

「だって、アキラ、最優秀賞だったんだサ？」

「考えてごらんさい、あのアキラよ。授賞式に何も無いと思う？」

「やつちゃったんだ」

「仮にも国営放送だからね、カットされてるわよ……。賞を取り消されなかったのが奇跡ね」

葵とサキは、二人してため息を付いた。アキラが絡むと、二人はどうしてもため息が出てきて仕方ない。

とはいえ気になって仕方がないサキは、録画予約はしてある。そして家に戻るなり、楽しみにしていた録画を再生した。

案の定、アキラの演奏は素晴らしいものだった。地元新聞では、「彗星の如く登場！」などともてはやされていただけある。最優秀

賞は当然のことだった。

でも問題は、葵が嘆いていた授賞式だ。

壇上のアキラは、お約束通りの仏頂面だった。しかしそれ以上はさすがに放送していなかった。

「だよなあ」

サカキは一人で笑った。実はコメチから、放送されなかった爆笑ビデオを借りてある。

第14部：十二月、別れ - 4（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfradia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

「最優秀賞の、桂小路 晃さんです。おめでとうございます」

「はい」

いつもの、アキラにとってはつまらない人間、既成概念で喋る人間に対するときの、あの独特な無表情の仮面を被り、アキラは答えるというよりは堪えていた。その愛想の欠片もない返事に、司会者は少し怯んだようだった。

「今回は一般の部での参加で、それで最優秀賞を取られたわけですが、今日の演奏はどうでしたか？」

「どうって、最低ですけど。最初のFの音のピッチがマイナス5だったの、気付きましたか？」

司会者のみならず審査員にまで、侮蔑するような視線を投げるアキラを見て、頭を抱えている葵を想像し、サキは笑い転げた。

「別に賞なんか、取り消されたって構いませんよ、私は。そのFの音のせいで、最後まで曲の気分になりきれていなかったのは、私の中の事実ですし、最優秀賞取り消したって、代わりの人間なんかないでしょうね」

「でも、最優秀賞で良かったですね」

当然アキラの性格などよく知らない司会者は、迂闊にもアキラの神経を逆撫さかなでするスイッチを入れてしまった。アキラはどのような場でも、建前で話すことができない性分なのだ。

「ま、あなたのような凡人は、良い賞を貰えればそれで良しなんでしょうね。他人の既成概念を受け入れて、それを受け売りして、しかも自分で考えてもいないくせに、自分の考えなんですって言える人間は、その道のプロフェッショナルが素晴らしいと言ったら、どのような演奏であっても素晴らしく聴こえるんでしょうよ。」

でも、それはテクニクとか表面上のことだけでしょ。楽譜に

従った強弱だけを聴いて上手だなんて、馬鹿にされてるようで不快です。

音楽の良し悪しって、作曲者の指示に従ったうえで、演奏することとでその奥に流れる感情を感じ取って、そして共感したり追体験することでしょう。私はその重要なことが、今回はできなかったんです。如何に皆さんが、私だけではなく、全員のテクニクだけを聴いていたかがよく判る結果じゃないですか。

大体、どうして自分の最高の演奏をしたと思っている人が落ち、納得していない人間が受賞するという、不可解な現象が起こっているか、あなた、判ります？簡単なことですよ。現代の流行や、審査員の好みとか、人間が審査するから諸々の要因が作用し、こういう結果を生んだんです。だから、私は結果を喜ばないんです」
可哀相な司会者は、返す言葉が見付けられずに項垂れてしまっていた。

サキは笑いで窒息しそうだった。これが葵の憂鬱だ。居たたまれないその雰囲気、思わず同情してしまう。

毎度思うのだが、アキラはいつもやりすぎる。馬鹿じゃないのだから、オブラートに包んで本質を主張することくらいできないはずがない。

サキだって弱い人間だから、長いものには巻かれてしまう。時と場合を考えるとという言葉に騙されてしまう。でもアキラは、そこで毛を逆立て噛み付いてしまうのだ。

その巻かれない一本筋は尊敬している。

でも、少しは大事に思う人間の為に、そのやり方を変えるよと、サキは画面のアキラに呟いた。これでは葵があまりに可哀相すぎる。自分一人だったらそれでもいいのだが、生きていること自体一人じゃできない。

アキラはそれに気付いていないのだ。

どういうわけか、ソロコンテストを終えた頃からアキラは別人のようになってしまうていた。

あの無理に普通を演じることを止めたばかりか、エセ関西弁も消えて無口になり、部活も辞めた。全身から近付きがたいオーラを発し、周囲を拒否している。

まあ、それはそれで本当の彼女らしいのだろうが、当然、理由を知らない周りの人間は戸惑いを隠せない。そのうちアキラが無口なのを確信すると、クラス中が静かになっていった。その静けさはとても異様なものだった。そうなって喜んでいるのは教科担任だけだ。とにかくクラス中が変になっていっていた。

カズヤはそわそわ落ち着かないし、葵までもが変だ。よくカズヤの家に通っている。

一体何が何だかわけが解らなかった。転げ落ちるようにクラスが変になっていく。事情を知らないサキには、理解ができなかった。

葵は水鏡との約束を守る為に、奔走していた。

あの時水鏡が言っていたことの半分も理解していなかったし、超能力だの何だのはどうでもよかった。

ただ他の教師が迷惑顔をしようと、トラブルメーカーのアキラやサキを始めとする、カズヤ、シキ、ポン、コメチ、ナミの七人が、今の二年五組が大好きだった、それだけだ。だからその為に、「七人を離ればなれにしないでくれ」という水鏡の言葉を守ろうと必死になっていたのだ。

しかし、その願いは虚しかった。

慌ただしい年末。気が付くと毎年毎年、何も変わらないままに新年がやってくる。

十四才になっていたアキラは、六回目の一人の新年を迎える準備をしていた。

何も変わらなかった。変わったのは、一人であることに慣れたことくらいだろう。

水鏡の預言を知らないアキラは、年末のクラスの変化が全て自身^{自身}の所為だと思っていた。

でも、それで良かった。もう自分はここの平和な暮らしを捨てるのだ。未練が残らない為にもこれでよい。それにアキラだって人間だ。忘れていた感情を呼び覚まされると、アキラ自身が潰れて苦しくなるということを、自分でよく解っていたのだ。

第14部：十二月、別れ - 5（後書き）

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

第14部：十二月、別れ - 6

アキラは適当なボロ着に三角巾を頭に被って掃除をしていた。

広すぎる家は、一晩でアキラの手に負える代物ではない。虚しさばかりが身に染みる。しかし意外と几帳面な彼女は、掃除をせすにはおれない。

「大体、新年だの何だのって、カレンダーが新しくなるだけでオレは何も変わらねえし、普段から掃除してるんだから、本当はしなくてもいいんだけどよ……。ちくしょう、永久カレンダーに変えてやる」

ぶつぶつと独り言を呟きながら、アキラは台所を磨いていた。

「ってオレ、朝からメシ食ってないじゃん」

アキラは時計を見て、肩を落とした。

「九時じゃん。……って、年の瀬に冷蔵庫が空って、どういうことだよ。店に行くにも、未だ誰かうろついている時間だし、しゃあねえな、歩いて行くしかないか。ったりい……」

アキラは瞬間移動を使えないことをぼやきながら、身支度を整え玄関を開けた。

今日はつくづくついてない……

「あのなー、何で雪が降つとんねん」

思わず二年間使い続けたエセ関西弁が出てしまうほど、外は白く染まっていた。

「着替えっかな、面倒だな。傘、傘と……」

家の中に傘を取りに戻ろうとしたアキラは、気配を感じて振り返った。

「カズヤだな、そこにいるの。隠れてないで、出てこい」

厳しいアキラの声に、木陰からカズヤが姿を現わした。

「お前、バカか？用があるなら呼び鈴鳴らせよ。ボロ家でもそれく

らいはあるし。まったく雪の中、傘も差さずに何時間立ってたんだよ。オレが出てこなかったらどうするつもりだったんだ。風邪ひくじゃないか」

おずおずと姿を現したカズヤに、アキラは情け容赦ない言葉をぶつける。一応最後には優しさもあるのだが、頭ごなしに言われて、カズヤは思わず小さくなった。アキラなりの優しさに気付いてはいののだが……。

「すぐ帰るつもりだったんだ。じゃ……」

「じゃあつて、お前、喧嘩売ってんのか。用があるから来たんだろが、こんな天気の中。ああつ、もう、じれったいなあ。とにかく中に入れ、バカ」

屋根のあるところに、アキラは強引にカズヤを引っ張ったつもりだったが、逆にカズヤに引っ張り返され、大柄な彼の胸板に引き寄せられ、その長い腕に囚われる。不意打ちのような行動に咄嗟^{とつさ}に対応などできるわけなく、全く状況が把握できないままに、アキラはカズヤの鼓動を暫く聴^{きこ}いていた。

その大きすぎる胸は暖かすぎ、その鼓動は懐かしすぎた。

アキラが逆らうことを忘れているのをいいことに、カズヤはその腕の力を切ないほどに強めていく。

六年かけてようやく忘れていった人の温もり。他人を憎む思いと相反するこの感情。二つの感情で板挟みになって、だからこの六年間苦しかったのだ。

ようやく両親の温もりを忘れたというのに、それと呼び覚まさせるこのカズヤの鼓動。

甘えちゃいけない。忘れなくちゃ……

自分の感情をやっと思い出した時、アキラは一瞬でも甘えたくなくなったそんな自分に対し、腹立たしさを覚えた。

ふざけんな！

アキラは瞬間移動で抜け出した。思わずカズヤの体勢が崩れる。

「大体、生意気なんだよ。お前を守るって、ガキの頃に約束したのはこのオレだ。現に、オレよりも弱いくせに」

「自分のことは、自分で守れるくらいの力はあると思うんだ。その為に空手やってたんだし。それに、アキラが守ってくれる必要はなくなるし」

「はん！それが新年の抱負か。いい心がけだ」
「そ」

カズヤは彼らしくなく、陰のある笑みを一瞬見せて、雪の中へと駆け出していった。

「おいっ、待てよ。それだけかよ！ふざけんな！」

しかし、アキラは追いかけなかった。間の悪いことに電話が鳴っていたのだ。

「くそっ」

アキラは電話を取り上げた。仕事上の電話が転送されてくることもあるのだ。

「はい？」

ナンバーディスプレイで誰だかは判る。

結局その電話は仕事のものではなかったが、不機嫌な声のまま、アキラはついだから取り上げた。

「あ、アキラ。カズヤ見なかったか？」

名乗ることを忘れるくらい、サキは相当焦っているのが感じられた。嫌な予感がアキラの心の中をよぎった。

「どうしたんだよ？」

「ん、知らなかったらしいんだ。じゃ……」

「じゃあって、さっきからお前らは、揃そろってオレをバカにしてんのか。知りたいのか知りたくねえのか、はっきり言え！」

よっぽど受話器を投げつけてやろうかと思いましたが、そこは堪えてアキラは怒鳴った。

暫く迷ったようにサキは口を噤^{つぐ}んでいたが、アキラの剣幕に気圧^{けあ}されて、ぼつりと話した。

「口止めされたんだけどな、あいつ、転校するんだって。東京サ行くんだって、これから。オレも今初めて聞かされてびびってるんだよ」

「何だって!」

アキラは大声を上げると、予告なしにサキのことを呼び寄せた。

「頼むから、予告してくれよ。こっちはあんまし慣れて……」

「あのくそガキ、ぶん殴^{なぐ}ってこい!慣れてないなら、足跡辿^{たど}ってけ!都合がいい時だけ病人かよ!」

サキの言葉を遮^{さへぎ}って怒鳴るアキラに、サキは立ち上がれないくらい打ちのめされたような気がした。

何てことだろう、あのアキラが自分の感情を剥き出しにしている。目の前にいる少女は、肩を震わせて怒っている。それは一人の少年が煮え切らない態度を取った所為^{せい}だ。自分が侮辱されたわけでもないのに怒るアキラではない。

自分はなれないことを知っていた。しかし、何もよりによって力ズヤが　　?!

第14部：十二月、別れ - 6（後書き）

次回、『約束された出会い』編 最終回となります。

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfradia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

確かにアキラは他人に守られることを嫌う。その反対に保護欲は人一倍強い。そんな彼女が他人を愛すなら、その愛の形はどちらかといえば男性的な愛情になるだろう。

そして何より、今まで彼女は自分以外を愛していない。もしかしたら自分ですら愛していない。愛情を認識できなかったとしても、少なくとも守りたいと思う人間も誰もいない。

その彼女を守ろうとする人間は、決して彼女から愛されないばかりか、彼女は無意識に拒絶をする。

二年間、アキラだけを見ていたサキには、アキラのその感情の動きが解るのだ。

彼女を『慈しみ^{いつく}守ってくれた人』を失った悲しみを知っているから、彼女は『守ってくれる人』を愛せない。『愛する人』を失う悲しみをもう二度と経験したくないのだ。

だから彼女は愛する対象となるべき人間が現われるまで、きっと彼女は自分を愛するしかないのだ。誰か大事な人を守るその日まで、彼女は『愛してくれた両親が残してくれた自分』を無に帰^きするわけにはいかないから、せめて自分を愛し守るしかない。

その彼女が他人を信頼するとしても、それは滅多にないことだ。サキは彼女を一番知っている。

それでもサキはアキラと特別な絆^{きずな}があると信じていた。だからその絆を、よりによって自分よりも明らか鈍感なカズヤにだけは、アキラを渡したくなかった。サキにしてみれば、カズヤの手に負えるアキラではない。その絆は繊細なものなのだ。しかしアキラはこう言うだろう。「オレは誰の所有物でもない。勝手なこと言うな」と。尤もだ。アキラのことを一番に理解しているからこそ、どうしても先回りして考えて行動できない。この心のムヤムヤを、一体どう

したらいいのだろうか。

誰よりもアキラのことを考えて、誰よりもアキラを守ってきたのに。

仕方ないなあ。

サキは月も星もない空を仰いだ。

愛情表現が似たもの同士が上手うまくいくわけないのだ。それでも想いを貫くとしたら、今できることをするしかない。報われなくても守り続けることを。

そこには勿論打算もある。

カズヤはこれから転校する。ということは、彼女の傍にあり続け、彼女を理解し精神を支えることができるのは、自分しかないのだ。どうせ身体の弱い欠陥品なのだから、普通に他人を愛する資格もないという思い込みもある。

サキはゆっくり前を向き、呼吸を整えた。

そうなのだ。報われない想いでも、彼女の傍にあって、信頼されればいいのだ。

アキラに言われるままにサキは駆け出し、積もり始めの雪に残されたカズヤの足跡を辿たどって、アキラの望んだ通りに背後からカズヤをいきなり殴った。

「痛えっ！」

「痛えじゃねえ、このバカっ！何、未練がましいことしてんだよ。」

お前の大好きなアキラはな、そういう男が死ぬほど嫌いなんだよ。好きなんだったら、相手が嫌いなことすんなよ。そんなの、相手の気持ちになればすぐ解るだろが！」

「ごめん……」

「オレに謝ってどうすんだ、アホ！とにかく、お前は家サ戻れ。小父おじさんたち心配してるんだから。お前の言葉はオレがアキラに伝え
といてやる」

サキはカズヤに「これはオレのだ」とばかりに蹴りを見舞い、さつさと瞬間移動でもして行くように促した。それを理解したカズヤは目で礼を言つと、姿を消した。

これでいい。オレは自分で決めたんだから……

サキは暫く雪の中に佇み、カズヤの途切れた足跡を見つめた。

オレも狡いよな。傍にいられる余裕なんか見せてさ……

サキはアキラの家に向かった。結果を報告しなければならぬ。

「よう、殴つといたぜ」

「サンキュ」

「ついでにオレに無駄足踏ませたから、蹴りもおまけしといた」

「はははっ、そりゃあいい」

さっきの少女のようなアキラは消え、いつもの無愛想なアキラが待っていた。

「見送りサ行くか？」

「行かない。あいつは秘密にしたがつてたんだろ。だったら尊重してやるさ、オレは。」

大体オレは朝から何も食ってないんだ。そんで買いに行こうとしたら、この騒ぎだ」

アキラはぴらぴらと手を振った。

「一緒にファミレスに行くか。野菜だけでも食べばいいじゃんか」

「気を遣うなよ。お前はカズヤの見送りに行つてやんな。それに、頼みごとがあるんだ」

アキラは一枚の写真を渡した。今さっきパソコンでプリントしたものだろう。

「アキラ、これは……？」

写っているのはアキラの写真ではない。饞別にせんべつしては奇妙な写真だ。どう見ても不良と呼ばれる類の四人が写っている。

「東京って言うてたっけな、東京で生きる注意をしようと思つてさ。この四人、二年前は未だ近所のガキどもを仕切つてただけだったんだけど、今では結構な区域の学生を殆ど仕切るまでに伸し上がった、札付きの連中だ。こいつらには死んでも関わるなつて、伝えてくれ」

「別に伝えるくらいはいいけど、そんなピンポイントで変な四人に会うか？」

サキは素直に疑問を口にした。でも、アキラは真に受けない。

「会つんだよ、調べたんだから。それよりもう一人、写真はないんだけど、霞^{かすみ} 信吾^{のぶみ}って男がいるんだけど、こいつにも関わるなつて言つてくれ」

「結構心配性なんだな、アキラ」

「お前はそのスジの連中を知らないんだよ、サキ。天然パーでも、あれでカズヤは狙われやすいタイプだ。腕はそこそこ立つし、見た目に強そうだろ。それに神森で育つてきてるんだ、反骨精神はしっかり持つてゐるはず。」

初めてサキなしで生活するんだ。一人になつて氣負つて、余計なことしないとは言切れない」

「でも、ずっと傍にいたから言えるけど、あいつ、わざわざ面倒に首を突つ込むような奴がいるんだよ、教師連中で」

「仕向けるような奴がいるんだよ、教師連中で」

「教師連中？何、それ？」

「これ以上は言えないな。オレの仕事に絡^{から}んでくる。それに余計な情報与えちゃ、かえつて災難を呼び寄せることになるだろ。」

とにかく、さっき言つた五人に関わるなどだけ伝えてくれ。他は余計なことだから、かえつてあのバカを刺激しかねないからオフレコで」

アキラの言いたいことは、例え心配性だとしても、理解できる。

「了解。途中まで一緒に行くか？メシ、買いに行くんだべ？」

「突然訛^{なま}んなよ、似合わない。オレは歩くから、お前は瞬間移動で

送る。行くぜ」

「了解。さっきのことは確かに伝えるっけ、安心しな」

「おう。お前は話が解るからいいよ」

「誉められても何もないからな」

「知ってるって。サキしか頼めないから言ってるんだって」

「サキは微笑んだ。少し悲しかったが、自分が決めた道だ。」

「じゃ、頼んだぞ」

アキラはサキを送り出し、傘を差して雪の中を行った。途切れた足跡を辿り、空を見上げた。

心が晴れないのは何故だろう？

アキラは自分以外の人間を好きになっていたことに、全く気付いていなかった。

恋などという言葉は、彼女の人生において無縁なものだった。

いつもと変わってしまった年末を終え、アキラは新しい年を迎えることになった。

第14部：十二月、別れ - 7（後書き）

長編作品を最後まで読んで下さってありがとうございました。

今回で今作品完結とさせて戴きますが、第二話『霧の円舞』へ続きますので、

引き続きよろしくお願いします。

本編先行連載している作者のブログです。是非おいで下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/alfradia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

story of ALFREIA 1 『空蟬の一族』 第一話「約束された出会い」

2010年10月8日13時04分発行